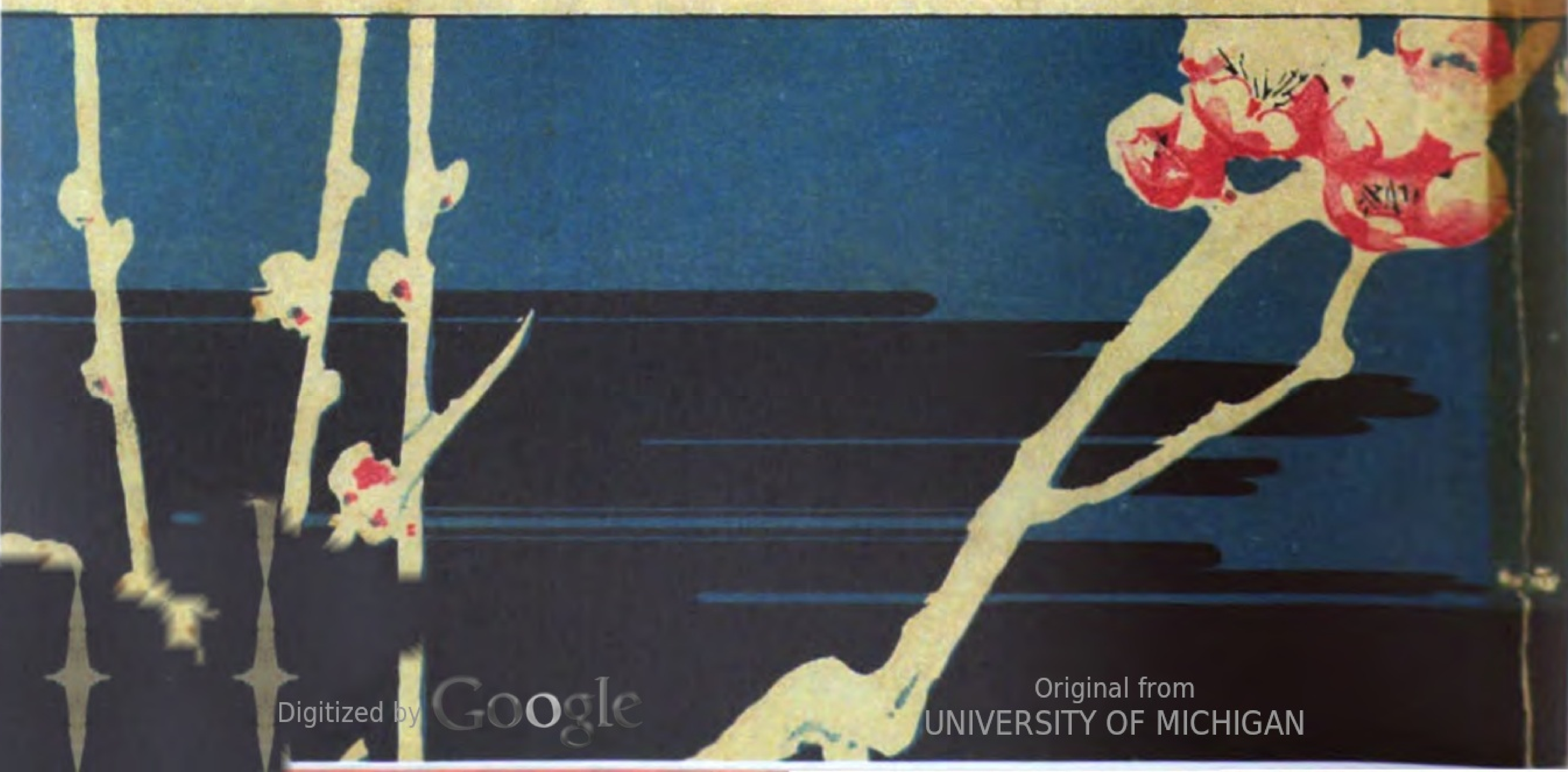
明治三十三年十二月廿五日 第三種郵便物認可
明治三十五年一月五日發行 毎月一回五日發行

女學世界

第二巻第一號

大附録
貴顕夫人

口繪
風俗十二ヶ月 春あそび（武内桂舟氏筆）
歓迎（泰西名画）
装い（小堀鞆音氏筆）
皇城の朝
筒井筒（上原古年氏筆）
乳虎（栗田周山氏筆）
日本三庭園
暹羅の婦人
華族女學校
図畫（姫小松、福寿艸、若石梅、竹 小藪女史）
習字手本（歌、消息文 坂、多田古香先生）





新年の御慶芽出度申納候
倍舊の御引立偏に奉願候
地方よりの御註文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕尚ほ註文案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候
三井呉服店
東京日本橋駿河町
電話特五二九
一二七
一八六〇
大阪高麗橋二丁目
電話東特四七三
一六五〇

女學世界第壹號目次

春あそび　(風俗十二ヶ月の内)



(武内桂舟畫伯筆)

小川一眞製版印刷

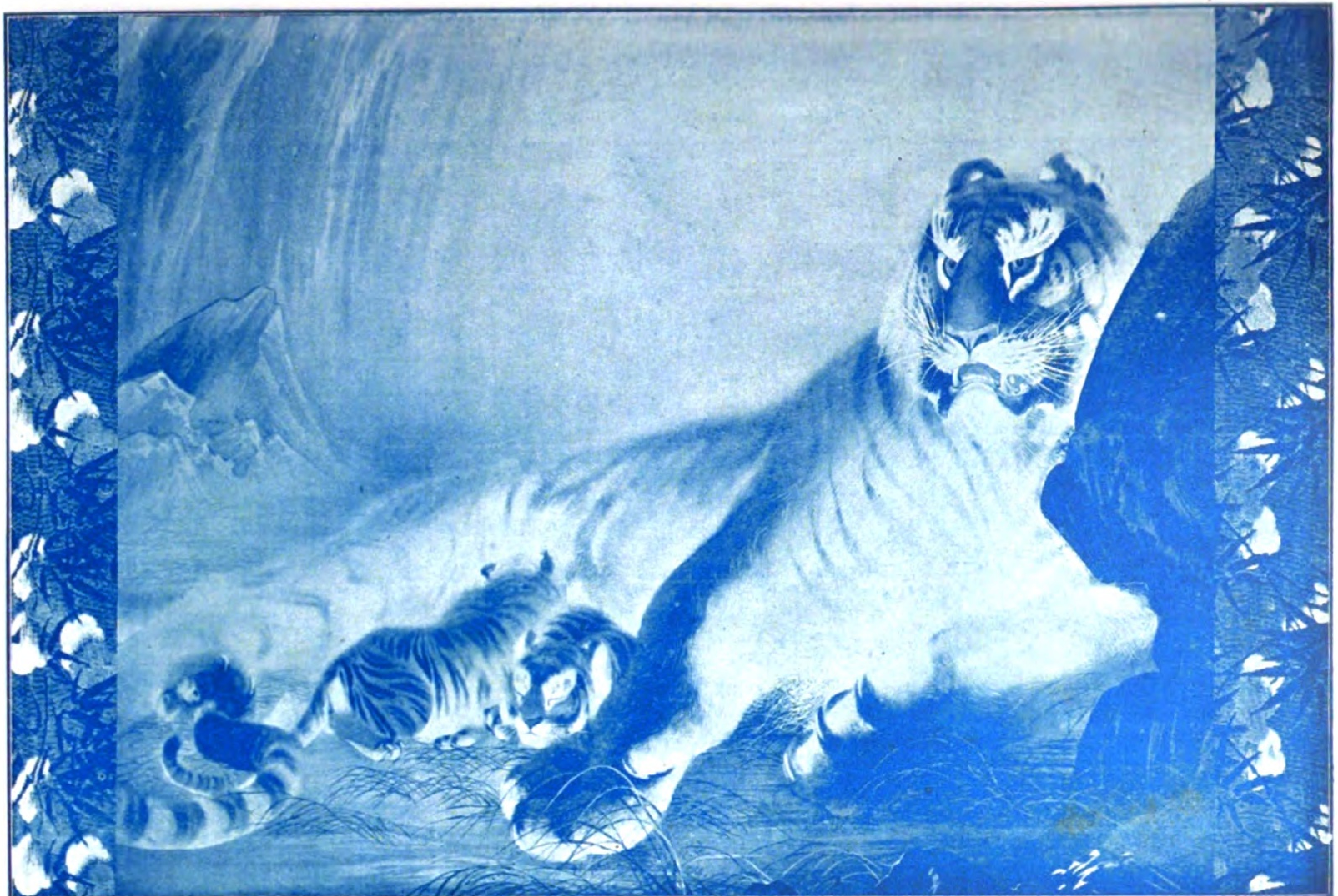


(ダビット畫伯の筆)

(ルーヴル美術館備品)

平　和　(泰西名畫)

(小西周山氏筆)



乳虎

装ひ



（小堀鞆音氏筆）

總裁　小松大宮妃殿下　副總裁　鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學年を開き會員を募集す

●本會は明治二十八年の創立にて既に學年を改むること三回講習終了者一萬六千餘人を出せり●講義を囑托せる講師は華族女學校女子高等師範學校日本女子大學校等の諸教授及び其他博士學士等著名の專門家なり

本會は國家開明の本源たる女子教育の普及發達を圖らんが爲に女子必須の諸學科を掲げたる講義錄を發行し家庭を離れ難き女子をして居ながら通信教授を受けしむ仍て一般女子素養の程度に應じ高等簡易兩科を設くると左の如し

高等科（毎月一回廿五日女學講義發行二個年終了束脩四拾錢月謝四拾錢紙數菊判參百頁）

○倫理坪内雄藏○禮法佐方鎭子○教育學安井哲子○兒童學高島平三郎○國文坂正臣○文法今泉定介○作文同○作歌大口鯛二○美辭學島村瀧太郎○漢文土屋弘○日本歷史大森金五郎○日本婦人列傳下田歌子○萬國歷史喜田貞吉○日本地理同○萬國地理同○地文脇水鐵五郎○理化同○算術上野清○博物池田梅子○生理衞生三宅秀○家事衞生同○小兒衞生三島通良○家事經濟後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○繪畫武村千佐子○圖案同○美學島村瀧太郎○音學東儀季治○挿花秀島成績○點茶松浦伯爵○園藝池田伴親○法制經濟岡戸論介○民法鳩山和夫○社會學岸本能武太○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

簡易科（毎月一回五日女學講義發行二個年終了束脩貳拾錢月謝貳拾錢紙數同右五十頁）

○修身談本會編纂○禮法佐方鎭子○國文同○作文今泉定介○漢文土屋弘○日本歷史大森金五郎○日本地理喜田貞吉○算術上野伊志子○博物小此木忠七郎○理化脇水鐵五郎○生理衞生三宅秀○家事大要後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○圖畫武村千佐子○史傳下田歌子○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●會則は請求次第送呈す●束脩月謝を添へ申込あれば假入會を許し直に送本すべし

初卷發行

簡易科十一月五日
高等科同月廿五日

初卷より缺本なし

東京麹町下二番町三七　大日本女學會

堀内新泉子著

家庭讀本

全四冊挿畫入美本
定價一冊拾六錢
●郵稅四錢宛
（春夏秋の卷既刊）

目下淫猥なる小說の盛に家庭に行はるゝを憂ひて、昨春以來專ら本書の著述に沈吟斷腸せし堀内新泉子の家庭讀本は今や秋の卷迄出來本月を以て全部完結せんとす子が着想のいかに高潔多趣味にしてその着筆のいかに穩健優雅なるかは、既に讀者の熟知せらるゝ所なれば、今また此に何をか云はむ。本書の一度世に出づるや近來の出版物中實に稀有なる世の激賞を招きたり世の教育家父兄子弟婦妻の座右には一日もこの可憐なる書冊無かる可からず家庭及び學校にも亦必ずこの冊子を備へざる可からず。殊に本書は製本最も優美にして四季の進物として頗る適當なる佳品なり今全部四冊の目次を左に

春の卷

夏の卷

秋の卷

冬の卷

發行所　東京神田區小川町九番地（電話本局二、四二〇）　開發社

（甲の二）

（甲の三）

華族女學校學監

少女文庫

全部六册
毎月一回發兌

第壹編 お伽敎草

お伽噺は其昔若君姫君のお伽衆が其お相手になせし噺なり由來此種の噺は日本にても外國にても實話あり寓話ありて何も幼稚なる兒女の腦裡に能く映して修身の助けとなり智を磨き躰を强くするの手引草となるの効著し下田女史の意を此著に注かるゝ周到にして敎育に貢する高且大といふべし慈愛深き世の父兄諸彦は愛兒の爲めに一本を購はれたし、

全一册菊判和裝
正價金三拾五錢
郵稅金六錢

第貳編 庭訓お伽噺

此書は本邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同種類中より其今に取りて可なりと思ふものゝみを撰み出せるなり總て此類の書中には甚た面白き趣向の者ありて往古の風俗を知るの栞とせんは此上なきものあれど其兒女の敎育に適せざるものあれは述者深く此點に注意を加へて說明したれは年少女子も一讀其意を解し得て大に風敎の裨益となるべし

全一册菊判和裝
正價金三十五錢
郵稅金六錢

第參編 內國少女鑑

全一册菊判和裝
正價金三十五錢
郵稅金六錢

發兌元　東京市日本橋

(甲の四)

女學生諸君必讀の小說

小栗風葉君新作

梢の花

定價十八錢 郵稅四錢

頗美本

口繪（寫眞版 二色刷）番也筆◎附錄（極彩色 繪端書）成美筆

本書は當代一流の作家小栗風葉子が、苦心慘憺の餘に成れる新作小說にして、某政黨の主領の令孃、名も智惠子と云へる才徽の美人と、硬直を以て聞えたる某新聞主筆との間に起れる戀ならぬ戀を描けるもの、面目多樣、波瀾萬丈、興趣極めて多く、新春書窓の絕好伴侶也、（製本既成、閲讀を待つ、）

正岡藝陽君著

婦人の側面

八版

定價二十錢 郵稅四錢

新婚旅行

德田秋聲君
田口掬汀君
生田葵山君
西村渚山君
合著

第參版

定價參拾五錢 郵稅金四錢

結城素明君
一條成美君
平福百穗君
渡邊香涯君
挿畫

東京神田錦町二丁目六番地

新聲社

第貳卷

第壹號

一月十日發兌

學生筆戰機關

秀才文壇

每號名家肖像與筆風景寫眞 口繪 數葉揷入

募集

◎壹卷二號より紙數增加

每號普通文、漢詩、新躰詩、和歌、俳句、を募集し當撰者の肖像或は筆蹟を次號に紹介又

大家の名文數篇を掲載す、一讀有益なるもの多し、第二卷より年四回大懸賞募る

◎逐號材料益豐富見よ

定價

一冊拾錢●六冊前金五拾七錢●十二冊前金壹圓八錢●外に郵送一冊壹錢◎郵券代用壹割增◎每月一回發行

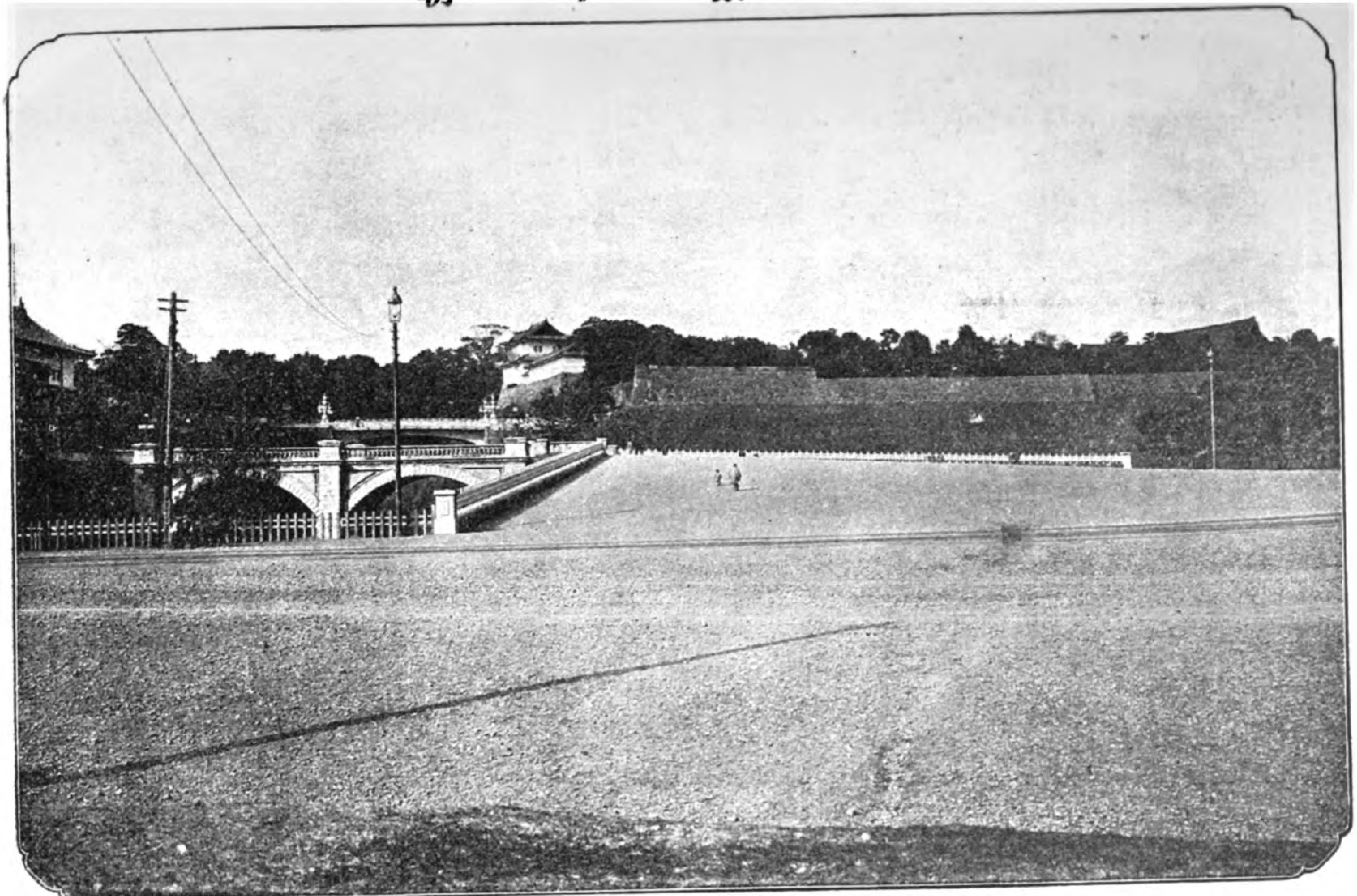
東京小石川區指ヶ谷町百卅三

文光堂發行

賣捌 ●東京神田表神保町東京堂 ●大阪東區備後町盛文館 外全國書店

（甲の七）

皇城の朝

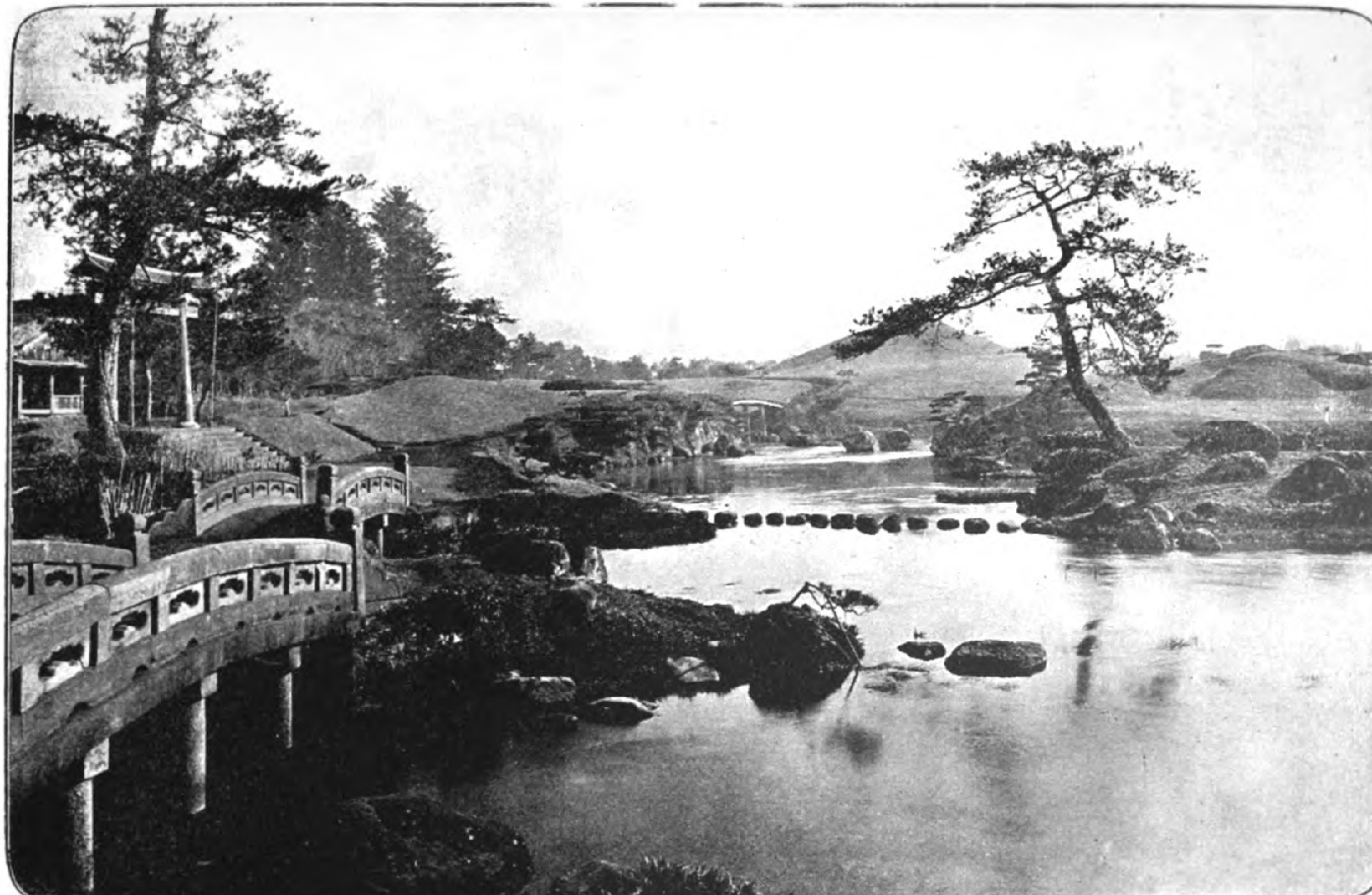


宮城二重橋正面（東京名所）

華族女學校卒業生



日本三庭園の一



熊本成趣園



芝増上寺御靈廟

樂眞子池田晃淵君著

大奥の女中

本書は、幕府累代大奧向の記錄にして、而もその裏面に陰伏する所の女流の消息を詳述せる者也○池田先生多年帝國大學史誌の編纂に從事せられ、深く幕府の事歴を討尋し、得たる所の材料に攷へ、幾多趣味ある實話を加へ以て本書を大成せるもの、一般史家、文學家の一讀を必すべきのみならず、徳川時代裏面の觀察を得んと欲する者及び女子に關して研究せらるゝ諸君共に一本を座右に備へ、一は以て實話小説の代用となし、一は以て世を警戒にする足るべきの珍本たる也

上中下全三册表装美麗●帙入
定價毎卷册錢郵税各四錢金壹圓

東京神保町神田 合資會社 富山房

謹賀新年

平出鏗次郎先生著
富岡永洗 松本洗耳 兩氏挿畫



東京風俗志

著者は歴史家として有名なるもの、其才藻發して首都東京の風俗の粋を述べ人情の微を觀察す、風俗は上下を通じ人情は尊卑に渉る、戰勝前後の現象により風俗人情に變革を來たしたるより着筆し、精透なる觀察、遒麗なる文章、光彩陸離たり、加ふるに趣味饒多なる挿畫、中卷のみにて七拾有餘、畫工が手腕と勞力とを傾瀉せるもの

上卷について年中行事、衣食住の狀態、社會人心の趨向、風俗の推移、山の手と下町風、新年、盆暮の有樣、節供、祭禮、川開き、家屋、流行の髷、其他品々悉く網羅詳説して餘蘊なき者也

上卷金五拾錢 中卷金六拾錢 郵税各金六錢 上ゞ印刷中 表装大和綴優美製本

(その一)

醫學新書出版

大學院學生醫學士石原弘先生編

（製本既成）

醫學新書 藥物學

全一冊洋裝上製
背皮金文字入
紙數一千百頁餘
正價金貳圓
小包目方四百匁

藥物學の醫學に重大の關係あること喋々を要せず本書は最新の學說に據り公平に諸藥物の作用を論じ且つ其應用を精選し極めて平易に簡潔に且つ了解し易き記憶實用に至便なる一種の分類法を用ひ細大漏す所なし卷頭には處方學一般を述べ各藥に處方例を添へ卷尾に精細なる索引を附せり最新藥局法に依るを以て醫學講習上に於て欠くべからざる要册なり

續刊豫告

- ●耳科學。鼻。咽喉科學　全三冊　醫學士　久保猪之吉君著
- ●法醫學　全一冊　醫學士　高山正雄君著
- ●精神病學　全一冊　醫學博士　片山國嘉君校閲　門脇眞枝君著
- ●皮膚病學。泌尿器學。黴毒病　全一冊　醫學士　旭憲吉君著
- ●小兒科學　全一冊　醫學博士　三輪信太郎君著

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の二）

少年增刊 日章旗

一月十日發行
正價拾錢
郵稅一錢五厘

寫眞銅版口繪

天皇殿下御料馬友鶴、特別大演習各國武官、仝清國武官、騎兵一聯隊軍旗祭、仝餘興競馬、鎭西八郎爲朝（水野年方）亞米利加印度人風俗、角力と弓術（記者の躰育）獨逸伯林氷辷遊戲、自轉車曲乘

◉大附錄（額面）楊由虎を防く圖……武内桂舟生先書

少年世界新年增刊

記事概目

（此他いろ〳〵面白き小說談叢等澤山あり）

發兌元 東京本町 博文館

（この三）

石井研堂君著

少年工藝文庫

毎月一回發行
全部十二册

毎編寫眞販西洋木版數十面挿入

定價 一册十五錢六册前金八十五錢十二册前金一圓六拾錢郵税一册四錢

文明の利器といふ物の中の利器を擇び之を解剖して其學理を窮め上は起原を探り下は一々實地につきて現況を視察し詳かに科學應用の精華を説話するもの即ちこの少年工藝文庫なり日新の社會に於ける少年の讀本これ程實益多く趣味豐なるはまた無かるべし

第一編 鐵道の巻

明治三十五年一月一日發行
定價十五錢
郵税四錢

此書は學理を骨とし、實際を肉とせる内外國の鐵道談にして、記述の趣向は、著者獨得の新機軸を出し、挿畫は多く實地撮影の寫眞を應用したれば文明の新智識を得んと欲する少年の讀まざるべからざる好本なり

第二編 ●水道の巻
第三編 ●瓦斯の巻
第四編 ●寫眞の巻
第五編 ●電話の巻
第六編 ●硝子の巻
第七編 ●紡績の巻
第八編 ●活版の巻
第九編 ●滊船の巻
第十編 ●製紙の巻
第十一編 ●銅山の巻
第十二編 ●電燈の巻
已上

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の四）

謹賀新年

東京市神田區表神保町三番地

東京堂書店

恭賀新禧

文武堂書店

英學新報社

（神田區表神保町三番地）



東京堂は、本年より業務一層擴張し書籍雜誌は何れの出版を問はず廣く地方各位の御便利を專一に價格は無類の低廉に發送は最も迅速に取扱は正實懇切に御小賣と勉強販賣仕候間御注文被下候へば第一各發行所へ一々御送金御注文等の手數を省き御便益も不尠と存候に付多少に拘はらず續々御注文の程希上候

東京堂發賣 書籍雜誌總目錄

壹月改正 新刷

御望の方は郵券二錢封送御申込あれば速に送呈す

委託販賣部（書籍雜誌を御發行の御方にして一手販賣方を弊堂へ御委托相成候へば諸事御便利に獨特の擴張法を以て賣捌方勉强可仕候間御委托相成候方は御發行前に御申込被下度懇切に御相談可仕候）

諸雜誌大販賣

東京神田區表神保町 東京堂書店

電話（特）本局貳百四拾八番



（乙の五）

第二高等學校教授 理學士 安田篤先生著 （製本既成）

植物學汎論

全壹册 洋裝菊判 紙數六百四拾頁
上製 金文字入 正價金壹圓五拾錢 郵税拾貳錢

本邦從來中學課程以上の高等教育植物學教科書に缺くる所あるや久し、本書は聊か之が欠を補はんが爲めに編述したる者にして、併せて植物學の初歩を修め更に其専門に入らんとする獨學者の楷梯たらしめんが爲めに纂著したるものなり。抑も植物學は實驗的の學問なれば、之を學ぶに徒らに文章の暗記、字句の解説を以てするが如きは、到底之を領會するの道にあらず、况んや其趣味を覺知するに於てをや、故に著者は此書を編述するに當り、勉めて各處に例證を擧げ讀む者をして直に實物と比較對照せしめ、殊に毎編の終には一般に關する實驗の方法材料を掲げ、以て斯學を實習する者の便に供せり、冀くは此指針に依て肉眼的並に顯微鏡的の觀察實測を爲し、以て斯學の眞味を發ることを得ば、思ひ半に過ぐる者あらん。

（植物挿圖六百十餘個）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

理學士 飯塚啓君著

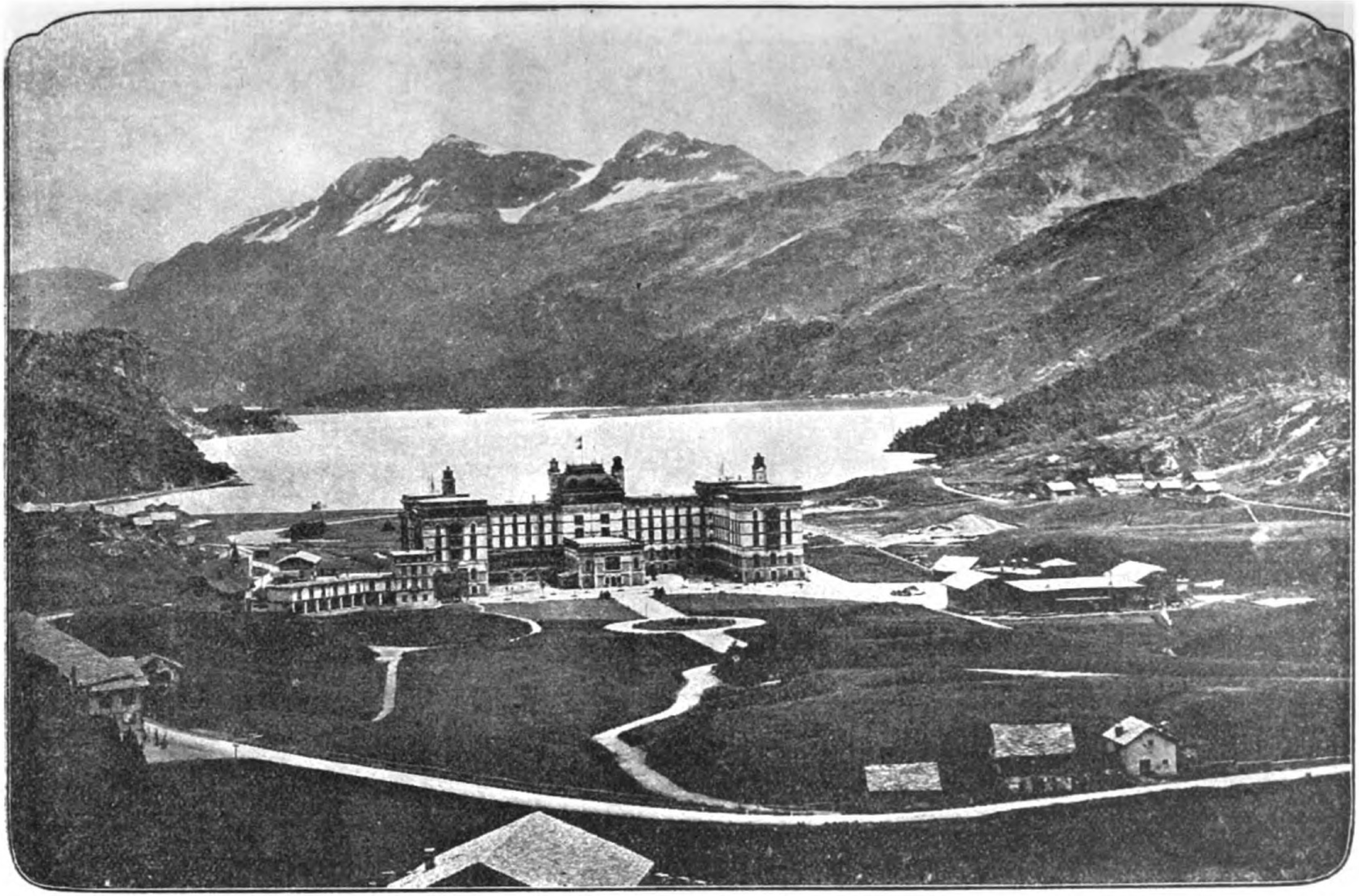
植物學新論

◎全壹册洋裝菊判
◎上製五拾錢郵税拾錢
◎並製卅五錢郵税八錢

植物學は實驗の學問なり故に本書は勉めて各處の例證を擧げ讀者をして直に實物と比較對照せしむるの便を得せしめ殊に一般に關する實驗の方法材料を掲げ又た前人未發の分類表を懇切に指示したるを以て斯學の眞味を了するに於て最も嶄新の智識を得らるべし

發兌元 博文館

（乙の八）



瑞西國マロヤ湖畔の客舍

暹羅婦人



中等社會の令孃



貴族の令孃



上流社會の令孃

(新嶋大佐寄贈)

春景山水



（野村文擧畫伯筆）

筒井筒



（上原古年氏筆）

増刷出來

八版 ●一葉全集 正價四十錢 郵税十錢

六版 ●福引集 正價十二錢 郵税四錢

再版 ●ベースボール クリケット 正價十二錢 郵税四錢

再版 ●圍碁定石 正價十五錢 郵税四錢

十版 ●日露戰爭未來記 正價十八錢 郵税四錢

博文館發兌

専賣特許 時計形文具



出願時計形文具は上圖の通**兩蓋**時計側の中に墨池肉壺檢印等を備へ龍頭に**伸縮**自在の筆を仕込みクサリ迄添付す故に蓋を閉づれば一見**時計**と異らず和服洋服携帯に便利に體裁亦此上なく代價は無類の大**廉價**なり●價甲號兩蓋開き六拾錢乙號片蓋開き五拾錢小包送料百里內八錢百里外拾六錢の割にて添送の事●切手代用は必ず二割增しの事

新春年始の進物 商店景品學校**賞品**に最適當

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**

●皇太子殿下毎號御上覽

總裁一條公爵 議長本多男爵

青少年議事錄

筆戰場

第四期第一號 一月一日發行

（議員數一萬有餘 購讀者三萬有餘）

見本郵券十錢

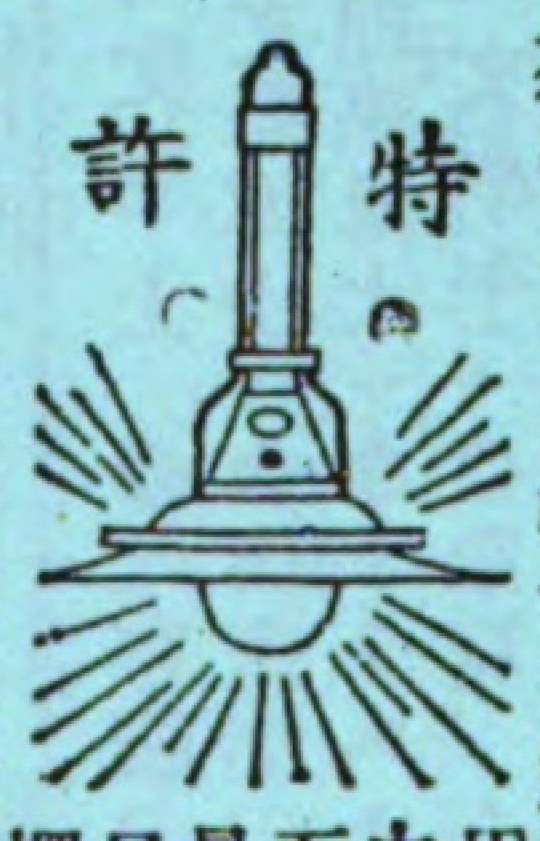
作文和歌俳句漢詩等各課專門の師擔任す

本號には本會獨特の議院制方法詳細あり

本會の支會支部は全國到る處に設置あり

東京神田千代田町二 電話本局（一四四四）

帝國少年議會



專賣特許第三一五四號磐井燈は多年の研究を以て發明したる實用粧飾兩全の新燈器なり此燈世に出る上は從來のランプ社會に新紀元を作るに足る○長所空氣の作用を以て火光を下向にも斜にも自由に發射するにあり光白色にして瓦斯電氣を壓し其費す所の石油の量は普通ランプより大に少し一日早く用ゆれば一日の德あらん十四燭光並製柱掛三圓五十錢ニツケル上製四圓五十錢並製釣燈三圓三十錢ニツケル上製六圓五十錢より詳細は郵券二錢御送りあれ

京橋區八丁堀仲町十二番地 **磐井商店**

（丙の三）

中學世界

(一月十日發行) 第五卷第壹號 (紙數二百八十八頁)

正價一冊廿錢 四冊前金七十五錢

博文館發兌

八冊前金一圓四十五錢 郵稅二錢

(丙の四)

歌文雜誌

こゝろの華

歌文を研究せんとするものは
來れこの花のもとに

心の華は東久世伯を會長に佐々木信綱氏主幹たる大日本歌學會の機關雜誌にして毎月一日發行し既に第五卷第一號を出せり

一號要目

井上文學博士の裸躰畫論●高楠文學博士の印度古代の抒情詩●小杉文學博士の自傳●MSS譯のオルレアンの少女●佐々木氏の竹柏園漫吟●石榑氏の美文●大塚楠緒女史のうつせみ●印東氏の安房の浦づと●插畫黑田清輝氏小林萬吾氏等の名家に成れり

定價一冊拾錢十二冊前金一圓十二錢

京橋區東玉豐河岸六十番地
發行所 大日本歌學會

さびしき心を慰めむとするものは
來れ此の花のかげに

東京日本橋病院長 醫學士 岡本武次先生新發見藥

太陽丹

（定價）
千二百粒入金一圓
五百粒入金五十錢
二百十五粒入金廿錢
百五粒入金十錢
五十粒入金五錢
郵送料各一錢づゝ

平素は勿論、酒席、旅行及び惡疫流行の際は必ず携へ時々服用せられよ。此藥は○頭痛○眩暈○酒、船、車の酔、吐瀉○下痢○胸腹の痛等に著効あり。殊に食後常に四五粒づゝ用ふる時は○時候中り○食あたり○食物滯り等の憂なる血液の循環を整へ精神を爽快にし、音聲を清淨にし、益々壯健の身と成ること、大醫の證明せらるゝ處なり



本舗 東京日本橋區本石町二丁目 藥種問屋 博愛堂

賣捌は全國の確實にして敏活なる藥店にあり最寄にて御求めを乞ふ若無き時は直接御注文あれ

（丙の五）

太平洋

每月曜日發行　**第參卷第壹號**　一月六日發兌

●本邦唯一の週刊新聞

四六判四倍大　每號寫眞版入

本邦唯一の週報として斬然新聞雜誌界に頭角を擢んでたる本誌は本年より愈材料を精選し記事を精密にして政治經濟の論評を始めとして凡そ現時日本の社會に起りたる現象思想を報導し更に進んで海外の思潮奇聞風景等を紹介し讀者をしてあらゆる趣味と智識とを得せしむるとを努めんとす殊に色刷寫眞版は本誌の特長として誇る所なり今回は更に新らしき意匠を施し明治三十四年間に起りたる政治經濟文學等の諸方面を

人物の寫眞

を以て說明し名つけて

活動寫眞

といふ其の說明の執筆者は皆當代の文士或は輕妙に或は洒脫に或は愼重に或は簡勁に或は皮肉に千變萬化殆んと端睨すると能はざらしむるの概あり則ち此活動寫眞を見ん者は坐ながらにして天下の形勢に通し天下の名士と接し社會の活劇に觸るゝとを得ん所載の記事中川上眉山氏の小說

梅の寮

は文章着想共に艶麗高雅にして明治卅五年度の新春文壇を飾るに足るもの年方氏の

挿畫

と相俟て頗る見るに足るものあり理學博士

坪井正五郎氏

の紙鳶は科學方面より巧に紙鳶の來歷、傳說を傳へ國府犀東氏の艦樓日記は新に清國を漫遊したる觀察を記し、化粧鏡に女優千歲米坡の實歷談を紹介し社會事情に初出の今昔を記述し外遊奇話には新らしき方法を以て新らしき洋行者の失敗談を描く等多趣多種なる殆んど應接に遑ならん、其他三遊亭圓遊の新作落語虎ヶ嶽、齋藤綠雨氏の奇警なる星降り高山林次郎氏の美文蒲原有明氏の光の歌等皆一讀再讀の價値あるもの之れに加ふるに流行欄は新らしき流行を綿密に紹介し娛樂の案內には初春の遊覽所を詳しく報導する等編輯上更に遺憾なきを期す尙初春文壇の一文あり簡にしてよく新年の小說を批評し盡せり

●定價

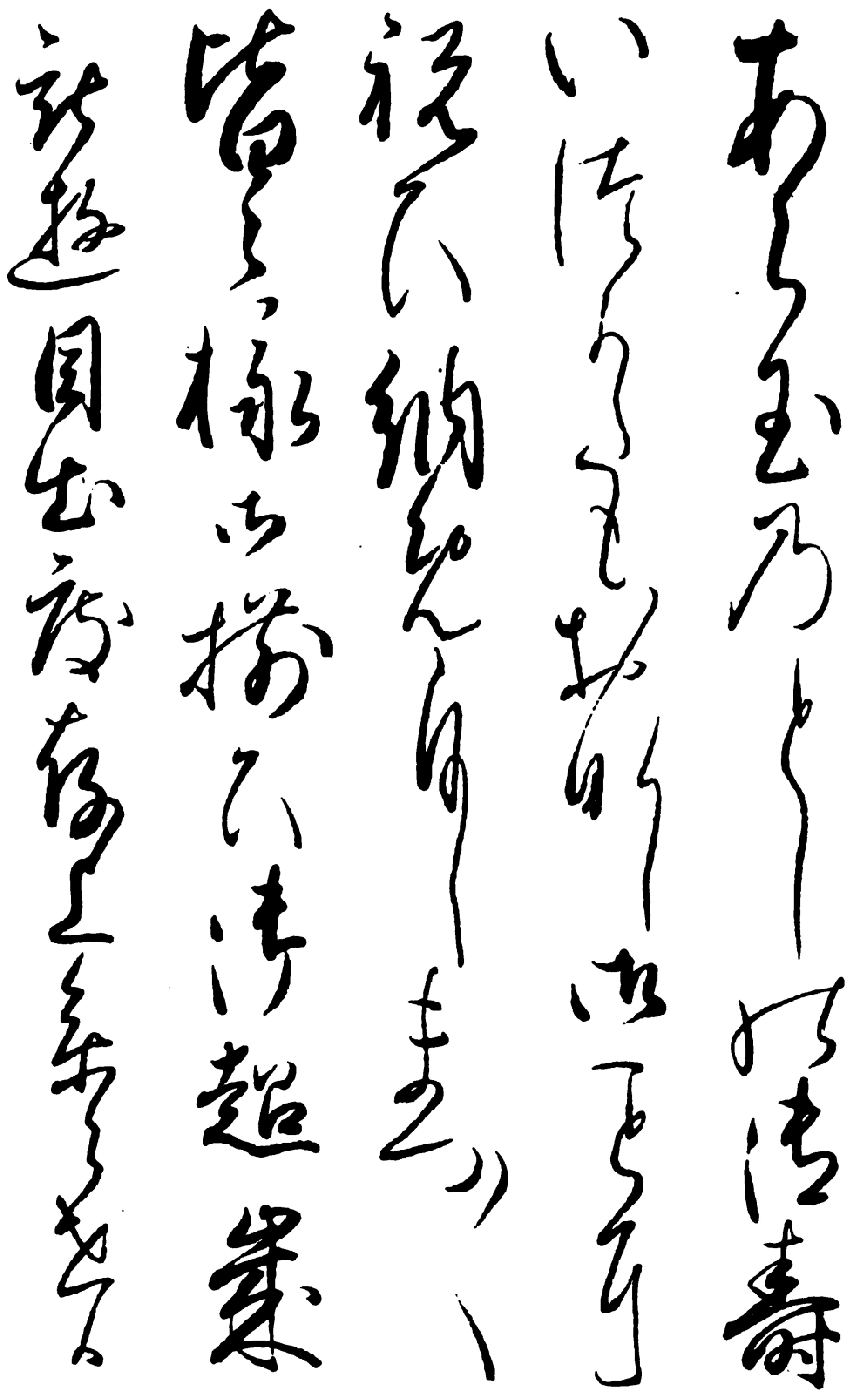
一冊六錢　十三冊（三ヶ月分）前金七拾五錢　廿六冊（半ヶ年分）前金壹圓四拾錢　五十二冊（一ヶ年分）前金貳圓七拾錢

郵稅一冊五厘

（丙の七）

發兌元　東京日本橋本町三丁目　**博文館**

多田親愛先生筆



左様より此ほど十山喜取しの

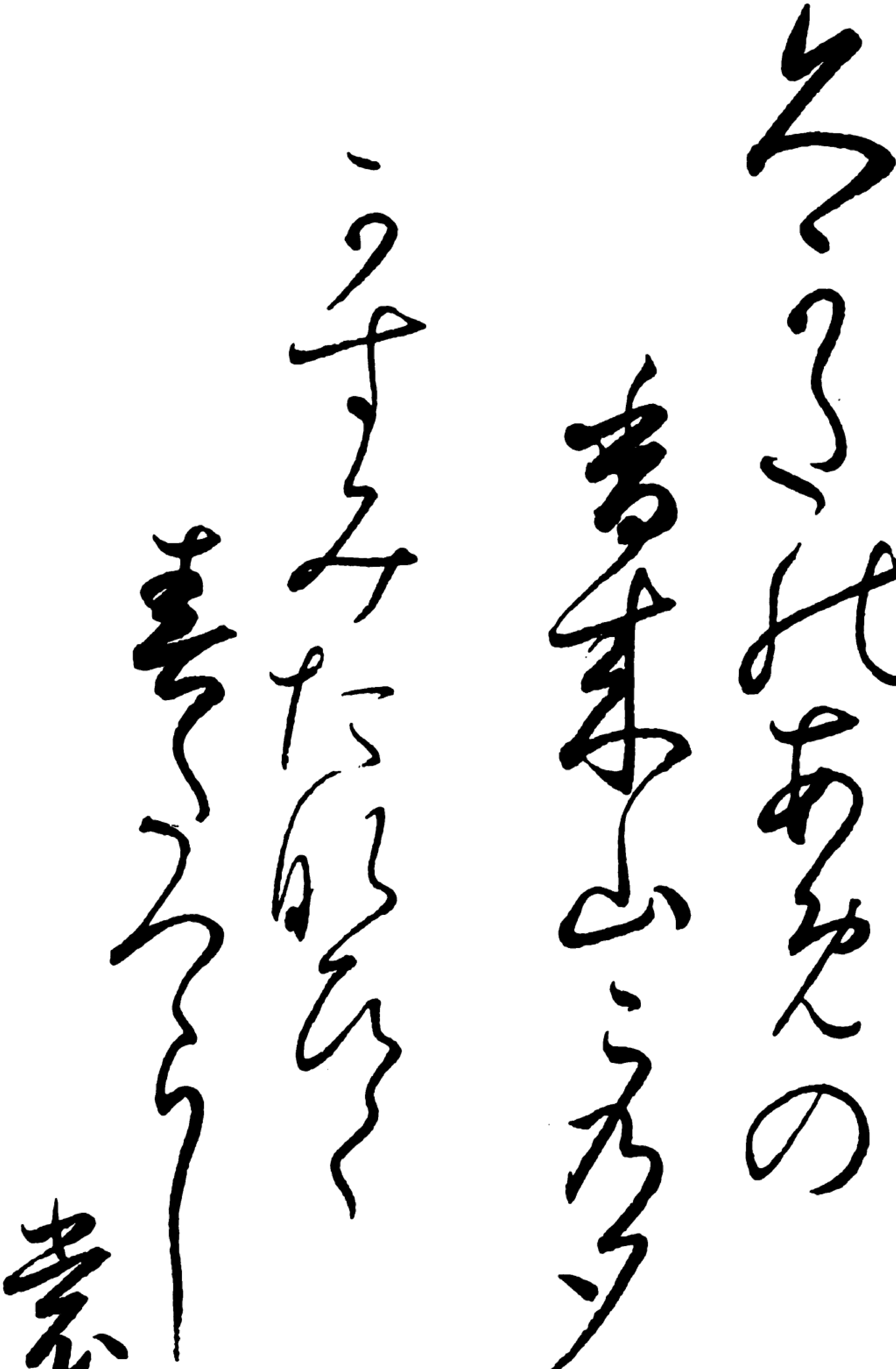
婚乃御祝儀申上候寿二

進上いたし候 猶萬々申上候

殊に一寸

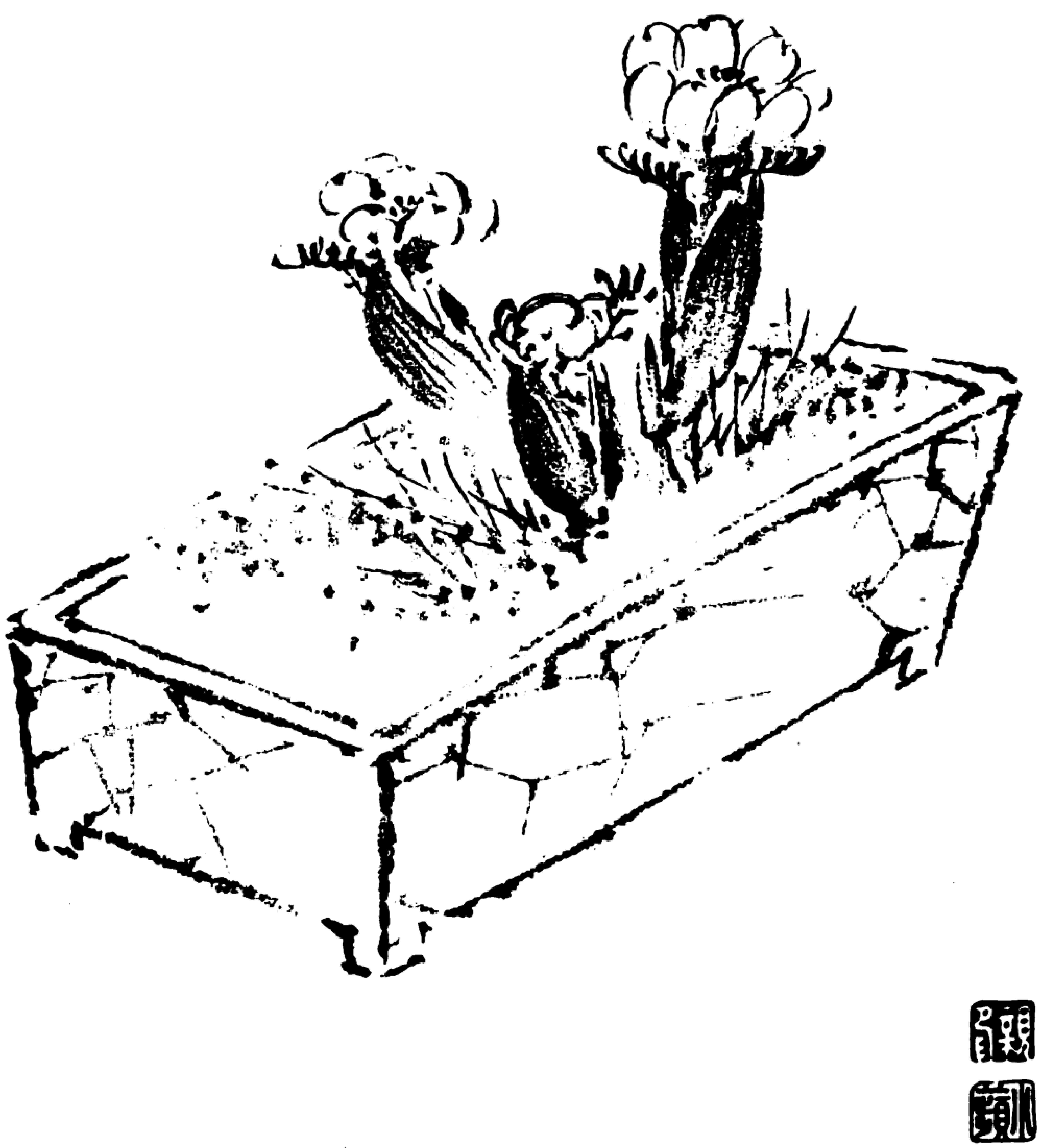
めでたくかしく

坂正臣先生筆



坂正臣先生筆

なのめならずとしは
ゆくしのまゝにすみ
このまへのやなぎに
はやくらにけり
こゝのおほみのまつりごとき
あまつひのひかりきこし
みそなはすらむ



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



古來稀有茶道全書豫告

心月庵松浦伯爵題辭
半月庵石黒男爵序文
遮莫庵伊藤男爵序文
谷神庵岡崎淵沖翁著

各傳比較 點茶治法

新年一月出版

全部十三巻
和裝上製
全四冊
定價二圓五拾錢
小包料八拾錢

此書は篇を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系譜を掲ぐ首に斯道の總論を掲げ各編皆諸流の傳を列記し其異同と理義の在所を知らしむ初學の人は此書に依りて主客の作法を始め手前百變の基棚莊千化の起露地の繩張茶室の構造まで容易に獨習自得せらる故に師範の人の好參考書たるは素より何流何派に論なく必ず一本を座右に備置かざるべからざる古來稀有の全書なり

東京日本橋區本町三丁目
博文館發兌

圍碁全書

全部十二部

七段 小林鐵次郎先生遺稿
初段 小林鍵太郎先生編述

第六編 評釋 古今名家打碁集

新刊

全一冊和裝 正價拾五錢 郵稅四錢

既刊

- 第一編 圍碁初步
- 第二編 圍碁入門
- 第三編 圍碁定石
- 第四編 圍碁詰方
- 第五編 圍碁布石法

續刊

- 第七編 互先定石集(上)
- 第八編 互先定石集(中)
- 第九編 互先定石集(下)
- 第十編 近古名人打碁集
- 第十一編 近世名人打碁集
- 第十二編 今代名人打碁集

各編一冊 正價金拾五錢 郵稅四錢宛

發兌元 博文館

(丁の一)

（丁の二）

明治三十五年 當用日記

菊判大形特製（舶來洋紙背皮 美製金文字入）正價金六拾五錢 郵稅拾四錢

菊判大形上製（舶來洋紙總クロース金文字入）正價金五拾錢 郵稅拾四錢

四六判形特製（舶來洋紙背皮 美製金文字入）正價金五拾錢 郵稅拾錢

四六判形上製（舶來洋紙總クロース金文字入）正價金三拾五錢 郵稅拾錢

菊半截形上製（舶來洋紙總クロース金文字入）正價金三拾錢 郵稅八錢

菊判形四六判形は紙數各五百四十頁菊半截形紙數五百二十餘頁

御注文は必前金

全壹冊毎月の初めには年中行事遊覽案內食品月令等の記事便覽依例材料最豐富

御注文は必前金

明治三十五年 懷中日記

特製（舶來洋紙頗美總クロース金文字入紙數二百八十頁）正價金拾八錢 郵稅四錢

並製（上等洋紙表紙クロース金文字入紙數二百八十頁）正價金拾二錢 郵稅四錢

弊館出版の當用、懷中各日記の正確堅牢にして實用に適するまた多言を要せず今回用紙印刷體裁製姿に至るまで尙一層の改善を加へ懷中日記は從來の厚表紙に屈折自在の薄表紙製を案じ又當用日記は新たに菊判大形の分を創製し且當用日記には中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を揭け各月の溫度天氣晴雨等の豫測に便す之を舊年の日記に比すれば材料の愈よ豐富なると記事の愈よ精確なること江湖坊間の日記と同日に論ずべからず請ふ續々御愛購あらんことを

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

工業叢書

工學士　市川俊雄君著　（既刊）

水及油

全壹冊洋裝
正價五拾錢
郵錢六錢

水と油とは人生秒時も缺く可らさる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種の生産之に出て運轉し、萬種の製産之に由て始めて成る、而して其工業上に於ての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書無し、世の工業家、機械家及化學者を始めとし艦船鐵道の機關士工業學校の教員及生徒は勿論其他總ての技師、技手等の必讀すべき良書なり

獨逸國カール、ランゲンベック氏著
東京高等工業學校教授 東京帝國大學講師 工學士細木松之介君校閲　（既刊）
尾州瀬戸陶器學校長黒田政憲君譯

陶器製造化學

全壹冊洋裝
正價六拾錢
郵税八錢

本書の譯者黒田氏は我國陶器の最も盛んなる産出地なる尾州瀬戸の陶器學校長にて、校者細木氏は工科大學に於て専門として陶器の製造を研究したる工學士なり而して本書の原著は歐州に於て陶器の産出の最も盛んなる獨逸國のカール、ランゲンベック氏が多年苦志して研究したる陶器製造の原理及方法を編述したるものにて方今世界の各國を通じ、斯業の爲に唯一の原理として賞賛せらるゝものといふ、當業者の爲めには無上の參考書なるべし是れ工業叢書の第貳編として出版す

工學士　糸山孝吉君著　（新刊）

機關車

全壹冊
洋裝上製
正價六拾錢
郵税六錢

我邦に於ける機械工業中最も弘く社會を利ぜるものを舶用機關及ひ機關車とす前者に對しては良書内外に乏しからすと雖後者を詳述せる著書は之を歐米に求むるも僅かに一二見るに足るべきものあるに過きず而も此等の諸書は最近の學説及ひ定例を載せざるを以て不便少とせず著者玆に感あり歐米に於ける良書を參考とし加ふるに最近の工業諸雜誌より最新の學説を採りて之を補はれたれば其完全無比の良書たるは呶々の辯を要せさるなり

（丁の四）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

恭賀新年

太陽丸

◉毒氣一切根切最新藥

定價 三日分廿錢、一週分四十五錢 五週分貳圓、二週分一圓廿五錢

梅毒、痳病、胎毒、瘰まちす、痔脚氣等を神速根治全癒し、再發するの憂なき、解毒最良藥なり。

醫學士岡本武次先生
醫學士田代義德先生 協贊
醫學士田村光顯先生 製藥

◉痳病消渇の根治新藥

太陽劑

定價 三日分廿錢、一週分四十五錢 二週分八十五錢、四週分一圓六十錢

痳病、消渇の專門藥にして、陰部の膿漏、刺痛、出血、腐爛等を根治全治し、再發の患なき良藥なり。

太陽五方藥の原料は、何れも我大學病院にて賞賛せらるゝ獨逸國最近發明の卓効ある貴重新藥なり

◉酒席旅行懷中必携新藥

太陽丹

定價
五十粒入 金五錢
百五粒入 金十錢
貳十錢 五拾錢 壹圓

旅行酒席は勿論人常に懷中すべき靈藥にして、頭痛眩暈、氣絶氣鬱、船車酒の酔、吐瀉下痢、等に著効あり、殊に音聲を清浄にし精神を爽快するに靈藥也

弊堂は藥舗として取扱ふべき品は内外何れの製造を問ず一式取揃置き全國一般卸小賣共大勉强致候

◉引風一切早なほし新藥

太陽散

定價三包入五錢七包入十錢五拾錢

風邪速治藥にして、熱を解し汗を發し、咳を鎭め、痰を祛るの効著大也。

●五方藥の郵送料は何れも二錢づゝ、

進呈

藥種、滋養品、賣藥、化粧品、薰物、醫療器等一式を網羅したる、弊堂販賣品目錄御望の方は往復、端書にて御申込を乞ふ即時呈送可仕候

●五方藥は全國藥店にて取次販賣す

◉腫物傷痛皮膚病の新藥

太陽膏

定價 大貝入五錢 罐入金拾錢

凡て傷痛の、毒を消し、腐を防ぎ、乾燥の効顯著しき、奇効良藥なり。

太陽五方藥本舖

東京日本橋區本石町三丁目 大橋博愛堂 電話番號本局二百八十六番

(丁の五)

(丁の六)

十二版發兌

中江兆民先生著

續一年有半

（一名。無神無靈魂）

全壹冊
洋裝菊判
正價金卅八錢
郵税八錢

兆民居士曩に客寓に在て病疾を獲、醫師診して餘命一年半を出でずといふ。玆に「一年有半」の著あり遐邇爭ひ賭て快とす、既にして九月中旬京に歸り、爾來病勢大に進み、醫師以て**餘命纔に一ヶ月**を支ふべしとなす。先生此二ヶ月の間に於て更に一家の哲學を留めんとて非常の痛苦と勞憊を忍んで亦此著あり。前編とは頗る其趣を異にし、高遠なる學理の見地と、卑近なる實際とを以て古今東西の聖賢哲學者宗教家の所説を縱横論駁罵倒して殆ど完膚なからしめ以て先生一家の哲學を創建し組織したるもの、哲學家としての先生が**五十年間**の蘊蓄造詣したる所は一に此書に依て發揮し盡せり其天馬空を行く底の筆力と廻飈林を拂ふ的の論鋒とは實に先生の壇場、前篇を味ひたる者亦此書を一讀せざるべからず。

第十八版!!

一年有半

全壹冊洋裝
正價金卅五錢
郵税八錢

（丁の七）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

商業叢書

新版

大學院學生法學士桐生政次君著

世界商工業史

全壹冊洋裝菊判 上製六十錢郵税十錢並製四十五錢郵税八錢宛

平和の戰爭は形式的のみ偶敗るゝとありと雖暫らく臥薪嘗膽の難苦を忍はゞ忽にして會稽の恥を雪ぐことを得む經濟の戰爭に至りては即ち然らず一度敗るゝときは再び起つことと能はず其凱旋は永久的なり又實質的なり意を留めざるべけんや彼の識者の寧ろ兵力の養生を捨てゝも國力の進捗を取らんとするとは即ち之が爲也而して商工業の發達は實に國力進捗の唯一的要件なり此書世界に於ける各國商工業の興敗を叙して其源因を明にし併て其變遷の狀態を詳にせり愛國の士は須らく一本を講ふべき也而て我が商工業者たるものは進て自ら其策を立て偏に當局の方針に狼狽するが如き從來の愚を再びするとと勿れ

目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(丁の八)

女學世界

明治三十五年一月五日發行

第貳巻 第壹號

紀元二千五百六十二年 西暦一千九百〇二年（壬寅）

論説

家庭教育所見

華族女學校學監 下田歌子

或る人、己れに問うて曰く。近來家庭教育の必要を説く者、日々に益々其多きを加ふるを覺ゆ。余、素より、家庭教育の如何んが、社界に影響すること、甚だ尠なからざるを知るものなり。而して、此の種の書籍、新らたに刊行せらるゝもの、亦其數益々加はり、新聞に雑誌に、日として、斯の種の事を掲げられざるなし。左れば、家庭教育の必要、家庭教育の目的、家庭教育の方法等も、有益なる事柄を記載せられたるもの、亦尠なからず。然

れども、目下、一般の家庭を見るに、猶ほ未だ其進歩改良の、大いに斯道を補益したるの結果を見ず。茲に於て、余は、家庭教育の進歩が、如何に此神聖ならざる社界に於ては、甚だ困難なるかを察するに餘りあるなり。左りとて、此の儘にして、改良進歩の好果を見ざる時は、社界は、日々に益々、墮落に傾き、家庭は、年々に、愈々、強固嚴正ならざるの、惡弊風を増長するに至らん。家庭教育の必要、果して、社界の說く所の如く、必要なりとせば、那れの點より着手し。何れの弊より、先づ矯むべきか。希くは、所說を聞かんと、己れ之れに答へて曰く。然り。家庭教育の必要は、今更言を俟たず。然し、己れが見る所を以つてすれば、既に、明治の教育を受けたる婦人が、人の母と成りて、熱心に、其子女の爲めに、家庭教育に、力を盡されつゝあるを見、又其結果の良好なるを、認むるものさへ、之れ無きにあらず。然れども、今より十餘年前の女子教育は、尙ほ甚だ不完全なるものなりしは、云ふ迄も無く、其の不完全なる學校に登りてすら、普通教育を修め得たる女子は、實に寥々として、曉の星の如くなりしなり。此の僅少なる普通教育を受けたる母達の、如何に、熱心に、家庭教育に、力を盡され、且つ、其結果、良好なりといふと雖も、猶ほ未だ、其好果を、社會に影響する事能はざるは、實に遺憾の事なり。況んや、其

教育を受けたる婦人と雖も、決して充分なる、教育を受けたりとも云ひかたく、殊になほ年若くして、經驗に乏しき母達の、充分に、完全なる家庭教育を、布かせんことは、之れ亦、望み易からざる事なるべし。而して、其他一般の母たちは、なほ文明社界に、行はるゝところの、教育の如何をも知らざる人多ければ、此無智の母を以て、主宰とせる家庭に、養はるゝ子女は、矢張り、完全なる膝下の教育を享くる事難きは又素より。論を俟たざるなり。而して、己れの最も悲しむ所は、此の無智無識なりと人も言ひ、自づからも信ずる所の母親達、己れが子女の學校に登りて、僅かに、普通教育の片端をも、學び得たるものを目じて、すでに、我れよりも賢明、我れよりも博識なりと思ふが故に、彼等年少子女が云ふ所は、其理と不理とを撰ぶに遑あらずして、大抵は、其云ふがまゝに、任かするの傾きあり。殊に、修學の點に付きて、最も其然るかを疑ふものなり。例之ば、甲の學校は、不可なり。乙の學校に更へたし。甲の教師は、不充分なり、乙の教師に付いて學びたしと、子女、其母に乞へば、母は、其善惡優劣、適不適をも細かに觀察調査すること無くして、大方は、其子女が云ふまゝに、幾軒も學校を取り替へ、屢々教師をも取り換て、只、其年少子女が、云ふ所を行はしむ。茲に於てか、子女は、更らに、學校を確信し、教師を尊崇

するの念なく、己れが我が儘に履行せんと欲すれば、直ちに、其家庭に訴へて、各自、教育の方針をも取り更る事を難しとせざる事、恰も奕棋を取り更ふが如し。斯くの如く、師に重みなく。家庭に亦重みなし。何を以て、其子女が精神教育を強固にすることを得べき。其半物識なる子女は、生噛りなる、學問技藝を、其家庭に誇りて、僅かに、文を綴り、僅かに、物の理を解すれば、得々として、其父母に誇る者、亦之れ無しとせず。其弊や、又甚だしと云ふべし。從つて、この哀れなる母は、往々にして、口にすらく、『私は教育が御坐いませんから、私は學問が御坐いませんから』と、此の語を數回すれば、遂ひに、其子女の耳にも入りて、自づから母を輕蔑するの念を高むるは、又實に、免れざる事なるべし。

或る日、己れ、何某の母に遇ひ、子女教育の事を語りたる時、其母親の曰く。『私は、小供の躾も充分に致したいと存じますけれ共、何分教育と云ふものを、受けた事が無くて、學問と云ふものが、少しも御坐いませんから、小供を叱る事も出來ません』と、己れ、之れに答へて曰く、然り、知らざるものを以つて、知る所のものを誡め。悟らざる所のものを以て、悟りたる所の者を敎ふに、至難の事あるべし。然れども、日本社界の道德の基礎は、一に其母なるものよりか、打ち立てられたる事は、今更ら言を俟たざるなり。西哲は、言へ

り。東洋は母を以て、社界道德の基礎とし、西洋は、妻を以て、社界道德の淵源とす、と、眞に然り。東洋には、母の善く兒を敎へたるもの、比々として、其數實に、數へ擧ぐるに遑あらず。其母なる人は、果して、皆、學者なりしか、識者なりしか、否、決して、然らざりしなり。地方邊陲の地に住めりし婦人の如きは、其甚だしきものを云へば、眼に一丁字なきものすら之れありしと、然れども、其兒に善を勸め、邪を嫉むるの嚴なる、決して、一歩だも假さゞりしなり。己れが知人、明治元老の一人なる、某氏の母刀自は、文字と云ふものは、更らに之れ無かりし人なれ共、其志操堅固にして、其言行甚だ、嚴正なる人に在しけるよし。其兒を師に付いて學ばしめ、兒、還れば、直ちに之を復習せしむるに、彼れ母刀自は、眼に一丁字を知らざれども、其子を思ふ熱情の至誠は、善く其巧拙を判斷するが故に、其愛兒の讀書の聲によりて、充分に覺え込みしや、充分に其意義を解せしや、否やを判斷して、不可なりと思ふ時は、傍らに、鞭を置きて、其臀を鞭打ち、以て其怠りを叱責訓誨せられきと聞く。氏の曰く。余の今日あるは、實に母の賜物なりと。是れ實に世の母たらん人の、好模範とすべし。母親、熱心に、己れが子女を、敎誨して、善に導かんとせば、何んぞ、己れが無似を顧みて、躊躇することかあらん。遠慮無く誡しめ、猶豫

など教へて、以て、其子の賢明正義の人たらん事を希ふべし。と答へたりき。家庭教育の方法は、多々之れあるべしと雖ども、己れは思ふ。要するに、只母なる人の、熱心に其子を正直に導びきて、且つ之れを聡明ならしめんと希ふ志固ければ足れり。其の方法は、縦へ拙なかるにもせよ、母が満腹の至誠を以て、之れを正義に導かんとせば、年少の子女、いかでか、其至愛至誠の情に化せられ、清く正しき人とならざるべきかは。希くば、家庭教育の主宰者たる、世の母たらん人は、先づ己れの言行を修めて、至誠以て、子女を導き、及ばぬまでも、其子女をして、賢明智徳の人とならしめんと、希がはるべし。しかせんとならば、有益なる、各種の會に出で、學士博士の演説を聴き、又有益なる、雑誌書物を繙きて、子弟教育及び、家庭教育の方法手段を講ぜられんも、決して至難の事ならざるべし。只、己れは、悲しむ。社界の趨勢、何となく、眞面目ならざる現象ありて、其悪弊風は、自然親愛の子に對しての母の熱心さへ、又眞面目ならざるにはあらざるかの感をさへ懐かざるにしもあらず。實に、社會の風紀は先づ一家の風紀より正さゝるべからず。未來の國民を養成する家庭に於て、善に進むの一歩を母のつとめよりつけられば、爾餘の教育は、甚だ困難ならじかし。猶ほ、家庭教育に就て、思ふ所多々之れありと雖も、今度は只此の一篇に止めて、次回を待ちて、更らに其方法手段を云はんとす。

九重の庭

祀し奉るもいと恐れ多き事ながら、畏きわたりには東雲の肌寒き頃ひより夜の御殿を出させ給ひ、七時といへば大方の賤が家にも早しとおもふに、いと嚴かなる御食室の中には夙く龍顏のうるはしきを拜し奉るとぞ、兩陛下とも平時御洋裝に在せども、御食事は御陪食などの場合を除き、いつも御國ぶりにて御二の膳の御定例の外に殊更に添へらるゝものもなし、食召さるゝ御材料に精粗の差こそあれ、味噌汁、御香の物、常人と異りはおはさぬとぞ、主上には時として重要の御政務を聞かせらるゝ爲め、皇后陛下の定刻に出御あらせらるゝを待ち給はず、御一人にて御食事を終へさせられ御表に臨御まします事もあり、御晝餐も御政務多端に渡らせられ通例一時を過ぎ給ふとか、皇后陛下も特別の御都合なき限は永く陛下の入御を待たせ給ひ、大膳職の粗忽なき注意申し上ぐるにも拘はらず、御食品のさつと冷へ渡る頃、はじめて食召さるゝ事もありとか、臣民たるもの察し奉つるにも猶恐れ多き事ならずや、又兩陛下御平常の御嗜好を洩れ承はるに、御兩方共御食事のきわにさして御好も御はさぬ樣なれど、主上には鮎など川魚の類を御嗜好ありて、季節に至れば長良川より獲たる物を氷詰にして御厨に上るなりと、皇后陛下には鮑のふくら煮など御好みに叶ふ由、大膳職などの恐察し奉る處なりと、主上には朝は牛乳、晝と夜とは少量の葡萄酒を用ゐらるゝよしにて皇后陛下にも此程より御藥用として極く少量の葡萄酒を食召せど、洋食及び葡萄酒は御好みに添はぬ御樣子なりとぞ。

家庭

女子食料の改良（上）

醫學博士　三宅秀

肉食論者、穀食論者、魚肉の供給其他、

此頃或る所で穗積博士(陳重)に出會ひまして女子の身躰を强健にすることに就き追々話に及びました時に同博士の申さるゝには私が二十年ぶりばかりに歐米を巡廻して見た所が彼地の女子の躰格が著るしく大きくなつて居るやうに覺えました、それは私一人の感覺上からしてさう思ふのではない、彼の地の人に聞いて見ても歐米の人が申すに二十年このかた婦人の身躰が大きくなつたと云ふことを皆申して居ります、而して此躰格の宜くなつた人達は中以上の婦女に多く認めまして女工を澤山使つて居る工塲へ行つて見ると案外工女の身躰は以前より増長して居らぬやうに見かけました、

此話を承りて私の考へますには斯く中以上の女子の身躰の大きくなつたのは食物が良くつて運動を奬勵した結果であらう、貧困なる勞働者の身躰の大きくならぬのは食料が不適當であつて運動が度に過るからであらうと思ひます、斯うして見ると人間の身躰を長大にするには强ち數代の後を待たずとも僅か一代の中に身躰を大きくすることも出來ぬ譯のものではないやうに思われます、と申したら穗積君も全く同感であると申されました。

近頃我國にても中等以上の婦人達は頻りに躰育の必要なることを言ふて運動を奬勵したり又小學校の令孃達には袖を縮めたり袴を穿せたりして假令日本服を着て居ても運動に便なるやうに致し又は精神を活潑にする爲に全く洋服杯を着せるのを見掛けます、斯う云ふ具合に思ひ通りに衣服等をも改正することの出來るやうな婦人達は勿論自分達の好みに應じた食物を攝つて其分量も充分に供給されまするからして日本の婦女も遠からず身躰が成長するやうになるだらうと思う此事は

甚だ喜ばしいことであります、併し以前からして日本には一の通弊があります、それは女子が兎角少食を以て誇る癖がありますが是は甚だ宜しくないことでありませう、前の宮内大臣の土方伯が曾て私に話されたことがありまするが華族女學校の生徒の辨當箱が一年増しに小さくなる、年を取るに從つて辨當箱が大きくならなければならぬのに其級が進んで妙齡の頃に至ると云ふと格別辨當箱を小さくする癖がある、是は甚だ宜しくないからどうぞ私にも心配をしてさう云ふことのないやうに氣を付けて呉れと云ふことでありました、併しそれは數年前のことであつて今日では斯う云ふことは追々改良に赴いて居ります。

元來女子の十五六乃至二十歳頃までの所は身躰が急に育つ時分であり精神も大に發達して來る時でありますからして其爲に身躰を養ふ所の食物を澤山に取らなければならない頃はひであるのに恰も其頃食事を餘計にするのを羞て少食することを以て誇ると云ふのは丁度逆のことであつて道理に背いてをるから是が貧困であつて食物を取ることが出來ぬと云ふやうなものならば兎も角も中以上であつて食物を充分に取ることが出來る人であつたならば舊來の悪い風習は全く棄て充分なる食料を取つて貰ひたいものだと思ひます、

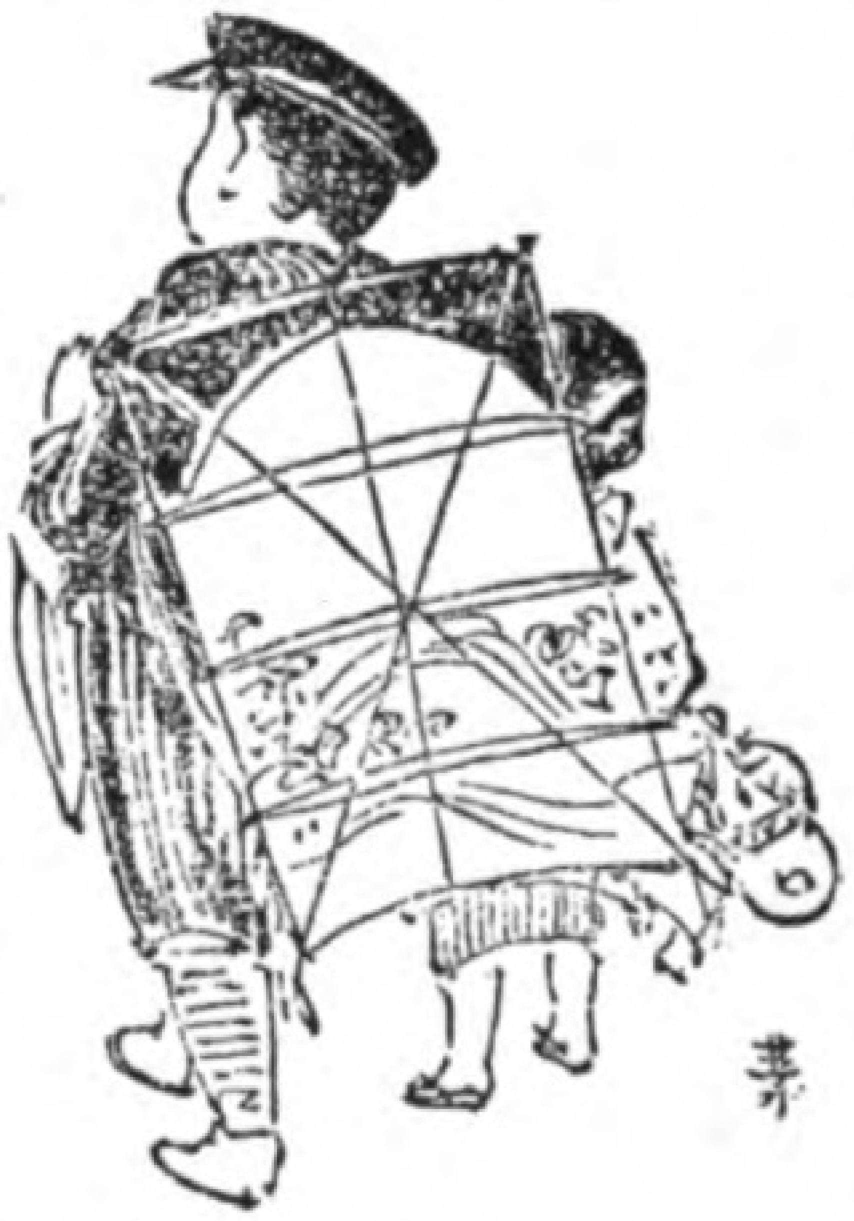


原來日本は專ら穀物を食ふ國であつて肉食は主食となさざる習慣でありませう、然るに西洋の衣食等總ての習慣が追々此方へ傳つて來てそれが爲に舊い習慣を改めて頻りに肉食を勸奬して居る人が一方にありまするとと丁度其反動で日本古來の穀食を主張して肉食は却て人間の身躰に危害を及ぼすものだなどと言つて頻りに肉食説を說破らうとして居る者が熾んになつて來ま

したけれども肉食論又は穀食論に偏して居るのは矢張其中庸を得ないものだと私は思ひます、併しながら此食物の二說あつて互ひに爭ふて居る事柄に對しては各々其根據とする點に於ては全く道理のないことではないので、肉食論者の言ふ所では人間の身體の構造を見るに其大部分は皆蛋白質と脂肪分より成立つて居つて粉質のものは極めて少しほか身體の中に含むで居らぬ、それ故に人が身體及び精神を勞働使用すれば必ず是等の主要成分の老廢を致す筈のものであるからして食物を以て之を補給しなければならぬ是のみは一日も怠ることが出來ぬものである、若し此食物の補給を怠つたときには勞役に堪へない者になる、それ故に肉食を專らとして充分なる食料を取らねばならぬと言つて居るのであります。

之に反して穀食論者の說によれば人間の身體の構造は肉食論者の言ふ如く蛋白質と脂肪分で專ら出來て居るものではあるけれども此身體の動作運營を致す際に夥しく消費せらるゝ物質は蛋白や脂肪にあらずして却て粉質糖分が主なるものであります、それ故に蛋白脂肪の如きは格別消費せらるゝものでない、其僅に消費せられるだけの蛋白や脂肪は穀物の中に充分含むであるからして强ち肉食をしないでも穀物ばかり食つて居つても動作をする所の成蹟に於ては肉食をした者に少しも讓る所はないと辨じて居ります、實に此甲乙二つの論者の說は各道理に當つて居つて決して理のない譯ではありませぬ、併し私は其中間に立て穀物を專らにし之に適當なる肉食を加へると云ふことにさせたひと思ひます、之に付いては少しく經濟上の話をして來なければならぬのでありますが、我國では家畜及家禽を養つてそれの肉を食にすることが少ない、故に西洋よりは比較的に價が高いので中以下の生計を營む者の食膳には肉類を上すことが誠に難い、況んや貧困者、勞働者などは鳥獸の肉は到底得ることが六ヶ敷いのである、然るに魚介の肉は周圍が皆海で取卷かれて居る國であるからして安い價で普ねく下級の人民の口腹を養ふのに足りるやうな方法手段があるのであるけれ

どもそれすら容易に行けれ難い有樣である此魚介の肉と雖も山間の僻地まで及ぼして行つて安く之を食はせると云ふことの點は充分に行屆いて居らない、一說には我國の肉は之を購買する價が高いのではない、我國の富の程度が低いのである、資財に乏しいからして贅澤らしい肉類は食することが出來ないのであると富の程度が低いと云ふ所に其理由を付ける人がありますけれども、私は富の程度が低くつて肉が高いから食ふことが出來ぬと云ふのでなからうと思ふ、實際山間の地には鹽漬にした魚肉ですら未だ得難いのは全く交通の道が開けずに運輸の費用が嵩むで其爲に魚肉の直段まで高くなるのと又魚肉の方は漁獵の收獲が年中不均一なものでありまするからして或時には澤山漁れて腐る程澤山にありまして其海岸の地では必ず魚肉の價が下るでありませうけれども、收獲のない不漁の時になると云ふと全く其品が拂底になりまするからして非常に價が騰貴して來る、之を平均させて置くのには詰り魚肉を貯藏する法と云ふものが充分に進んで來れば不漁の時の足しに貯藏して置くと價も格別の高下なしに魚肉が食せられるやうになるが、扨貯藏をして置く方のことにしても魚肉と鳥獸肉と比較して見ると云ふと魚肉の方が貯藏するに困難である、魚肉の方が早く腐る性質を有て居るから其腐れ易い魚肉を能く保存して置かうとするのには種々の手を掛けねばならぬから矢張直段が高くなるのみならず、魚肉と云ひ鳥獸肉と云ひ何れも肉は案外に高いものであるからそれ故勞働者就中紡績業機織業などに從事して居る所の工女などに食はせる物が兎角年中精進物ばかり食はせて置くやうな結果を生ずるのでありませう、



現に內務省等で調べられたのを聞いて見ても僅か一週間の中に一度鰯の目刺を喰はせるとか又は一ケ月の間朔日十五日の祝ひ日計り魚肉を膳に上すと云ふこと

で、甚しく言つて見ると年中精進物ばかり喰はせて置くと云ふやうな有樣で居る、是は實に其工女の身體を大きくすることが出來ないと云ふばかりでなく、殖産興業の基たる原動力を弱らすのであるからして殖産興業の方から言つても嘆かはしいことで是非共是からして改良して來なければならぬと思ひます、併し穀食論者に言はせたならば肉類は殆んど要らぬものであつて肉を食へば身體を害すると云ふ位に極端なる論をして居ますから、其工女を使役して行く人などは所謂我田引水の理屈で精進物ばかり喰はせてさうして勞役に從事させることは一向輕減せずに粗食を供しつゝ勞役の方を重からしめむとするやうな傾があると思はれます、蒸滊機關を用ゐて之を原動力と爲して工業を營むで居る所では、其蒸滊機關で費す所の石炭を節減して可成少量の石炭を以て滊力を盛んならしめむと欲するのは實に無理なことだと誰も能く知る所でありませう、然るに人力を以て原動力と爲して居る所では人間の身體に取込む所の食物と云ふものは取りも直さず蒸滊機關の中へ石炭を燃べると同じ道理のものであるからして、其食物の方を貧しくして置いて充分なる勞働を爲さしめむとするのは無智と言はむよりは寧ろ酷薄と言つても宜い位だらうと思はれます、吾々の身體を動かしたり又體溫を保つて行くのには粉質糖分を以て主要成分として居るのであるからして、丁度穀食論者の唱へる如くに是等の食物を多く食はなければならぬ筈のものである、幸ひに我國の人は肉食を少なくしても米穀を澤山食することに馴れて居つて米麥の如きは粉質に富んだ物であるから之を食へば身體の活動を力めるのに一向疲れを覺えないで作業力も大きに振つて來て隨つて其勞働者が一個人の利益を得るのみならず、工女使用者の利益となり遂には國民一般の富を增して來る譯でありますから、是非共米穀を主なる食物として多く食さするやうに習慣を付ける方が宜からうと思ひます。

家庭の樂趣

成女學校講師 嘉悅孝子

あまり喜ぶ人ばかりもありますまい、年ばかりとりて、とは人々のよく云ふことですが、去かし致しかたがありません。またも年の初がめぐつて來ましたので舊例により皆さんと相變らず紙上に於て見ゆるの榮を得ますのを幸の至りと玆に謹んで新年の賀を演ぶると共に、其年の初にありとまうす一年の計を講じやうと思ふのです。顧みますれば昨年の事業としては、女子大學の巍然として建てるを見、愛國婦人會の沛然河を決する如き勢にて進みつゝあるを觀、或は我女學世界の花の如く學びの庭に活動するを見るなど、幾多見るべきものもありますけれど、さてこれによりて世は如何ほど進みしか、日本の家庭に於ける有樣はどれほど改善せられたるかといはゞ、なほ依然として舊態を改めぬと云ふより外はないやうてす。これは能はざるのではなく、所謂爲ざるのでせう。それて我々はこゝに年の改まると共に我等の理想の實行、則ちおのれの職を樂しみ、世を面白う渡り、殊に家庭の如きはこれを以て一個の樂園たらしむる道を講ずるの必要があると考へます。



すべて世の中の事一ッとして興なしには決してやれるものでなく、興ありてこゝに充分働けるので、男子の外に働くは、愛する妻子の家にまつあるを思ひ、我が成功に彼等の歡ぶを見る、その樂しみに働き、また教育者の勞多きをつぶやきつゝも一度教育の面白きを知りては如何なる王公貴人の招きにも應ぜぬ如きも則ち千金にも換えがたき興がおのづから湧き出るからで、俗にすきこそ物の上手と云ふは、すきと云ふが既に興を知りたるので、普通の人より見れば實にその優長たるに驚く茶の宗匠などの、朝から晩まで同じやうなる事に、厭く色もなく繰返すも、全くそ

の興を覺り居るためであると思ひます。で我々は一家の整理を無上の樂しみとし、臺所の働きを最も興あるものとしたいのです。

帝と王と其號異れども其聖たるは一なりと、蘇氏か誰かゞ云はれたやうに覺えて居ますが、試にそれの如く主人と主婦、男子と女子と、其名其者各異つては居ませど、一家に於て其聖たることは一にて孰れも缺く事の出來ぬもので、只その世に處するに相違あるだけである事を知つたならば、男女同權とか女權云々などの如き、やかましき言語を稱へずとも我等婦女子天性の美、所謂愛を以て世を救ひ、家を治めると云ふ此美しい性質。思想。感情。態度。は、決して男子の持ち得ぬ徳でありますから、女は女らしく女のすべき勤をなすうちに優に男子の尊敬を得る事が出來るのです。然るに今かやうに完全に一家を治め、社會を融和し得るだけの家政的女學生が幾何出來つゝあるのでせうか、よく本は讀みますが、内の事は何も出來ません、洗濯一ッが碌〲出來ません、裁縫は素より煮炊の業は殊更にとは、大かたの母親たちが慨かるゝ所で、親でさへすでに我子の不能をつぶやくやうでは、他の家に嫁で其家の治るわけがありません。匹夫にして百世の師となり、一言にして天下の法となるとかいへる言のある如く、賤しい業でも洗濯をする内に百世の師となるべき經綸が、たしかに出來るので、世に賢才を輩出させるは父親の力では決してなく、母親の力でせう。つまり洗濯一ッ出來ないやうな人があるので、女は役にたゝぬかと何とか云はれるので、見渡す所多くが一家の事皆男子の指揮を受けて行ひ、子女敎育に關する智識は素より被服の調製、夜食の献立までも、一々指揮の下に働く有樣、さながら奴隷です。かやうに自分からわざ〱自分を奴隷にして居るやうで、こんなに世話がやけては男子もたまつたものではなく、家政を擧けて任かすところがなくどの位心配か知れません。若しかやうに心配な氣遣はしい位の人間であつたなら我々であつても家政の重任は任ぜられますまい。たとへば今茲に一人の女中頭があるとして、その者は名こそ女中頭であれ、實力は

わづかに臺所の事だけも、正しく完く治める事が出來ないやうな人物であるとしたならば、一家一部の長として尊ぶ事が出來ませうか。政府に於ける閣臣を議會が不信任を稱へて辭職を勸告すれば政府は議會を信ぜずとして解散を命ずるなどゝ云ふ事をよく聞くやうですが、これなども互に信せられる丈けの技倆を顯はさぬからで、夫人も良人の信用を得るだけの技倆を顯はさぬ時は、女子供の知る處でないと一言の下に退けられ、ます〳〵奴隷視せらるゝも致しかたないのです。婦人の技倆は一家經營にありとは、よくだれも云ふ事で、一家經營一國經營、その大小の差こそあれ、爲す事に於ては少しもかはりはありません。

國を治むるは其家を齊へ、家を治めんには身を修むとは古今の金言で、實に國の基は家にあるのですから、私どもは既に人の妻となり一家の政治にあづかり居る人は、一國に於ける大臣と等しき尊敬を以て



過したいと思ふのです。否遇して居る積りです。しかしそれが又それだけの價値がなくては如何に思ふも尊ばれぬので、ことに一家の事は小事なりなど云ひて顧みず、徒らに虚名をうる事にのみつとめる如きは、我等の尊ぶことが出來ない處のものです。

なほ茲にくりかへします。彼の諸葛亮が草廬に在りてすでに天下の計を爲し居られたるやうに、一家にありて洗濯をし、烹厨に働き、子供の繦緥つゞる手に、はや天下の得失生民の利害、社稷の大計はこもつて居ると云ふ事を。

それで女子は是非とも此觀念を以て起り、此覺悟を持ちて立ち、一家經濟、子女の敎育など良人の指揮を仰がずとも、我が思ふまゝに行ひて少しも他より嘴を入るゝ餘地なからしむるやうにやりたいのです。先達ての本誌に出て添田博士の家内經濟と云ふ御議論、あれは誠に我等の指針であ

れだけの事は御互に是非やつて見たいのです。あのお話にありました節儉以て貯蓄をなすは、それほど六ケ敷はありますまいが、勤勵以て生產の增殖、これが鳥渡出來にくいやうで、まさかに內職を初める譯にもと思ふかたもありませうが、內職は決して增殖法ではありませんて、勤勵則ち其ものが增殖法だと私は思ひます。先達も私の學校て紀念祭を擧行し、賓主を合せて殆んど五百人の立食、たしかに各自のおなかに滿ちたと思ひますが、其費用がわづかに三十幾圓といふ有樣、それで其品目は、すし店も出來ました萩の餅店も出來ました。珈琲店も西洋菓子（スカンズ）店、柿店、煎餅店と分かつて、わづかにかくの有樣、一人前七錢を越えぬとは實にをかしいやうですが、これは誠にいはれのある事て、製品は皆前日よりかゝりし生徒の勤勵になりたる手製の品であつたからて、これを若し他より購求したものとしましたら、こゝに慥に十數圓の差を生じたでせう。そこで此の十數圓は慥に勤勵の價であつた事がわかります。わづか學校てする事位でさへ、すてに此通りですから、我國に於ける二千萬の婦人が、此心を持ちて勤勵の價を貯蓄しましたら、忽ちにして晉楚もために顏色なしとも申位の富を致す事が出來やうと思ひます。それでこれからは現時の女學生諸子が、以上の樣な大事な事を心として、他日一家の主婦とならるゝ頃には、從來の樣な何々軒、はた何々樓などいへる飲食店でなくば宴會が出來ぬとか、若くは紅粉美服にわづかに其身の醜を覆ひながら、聊か恥ちる色もなき賤婦をして、貴き席かつは淸き家庭には、決してこれを入らしめないて、如何なる宴席會合もその接待斡旋の勞をとるは其家に於ける貴き夫人、淸き令孃、若くは朋友知己の婦人令孃が、これを助くる事として最も高尙く、最も樂しく面白きまとひとなしたいと思ひます。それを完ふするには此心懸の上にまた交際術の必要が愈起つて參るので、交際術これにはまた少し考へた事もありますが、それは他日のべる事として、つまり人をして不快の感じを起さぬやう、やはり面白く、愉快に感ぜさせるといふに歸するので、よくある事ですが某夫人

の處へ行くと、何だか樂しくつて、歸るのがいやになると云ふことがある、これらが交際術の得たるものでありませう。

かくわけて參りましたら學ぶべき事、つとむべき事は猶ほ澤山ありますが、それは着々とやる事として、兎に角世を面白く渡り、社會を愉快にすゝませる研究をする事に、一般婦人諸氏の贊同を得たいと思ふのです。(完)

育兒實驗

ドクトル　川瀨元九郎

育兒問題は近頃になりて大層八釜しくなつて世人が一般に注意する樣になつて來たのは結構なことである。二三十年前迄は兒童は憐れな取扱を受けたもので、殆んど人間の仲間に數へられなかつたのである、殊に父親は全く育兒には關係しなかつた、而して當今の婦女子に比較すると無學文盲であると言ふても差支がない婦人に兒童の養育は全く任かされてあつたものである。今日でも上流社界の或る者殊に明治以前に生れた人は相變らず育兒には無頓着である、下等社界にありては一層甚だしいものである、東京の下等社界では兒童を餓鬼と呼び厄介物として取扱つて居るが、文明の進歩と共に全く改良せらるる時が來るであらうと思ふ。



◎私は書生時代の頃に於て外人と交際する樣になつて以來は育兒上の改良問題に趣味を以て居つた、而して其頃から淺薄ながらも育兒上の理想を畫て居つた。實際自分の子供を持つて實驗するに至りては數層趣味が增して來た、親としては育兒ほど愉快で大切な問題はなからうと思ふ。

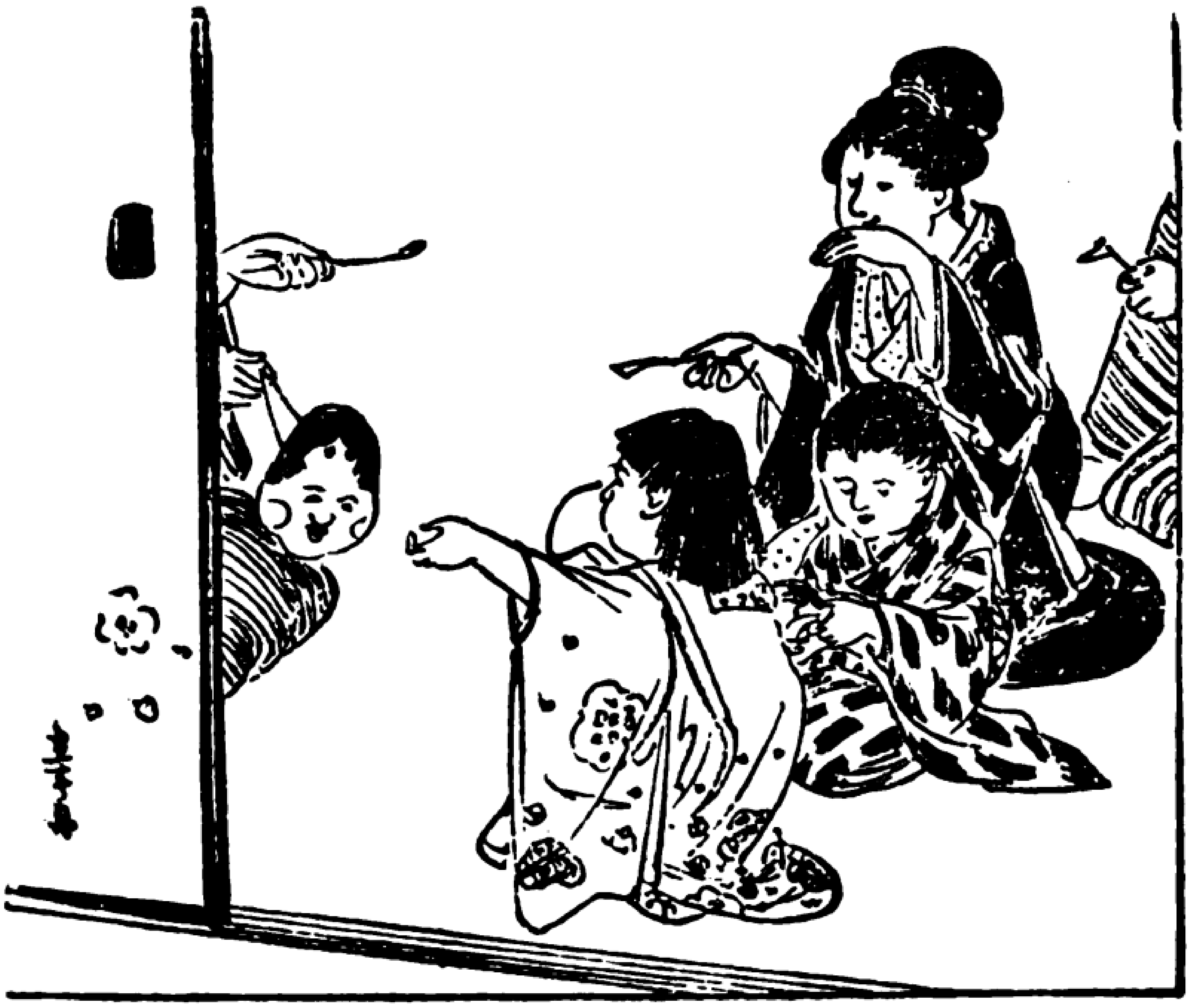
◎西洋人が育兒問題の研究に熱心であるとは世人の多くが承知して居ることであるが、育兒の主任者たる婦人だけでなく男子も一樣に研究して居る、又結婚した

婦人が小兒の養育法を心得て居るのみでなく妙齡の令孃でさへも吾輩共よりも多く心得て居るです。此頃も一英婦人を訪問した、此婦人は三十才許りて未婚者てあるが年齡滿四才許りの日本男兒を預かつて養育して居るが、吾輩の訪問した時は丁度此男兒に音樂を敎へて居た所であつて、男兒は愉快らしく「ピアノ」に合して歌ふて居た。婦人は規定の敎授時間であるから規則を破りたくないからとて私に許しを乞ふて音樂の敎授を中止しなかつた、音樂の後に勝負事の遊戲を始めて私及び來合せて居た一婦人にも遊戲の仲間入りを請求した。男兒は實に愉快らしく遊んだ。主婦の曰はれたには此の男兒が婦人の宅へ來た初めには「負けた」と言ふことを仲々言はなかつたが此頃に至りて負ければ負けたと直に言ふ樣になつた云々、私は婦人が萬事に注意して居るのに實に感服しました。

◎西洋の育兒法は間然して居る所はないが日本では其儘實行するとの困難な箇條もある、例せば西洋ては小兒が横着を言ふと小兒の寢室に閉込めて矯正するのであるが日本では閉ち込めることが出來ない障子や襖を三四才になれば自由に開閉するから到底實行することは出來ない又假りに閉込めたとするも薄き紙一重が境界であるから近隣の家屋へ泣き聲が達して邪魔になるのです、私の宅の隣りに能く泣く小兒があるが時々其泣き聲の爲に宅の小兒が目醒めて閉口することがある、又間食を禁じて一定時に食事を與へねばならぬことを知つて居つても日本の風習の爲に其規則を破らせらるゝことが屢々ある、來客があれば直に茶菓を出さねばならぬ小兒が菓子を見れば欲しがるのも無理はない、親しき朋友とか親戚のものゝ來訪した時なぞは小兒を客間へ出さねばならぬことがあるから困るのである、西洋には斯樣な惡習はないから實行し易いのである勿論私は斯樣な惡き風習は改良したい精神であるが今急には實行し難いことである。其外斯樣の例は澤山あつて一概に西洋の通り實行することは出來ないが可及的注意して改善せねばならぬ。

○家屋を建築するに當りて最初、注意すべきことは基

礎である基礎が不完全であれば暴風雨などに遭へば直に倒覆する不幸を來すや明かである、小兒時代の養育は人生の基礎であるから主任者たる婦人は充分の教育がなければならぬ、然るに女子教育に反對して、女學校出身の婦人は主婦としては何だとか育兒者としては斯うだと批評するものがあるが大なる間違であると私は思ふ、醫學校を卒業した許りで醫術に長じて居る醫者はあるまい、商業學校を卒業したればとて商買が上手であるまい師範學校を卒業した無經驗の教師に多くを望むことが出來ないとは萬人の承認することである、彼等が其業務に熟達するは學校に於て得た學識を實地に應用して數年間實地經驗した後の事である、學校教育は實地の經驗を與へるものでないから反對者の論理は立たないかと思ふ。



婦人の天職にして天保時代の人々の信ずるが如く主人の御機嫌を取り、雇人を監督し又は古來の風習に準ふて賄方の取締をする丈けならば教育も不必要である、然し文明婦人の職分は奴隷的の業務でないと定つた以上は教育を十分に施さねば本分を全うすることは出來ない。西洋では犬や猫を飼養して藝を仕込む學校さへある、犬猫を仕込むにすら學識と熟練を要するではないか、靈長たる人間を養育する主任者が教育なくしては到底今日の世の中には無益である。

○私には年齢滿一才半と三ヶ月に成る二人の女兒があるが、私が第一に心懸けたのは小兒の養育を全く妻に

のみ任せないで兩人共同協力して養育しやとしたことてある、婦人一人て處置するよりも二人の智慧を絞れは幾何か成蹟がよいに相違はない又小兒と母親とは自然に相近寄ることが多いのと男女其性質を異にするが爲の小兒の母親に對するの愛情は父親に對するよりも遙に深厚てある。それで私は小兒をして兩親を一樣に愛せしめんとの願を以て自ら衣服授乳其他に注意して手傳をしたのである。恐ろしきものは地震、雷電、火事、父親であると俗言に言ふ通り、父親は威嚴と權力がある恐るべきものであると云ふ感念を小兒に與へるのは惡いとである、夫が故に小兒の母親に對する愛情は倍蓰して母親自らも老婆的に愛する樣になり、遂には小兒が母親を輕蔑する樣になるのである。長女が生後六ケ月の頃てあつたが、大に泣いたことがある、私は其理由を發見することが出來なかつたから橫着であると考へて、手を以て劇しく小兒の顏面を擲打したことがある、それが爲め私は小兒の愛を俄に失つた、以前には喜んで私に來たのが今は私の顏を見て彼女が顏を背ける樣になつた、それから私は大に後悔して彼女の愛を回復せんとを勉めた、一週間位て元の如く私を愛する樣になつた。

◎私の友人にも一女兒がある、一日私は女兒が彼を愛するや否やを彼に問ふた、彼は平然として否なと答へた、實に奇躰である私の女兒は私を喜んで迎へて離れるを悲む然るに彼の女兒は全く彼を愛せずと、彼は女兒を愛することを知らざるが故てある、彼は小兒の養育に自ら手を下さぬからてある、父親が實地小兒を養育することの必要なることを知るに足ると思ふ。

◎乳兒が母親を慕ふは何故であるや、乳を與ふるが爲めか、然らず、母親が温き情と厚き愛を己れの行爲と言語を以て小兒が現示するからてある、親として子を愛しないものはない、只父親が母親の如く己れの愛情を表示すれば小兒は母親と同樣に父親を愛するものてある。犬や猫が主人を愛するは主人は威光あるが爲めか、食物を與ふるか爲めか、否な、彼らは主人が彼等を

愛することを悟るからである、下女をして犬に食物を與へしめ自ら彼を愛するとせよ、犬は食物を與へらるる下女を愛するよりも却て己れを愛するものを愛するは明かな事實である。

新年の裝飾

（室内裝飾趣味の修養）

禮法講習會講師　近藤嘉三

福壽草や藪橘のやうな一寸した草でもそれ相當に自然の趣味を持つて居ないものは無い、その溶金の色した暖かさうに見ゆる所、深緑色の葉の間に珊瑚を點綴した樣な可愛らしい所に名々特種の趣味を標榜して居る、然しその趣味には好いのも惡いのもある。人間もその通りで氣質品格の違ふ樣に種々の趣味を持つて居る知らず〱行住坐臥の間に之を語りつゝある、それは目元からも、口付からも、態度からも、風采からも。



そして人の趣味風品と云ふものは決して衣服や髪形に依るものでは無い、況して家柄とか門地とか云ふ人爵には少しも拘らぬ。只その人の思操の文野雅俗が趣味の善惡の判るゝ所である。

それは寫眞や油畫などを見ても直に知ることが出來る、何程立派な衣裝を着けて黃金や眞珠の簪を挿て居ても心の卑い人い決して淑女とは見えぬ、何所かに下種な樣子が現はれて居る、又洗い晒した木綿の衣服を着てく〱卷の束髪にそこらあたりで取て來た薔薇花一枝をかさして居る一寸見ては見すぼらしい樣な人でも清高な心をもつ人は熟視する中に云ふに云へぬ氣度品格を備へて居る樣なものである。

若し外貌が人の趣味を告白するが如く居室の裝飾が家庭の妍醜や主婦の人格を標榜するものであるとすれば、室内の裝飾は是非とも高尚で氣品のある飾が爲度いものである。それは他に向て家庭の光彩を發

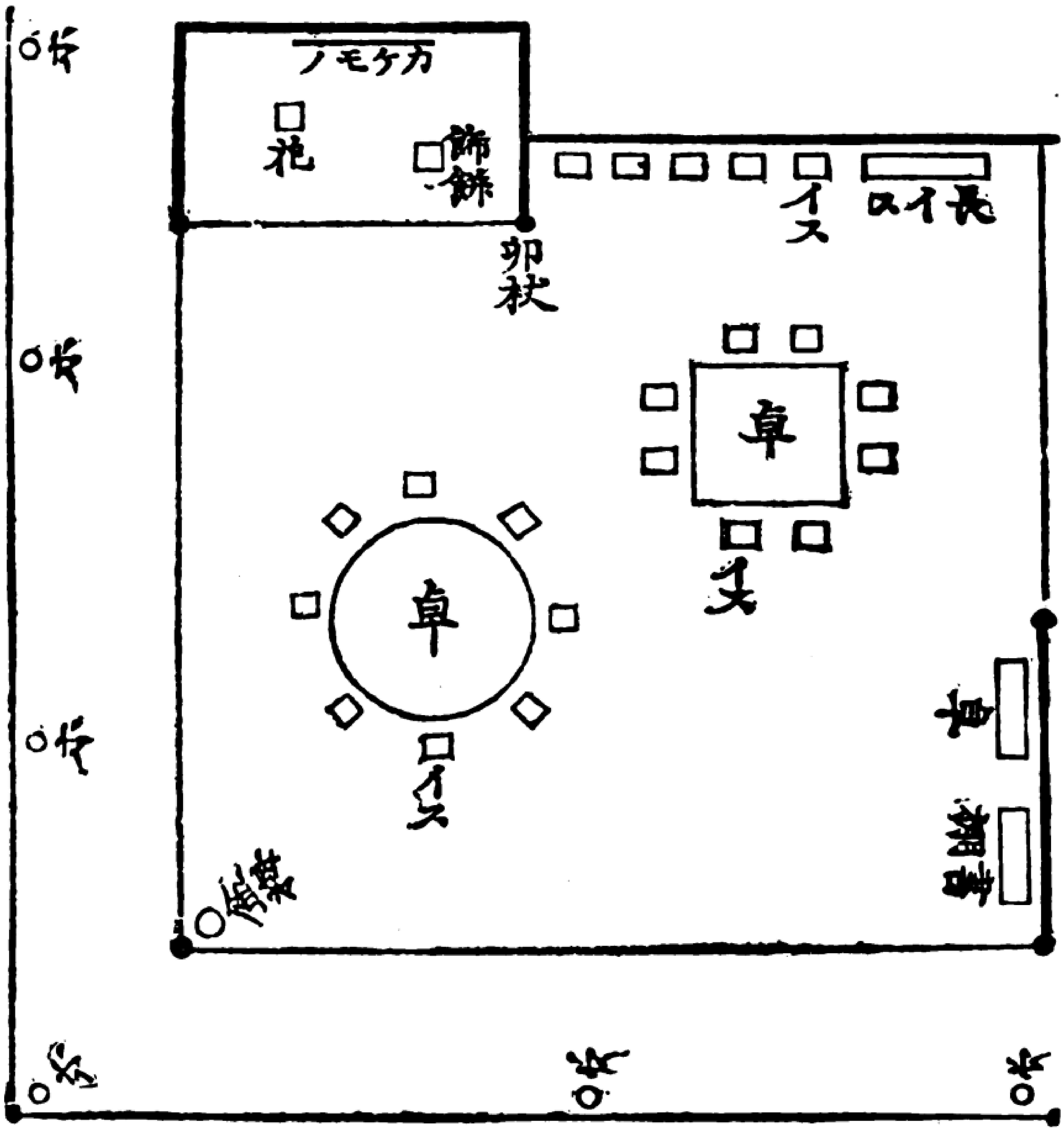
輝すると云ふ計りでなく、兒童の敎育にも家庭の健康にもその外種々の利益が多いからの事である。

室内裝飾の上に大切なる要求は種々ある中にも、就中趣味は恐くはその要粹であろう。そして高雅なる趣味は、實に主婦の思操の淸白眞純なるより流露するものである事を知らねばならぬ、財力や配列の器物の高下等は聊かも關係を持たぬ、寧ろそれ自身よりも、之を用ゆる手段と方法の如何に依るのである。

又趣味は決して驕奢に伴ふもので無いことは、千金を投じて購い得たる珍品、萬金を擲ちて求めたる調度も、その配列の方法を誤つたならば、只々俗つぽく目欝陶敷い計りで何の見所も風情も無いのを見ても知らるゝ一幅の掛物、一瓶の挿花のみにても、その安配が宜敷を得たなれば却て希世の珍器や高價の道具を以て飾り立てたる金殿玉樓の裝飾を壓するの風趣を見ることがあり。若し此間の消息を會し得たなれば我々の樣な中等以下の生活をする者でも室内裝飾上の趣致を味ふことが出來るであろふ。一枝の梅花、牡丹や海棠の樣な派手なる姿や艶しい色はなくとも其雪よりも白い葩瘦せて鐵の如き枝ぶりに云ふに云へぬ氣品を具して居る。

若し室内裝飾の要粹が趣味と氣品であるものとすればその第一義は恐くは心術の修養であろふ、之を求むる手段として宗敎や道德の說話を聽くは尤も好い、又景色の好い山や川を見るのも好い、彼の長汀曲浦參差としてさながら畵圖の如き鎌倉あたりの海邊や、菜花、紫雲英が一面に絨氈を敷き詰めた如き彼方に筑波山の翠微が夢の樣に溥す霞む飛鳥山など此樣な景色に對すれば所謂思ひ邪なしで世の中の理窟も何もすつかり忘れて爲舞て恰も小兒の樣な心持に爲る、又さし上る朝の初日の光が富士の山の雪を半は紅に染めたる景色の崇高雄大なるは實に比類なき神品である、凡て此等の風致景色を見るのは居宅裝飾の上に大層な資料を與える――が然し私は此景色を寫して室内裝飾の粉本にせよと申すのでは無い、唯此等の景色に對して眞純淸高の氣品を養ふことを勸告するのである、勿論獨り思

操を修養する利益のみてはなく色や形の配合、遠近高下の取合せの消息を解するに於ても非常の便益があるものなれば　これは室内装飾術の上から申さば恐くは有聲の敎科書と云ふても好いであろふ近代の歌人香川景樹は常に門人に敎へて和歌を能く詠んと思はず先づ論語を讀めと申したと承つて居るが今試に室内装飾の敎科書を指定致さるなれは私も景樹翁の轡に習ふて第一に論語を推撰しようと思ふ、聖書、詩經も、勿論立派な敎科書である徒然草、アオレリオスの默想錄なとも勿論參考書の價値はあるてあろふ



新年の室内装飾

新玉の年の始めは装飾の器具、調度にも趣向にも決して乏しくは無い、常には飾らぬものも年の始めに限りて用ふるものがある。鏡餅、蓬萊、俗氣があると云へば俗氣もある様であるが、飾り方、用ひ様に由ては中々面白い趣向も得らるゝ。それから破魔矢、破魔弓、もそつと風情のよいのは卯杖紅梅重の包み紙の下から日蔭の夢と柳を大和錦の裂で巻たのが、長くたれたる様子は、その風情氣品装飾品中の大立物である。遊技の具に就ても歌かるた

の箱、双六の盤、貝合　の具、それも若松にこぼれ梅か何かの蒔繪したるものなどは見るから何となく春めいて居る、草木の花も福壽草、せんりやう、萬年青、梅花は取り分け當年の御歌始めの御題にも成つた位で殊更面白い。一つ二つを擧げても斯うである、さぞ面白い趣向の装飾が出來るであろふ、が然樣で無い、恐くは新年の装飾は一年中で一番六ケしいであろふと思ふ。

それは其筈で、何れの家も〳〵風俗畫報の挿畫を見る樣に先づ花が松竹梅で、掛物が日の出か鶴の三幅對、その前の所に三方に鏡餅を飾る、殆んど千遍一律板で興した樣に變化の趣向がつかぬからのことである。

茲に記する所も亦た恐く平凡を免れぬであろふ、但し趣向を多く梅に求めたのは新年御歌始めの御題の梅に因みたのである。

▲廣間。普通の客間としては少し手廣に過ぐるかも知らぬがこれは主人が年賀の客を引接するの室であるから常のよりも少し廣ひ、又和洋折衷の装飾を爲したるも洋装の禮服を着たる客を接遇するに便利な樣にとの思ひ付きである。

△室の大さ方五間、日本建の大廣間で飾るに椅子テーブルの洋風器具を以てしたので、東南の二方は打開いて、西は長二間と奥行一間の大床間を有してその外は壁である。北の方二間程は壁で其餘は襖が立て居て次の室に連接して居る。

○壁床の間、鴨居上、その他の壁幷に襖は銀砂子の上に金泥もて梅花を散し摸樣のように畫きたるを張り、床より上、凡三尺計り一寸腰張付と云ふ所は金紙に金泥もて青海波を畫きたるを張り

△敷物　こぼれ松葉に松かさの摸樣ある淡朱鷺色の天鵞絨氈を敷く、但し松葉は綠、松かさはこげ茶色

△床の間の飾

○掛物應擧の筆、初日の出の畫大横物。表装白茶金襴、象牙軸、

○花　朱檀製高卓の上に古銅方形式大花瓶を置き、梅花を枝數多く挿む、この掛物の日の出と梅花か聊か趣向で通常なれば花は松竹梅にするのであるが、御題の

新年の梅で、彼の梅が香にのつと出でたる初日かなと云ふ芭蕉の句から考へたのである、それから、花臺の少し手前右の方へ寄つて鏡餅を飾るこの飾り方は古ひ飾り方で遠山臺の上に餅を拵へて上に大根と乾鮎と橘を三つ載せて四方に絹糸で作つた小松を立てたので普通の飾りよりは面白ひ、それから床柱には卯杖を掛くる。その安配の位置は圖に示す通りてある。

西方の壁の上には梅花の散し模樣ある純子張、塗椅子五六脚と同じ裂張の長椅子一脚。

北方の壁の前には光琳風梅花の蒔畵ある書棚を朱檀の高案上に置き棚の上には、風香の具一式、歌かるた、古今集、梅花譜など位置よく飾り、書棚に幷んで、純白の卓被を以て被ひたる長方形の卓を置き組重と銚子を盆の上に載せ銚子には梅花の枝を挿む、室中に圓卓と方形卓とを左右に併へ据へ、七八脚の椅子を以て圍む圖中(イ)印を付するもの、且つ室中所々の案上に梅花、福壽草、松などの盆栽を置く(ホ印を付するもの)

○小座敷の装飾

前の廣間の派手なるとは違ひて、極々簡潔な装飾である室の大さ六疊敷一間に三尺の床付。

△床の間は半切の立物昇文の筆、門松の畫、花は竹器獅子口花筒に梅花と乙女椿を交え挿す

室中位置能き所に爐を開き丸卓に點茶の具を置く、

新年の調理

共立女子職業學校割烹科教員　井上善兵衛　口述
岡野そり江　筆記

▲新年用調理

儀式の事であればまづ一通り順序だけは正式におはなしをして置くのも、何かの御參考にならうと思ふ。こゝに記すのはむかしの大名方に普通用ゐられたのです

▲喰積

客來のとき書院で献立の第一に侑められるのは賓來と松の臺とてす。

御喰積（御蓬萊）實來——海老、みかん、代々
　數の子、搗昆布、ころ柿
　八木、神馬草、かや
　勝栗、ところ、根松
　敷こうじ
(以上三方、敷紙、山草敷)

長熨斗五枚
松の臺(松は三莖)——天海苔
　積數の子
(以上三方、尺長御箸松へ立かけ)

以上は干肴で式ばかりに侑め戴くまでのもの、略して熨斗ばかり三方で侑めるのと同じワケです、八木とわるは米の事です。しかし新年の式飾りとして作るのも目出たいものですが、一般に用ゐられる事でもないので作り方の說明は一々こゝには略します

▲雜煮

新年には雜煮は家內で祝ふばかりでなく、正式には來客一々へ先づ雜煮を侑めるのが法です、左に献立をしるします。

向——田作り
　黑豆
同——淺漬
　大根

御雜煮——餅
　串貝
　芋
　大根
　燒豆腐
　若菜
　柳かつほ
　箸打

二

御吸物　鯛鰭箸打
三ツ組御土器　三方
御滴土器　片木
御銚子(長柄提)　冷酒

以上田作り、黑豆はたゞ式ばかり干肴のまゝ用ゐ、雜煮の作り方は別に末項に記す。さて上記の雜煮に引替へて左の本膳が侑められる。

本膳一汁五菜

組作り鯛
赤貝

鱠
花吹大根
三島海苔
岩茸
九年母
生姜

汁
つみ入れ
小かぶ
椎茸

香物三種
子持串子

坪皿
つみ菜
末廣にんじん

御飯

二

平皿
松笠鯛
鳴月海老
長芋
松茸
みつは

千代久
唐草烏賊
ひたしよめ菜

御焼物　御飯鉢（三の膳に）

以上往時大名にはすべて汁、皿等替りを侑む、旗下以下には替りはない、今日はいかゞ扱ふかは亭主の心得方次第であらう。以上濟み下げて後に左の通り侑める。

御盃折

御吸物　海月 / 防風

御肴　小皿巻するめ / 同　海鼠

御銚子（以上下げて后に）

御湯頭御水出口

以上にて本膳下り、祝儀の膳了る、少間にて御茶御菓子侑めらる。

▲重詰

右了りて馬見所等へ出て遊興の催ふしあるべく、其席へ携へ侑めらるゝものは左の通りてある。

御重詰煮染（一）あはせかま鉾、石に燒玉子、より干瓢、松風慈姑、椎茸（二）鮭一夜鹽漬、同溜り漬、土佐煮芋、生姜、（三）福目鯛、ほうれん草煮浸し、（よ）奈良漬　澤庵、切飯丸形にして黒胡麻をふる。

以上重詰である、素より普通今日の新年用重詰とこれとは全く類がちがふ、しかし普通の重詰は已に知れて居るゆへ、この内の數種を用ゐ、別に新年用重詰を作るのも、一寸酒を侑めるに興があらう、又支那料理の小菜などの類を加へるのもいゝであらう、こゝには重詰用として、前記の内の調理法を參考のために末項に記すとにした。

▲服紗料理

前記遊興すみて後段となる。左の料理が侑められる。これが丁度晩景頃になる。

後段服紗料理献立

吸物　嘉比須鯛、千本志めじ、山椒、

口取（松竹梅見立）　雪中竹の子、松枝玉子、梅味噌赤、富士見子、

鉢　甘鯛二色焼、梅花牛蒡、ほんだはら、生姜ふくませ、蒲鉾、あちやら茄子、

さしみ　雪降鯛、長手作りキヘダ鮪、小川平目、山葵。

松つくし茶椀　松皮うつら、松茸算木、松葉、口、松葉柚

以上にて酒を侑めらる。右了りて、左の夜食を侑めらる。「口取」はもし本年なら御題新年梅などに見立て、新年梅、短冊さより、土筆ふくませ、三種など面白いであらう。

會席小付飯

向　柚釜（牡蠣又は海鼠　卸し合）

汁　ふり鯛　水からし

御飯

椀　裂き鱚　火取昆布　蕗の薹

皿　熨斗柱、うに焼

香物　當座漬　かくや　紋生姜

以上で祝儀の雑煮から晝夜にかけ終日の饗應である。が素より年始客へ一寸すゝめる丈の居酒がはりの饗應にこれらは出來るものではない、そこで雑煮は勿論略

し、重詰ものを小皿へとつて、鱈の吸物ぐらゐで濟むのであるが、もし少し用意をする氣なら、この内後段の「服紗料理」丈を侑めるか、又は簡易に會席丈を侑めるのもおもしろい、底で左に新年に必要なもの丈を説明する。

▲雜煮の作り方

雜煮を作るには(一)餅は器に入れ熱湯を注ぎ蓋をして置く、普通には燒きて用ゐるも正式にあらず、固き時は白湯にて少時煮て和かにする。(二)串貝、干鮑の事である、湯煮をする時藁を加へる、和かになつた時小口からきつて下煮をする、(三)芋を丁子形にきる、湯出て下煮をする、(四)鏡大根、大根を圓形にきり湯出て下煮をする、これは盛る時に餅の下敷にする、(六)豆腐を算木に切り串をうち、焦目のつく樣に四方を燒きこれも下煮をする(七)若菜は葉ばかり摘み湯出て下煮をする、△以上下煮の仕方は鰹節と醬油にて味を付けるばかりである。△雜煮の汁は濃煮汁に醬油(鹽少々加へ隱し鹽にする)にて作り、椀へ盛り上へかけ、これへ鰹節をうすくかき上へかけて侑む。

鳥類の雜煮　もし正式にするなら以上雜煮の内へは鶴の肉を加へる、鶴は多く鹽漬のものゆへ、ザツト湯煮をして、切身にして加へる、鴨ももし鹽漬のものならば同樣である、しかし鴨は生のもの多きゆへ、その時は味淋酒、醬油にて鹽梅よく下煮をして、用ゐる、但し普通客へ侑めるには以上の雜煮にては材料多きゆへ、若菜外一二種見計ひ用ふるのは適宜である。

▲吸物

鯛の鰭の部を用ゐ、鹽をふり湯にくゞらせ、椀へ盛り、別に隱し醬油の汁を作りてかける、

▲重詰

(一)合せ蒲鉾は摺り身を拵へ、板へ厚さ一分位に熨斗て蒸す、蒸しあがつた時に板を竪にして庖丁にてへぐ(但し上の方は一部少しへぎのこす)、へぎた方は二三分位に同じく竪に細引き、一方は左よりねじり、一方は右よりねじり、ある丈の細引いたのを左右〳〵とねじり、捻りの戻らぬやう串にてとめる、かくして後に上部

へぎのこした部分を全く落す、そこで裏かし、左右二本づゝへうすく摺身をつけて、その摺身の部分を金網でやく、適宜にきつて用ゐる、(二)厚燒玉子、魚の摺身を拵へ魚の身百目に鷄卵十二個、煮汁、醬油、煮きり汁三合を加へ、かき合せ、玉子燒鍋へ入れ、上へ庖碌を蓋としてこの上の火はつよく、下火はよはく燒く、手にて押し燒加減を試み卸し、適宜にきりて用ふ、(三)ヨリ干瓢、干瓢をザット湯煮し、煮汁、味淋、醬油、砂糖少量を加へ、風味をつけてよりて、一寸ぐらゐにきりて用ふ、(四)松風慈姑、米利堅粉百目、砂糖百目、つく薯四十目、慈姑十個、鹽十匁、鷄卵白身ばかり四個にて解きて板へ厚二分位にのして、玉子燒鍋へ板を上にして手で板を押つけながら燒く、五六分時經ると焦げ目つき居るゆへ、板からへぎ、再び板につきて居し部分を燒き短冊又は色紙形にきりて用ふる。(五)綠椎茸、よく湯煮をして軸をとり、煮汁、味淋、砂糖、醬油にて風味をつけ、煮上りし時は皿へとり、芥子を煎りてその上へ振る、(以上二重)、(六)鮭の一夜漬づけは生身へ鹽をふり、一夜そのまゝにして燒き用ゆ、(七)同じくタマリ漬は醬油二杯味淋一杯生酒半杯の割に作り、生鮭をこれへつけて用ゐる時は布巾でふきとりて燒く、(八)土佐煮芋、小芋の皮をむき、湯煮をして味淋、醬油、煮汁、砂糖にて風味をつける、(九)生姜はザット湯をくゞらせ五分ぐらゐの長さに切り、磨きて鹽酢にとりつける、(以上二重)。(十)福目鯛は鯛を三枚に卸して、鹽をして湯煮をし、皮と血身をとり、白身だけを手にてほごし、布巾に包み水で揉み洗ひ、水氣をとつて摺鉢であたる、摺つたのは鍋へ入れ、生酒、煮切りを加へ、湯煎にかけて煎りつけ 。此時紅を加へれば紅福目となる、(十一)ほうれん草の煮びたしは、葉ばかりつみ、湯煮をして水へとり、絞つて細かに切り、鍋へ入れ、煮汁、味淋、醬油で味をつける、盛るときまでこの汁にひたして置く、(以上三重)

▲口取

(一)雪中の竹は走りの竹の子の皮くるみ湯煮をする、皮をいためぬやうに剝くなかの身は生酒、味淋、鹽、醬油少量にて味を加へる、竹の子は竪に四つ割位に割る、

これへまへの皮を順よくかぶせて、竹の子の如く作る、別に玉子の白身を泡を立てゝこの泡を竹の子の上にかける、蒸籠へ入れ少時蒸して盛る、(二)松ヶ枝玉子、これは二色玉子の如く作り、竹を二つに割り、割目を下に伏せ、其上へ玉子の白身の方を塗る、其上へ又黄身を塗る兩側へ箸を二本あてかひ、美濃紙に包み蒸す蒸しあがつた時、美濃紙をはがして小口から切る、(三)煮梅は鹽づけの青梅に針にてやたらに突き湯煮をする、かくして二三日水へひたし置く、煮る前は一寸蒸して鍋へ入れ、アク引に味淋を少し加へ、トロ火にかけて氣永く煮るこれて松竹梅となる、(四)富士見蒲鉾、蒲鉾の摺身をつくり、別に大根を富士形に切り、板の兩はしへ立て中へ摺身をつめ塗る、富士形の蒲鉾となる、別に「よせ榮」(本誌十六號參看)を作る、これを摺身の上へ塗り、上より沸湯をかける、かくて又摺身を塗り、布巾なり、美濃紙なりつゝみ蒸す、蒸しあがつた時は水をかけ、紙をへがし小口よりきる、(五)アチヤラ茄子、罐詰の茄子を三杯酢につけ、一夜置きアク引を拵らへ(唐辛子を加へて)、さまして、茄子の三杯酢をしぼつた上へかけて置く、

▲鉢肴

(一)甘鯛を三枚に卸し切身にきり、タマリ(前條參看)につけ、布巾でふき蒸す、別に玉子をゆて、黄身はかりとり裏漉にして鯛の上へかける、又一方甘鯛を鹽にして、鹽の利いた時分、酒へつけ蒸す、小松菜を細かにたゝき鹽の熱湯をかけ、まへの鯛の上へかける、これで黄と青の二色となる、(二)午房をザツト湯煮をして皮をむき、この皮を味淋、煮汁、砂糖、鹽にて風味をつける、この皮の中へ摺身又は玉子を入れて合せ、これを五本作る、中央に魚の摺身を塗つた午蒡を心とし、このまはりへ前の五本をつけて美濃紙につゝみ蒸す、小口よりきれば梅花形となる、(三)本俵ふくませは本俵の玉ばかりとり、甘酢で煮る、(四)生姜かつらにきりて添へる

▲さしみ

(一)霜降鯛は身の方を板につけ、皮の方は布巾をかけて、上から熱湯をかける、之れより板の間にはさみ、小時壓石を置き、さしみに作る、(二)なる手作りのキワダは普通のさしみである、別に説明には及ぶまい、(三)小

川平目、魚を三枚に卸し、庖丁の峯で頭の方へ身をこき落す、身は庖丁の平で板の上に煉り裏漉にかけて、一部別にのこしてあとを板の上へ美濃紙を布き、厚一分位にのし、上に布巾をかぶせ、別に湯を煮立て、その板を竪にもち滿遍なく湯をかけ直に水にひやす、布巾をとり、さてまへの一部取除け置いた肉へは紅を混ぜ、これを美濃紙へ前の肉よりも少し薄目にのし、これを布巾をとつた肉にかぶせ、紙をへがし、小口より渦巻の如く巻く、その上を考濃紙でつゝみ、これを板の上へ鹽をまいた上にころがし、二三時間置き、紙をへがして小口からきる、(四)口には山葵を用ふ、

▲茶碗

(一)松皮いづら、鶉をたゝき摺身にして紙湯葉へ三分ぐらゐにのし、玉子燒鍋へ油をしきこの中で裏表二面をやく、適宜にきりて用ふ、(二)松茸算木は鑵づめの松茸を算木にきつて用ふ、(三)松菜、湯煮をして下煮をして用ふ、(四)吸口は松葉柚子、松葉にきつた柚子

▲會席

新年の會席は(一)汁ふり蜆は蜆をサツとゆがき身ばかりとり、椀へ盛る時この身と景色にその殼を、二三個入れる、味噌はいふまでもなく三州を用ふ、水からしは辛子をかきこの味噌汁でと解きて用ゆ、(二)向、柚釜卸し合ひは牡蠣なら黑き口と柱を除き、鹽水で洗ひ、ザツト湯がき鹽酢へ漬ける、大なるときは二つに割る、大根卸しを卸し、水であらひ、布巾でしぼり、酢鹽、味淋、少々醬油(少々)を加へ、大根卸しへ入れ、まへの大根卸しをまぜ、柚子は頭部をそぎ、中の身をくりぬき、その中へ前の大根卸し合ひの牡蠣をつめる、まへの切りはたした頭を葢にして脩める、(三)椀、割き鱈は生鱈を三枚に卸し、薄くへぎ、一夜鹽にして上より壓石を置く、用ふとき湯煮をして適宜に手で割きて用ふ、火とり昆布は盛るときに、金網にて燒きて用ふ、吸口、蕗薹は中の心のみむしり用ふ、(四)皿は熨斗柱のうに燒てある、これは柱を庖丁の平で叩き、布巾でつゝみ、平に疊み、布巾の上から裏表へ鹽をふり、板と板の間へはさみ、三時間ばかり壓石を置く、布巾をはがし板の上へ載せ、火をのせた餅鋼をその上からかざして燒く、兩面こうして焦げ目をつける、別に雲丹を玉子の黃身と生酒でどろ〳〵にといて、これを上へ刷毛で塗て再びかはくまで燒く、適宜にきつて用ふ、二片ぐらゐ盛る、(五)香もの説明はぶく。但しかくやへは絞り生姜を用ふ。（完）

家庭時言

文學士　大町桂月

家庭の樂

●社會の中に家庭あるは、夏の野原の中に清水湧く木陰あるが如き乎。社會は、優勝劣敗の一爭塲也、利を爭ふの巷也、名を求むるの處也、滿身の力を出さゞるべからず、氣張らざるべからず、氣取らざるべからず忍ばざるべからず、掛引なきを得ず、身を勞し、心を勞す。そこに名譽ある代りに、また苦痛ある也、煩悶ある也、不平ある也。

●家庭は眞實也、又愛也、從て詐なき也、爭なき也、策略なき也、力瘤を要せざる也、夫婦相和し、親子相親しむ。社會に出て、懐き來れる滿腔の不平も、妻の笑顔を見れば即ち散ず。胸中の心配も、愛兒のあどけなき樣に對すれば忽ち消ゆ。終日公事を鞅掌して、歸り來れば、妻子喜んで迎ふ。晩食の卓上、笑聲座に溢る。家庭は社會の一大樂土也。社會より家庭に歸り來るは、なほ終日旅行して疲れたるものが、晩に氣持よき旅店に投ずるが如き也。

●家庭は慰藉也、又興奮劑也、愉快なる家庭を有するものは、社會に出でゝも活潑也、愉色あり、よく元氣によく活動す。之に反して家庭の不愉快なるものは、社會に出でゝも、不愉快さうな顔付をなし、よろづ活發ならず。出でゝも苦しみ、入つても苦しむ、竟に氣をはらす所なし。其事業從つて萎縮せざるを得ず。家庭の如何が社會の事業に關すること亦大ならずや。小兒も平和なる家庭に育ちたるものは、自からのびやかに、鷹揚に、無邪氣に、人品氣高き也。亂れたる家庭に育ちたるものは、何となくこせつき、意地惡く、邪推ふかく、ひねくれ、ひがみ、人品賤しき也。家庭は教育上、學校よりも反て大切なる點ある也。

●余が家庭に關して、深き知識あるに非ず。精しき經驗あるに非ず。唯國家の爲めに家庭の善良ならむことを

希望するの念頗る切也。もとより指導者たる能はざれども、せめて岡目八目の忠告者たらむと欲す。本誌に毎號『家庭時言』を草して、夫たる者の注意を促し、婦たる者の參考に資し、庭家の改良を圖らむとする所以也。

妻君の一生

●家貧にして良妻を思ひ、國亂れて良相を思ふとかや。われ家庭のよく治まり、よく立派に立ちゆけるものを見るに、必ずや其家婦賢にして、よくしまりある也。賢婦を妻とせる人は幸福なる哉。

●かばかり家婦は一家にとりて大切なるものなれど、其夫の心掛如何によりて、一生徒らに苦しめる細君なしとせず。余をして不幸なる、而かもよく世にありふれたる細君の一生を說かしめよ。

●そもや良人が腰辨當の時代より、毫も其貧を厭はず唯夫の爲め家の爲めにと心を碎けり。一度も着物だの帶だのとねだりたる事なし。世の流行をよそに、亂れ髮をふりたてゝ働けり。友達が富家の妻となり、綾錦を着飾りて、昨日は花見、今日は芝居見物と、うかれ歩くをも羨まず。時に夫には肴を買ふも、己れは常に骨のみをしやぶり、終年臺所にくすぶり、手の理は水仕事にだいなしになり、愈〻窮せる時は、質屋に走りて親のかたみの晴着までも典し、苦辛に苦辛をかさね、つゆいやらしき顏をせず、さま〳〵にやりくりして、夫をして內顧の憂あらしめず。かくて、一年又一年、一家漸々餘裕を生じ、終には財產もあり餘るにいたれり。

●糟糠の妻は堂より下さずとは、古の賢人の事、今の紳士は新しき妻を喜ぶこと、なほ疊の如しとかや。家富むに及びて、夫たるもの、早已に細君の功勞を忘れたり。あはれや、細君たるもの、花の盛りを辛苦の中に過し、折角苦心せし甲斐ありて、家漸く富むかと思へば、年已に老いたり。頭には二毛あり、額はしわ生ぜり。貧故に品行よかりし夫、忽ち匹夫の本性をあらはし、外所をうちに、道樂しつくしゝ果は、いつの間にか妾宅とやらが出來たり。我への申譯けに、ソレ金の指環、ソレ帶、ソレ衣裳と、心付ありて、よしや金屋に住ひ、綾羅をま

とひ、佳肴に飽くとも、秋の扇とすてられたる身の、いかでか嬉しかるべき。思へば、裏店の貧乏世帯なりとも、互にむつまじく暮しゝ時こそ、世に最も樂しかりけれ。折角苦心して家を興せば、何ぞ知らむ、班女の恨をいだかむとは。斯くと知りせば、昔のまゝに貧乏世帯にてありしものを。世に變り易きは秋の空、つらきは男の心哉。

姑の境遇

●女はおしなべて男よりも長生するよと、世界各國みな然らざるはなし。お前や百迄、わたしや九十九までと謡ひ、謡はれし夫は、既に地下の白骨となりぬ。死なば共に一つ穴にと思ひしは、若き頃の一場の夢、もとより惜しからぬ命なれど、殘る息子や娘に心引かれて、今も白骨の老姿となりて世に生存へける也。

●夫のかたみの一塊肉息子、可愛や、娘いとしや。されど、娘は嫁にやらざるべからず。息子には嫁を取らざるべからず。丹誠してそだてし甲斐ありて、息子は今や立派に身を立つるに至りぬ。嫁を貰ひぬ。身は遂に姑となれり。

●なべて人は、親孝行よりは、女房孝行になり易きものなり。つひ昨日までも水ばな垂らして、かあちやん〳〵とあまへし我子、嫁を貰ひしより、嫁の側にのみへばり付いて、また我を顧みず。此方より話しかくれば、うるさしと言はぬばかりの顔付、さても憎らしや。そなたはまア誰が生みしぞ。誰が育てしぞ。この親が燒餅やくではなし。女房を疎んぜよと云ふてはなし。この親に對しても、今少し仕方があらうぞ。何ぞ昨日までのなれ〳〵しくして、今日のよそ〳〵しきや。春の花見、夫婦つれだつてゆく。母は猫と共にお留守番也。三度に一度は、知人の家にお勤めにゆくと稱して夫婦、共に芝居見にゆくともあるやう也。時にまた母に隱して、女房に着物を買ひてやる樣也。ちと母樣も氣霽らしに寄席へでも行かれよと、いつになき親切どかしもよく考ふれば腹だゝし、この寒き夜を、この雨の降る夜を、母をそとにだしやりて、夫婦は内に何の内密話をせむ

つもりぞや。

●あはれ、夫は佛様に取られ、息子は嫁にとられぬ。寂寞たる老姑の身の上、何によりしか心を慰めむ。かゝる程に、孫は生れぬ。乳をはなるゝ頃となれば、母よりも反て、この祖母を慕ふことのうれしさよ。愛に溺れて、知らず／＼給金の入らぬ傅となりぬ。而して世には、祖母さん育ちは、賣つても三百價が安いと惡口言はる。嗚呼老いたる女、何ぞ一に斯く情けなきとのみ多きや。もとより老いてひがめる所もあるべし。されどまた姑の境遇を憐察せよ、婦よ、息子よ。

姑のなき家

●一女子あり。年二十六。高等の女子教育を受けゝるによりて、嫁期かくおくれたる也。今や學成りぬ。高等女學校の教員となりて、得る所の月給、女一人生活するに足れり。されど、いつまでも獨身にては居られず。是に於て婚を求む。その教育あるとは、卒業證書之を證せり。躰は壯健也。但し顏は美ならず。而して其婚を求むる條件に曰く、學力のすぐれたる秀才ならでは嫁せず、一也。姑、小姑など厄介のなき家に嫁る二也。

●昔者、瀧鶴臺の妻、醜にして賢なりき。人其醜を厭ひて、婚を求むるものなし。されど、自から矜持して曰く、鶴臺の如き學者に嫁したしと。鶴臺其言を奇として之を娶れりとかや。鶴臺の妻は、秀才を望みたりき。されど姑の有無は問はざりし也。明治の昭代に至りて、女子の教育大に進めり。而して姑ある家に嫁せずといふこと、これ今の女子中の最も教育あるものゝ口より出でける也。

日本婦人の歩行

●西洋人を歩く國民とすれば、日本人は坐る國民也。唯其れ歩く國民也、何ぞそれ歩く樣の見事なるや。唯其れ坐る國民也、何ぞそれ歩く樣のみすぼらしきや。日本の家屋は、坐るに適せり、歩くに適せず。日本の衣服も、坐るに適せり、歩くに適せず。歌人は坐して名所を知るとかや。日本人は何ぞ斯く坐わるとが好きなるや。

されどわれは、恐る、餘り坐つて居ることが好きならば、面壁九年、竟に足なしの達摩とならむことを。

●日本婦人には、躰育といふものなかりき。否、寧ろ躰育を排斥せり。何事もしとやかに、おとなしきを、女子の能事とせり。其言を發するや、蚊のなくやうなるを女らしと褒め、其歩くや内わに蹈みて煉りゆくを上品とす。活潑に歩けば、おてんばとけなさる。されど、女子とても、牛のやうな歩み方にては、竟に世界の文明におくれ給ふべし。

●内八文字蹈むは、はき物や着物に制限せらるゝに由るべく、服裝にとりては、見よきものなるべけれど、躰格上より見れば、太だ不自然也。又見苦しき也。大なる腰ふり立てゝ、はた／＼と歩く樣は、さながらあひるの歩くが如し。わきで見ても苦しさう也。さは云へ、日本の男子とても、立派な歩き方には非ず。脚短く、胴前にかゞみ、辨當さげて、のそ／＼と歩む。十字街頭に立ちて行人を見るに、いづれもみなゆる／＼と散歩せるが如し。用務ありて歩行するさまなき也。

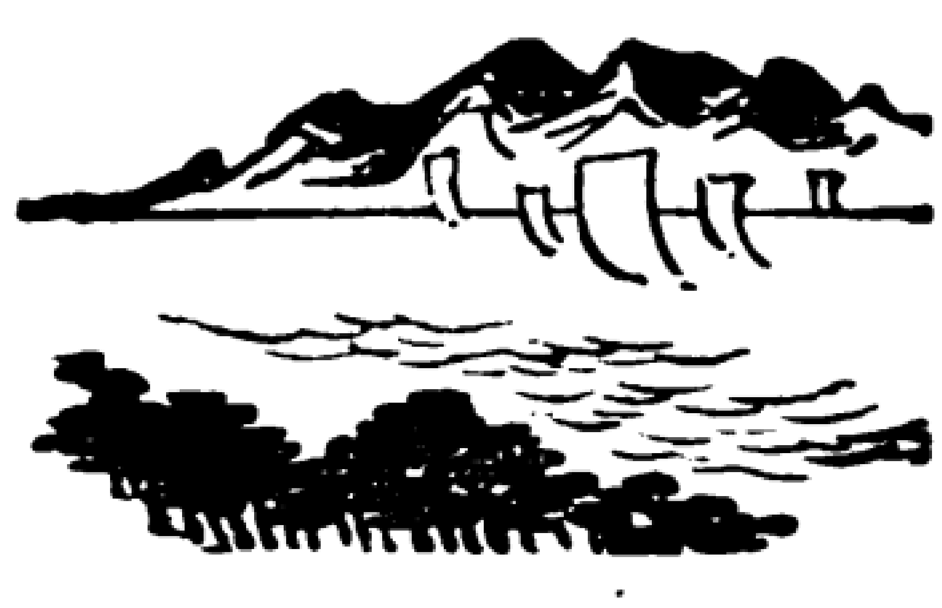
●歩行は、末事なれど、國民活動の一端也。女の歩き方も、今少し活潑ならざるべからず。自轉車に乘る女の中には、おてんば多かるべし。されど、自轉車に乘るとは決しておてんばに非ず。自轉車にも乘るべし。ぶらんこにも乘るべし、馬にも乘るべし。但し夫を尻に敷くはよろしからず。

汽車中の女學生

●曾て西郊の汽車中にて、目擊せし事也。海老茶袴つけたる二人の女子、知らず如何なる學校の學生にや。相携へて、三等列車に乘る。五十ばかりの品のよき老婦人、之に尾して入らむとす。うるさい、早く／＼と女學生は語りあひつゝ、戸をしめて入れず。あはれや老女は何處に入らむとまごつけり。一少女あり。其風采町家の女の如し。之を見て、わざ／＼戸を開いて入らしめぬ。老女は涙をこぼさぬばかりに喜べり。女學生は、我物顔に二行のベンチを二人にて占領して、時々洋語を交へつゝ、聲高にしやべり給ひけり。

二人女の比較

●二人の女あり。同じ學校に學びたれども、甲は富家の女也、乙は貧家の女也。甲は美服をつけたり、乙は粗服をつけたり。甲は兩親にちやほや言はれて、ねだる所悉くきかれ、氣隨氣まゝにそだち、思ふ如くに贅澤をつくせり、乙はすべて不自由に、親の手助けしつゝ生ひ立てり、甲は家の富と顔の美とを恃んで、學業に身を入れず、乙は一心に勉强せり。甲は親の威光によりて、年十七八にして早くも富家に嫁せり、乙は二十三歳にて漸く嫁したれど、其家は貧しかりき。甲は家にありし如く、嫁して後も同じく贅澤をつくしたり、乙は貧亡世帯に苦しみしが、幸に學生時代に勉强せし藝が身を助けて、夫の活計を助けたり。甲は子を生まず、終日お化粧に心をこらし、日々夫と共にうかれ歩けり、乙は子を多く生み、貧更に貧、苦益々苦也。甲の夫は、一朝失敗して財産を失へり、乙の夫は漸く地位を得、子みな賢にして出世せり。甲の夫は困窮の餘、詐僞取財して獄に投ぜられ、甲はたよる所なく、歸らむとすれば、生家は破産せり、外に藝とてもなければ、賃洗濯をして、かす〳〵その日を送れり、乙の子みな富みて、乙は數人の子女にかしづかれたり。昔錦を着たりし甲、今はつゞれを着、昔つゞれを着たりし乙、今は錦を着る、一日街頭に相逢ひ、相憐いて曰く、オヤマア　あなたは甲さんぢや有りませんか。あなたは乙さんですか。



英語實習 (單語食物の部)

Apple	林檎	Food	食物
Beef	牛肉	Green-pumpkin	冬瓜
Beer	麥酒	Ice	氷
Biscuit	びすけつと	Icecream	あいすくりむ
Bread	麵包	Lemon	れもん
Butter	ばた	Lemonade	らむね
Cake	菓子	Lobster	海蝦
Carp	鯉	Loquat	枇杷
Coffee	珈琲	Meal	肉類
Corn	穀物	Milk	牛乳
Cracknel	煎餅	Mustard	芥子
Cuttle-fish	烏賊	Mutton	羊の肉
Dab	鰈	Oil	油
Drink	飲物	Onion	葱
Eel	鰻	Orange	橙
Egg	卵	Peach	桃
Egg-plant	茄子	Pear	梨
Fig	無花果	Peas	豌豆
Fish	魚	pepper	胡椒
Flounder	比目魚	Plum	李

Student.—Is Mrs. Tanaka in?

學生—田中さんは御宅て御座りますか

Tanaka.—Ah, Mrs. Kondo. How do you do?

田中—オヤ近藤さん如何ですか

Kondo.—I wiih you a happy New Year!

近藤—先づ明けまして御目出度ムります

Tanaka.—A Happy New Year to you! Won't you come in?

田中—御目出度ふムります さあ御入りなさい

Kondo.—Thank you, but I must come more calls; so I did you good bye.

近藤—有がとう御座りますが未だ回禮に行く處が御座りますから今日は失禮致します

Tanaka.—Must you go? Well, come againe them.

田中—そうですか其れじや又入らつしやい

Kondo.—Are you going any where during the holidys?

近藤—あなたは此休業中に何處かへ御出掛になりますか

Tanaka.—I think of going to Nikko for a few days, but I have not yet decided.

田中—日光へ二三日行かふかとも思ひますが、未だ善く極りません

Kondo.—Is that so?

近藤—さうですか

Tanak.—Yes, I will Good bye.

田中—ありがとう、左樣なら

Kondo.— Good bye.

近藤—左樣なら

修身

女徳

仁愛

野中千代子

人となるものはつねに天地につかへてその海山もたゞならざる大恩をむくひんことをおもひ、丁度父や母につかへて孝行を行ふが如くに天地に仁をつくして決して忘れてはなりませぬ。仁とは心にいつくしみあはれみありて人や物をめぐみ、おろそかにしないことを申しまして、是がすなはち天のめぐみにしたがひうけて天地につかふる道でありまして、又人の道とする本意であつて一生の間つとめてやむべからざるわざでありますから決して怠りてはなりませぬ又わすれてはなりませぬ、天につかへて仁をつくすと父母につかへて孝を行ふとは同じことで、仁と孝とは一つ理でありまして人たる者のかならず知りて行ふべき道理のこれより大なるものはなく、又これより急なものは、御在ませぬ。すべて人は父母の家に居るときは父母に専ら孝をつくし、夫に仕へては夫に専らに貞操をたつるが如くに天地の中にありては天地につかへて仁をつくさねばなりませぬ、人たるほどの者が若もかゝる大事を知ずしていたづらに日をくらし世をすぐしては一生をむだに送りて人となれるかひはありますまい、いやしくも人たるものにして此道理を知らでかなひませうや、是は取りも直さず人の道とする所でありまして、此外にもし道があるならばそれは決してまことの道では御在ませぬ。

天につかへておこたらずといふことは如何なることかと申せば、人たるものは只朝夕天道の眼前にありて遠からざることをおもひて、常に天道をおそれうやまひてあなどらず、かりにも天道をそむき無道のことをなしてはなりませぬ、我身をへりくだりて人をあなどりほこらず、欲をこらへてほしゐまゝにせず、天地のうみ

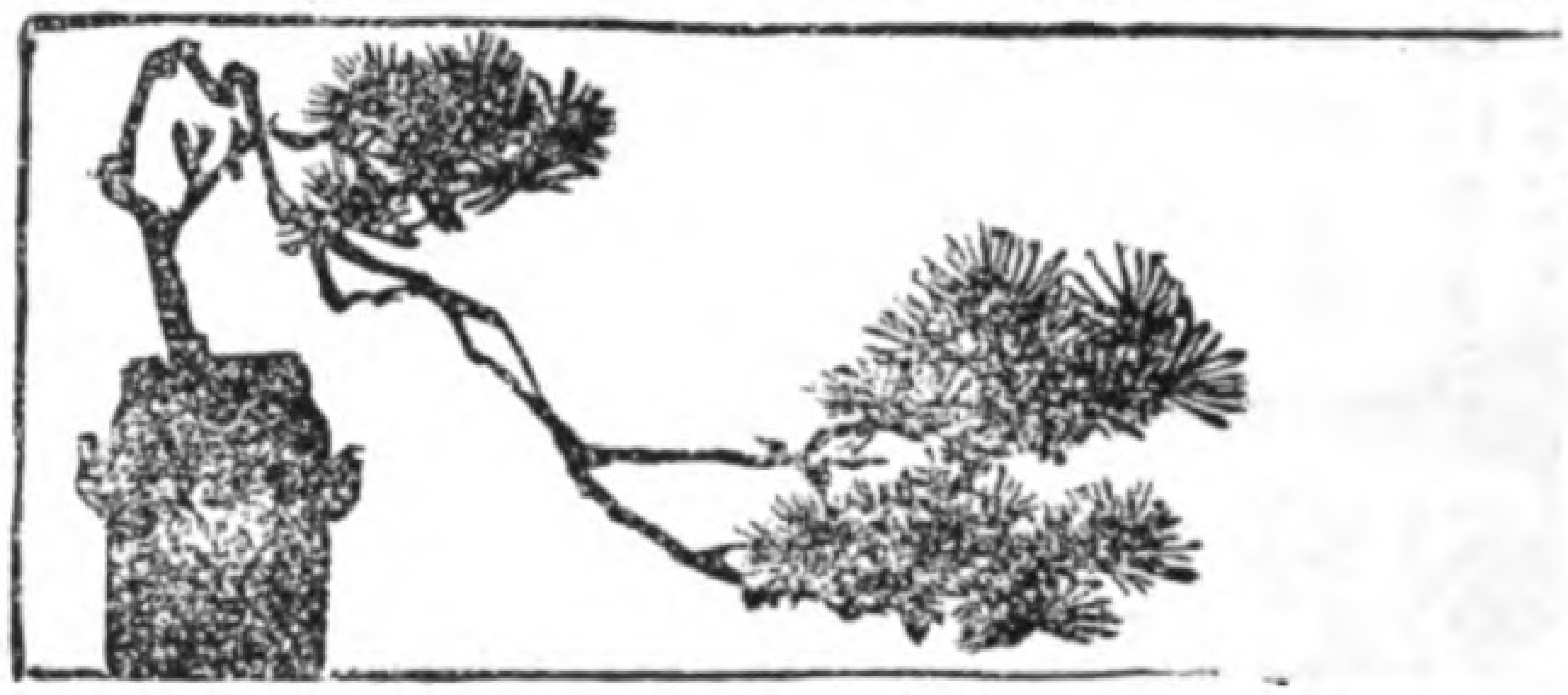
ていつくしみ給ふところの人倫をあつくあはれみてあなどらずそこなはず、鳥獸や蟲魚の生るものをみだりに殺さず、草木をも時ならずしてみだりに切りてはなりませぬ。是皆天地の生出しやしなひていつくしみ給ふ物でありますから、これをあはれみ養ふのは天地のみ心にしたがひてそむかぬわざでありまして、箇樣に萬物をあはれむ心を仁と申します。人倫の內親きをしたしみ次に萬民をあはれみ次に鳥獸草木等凡生る物をそこなはぬといふのが即ち天地の御心にしたがひて仁を行ふ順序で御在まして、親きを愛せずに他人を愛したり人を愛せずに鳥獸を愛するのは不仁で御在ます。

およそ人は天地の惠みをうけて生れ天地の心をうけて心といたし天地の養を得て身をやしなふもので御在まして、箇樣に天地の大恩をうけて天地の內に住みながら天地のわれ〳〵に與へてくださる心の德をすてゝしまつて保たず、天地の道にそむきて行ひもせず、其上天地の子としてあはれみ給ふところの人倫や鳥獸をそこなひくるしめて不仁なことをいたすのは、天地のみ心にそむきて其罪まことに深う御在まして天地の極めてにくみ給ふところのもので御在ます。

人として天をおそれず人をあわれまないのは是より大なる惡事はありませぬ、惡をおこなへば天のにくみたまふところでありますから天のせめをのがるゝことは出來ませぬ、即時にわざはひあると後に禍來るとのかはりはあるけれども惡をなして禍なき道理は御在ませぬ、又天地の御心にしたがひてそむかぬ人は天地のめぐみがありて必らず福があります、もし其福が早く來ないにしても後にはいつかしら福ありて禍はありませぬ、又もし我身に福なければ必らず子孫にいたりて福があります、是は必然の道理であつて古の聖人の敎によつて明らかでありましてしひて古の例を引くには及びませぬ近世にも其ためしいくらもあるとて御在ます。

天地の心とは人と萬物をうみやしないたまふ御めぐみの道をいふので、其理といふものは天地開闢以來萬世

までもかはるものではありませぬ、譬へば一年について申せば年々に春は生じ夏は長じ秋はおさめ冬はかくすといふが如く此四時にめぐり行はるゝ道を天道と申します、是が即ち天地の萬物を生ずるめぐみの生理でありまして、此四時に行はるゝ理を天地の道といたします。仁とは天地の萬物を生じ養ひたまふあはれみめぐみの理を人の心にうけて生れつきたるを申すのでありまして、仁を行ふ道はまづ天地のうみて子として愛し給ふところの人倫をあつくいつくしむにあるので御在まして、人倫をあつくするの道は先父母に孝をつくすのを本として夫をたすけ子をいつくしみ親戚をしたしみ家人をあわれみ知己朋友に信をつくし次に萬民をあわれむ是が即ち人倫をあつくするのであります、次に鳥獸蟲魚を愛し次に草木を愛するといふやうな鹽梅にするのでありまして、人倫はわが同類でありまして天地の殊更あつくめぐみあわれみ給ふものでありますから、我々も亦天地の御心にしたがひて人倫をあつくあはれまねばなりませぬ、次に鳥獸蟲魚草木も皆天地のうみ給ふところの物ですから、わが同類ではありませぬけれどもすでに人倫を愛してのち是をあはれむも亦天地の御めぐみにしたがひて天地につかふる道であります。總てかやうに人倫と萬物に情ふかきことを仁と申すので、人と物とをあはれみめぐむ善心をいふのでありまして、天地につかへて人の道とする理は仁の外に出るものでは御在ませぬ。



およそ天地につかふる道は人倫と萬物とを愛するにあることは前に反覆のべたるとほりで御在ます、其故は天地が其うめるところを愛したまふことは人の親の子をあはれむやうなものであります、人倫と萬物は天地のうみて愛したまふところのものですから、是を愛するは即ち天地の御心にしたがひて天地につかふる道であります。其故に天地の恩を報ぜんと思ふならば先わが心に天地よりうけ

た仁をたもち、其心にしたがひて人倫をあつく愛し次に萬物を愛せねばなりませぬ、是が即ち天地につかへて其恩を報ずる道でありまして、人の道の本意とすることは此外には更に御在ませぬ、人たるものはつとめて之を知りて行はねばなりませぬ。

天地につかへて仁を行ふを仁人といひ、父母につかへて孝を行ふを孝子と申します、父母に仕へては孝子となり、天地につかへては仁人とならねばなりませぬ、不孝の子不仁の人となつてはなりませぬ、不仁の人不孝の子は共に天地の間の大なる罪人でありまして、もしわざはひなくして世に立てをるものがあるならばそれは幸にして免れたので御在ます。

およそ人は萬物を愛する中につきて人に我と一類であつて同じ、天地の子であるから、人倫の内親疎はありても其本をたづぬれば天地の間の人は皆我々の兄弟でありますから、萬物の内にてとりわき人倫をあつくすることは天地の生める子を愛して天地に仕ふる道で御在ます、天地のうみ給ふところの人を愛すれば天地のよろこび給ふこと、人の子を愛すれば其父母がよろこぶやうなもので即ち天地に仕ふる道で其上兄弟をしたしむ理でありまして、天地を父母とすれば天下の人倫は皆我々の兄弟で御在ます。（此項未完）

禮法

新年の禮法

訪問の仕方――長熨斗三方――吉禮古實――雑煮の喰方――配膳等

禮法講習會師範
實践女學校講師　田島秀子

女子の作法も追々回を重ねて、今回は配膳より坐禮の食事に就て、御話致す考への所、恰度新年に際しますれば、何かそれにちなめるものを、先きに御話する樣、編輯記者よりの望も有たる事故、此處には二三の事を申ませう、然し皆それ／＼の家風を有て、一定致しをります故、今更ことと新らしく申す迄も御座いませんが、

先づ新年訪問の致し方より御話申ませう、之れは新年に限らず平常も左様であるが、凡て人の家の門外にて下車し、直に玄關には訪はず、中の口の方へ先きに訪ふので、然し玄關番のあるか、又は名刺入れなど据ゑあらば、直に行くも差支へなし、さうして成るべく玄關限りにて歸るを例とすれど、格別入魂の間柄なれば、上るもよし、然れど長坐すべからず。さうして坐敷に入らば手は正しく膝の上におき、種々の飾物等を眺め居る如き事は宜しからず、況て手をふるゝ事等は必らずすべからず、靜かに主人の出づるを待ち、取次人褥を進むるも、その上に坐らぬ樣にし　さて主人出でゝ正しきは此の時長熨斗の三方を前申た如く持ち出でゝ挨拶す、客も叮嚀に一禮し、直に又三方は床の上、元ありし所へなをし次に口祝の三方、即ち結熨斗と、昆布ののせある三方を同じく前の如く持ち出でゝ、例の如く挾みて客に進め、客は懷紙に受て包み、左の袂又は懷に入れる、次に主人盃臺



正しきは三方に載せ、左の手に持ち、右に銚子、(之れも正式には長柄又白木の三方には土器塗りたる三方にはぬり盃を用ゆるなり後に悉敷申ます)のつるを上より持ち三方より少し下げて持ち出て、自分の膝の側に口を客の方に向けておき　次に兩手にて客の前へ進む、最も此れらは主人自らせずも、子女又は召使の者にてもよろし、其の時に客は少し前に出で、兩手にて盃を取り上げ酌人の右の方乃ち自分の左に三方の緣と同じ高さの所へ出だす　酌人直に右の手にて前の如く銚子を取上げ、左の手を橫に口の下の所へ添へ少しづゝ三度つぎて元の所へおく客は一すいたゞき、飲終らば呑口を右の拇指にてそと拭き、懷紙にて指を拭ひ、元の如くに盃をおく、その時酌人より今一獻と進め、客の辭退されなば元の如く持ちて床の上熨斗三方の左へおく、次は雜煮などを出だす左れど、大抵は畧して熨斗のみ出だし、あとは貝の吸物膳を出だし取肴には數子田作乃ちごまめ煮豆

かち栗等を用ふ、床には目出度き軸を掛け、花、草物よりも松竹梅などが宜し、中央に鏡餅の臺を据ゑ、裏白ゆづり葉を添へ飾には海老橙實を用ゆるは、何れも年の始の吉兆を祝ひ、その名稱の目出度きを取り集めたるものと云ひ傳へたり。ゆづり葉はその家の職祿と財寶をゆづる意、うら白は裏に城わりとのいみにて、武家の隆盛の頃一城の主たるを望みし意、海老は人の年老いて腰のかゝまる迄も長命するに形どり、橙は代々の義に通はせ野老炭などを添ふるは「代々此處に住み」と云ふ詞に協はせたるものと聞傳へ居ります。次に餅類の食し樣を申ます、之は餅に限らず何にても圓き物は一口食ひ切り、その齒を放さず今一口食し決して三日月なりにしてはいけません。次に雜煮の食し方、之れは右の手にて箸を取り直し、持ちながら兩方の手にて椀を取り上げ、左の掌に据ゑて持ち、先づ上にあるものを食し、汁を吸ひ下におき、左の手を椀の左の横にそへ、宜き程に端より挾み切り一口に入る樣になして食し又兩手にて持ち汁を吸ひ、又前の如くして

食し、決して數多く切り溜めおかず、一々に切りて食し、又一口食し、餘りあつき爲め狼狽する如き事のなき樣、注意しなければいけません。客に代りを强る事は能く心すべき事で、一應は進むるも、客の辭退なす時は其の意に從ふがよろし、扨客の歸らんとする時は、主人自ら障子襖を開け、玄關迄送り出でゝ一禮し、その姿の門外に出で見えずなるまで見守りて、後靜かに立入ります、召使の者などは能く客の歸らんとする時を注意し、御車ならば玄關側まで引き入れさせ、又履物などよく取り揃へ、供人あらはその旨を通じおく樣に申つけおかねば、失禮の事も出來るもので御座います。客は又主人の見送りを一應は辭し、尙も主人の出て來る時は其のまゝ玄關に出て、履物をはき、車の入りをらば門外迄出ださせて、又一禮して車に上り歸り、決して門外迄の内しば〳〵後を返り見る等は、失禮であります、凡て女子の年始廻りは七草の前後に致します　それは何れの家も三ヶ日の間はその良人などの廻禮に出て、不在なれば家にて訪はるゝ客の接對に急がしき故て御座

います、次は

配膳の心得を御話致します、配膳とは乃ち給仕人の事で、正式には客一人に對し配膳二人に手長二人、手長とは料理人より膳を受取り、客の次の間迄持ち出て、配膳人に渡す者を申ます、かくの如くに人手を多く要さずとも、大抵は一室の内客一列に付き給仕一人で事足ります、さうして配膳人は成るべく身ぎれいに卑しからぬ者を撰び平生から能く坐作進退の作法に習はしおき配膳の間は殊に愼で手は正しく膝の上に組み重ねおき髮をかき體を撫て側目し話などする事なく、始終客の膝の邊に目をつけ、かりにも客のふるまひを見廻し等するは失禮でわるし、さうして貴人の配膳人は手の四指を内へ折りて兩側につけ進退はゆつたりとしたるをよしとすれど何事も手早く取り扱ふ樣にしなければいけません片側列坐の時配膳人が二人以上なれば一列に膳を持ち出で、一列に立歸り末坐の者より退き又兩側列坐の時には二列に持ち出で左右の上席より順々に据ゑ歸る時は一列となりて退きます膳を据うる時は、先づ兩手にて本膳の兩横を持ち出て、客の前より三尺許りはなれて坐し、膳を下におき兩手にて膳をよき程に押進め一膝退き一禮して靜かに立歸り次に二の膳之れは客の右に三の膳は客の左に燒物は本膳と二の膳の間に客より膳の向うへおき臺引物は本膳と三の膳との間に又畧す時は燒物は盆にのせて持ち出で例の如くして坐し燒物皿を兩手にて取り、よき處に据ゑ、盆のみ持ちて退くもよろし、次に

食籠は臺にのせ、手前の所に杓子を俯向けておき、持ち出で、下坐に控へ飯櫃乃ち(食籠とも云ふ)蓋はうらを向うにして兩手にて取り櫃の前の所にて露を能く切り例の盆の上に仰向け、又は櫃の横に寄かけ置てもよし、杓子を仰向けて櫃の内に入れ、客の前へ一膝進み、右の掌に左の掌をそへ椀の糸底を受け、左の手に移し右の手にて杓子を拇指を上にして取り、飯は二匙半程すくひ盛りて杓子を元の所へおき椀を右の手に移し左の手をそへて進め、若し配膳人充分に馴れぬ時は、通ひ盆を用ひてよろし、汁の盛り換は通ひ盆を持ち出で客の授

けらるゝ空椀を盆にて受けて退きそれに盛りかへて進め吸物は吸物膳にのせ本膳の如くにして出だします、酒は前に御話したる通りにして進め順々に末坐迄進め終らば元の所へ据ゑおき、又畧す時は猪口と徳利を持ち出て、酌する時は右の手にて、口より一寸位下を持ち、左の手をそへて注ぎ或は右の手のみにても宜し。次に湯桶は口を向うにして臺にのせ、持ち出てゝ例の如く坐し、右の手に湯桶の手を握り、左の手をそと口の下の處へそへ、客の椀を出だして受けらるゝ時に注ぎ、若し客椀を渡さるゝ時は、手又は通ひ盆に受け、湯桶の左側におき、前の如くにして注ぎ、更に手又は盆に載せ、進めて宜し、撤く時は最終に持ち出でたる物を先きにし、本膳は最終に撤き又中皿、小皿等に盛りたるものは吸物膳の上におき湯桶を持ち出づる前に吸物膳を撤くのて御座います此次には坐禮の食事を御話致しませう。

史傳

ジェーン、グレー姫

文學士　中内蝶二

（上）

百行の本といひけむ、世に忠臣とたゝへられ、義士とめでられ、さては貞女節婦の美名を遺すもの、いづれか孝子の門に出でざるべき。げに貴くも、かしこきは孝の徳にこそ。されば、孝子の情に感じては、雪の中にも筍を生じ、氷の上にも鯉躍りぬとかや。しかも、絕代の孝女、謙遜柔順の德に富み、博學多識の譽高く、ひたすら靜閑の地に安居して、風月の樂みに塵の世の汚れを避けし無垢の身ながらに、不幸にして豺狼の餌となり、聞くも悼ましき無慙の最期を遂ぐ。天下憐れむべきものは多けれども、予が茲に語らむとするジェー

ン、グレー姫ばかり、憐れむべきものはあらざるべし。同情深き世の令孃たち、希くば、姫が爲めに一掬の涙を濺ぎたまへ。

姫はドアセット侯ヘンリー、グレーの一の君にして、紀元千五百三十七年に生れたまひぬ。母はフランセス、ブランドンとて、英王ヘンリー八世の妹メリーの女なり。されば、姫は英國王室の血統をたもてる金枝玉葉の御身にして、若しヘンリー八世及び蘇格蘭皇后マアガレットの繼嗣全く絶えなむ曉には、正しく王冠を戴きたまふべき御方なり。



姫は幼き時より、都離れし別莊にて人と爲り、靜なる田舍の生活に馴れたまひたれば、後日國王の玉座にのぼり、綾羅錦繡の美をつくして、浮世の榮華をきはめむなどゝは、夢にも心にかけたまはざりき。

姫は眉目容貌世にありがたく珍しきのみならず、御心ばへいと優しく、才學また並ぶものもあらざりき。その頃、英國の文學の盛なること、さながら我が奈良、平安の朝に於けるが如く、才媛數多出でたりしが、その中に就きても、姫が學識は、殊にすぐれて譽高かりき。

親しく姫が示導の任にありし人(エリザベス女皇の侍講アスカム)の語る所によれば、『姫は識高く、學博く、讀み書きの道は固より、音樂、裁縫その他萬の手藝まで、何一つとして達せざるはなく哲學は其蘊奥をきはめ、語學に於ては、刺丁、希臘、希伯來、加兒耳亞、亞刺伯及佛蘭西等の諸國の語に通じたりき。一家の人々、公園などに出でゝ、はしたなき遊戯に興を

恣まにする時さへ、獨り一室に垂れ籠めて、プラトーの書を繙くをこよなき樂みとしたりき云々」と。また、よく姫が平生を知りたる一記者は、「姫が學識は、當代女流の中に其比を見ず。男子と雖も、其上に立たむものは甚だ稀なり。若し幸なる運命をたどりて、十分に其才を發揮したまはむには、天晴學界の明星と輝きて、天下の才媛の世表となり、學識ある紳士の欣慕する所とならむものを、風雪あまりに嚴しくして、莟の花の全く開きもらへざるうちに散り失せ給ひしは、悼しとも悲しとも、惜みてもなほ餘ありといふべし」と評したるを見ても略ぼ姫が面影を窺ふに足らむ。

まことに、姫は靜座讀書の裡に、樂しき生涯を終へむとこそ願ひたれ、波風荒き浮世の富貴は望まざりしを、嫉妬多き魔神の手は、姫が無垢なる身を弄びて、免るゝに術なき苦患の淵に投げ入れむとす。

紀元一千五百五十三年、時の國王エドワード六世は、蒲柳の御身、兎角健康すぐれざりしが、遽かに病重らせまひて、今は回復の望も絶えなむとする有樣に、人の心は自から繼嗣の事に向ひぬ。正當の儲君は、姉君メリーなれども、新敎を尊信したまふエドワードは、天主敎の信徒たるメリーを國王に立つることを好みたまはずまた妹君エリザベズは、曩きに國會の決議によりて、庶子とせられたれば、國の法度に從へば、王となるべき權利あらず。さればとて、姫君メリーは、既に蘇格蘭の女皇となりて、外人の籍に加はりたれば、これを王として戴かむことは、もとより國民の悅ばざるところなれば、如何はすべきと途方に暮れて、首相ノーサムベルランドに、この事を諮らせたまひぬ。

首相ノーサムベルランドは、元來邪智深き奸者にて、何時かは國家の大權を、己が心のまゝにふるまはむと、恐しき大望を抱ける折柄なれば、今國王の諮問を被るに及びて、ござむなれ、わが志を達すべき時節到來と、思ふ心を色にもあらはさで、憂はしげに御前を引き退りぬ。

さても、首相は如何なる陰謀をめぐらして、己が大望を達せむとはせしぞ。當時天下の名望といひ、國王

の御覺えといひ、グレー姫の右に出づる者はあらざりき。加之姫は熱心なる信教徒なれば、エドワードが心を屬したまふは、姫の外にはあるべからずと、はやくも看破りたるノーサムベルランドは、即ち姫を弄びて己が大望を遂ぐべき餌に用ひむと思ひきはめたるなりき。

さるにても、かゝる奸者が大望の犠牲に供へられたる姫が御身の上こそ憐れなりけれ。首相は事を急にするの却へ敗れ易きことを知りたれば、先づ其準備の第一着として、姫を己が第四子ギルドフォードダッドレーに賜はらむことを王に請ひぬ。王はもとより首相に深き陰謀のあらむとは露知らねば、直ちに其請を許してけり。

其年の夏五月、盛大なる結婚式は行はれぬ。かくて首相が大望は、既に一歩を成就の地に進めたれど、あはれなる姫が運命は、こゝに一歩を苦患の淵に投じたるなりけり。

歴史上に散見せる日本女子（一）

鹽井ふく子

女子と小人とは養ひ難し、女子はまがりたるもの、くねりたるもの、僞れるもの、陰險のもの、姦佞のもの、邪惡のもの、殊に嫉妬は女の疾など、とかく惡しざまに云ひおとさるゝよ。さるにても婦人さばかり陰險なるか、妬心深きか、唐の中宗皇帝に仕へて御史太夫なりける裴談は、其の妻のねたみを恐れて、つねに嚴君の如く思へり。かつて云ふやう、妻の恐るべきもの一生の中に三度變ず、一にはその若き時、うるはしう飾りて出でたちたる時は、活菩薩を見るが如し、まことに恐れて敬すべし。漸く年の壯りも傾き、男兒女子多く前に双べて座したるは鬼子母の如し、まことに恐るべし。既に五十六十に及びて、吻に皺をたゝみ、唇或は青く、歯の斷けあがりたるに、鐵漿をつけて、うすく粧粉を施したる、これを視る事鳩槃茶の如し、固とに恐るべしと。

また、かつて魏王、楚の國より容顔すぐれたる美人を得たり、魏王の后を鄭袖と云ひけるが、王がその美人をいつくしむを見て、つゆ妬むさまもなく、王と共にいたくこれをいつくしみ惠みぬ。王、之れを見て、女の嫉妬は定まれる情なるに、鄭袖は吾が愛する心を知りて、妬まぬのみならず、これを愛しむ事吾れに過ぎたりとて、大に后の心を感じよろこべり。鄭袖誠に嫉妬なきか、實に國后のたしなみ、國母のかゞみ、仰きてもあまりあるべきを、此の后、誠に畏るべき蝮蛇の心、鍼を外にあらはさずして遂に人を毒刺す。あるとき、其の美人に云ふやう、汝が容貌世に類ひなし、王たゞ汝が鼻を醜しとす、汝、王に逢ふ毎に鼻を掩ふべしと、美人その言を誠として、之れより王に見ゆる毎に鼻を掩ひたり。王、これをあやしみ問ひけるに、后、聞ゆるやう、彼れは君が匂ひを忌みて、かく鼻を掩ふなりと、王大に怒り、忽ちその鼻をそぎたりと云ふ。嗚呼、女子の心、さばかり嫉妬深きものか、さばかり姦惡極まるものか、思ふにこれは支那婦人に多く見る所にして、支那人は心かたくなにして、やさしきふし少なく、賢を賢として色にかへよなど、いみじく四角ぶり、いたく女を毒あるものとし、女を輕しめ、いやしめ、いみじう束縛したれば、女子また姑息に陷り、天眞の心をのばす能はず、外貌如菩薩につくりて、內、妬心をたくましくす。嬖婦、城を傾けしは、桀紂に見る所にして、一笑、國を亡ぼしゝは周國に見る所なり、妖婦世を亂しゝは唐の玄宗の代にして、牝鷄あしたを司りて、權を宦官に奪はれ、祖先の大業を失ひしは、東漢に見る所なり。富貴なれば敬ひ、貧賤なれば敢て夫とも省みざりしは、蘇秦の妻にして、覆水盆にかへらざる例へに引かれたる女子は、太公望の妻なり。ねたみの刄をみがきたてゝ、八十四人の婦女を殺ろしたるは、閩の王延鈞が妻にして、淫行、夫の玉の緒をちゞめしは卓文君なり。かゝる女子が多き支那、女子を養ひ難しとするもうべ、哲婦城を傾くると恐るゝも道理、美人を傾城、艶婦を傾國と畏るゝも過言にはあらざるべし。

これに反して、西洋人は、あまりに男子に尊崇せらるれ

ば、心おごりて、謙遜の心乏しく、行くに車を先きにし、座するに席を上みにし、夫に先だちてしやべり、甚しきは男に沓をとらせ、帽をとらせてはゞからず。もと、つゝしみなく、深慮なく、我がまゝなるを、貴き女の風としていたく尊び、かつて宴會の席にて、ある貴婦人室内を見まはし、薔薇のつくり花を見て、あれを〳〵と指しけるまゝ氣絶したりしに人々、おどろきあやしみて何が故とその原因を尋ねまどひしに、此の女、つねに薔薇の香りをいみけるが、今、室内にかざれる造花を誠の花と思ひ、神經の匂ひにさゝれて、かくは息絶えしならんとて、其の造り花をとりのけしに、しはしありて婦人はもとの身となりたりと云ふ。あまりにもおろかなる事ならずや。而して、之を貴婦人の品格としてとがめざる西洋男子、またあまりならずや。



かくて男子は女子をとがめず、何事もやさしう接するに、女子はこれに馴れて、敬愛の心のうすきにや、みだりに人の夫と手をたづさはり、吻を接し、遂に心をまで通はすに至る、誠なきの限りにあらずや。

ひとり日本の女子、太古よりものに傳はり、歴史に殘れるの婦人が性情を窺ふに、これ等外つ國の女と大に異りて、性質やさしく、すなほに、大人しくして氣慨あり、かしこくして情にとみ、親によく孝、長者によく悌、夫によく貞、たゞ赤心を以てし、誠心を以てす、實に外つ國に見ざるの操を有し　しかも天眞爛熳、あどけなく、邪氣なく、可憐の情にとみ、己れを知るものゝためには、一身をも擲ちてつゆ省みざる烈丈夫の心

は、日本女子の特に備へたる所にして、また高尚潔白、神に近きの性の殊にあらはれたる人物もまた少なからず。而るに漢學の渡り來りてより、いたづらに孔孟を學ぶの徒、彼の口つきをうつして、日本女子を罵り、日本女子そしり、誠なきもの、陰險のもの、心せまきもの、畏るべきものなどのなさけなき言の葉を吐かる。これ畢竟婦人の心のせまく、つき草のうつろひやすくて外つ國ぶりに習ひ、我が國固有の天眞可憐の性質を失ひ、或は漢人のかたくなしきを學び、西洋婦人のかろがろしく奥床しからぬを習ひ、なま〳〵しく振まふためにもあらんか、誠に口惜しき限りなり。

古くより我が國の女子は、美稱を手弱女と稱へて、温順貞節なるを本分とし、男子に從ふべきものとしたりしはかけまくもかしこけれど、伊弉諾、伊弉冊の二神、天の御柱をめぐり玉ひし御時、あなにやしえ男をと、女神のまづの玉ひしによりて、道たがひぬれば、あれまし〳〵御子よろしからず、よりて御柱をめぐりなほし、あなにやしえをとめと、此度は男神の先きにのり玉ひしによりて、國を造るを得給ふに至れりと云ふ事あるにても、はやく我が朝にては、牝鷄のあしたするをいましめしなり。

從つて男子は、己れが意志にまかせて結婚せしかども、女子は父母の意見によりて嫁ぎたるなり。邇々藝尊、かつて笠佐のみさきを通らせ玉ひ、木葉咲耶姫に逢ひ玉ひて、汝に婚はまく欲す、汝は如何にとの玉はれしに、咲耶姫は、我はえ申さじ、我が父大山津見命申すべしと答へ玉ふ、これ、日本、太古よりの風にて、父母の許可なくしては、晴れての夫婦となる事能はざりしなり。

　かくのみに戀ひば死ぬべみたらちねの
　　母にも告げつやまず通はせ

もはや、母にも告げてゆるしを得たれば、心やすくやまず通はせ玉へと云へるこの歌にても、母のゆるしなくては、うちとくる事能はをりしを知るべし。人、或は、我が國の太古は、自由結婚なりき、伊弉諾、伊弉冊の命、即ちそのはじめなりなど云へど、それは大なるあやまりにて、この二神は、神御產神の命をうけ、汝二人して

國をつくれよと仰せ言せられたれば、即ち神御產神の結ばせ玉へるにて、決して自由結婚にはあらざりしなり。景行天皇、かつて弟姫を得まく欲し、語らはんとし玉へる御時、召させ玉ふにはその道ありと云ひ玉ひしにはあらずや、女子は心大人しく、家にありてはたゞ父母の仰せに背かず、殊に父親とは共に住はざりしかど、母親とはつねに共にすみたり、されば何事も母に語らひ、母の意見に從ひしなり。殊に女はつゝしみ深く、浮き名を立てらるゝを耻ぢたるなり。

　玉くしげかへるをいなみ明けて行かば
　　君が名はあれど我が名しをしも

これは、內大臣藤原鎌足卿が、鏡女王を聘せし時、女王の內大臣に贈れる歌にて、六帖に、此の歌を、我が名はあれど君が名をしもと有るべしとあり。されど我れはもとのこそしからめと思ふ。鏡女王は天智天皇の妃なり。此の時、寵おとろへしと云へども、なほ天皇の妃なり、內大臣の來り聘せんとして、女の從はざるに、あけがたになるも歸へらざりしかば贈れるにて、君は男なれば、夜あけておかへりになり、人に見つけられて、浮き名を立てらるゝとも、名のけがれにもなるまじけれど、妾は女なり、殊に主君のある身、もし無き名にても負はされなば、面目なき事よと云ひ玉へるなり。其の耻かしと思ひ入つては、身を投げつるものさへありしなり。



源義平に、八重菊、八重牡丹と云へる二女ありけり、義平は、義朝の子にて、飛騨の國に居りけるか、義朝殺

ろされてより、いかで平家を狙はんと思ひたち、京に上ぼりたれど、志達せずしてみまかりぬ。二女長じて之れを悲しみ、京に至りて父の菩提を弔はんとて、一日故郷を立ち出でけるが、白川の闕にきかゝり、激流の上にかけたる渡籠にのりて渡らんとしけるに、八重菊の紅の裾の、ふとひるがへりて見えけるに、あたりのものども大に笑ひしかば、八重菊いたく耻ぢて、籠のわたりの綱をはづして身を川中に投じたり、妹、これを見て、我れ姉におくれんやとて、つゞきてその川に身を投げつ、時に姉は十七歳、妹は十五歳なりき。

　名をばとゞめた海浪に
　吉田八重菊八重牡丹

飛彈の國人、今に五月の田植え歌として、口碑に傳へて歌ふとぞ。紅のもすそのひるがへりてだに之を耻しにても、むかしの少女の心を察すべし。かやうにその身をつゝしみし女子、多く仇なる行ひを聞かぬなり。萬葉集九の卷に丹治比眞人と云ふもの、旅にて女にあひて、

なにはがた鹽汐に出でゝたまもかる
　あまをとめども汝が名のらさね

とよみ送りければ、

あさりする海士とを見ませ草枕
　旅ゆく人につまとはのらじ

と答へたり。日本のむかしは、男子、女子を得まく欲へば、まづその女子の名を問ふ、女子、我が名を答ふれは、已でに男女の契約はとゝのへるものなるが、眞人、旅にて女子を見て、忽ち心をうつし、妻とせんと思ひしを、誰れにてもよし、たゞあさりする海士と見て行き玉へ、旅ゆく人などに我が名を云ひて、みだりに妻のかたらひはせずとなり、これを見ても、日本女子の品行のめでたきを察すべし。

而して、男子はもとあまたの女子を聘ひたれど、女子はたゞ一人を夫と仰ぎたるなり。古事記、須勢理姫の御歌に、

「やちほこの　神のみことや、我が大國　主こそは
　男にいませば、うちみる、島のさき〴〵、かきみる

いその崎おちず、若草の　つまもたせらめ、
吾はもよ　女にしあれば、汝をきて　男はなし、
汝をきて　夫はなし」云々

また萬葉集十二の卷に

人妻に戀ふは誰がことさ衣の
この紐とけといふは誰がこと

これは、もはや人の妻となりをるものが、他の男の挑みたるを憤りとがめたるなり。

また萬葉二の卷に、三戸沙彌と云ふもの園臣生羽の女を妻とし、幾日もあらずして、病にかゝり、その女の許に行かざりし時、

たけばぬれたかねば長き妹が髮
このごろ見ぬにかきつらんか

と云ひやりしに、女、

人みなは今は長しとたけと云へど
君がみし髮みだりたりとも

と返歌したり。むかし、男、夫と定まりたる時は、その女子は髮を上げやりし風俗のありたり。結髮とかきて、ゆひなづけとよみしも、畢竟はかゝる古事より出でし言葉なるべし。されば、女子は夫ならぬ人に、みだりに己れの髮を結ばせざりしなり。人みなは、長くなりし故、結へと申せど、君が結ひし髮を、誰が何と申さうとも、如何にみだれんとも　君が來り玉ふまでは、此のまゝでおかんと答へたるにて、その操行また察すべし。

女子は、男子の云ひよれるを、徒に恥見せんは不德なりなど、源語の中に見し所なるが、それは、女子の性のやさしく、大人しく、しからぬを尊みしを、おやまり習へるにて、文屋の康秀、三河の掾になりて下れるとき、縣見にはえいでたゝじやと小町の許に云ひやりけるに

わびぬれば身は浮草の根を絶えて
誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

と小町の返し言したるも、たとへ、わびぬるとも、田舍などには行うやはと云ふべきなるを。すぐれたる歌人とて、上は從ふ如くによみて、内心は、いたづらに世におちはふれて、容易く人に云ひよられしを嘆息したるなり。此の歌、やがて日本の女子の心を代表したるも

のにて、女子は柔順を貴ぶ、されば言葉あらく云はぬなり。柔順温和なるは、日本婦人の美德なり。

かけまくもかしこけれど、雄略天皇の皇后は、いみじく仁智の御心にとませられ、賢明の君におはしましけるよ。天皇、葛城山に御獵遊ばされし御時、野猪つき至る、天皇舍人に命じて射させ玉ひしを、舍人恐れて避く、天皇大に怒らせ玉ひ、野猪を御親からふみ殺ろされ、舍人をも殺ろさんとし玉ひけるを、獸の故を以て人を殺ろすは禽獸に如かずと皇后の諫め奉られしによりて、天皇舍人をゆるし、今日の獵、人は禽獸を得、朕はひとり善言を得たりとて、大によろこばせ玉ひぬ。かやうに、内より天皇を助け玉ひ、或は御みづから桑を取つて蠶をかはせ玉ひ、御みづから工女に習はせ玉ひて、御機殿にさへ下りさせ玉へり。我が國殖產の業、此の御世にいたく盛んになりしも、偏へに皇后の大御心に基づけるものにして、殊にやさしき御道をつくして、はやりかなる天皇が御心を和らけ玉ひ、下民をめぐませ玉ふのあつき誠にありがたき皇后におはさずや。

光仁天皇、和氣の廣蟲の人となりをかつて感歎せられての玉ふに、諸侍從、執御は毀譽紛耘、つねに耳に絶えざるを、法均のみは人の短を云ひしこと、未だかつて一度もあらずと感じさせ玉ひけるとかや、而して後宮よくおさまる、か丶るが即ち日本女子の美德にして、まこと窈窕たる淑女、まづ其の身をおさめて人おのづから規とる。

（以下續出）

本朝名媛佳話

熊田千巵

はしがき

我國建國以來此に二千五百有餘年、人情敦厚にして忠孝を尙ひ、風俗淳樸にして節義を重んず、上は下を憐れみ、下は上を敬ひ、長は幼を慈しみ、幼は長を尊ぶ、洵に東方君子國たるの名に背かず、左れば美名の汗青を照らし、偉績の口碑に存するもの、世其人に乏しからず、男子は之れを措かん、女子に在りても賢妃の國力を富まし給へるあり、烈后の皇威を耀かし給

へるあり、節女の國に盡くせる、貞婦の夫に洵せる、孝女の親に事ふる 忠婢の主を助くる、實に百世の模範となり、又千秋の儀表となるもの甚だ多し、今呂氏蒙求の躰に傚ひて之れを纂錄するもの、聊か風教を裨補し、道義を扶植するの一助となさんと欲するに外ならず、而して間々雜ゆるに不貞不義の婦女を以てするもの、玉にして石と並べば益々光を發し、猶にして薰と列なれば益々臭を放ち、以て人をして其是非善惡を辨明し易からしむるものあればなり、而して余の特に筆を幡梭媛の蠶を勸め、神功皇后の武を耀かし給へるに起すもの、別に微意の存するあり、能く讀むもの蓋し之れを知らん、

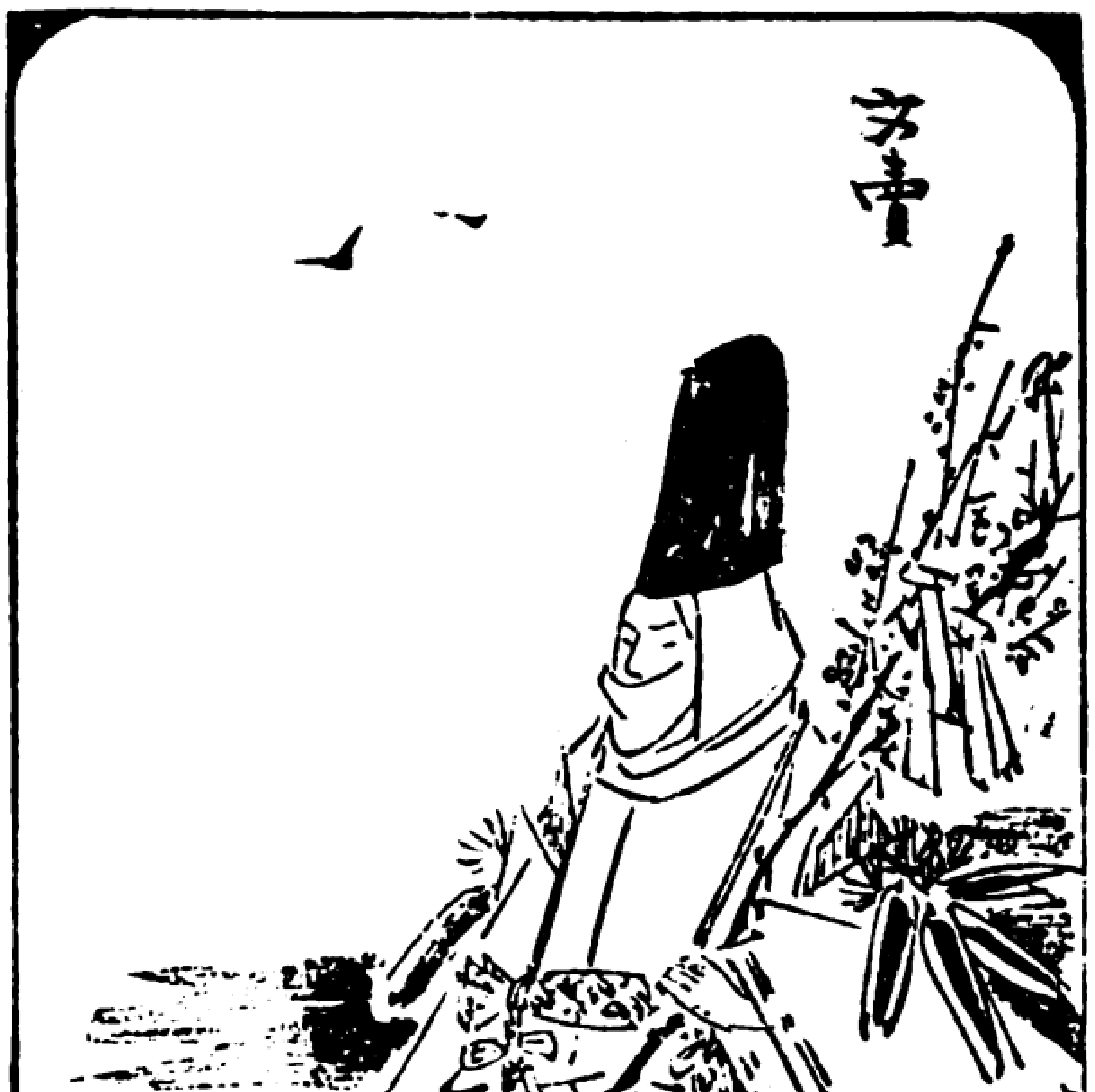
(一) 幡梭徵吳、 神功征韓

雄略天皇の皇后香幡梭媛と申すは、又の御名を橘 媛と申す、仁德天皇の皇女にして大草香皇子の御 妹にてぞ在はします、皇后賢明に渉らせ終ひて內助の御 功少なからず、雄畧天皇御即位四年二月と申すに葛城山に狩し給ひけるが、會々叢の中より一頭の大猪突然として走り出て、勢子共を逐ひ駈けて暴れ回たりければ、天皇舍人を顧みさせ給ひて、あれ刺し留めよとぞ仰せられける、舍人上意畏まりぬとは答へ奉つりにけれど、心憶して猪に向はんやうもなく、慌てゝ傍の樹の上に逃げ登りぬ、猪は益々怒りに怒り、天皇を掛け奉つらんとしけるを、天皇弓にて突き留め給ひ、御足を擧げて踏み殺し給ひける、頓て狩已みければ天皇舍人を召して斬り殺さんとし給ひけるに、御伴に在はしける皇后深く御心に悲ませ給ひて、樣々に申し宥めさせ給ひければ、天皇御氣色あらく何とて朕を思はで、舍人をは憐れみ給ふぞと詰り給ふ、皇后御容を正し給ひ、君には御心猛く在はしまし、狩をのみ好ませ給ふは、善からぬ御振舞にこそ候へ、今猪の爲めに舍人を誅し給はゝ、世の人君の御情けなきを怨み奉つり、頓ては叛き奉つらんも測り知られ候はじ、よく〱叡慮を運らし給へかしとぞ諫め奉つり給ひける、天皇斯くと聞し召して深く喜はせ給ひ、人は狩にて獸を獲るに、朕は善き言葉をば得た

るぞと宣はせて、舎人の罪を赦し給ひ、皇后と御車を與にして還らせ給ひにければ、上下皆萬歳をぞ唱へ奉りける、其れより二年を經て天皇諸國に令して桑を植ゑしめ給ひければ、皇后此大御心を奉し給ひ、諸の皇妃と與に躬づから桑を採りて蠶を養ひ給ひ、大に斯業を奬め勵まし給ひける、其後ち使を呉の國に遣はして工女呉織漢織を徵させ給ひ、仁德天皇の御宇より織業に從事せる秦氏を集めて大に絹帛の製造に力を盡くさせ給ひければ、其產額年々に增加しける、斯かる有樣なりければ、陶器の製造、車駕の製造、樓閣の建築、石垣の建設など、各種の工業大に發達しけりとなん。

神功皇后は御名を氣長足姬と申す、開化天皇五世の御孫にして氣長宿禰王の御女に在はします、御心ばへ愛でたく、御容世に勝ぐれ給ひければ、仲哀天皇の二年正月召されて皇后にぞ立たせ給ふ、二月天皇紀伊に行幸し給ひけるに、會々筑紫の熊襲叛きければ、天皇親づから舟師を帥ゐて之れを征し給ひ、穴門の豐浦行宮に在はしましける、八年の春進んで筑紫に幸し給ひ、香推行宮に御輦を駐め給ひ、其年の秋九月群臣を會めて進討の事を議らせ給ひけるに、神忽ち皇后につき給ひて、是れより西の方に樣々の寶多かる國あり、新羅と云ふ、行き向ひ給はゞ直ちに隨ひ奉つらん、熊襲の如きは攻めずして自から靡き申すべしとぞ宣ひき、左れど天皇之れを信じ給はず、親づから軍を統べて熊襲を討ち給ひけれども、戰ひ利わらずして傷つき給ひ、其翌九年二月香椎宮に崩れさせ給ひぬ、皇后宣はく天皇神の敎へに隨ひ給はで、世を早うし給へることこそ最と悲しき事なれ、何れの神の祟りをなし給へるぞとて、七日の間祈り給ひけるに、伊勢の國五十鈴宮に侍る神なりとぞ託宣し給ひける、皇后浦に出てさせ給ひ、御髮を海に打入れさせ給ひて、事叶ふべくは我が髮別れて二つとなれと宣ひしに、頓て二つとはなりにき、乃ちみづらに結び給ひて、臣下に宣はく我れ女の身をもて男の姿を假りて軍を起す、上には神の惠を蒙ふり、下には汝達の助を賴むぞとて、松浦と云ふ河に出でまして、若し西の國を得べくは魚を獲よと祈り給ひつゝ釣し給ひけるに、頓て年

魚と云ふを釣り上げ給ひける、左れば勝利疑ひなしと思して、愈々新羅征討の事を思し立ち給ひ、大臣武内宿禰をして密かに梓宮を奉じて豊浦に殯せしめ給ひ、諸國に令して船を召し、兵を集め給ひ、大連大友武以、中臣烏賊津、物部膽咋をして群臣を率ゐて行宮を守らしめ給ひ、武内宿禰と共に舟師を帥ゐて新羅に向はんと思し、先づ人を出して國の有無を見させ給ふに、頓て歸りて見えぬよしを申す、又人を遣はして見せしめ給ふに、此度は日數多く積りて歸り來り、乾の方に山あり、雲かゝりて幽かに見え侍りと申す、左ればこそ其國なれと宣ひけるが、時に皇后御身常ならず、在はしましければ、石を取りて御腰に挾み給ひ、事終りて旋らん日此國にて産み奉つらんと祈り給ひ、十月辛



丑の日をもて新羅へと向はせ給ふ、時に大なる鰐の魚御船の左右に添ひ來り、強き風吹き起りて船の駛すこと矢の如く、荒波立ち騷ぎて新羅國の内にと侵し入りぬ、新羅の國王波沙寐錦大に怖ぢ恐れ、臣下を集めて言ひけらく、古より未だ斯かる例ありしを聞かず、海水充ち滿ちて此國滅びんとするかと、深く歎き悲みける、忽ち軍の船海を掩ひ、皷の聲山を撼かして來りければ、新羅の國王之れを見て以爲へらく、是れより東に神國あり、日本と曰ふ、是れ其國の兵なるべし、我れ抗ふべからずと、面縛して皇后の御船の前に參り、今より永く隨ひ奉つりて年毎に方物を献つるべしと申しければ、皇后乃ち其縛を解きて城に入り給ひ、府庫を封し、圖籍を收め、其杖き給へる御矛を城門に樹て給ひ

ぬ、國王年毎に貢船八十艘を献つらんと誓ひければ皇后之れを許させ給ふ、高麗百濟と云ふ二國も此事を聞きて大に怖ぢ恐れ、進みて從ひ奉つりぬ、三韓乃ち服しければ皇后御船を旋へし給ひ、筑柴の蚊田に着きて皇子を生み給ひぬ、之れを胎中天皇と稱へ奉つる、即ち應神天皇の御事なりけり、皇威是れよりぞ遠く海外に輝きける。



和歌

寢覺霰

埋火はとく消果てゝねふられぬ
老か夜床をとふあられ哉

高崎正風

久我建通

閨の戸をうつやあられのたまくに
ねさめせぬ夜も夢くたく也

鍋島直大

中庭の板戸にあられふりかゝり
よはの眠もさめはてにけり

渡邊千秋

皆人のねふれるよはに玉あられ
さめよとたゝく音聞ゆなり

黒川眞頼

みし夢をたとるねさめのこゝろまて
おとろかしてもふる霰かな

本居豐穎

枕邊の板戸のあられうちつけに
ゑひ心地さへさめはてにけり

◎寒夜客來

松風ののとけき宿に友のきて炭さしそふる埋火のもと

松浦詮

ひとり居てさむさもことにふかき夜をうれしく友のおとつれにけり　前田利郤

めつらしき友にとはれて酒くめはさむき夜さへわすれけるかな　水野忠敬

わかやとにかたりふかしてかへるさの夜みちの寒さおもひこそやれ　植松有經

火桶たにひとりむかへは寒き夜を霜ふみわけて君かきませる　小出粲

とはれつる友とむかしをあたゝめて酒くみかはすうつみひのもと　小杉榲邨

一夜ねてかたれ我が友今更にかへらるへしやこの雪もよに　大口鯛二

寒くともかへりは月になりぬへし今しはらくはかたりふかさん　千葉胤明

寒しとてよひよりさしゝ門の戸をたゝきて友のおとつれにけり　遠山英一

しひてとはとゝめひねけりかへるさの夜道の寒さおもひやられて　加藤義清

○鴨　獵

朝氷きえゆくおのかいのちともしらて汀に鴨のよるらん　詮

厚氷とけてゐるまもなかるらんかけ人たえぬ池のともとり　利郤

氷しく池にむれゐるをし鴨をあみもてとるも樂しかりけり　忠敬

新濱に鴨かりすとてつかさ人きそひいてけりあさまたきより　有經

野も山もあれと三池のおもしろき狩場は鴨にしくものもなし　粲

けさのまの命としらす時まちてほりするかもそほりえにはくる　榲邨

あなあはれをとりにおひきよせられてのかれぬあみにかゝるかも哉　鯛二

わかあみをのかれしかもははしたかのつめにかゝれりすはといふまに　胤明

あさまたきまきゑするみゆ鴨狩にけふみや人やおりた

ゝすらし　　英一

わし原にけさは狩人しのふらんひれたつかものはおとみたるゝ　　義清

ルシーグレー（チルツチルス作）

尾上柴舟

ルシーグレーのその名をば
しばしばわれは聞きたりき
荒野を過ぐるわさまだき
連なきその兒われはみぬ

夥伴も知らず友もなく
彼れは住みけり沼近く
人の戶の邊に生ひ立ちて
かばかり何か美しき

綠の野邊に君立ては
腿野兎見出づべし
されども君はいかで見む
はしきルシーのその顔容

「今夜嵐ぞ吹きたゝむ
市のちまたに汝はゆきて
雪ふみわくる汝が母を
燈火とりて照らせかし」

我はなすべし父上よ
今やうやうに午過ぎぬ
御寺の鐘は二時うちて
月はかなたの空にあり」

父は上衣ひきしめて
柴の一束つかみつゝ
生業おのがいそしめば
ルシーは燈籠手にとりぬ

山の鹿よりさわかに
ルシーは脚を打ちあげて
積れる粉雪蹴ちらせば
煙となりてみだれたつ

雪はいよいよ降りしきぬ
岡の數々よぢ上り
ルシーは道をさまよへり
されど市には出でずして

心痛める雙親は
子の名を呼びぬ夜もすがら
されど彼等を誘ふべき
響も影もあらざりき

沼を見おろす岡のべに
彼等は立ちぬ朝ぼらけ
おのが家より遠からず
架る板橋其處に見ぬ

家路に向きて泣きていふ
「我等は逢はむみ空にて」
ルシーの足跡をその母の
積れる雪に見つるとき

岡の趾よりその足跡を
息もたえ〴〵覓め行きぬ
長き石垣傳ひつゝ
破れし生墻うち過ぎて

廣き原野を橫ぎれば
同じしるしは猶さだか
いよゝ其あと覓めゆけば
遂に出でたり橋の詰

積む雪ふかき堤より
その橋板のなかばまで
跡はつゞけり一つづゝ
されども見えぞ夫よりは

しかはあれども山の邊に
彼れは住むなり今も猶
人目たえたる荒野原
君はルシーを其處に見む

野路山路ゆき〳〵て
ふりも返らで彼れはたゞ
さびしき歌をうたふなり
聲をば風にひゞかして

禽獸の言行

山の井翁

あながま〳〵、世の中の人の多きが中には尤も多口にして、恰も百舌鳥に類するの人あり。よればあつまれば人の噂、ふと人の足音の聞ゆるや、一齊になりをとゞむさながら轡虫かと思はるゝ人あり。たてがみのあるにもあらず、四足のあるにもあらねど、ちりをたて、ほこりをとばし、いなゝきちらし、かけりまはるさながら馬の如し、さらばとて、まこと駿馬ならば、千金にて買はるべきを、鎌にてかききりてやらまほしと田舍の草刈翁にまで憎みおとさるゝ、さながら駑馬ほどの價値もなし、これを人呼んでおてん馬と稱す。馬の人に轉じたりと云ふにや。また、いつも、のさり〳〵と暗黑より引き出さるゝ牛の如きあり、家を治むるの道もなく、衣をつゞるのたしなみも知らず、いつもしだらなくぼろを下げをるを、おなどじの奥樣と云ふ。仁もなく義もなく、心はどう慾あくを知らぬを、なつかしげに人の膝にむつれ、猫なで聲のあまりにもやさしげにかざり立てた

るおそろしき〳〵熊の如き人あるよ。おのれの行ひ少しも省みざる熊の如き人あれば、自己のおろかなるは棚に上げおきてあはう〳〵と人をあなどる烏の如き人あり。狐の如きいみじう狡黠の徒もあれば、巧みに腹つゞみを叩き立てゝ人をおだてたばかる狸の如きものあり。豺狼に類する人あり、虎豹に似たるものあり。ねんごろに人の跡をおくりて、それがつまづくを伺ひ、走りかゝり喰ひつく送り狼の如きあり、瀛伏魚の如く形も醜くゝ、味はひも佳ならず、こちへどころなきものあれば、形ちはいと〳〵醜くゝ、あまつさへ針をもつ鯱の如きものあり、濁り江を好む鰻の如きものあれば、泥水をくゞる鰌の如きものあり。鬚のみ立派に見ゆれど、鯰の如くぬらくらにておさへ所のなきものあり、また絶えずねぶりて、鰌にても入れて、折りふしその水をおどらせずば、そのまゝにねぶり死す沚子の如きのあり、さやうのもの世におくも何の甲斐かあらん、はやく田畠の肥料にもあつべし。

如何なる鱗あればにや、妬婦を詠ずる賦に、忽ちにその妬鱗に逆らひ、その忌を犯す事あれば、即ち湯におもむき、火をふみて目を怒らし、袂をかきまくると、妬婦邪心深し、邪心、即ち蛇心なり、總じて蛇は邪念つよく、毒氣をおぶ、其の毒氣もて、草を枯らし、人を倒す、殊におそろしきは蝮蛇なり、人この牙にふるれば、毒氣忽ち全身にまはりてまた立たざるに至る。また尾に鍼をもつ、つねは見えざれど、時に臨んで人を刺す。最もはげしと、あな恐るべし、恐るべし、人の中にも妬婦最も恐るべし、また此の蝮蛇の生れかはりしにや。彼岸前後の蛇をめくら蛇と云ひて向ふ見えざれば中々にもの恐ろしからず、のたりまはす、此の翁の如きを云ふとか、さては穴に入らんか、今少し云はしめよ。

大海を知らぬ井中の蛙の如きあり、家にありては蛤の如く威はりをりて、外に出でゝ虱の如くちゞみかへるものあり、翁もかやうの娘をもたり、いと口惜しき事や。海月の如く骨なきものあれば、つねは之がのんどの下にかくれ、そのよだれに活きながら、變事あれば之をつゆ省みずしてひとり走りかくるゝ海老の如きものお

り。海老に釣らるゝ鯛の如きものあり、一皮はぎてやらまほしき皮剝魚の如きものあり、目張魚の如くいみじう目を張つて見るあり、八目鰻の如く人を見るめを數多にもつものあり、さやうの目、ちと鳥目のものにゆづりては如何に。

あはれむべし、鴻鵠の心を知らぬ燕雀あり、小貮大友何の狗鼠、狗鼠の如き人物あり、一犬の虛をほえたるに、實を傳ふる萬犬の如きあり、鷹に似て非なる鳶の如き人あり、金魚の如く形ちの美くしきにもてあそばらるゝものあり、蟻の如く一生利のために走るあり、何にても己れが穴にひき入るゝむぐらもちの如き人あり、さやうのもの穴倉往生せぬやう注意すべし。而して、三年飛ばず泣かざるを、これ何の鳥ぞやと問ふ人ありけるが、一生飛ばず、泣かざる翁の如き、これまた何の鳥ならんか、獸ならんか。

寄宿舎の夜

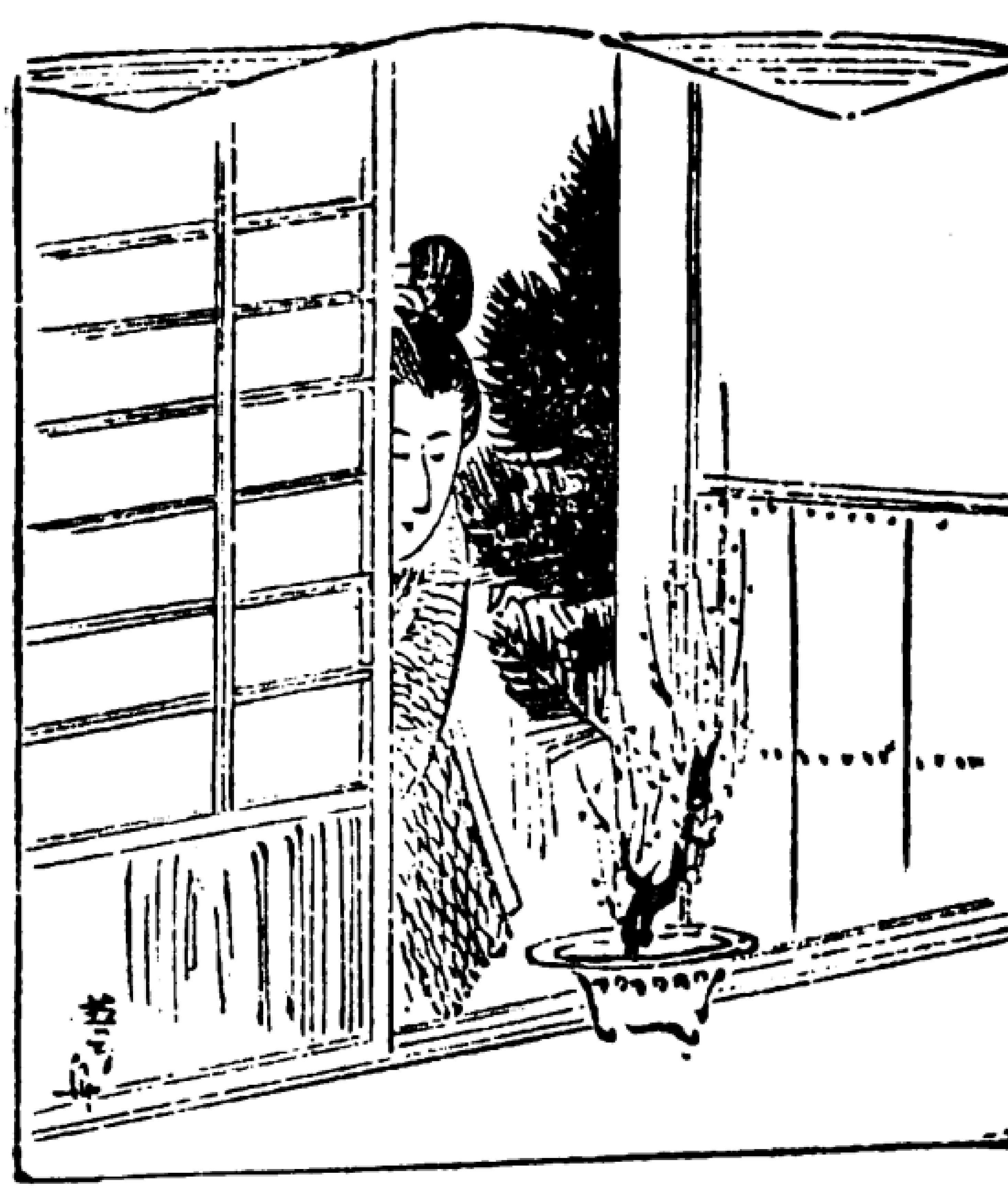
有賀晴子



硝燈のかね響き渡れば、騷がしかりし草履の音も話聲も、ふつと絶えはてゝ、遠く聞ゆる汽笛は、何所の何番汽車の、出づるにか入るにか、此月はじめまで、一ッ室に寐たりし一年生のみち子が君、今も古郷思ひいてゝ、つき給ふかいかに、家といふもの、さばかりなつかしきものにや、我は幼くして分つれば、あたゝかき親の味しらず、日曜ごとに兄君に逢ふも、さばかり嬉しからぬは、人より情の薄きにや、自らはさるつめたき心とも思はねど、おのれをみる目の、誰もひがめるといふは、師の君よく云ひ給ふことなり。女は情に生き、情に死ぬ情の化身なるべきを、木や石のやうなる、つめたき者になりはてしならば、女といふやさしき冠は、はや我頭に

はおかれてあらぬならむなどゝくらき天井をみつめつゝ、思ひつゞけぬ。夢の國より、もれくるかと思はるゝ、大路の笛の音末長く〱引きたるが、あやしくも胸にひゞきて、ねぶられ難くて、二度三度寐返りしつ。となりてねぶれる涙子の君、けふ外出して歸り給ひしより、うなだれがちに太息のみしてありしを思ひ出でゝ、大かたならぬもの思に、小さき胸いため給ふらんを、とひて見ばやと、よびて見ぬ。神經いとするどく、夜ふくるまでねぶられぬが、此人の常なるに、今宵はいらへもなし。再よばんとせし時、あやしや彼の君すゝり泣きするなり。いかにかし給ひし。悲しきことあらば、我にも分ち給はずやといへど、益なきにさばかり頼まれぬ者と思ひ給ふや。こゝに入りてより、二年同じ學びの道手をとりてたどり、かく同じ室におきふしするは、たゞならぬえにしに侍るぞかし。世にたよるもの少き身、同じうとり殘され給ひし君と、頼みつたのまれつ、淋しき世をせめて、樂しく渡らんとこそ願ひしか。さばかりに思ふ我にことへだて給ふは、我まことの、未だ君の御眼には見えぬにや、知らず〱かこちごとめけば、ゆるし玉へ。かくしまゐらせしにはかまへてなし。問ひ玉はずとも、先申さでは叶はぬことなりと、衣の音かさこそとさするは、起き直りし給ふらむ。けふ外出ゆるされてゆきしは、彼叔母の家にて侍り。知り給ふ如く、叔父のありし程は、なき親に萬かはりて、誠の子のやうにいつくしまれしが、叔母はかたくなゝるさがにて、我ために黄金いくばく費すことを惜み、常に家に歸りて、たちぬひの手傳ひせよと言ひ侍りしが、けふも亦それ打ちいでゝ、つひにこの學期の終らむ日、こゝ退かでは叶はぬやうになりはべりと、語る折しも室々を見めぐる、舍監の足音みし〱とするに、詞はしばしとだえぬ。あはれ親ならば、いかにもして云ひとかむに、片親にても殘りてあらば……、こは愚痴といふものに侍れども、君もさは思ひ給ふことあるべし。誠に若くして親にはなれたるに、綱手たえたる小舟の如くにも侍る哉。世の波にもまれ〱て、さて身のならむはて、思ひみてさへゑりもとさむし。君は安く波の上行くらむ大舟、うらぶれ

つゝ、つひには岩にくだかれて、水底にくちはてむ身をあはれみ給へ。かくうらなく語りまゐらすも、こゝ二月三月、この窓立ちはなれては、君はいよゝ高き學びの山に分け入り給ふべく、我はます〳〵あるかひもなき者になり下りゆく身、近付かれもせぬ樣なる、けぢめの垣結ばれて、ふたゝびかたり合はんと難からむと、すゝりなく音、やみに高し。そはいとほしき御身哉。心細う思ひ玉ふはさるゝことながら、されど世の中さばかりおもひくだしたるものにわらざるべし。つらしとわびつゝも、かにかくに一生を過し侍るぞかし。み心大きく持ち玉へ。文よむことやむればとて、人の價に何のさゝはりか侍るべき。とは、さても冷かなる詞よ、我は誠つめたき者になりけるにや。何とてあたゝかなる、同情の詞はいでざる。さても我ながら冷かなる詞よ。かの君いはず。



我もさらに云ふべきこと考へをれば、廣き寄宿舍、何の物音もなく、うらの運動場のあたり、あはれにもすさまじきふくろふのこゑ。

山家の初雪

宮澤すみれ

蝶のもろはにおしろいぬりたらんやうの雪、そは暖かき國の、冬とは名のみなるあたりに、偶々降りたるをいふなるべく、こゝなる國、こゝなる里、わけても越路に近き我が村は、おびたゞしき降雪にして、千山鳥とび絶へ、萬谷みちを埋むるの形容詞も僞ならず、去る十一月十三日紅葉いまだ紅深う山ににほふころ、むごたらしうもそが上につもりて、秋にうたふわがうらみも深かりき、さりながら雪はてる日の光に耻らひてや、夕べをもまたずして消へうせぬ、かげろふのそれよりも果

散なかりし。

けふは同じ月の二十五日なり、北峠より吹く風にひら〱舞ひくる六つの花びら、舊歴にてはまだ小春日の頃合なるを、菊さへ香をとめて籬にあり、赤かき〱柿の實いづれの村にも數多のこりて、これは白き花たる風情おかしく、祝言の夜、綿ぼうしのもと、はじらひて燃ゆる年わかき女が頬にたふとべくや、姫松小松尾花の枯れたるは俄かなる冬の宣告におのゝきてくるしげなり、高慢なりし日廻りの花よ、これはかねて覺悟なしつらん、頭うなだれて白花の御前にひざまづく。

きのふ迄秋をうたひし人、紅葉をめで菊を愛し〻人々、けふはつめたき〱雪にくちづけせざるべからず、薄化粧する乙女子等は裾にまつわる雪をうらみて、花のあしたをおもひ、田畑としたしむ男の子等はいまだ業の完ふせざりしをくやむなり。

都にては優なるともがら、林間酒をあたゝめて紅葉をやたくらん、はた涙おほき詩人くれゆく秋のあはれにすぐれたる詩わらんを、我等は一度ならず二度までの雪にこれよりながき〱やみをおもひ、冬ごもりをおもふて安き心もなし、暗き北極のねむり、南極の冬にくらぶればこゝまた樂園の面影あらんが、うらやましきは同じ信濃路にても、上田小諸の町々なり、長野を去る事十里の下、山一つこさばはや越の領なり、雪に縁多き所以なしとせんや。こよひ十五夜のいざよひか、漸く晴れし雲間より、幽かなる光見へて四面寂々、夜色しずみゆく折しも、空には赤き星三つ四つあり、下界の苦悶何とか見つる。

やがて日一日へなばこの雪消ゆべし、屋根には八寸あまりあり、さても師走の半ばに至らば一夜に五尺六尺つもりて、これらは翌年四月の雪消迄のこるなり、我先きに拙なき筆を弄して「雪の朝夕」てふ長扁をものしぬ、今年更らにまた新しき觀察新しき眞理をや見いださん、早梅かほる御文机のもとに消息傳へまゐらせんかな。

學藝

雪と氷（理科學談）

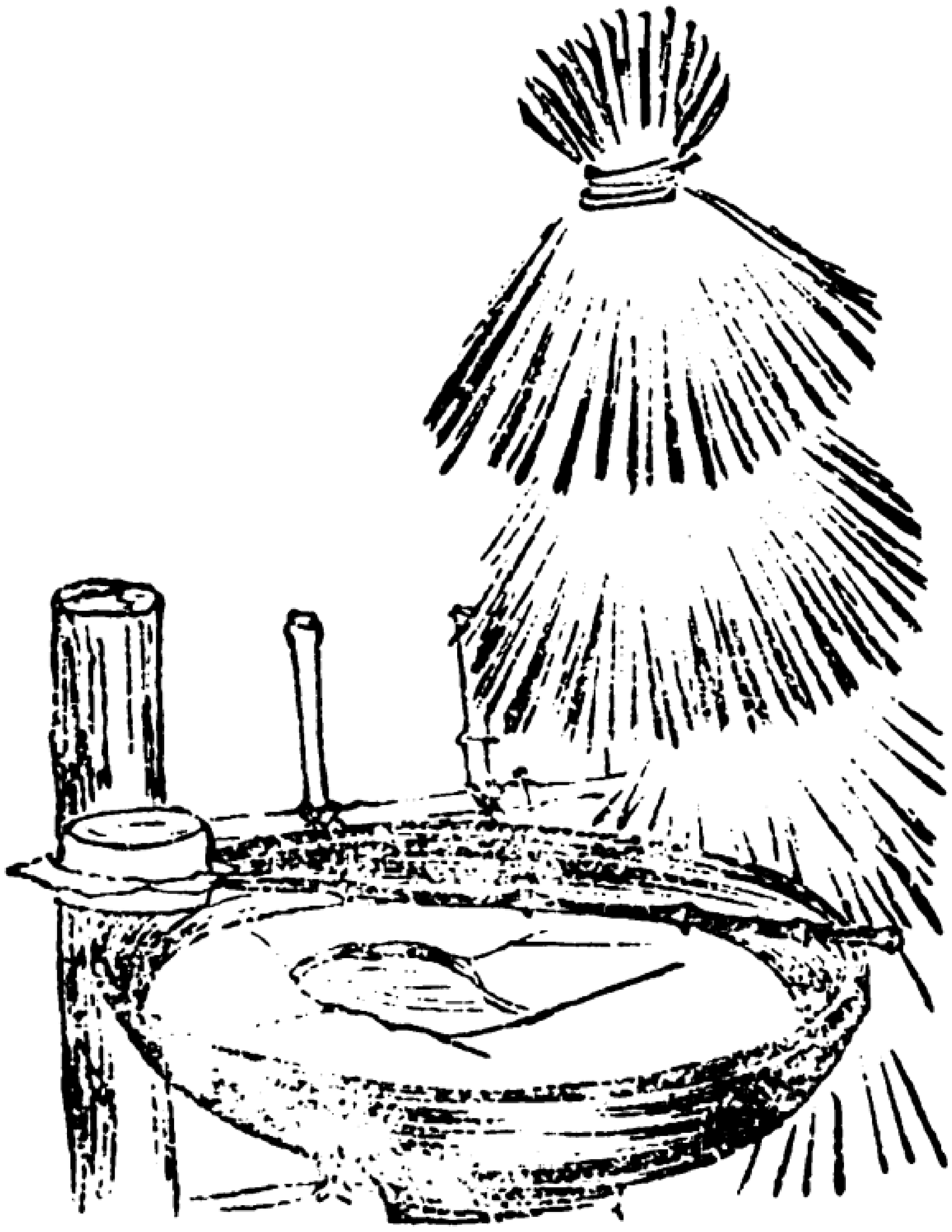
女子高等師範學校教授　岡田みつ子

（一）氷

二三日前のことでありました。朝例の如く起きて見ると、さすがにお正月で、空は長閑によく晴れてゐるが、寒いことはモウ身内がブルく慄へる位で、手水鉢に厚氷が柄杓までも吸ひ付けてゐます。それに、モウ外には子供の聲が、して、可愛らしい聲で、

小池小川に氷が結ッて、サソヤ、泥鰌めだかが天井はッて、うるさかろ。

と節おかしく、繰りかへしてゐます。



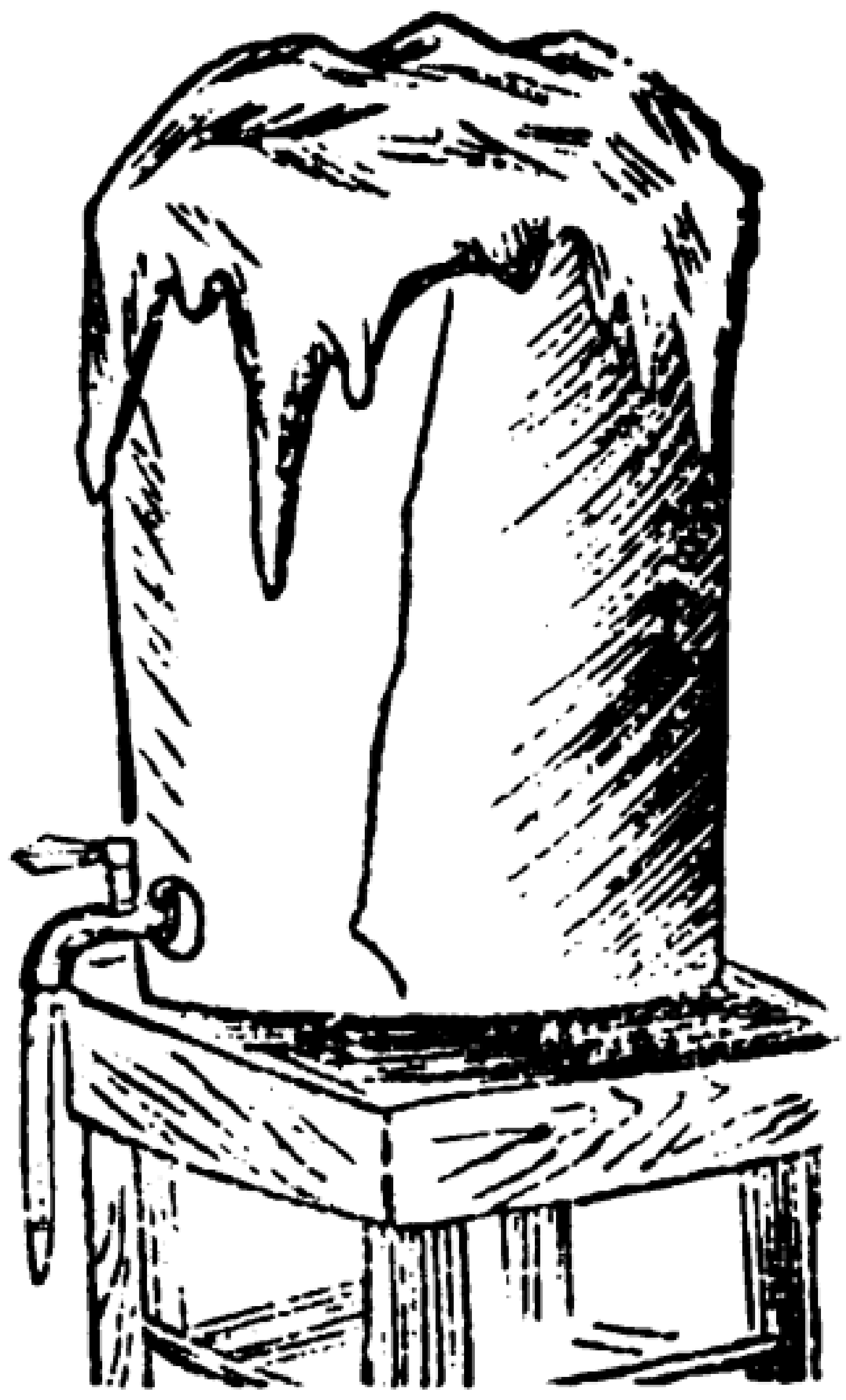
小池小川に氷が張ッて、……この歌は、自分も子供の時分よく唱うた覺えがあります。其の時分は何の意味とも知らないで居ましたが、今思へば、成程面白い意味です。皆樣のうちにも、此の歌を御唱ひなさる方が、あるかも知れないが、何と思うて居らるゝか知らむ。小池小川に、天井を張つたやうに氷が結ッて、その下で鮒や泥鰌が、はねまはつてゐる。別に、何も感心する所がないと、思うて御出てかもしれない。もし左樣ならば、此の時私の心の中を通つて、私に面白いと思はせた事柄があるから、其れを書いて御目に懸けませう。そ

れて、私と共に、ホントにさうだと合點して下されば、誠に嬉しい。

この歌のいふ通り、氷は池、河の面に天井を張るばかりで底までは凝りません。―石を投げて見ても知れます。―何故上にばかり出來て、底に出來ないのだらうと、マ―かういふ疑問が起ります。それでこの疑問に答へるためには、池の水が氷にかはる工合を、順々と考へていかねばなりません。まづ、夜になつて、池の面に、いかにも冷たい風が吹き渡ります。スルト、其の風に撫でられた水は、冷たくなつて收縮し、從て重くなるから、水の底へ沈んでしまふ。水底の水は、今沈んで來た水よりも、割合に温度が高くて、輕いから、代りに浮んで來ます。また、この水が冷えて下へゆき、下のが代つてグル〱循環します。そのうちに、いつか池面の水の温度が、華氏の三十九度になります。スルト、もうこの水は下へはいかなくなり。何故だッていへば、此處が奇妙な所で、之までは、水は一般の物と同じやうに、冷えては容積が減つて、重くなつて下にいつたのですが、之からさきは、其れの反對になつて、冷えても收縮しないで、却て膨脹する、即ち容積が殖えるのです。だから、底の水よりも輕くて、その儘表面に止まつてゐます。そこで、いよ〱風に吹きさらされて、温度が三十二度まで下ると、此處は水が氷になる點（氷點）ですから、一層容積を増して氷結するので、即ち天井を張つたやうに、なるのであります。之だからこそ、泥鰌、鮒が下で騷がれるので、もし一般理法の通り、水が冷えれば冷える程收縮したら、氷は池の底から出來はじめて、生物はとても住まはれなくなるのであらうに、この造化の妙術があるので、却て氷は、水中住民の保護者になつてゐます。それで、この歌は、氷は魚類のために、天井を張つて、寒さよけをするのに、魚は、その恩を知らないで、天井を鬱陶しく思ふほど、自由に遊びまはつてゐるとの意味にとれます。ナント、面白くはありませんか。

水が氷點に近づいて、いよ〱容積を増すと申しましたが、その證據を一つ、御目にかけませう。いつてあつたか、圖のやうな陶器の鉢に、水が一ぱい溜まつてゐた

事がありました。處が、始終外に出してあつたものだから、或る極寒い朝の事、その水がスッカリ氷つて、鉢の上には氷がもれ上る——チチの處からは氷垂が下つて、鉢自身ははちきれさうになつて、ヒビが入つてゐました。隨分膨脹する勢は、強いものではありませんか。皆樣の御宅でも、こんな例がありませう。



何故、水は氷る途端に、そんなに膨脹するのであらう。この答は、下の如くです。氷は、見たところはたゞ透明の固体で、定まつた形のないものゝやうであるが、氷塊の面を顯微鏡で見る時は、六出星狀の結晶を見ることが出來ます。この、氷が結晶したものから、成つてゐるといふ事が、即容積を增す事なるので、たとへて見れば、四角な木片を規則正しく積んでゆけば、容積は少なくて多く積めるが、それを六角の星形に積んだら、非常に場所を要するやうなものです。即ち、今まで水として密に排列してゐた水の分子が、變じて、六出の星狀に排列するやうになつて、場所を多くとるのであります。

(二)雪

どんよりした太陽は、常時より早く沈んで、吼えるやうな北風は、時を得がほに吹き荒れてゐる。その寒さというたら、山から來る小僧ではないが、大人まで泣き出しさうである。夜に入る頃、サラ〳〵と霰の窓打つ音がしたが、やがてその霰は止んで、白いものが紛々と舞ひ下つて來て、音なく、響なく、降ること〳〵、見るまに棒杭は帽子を被り、垣根は化粧をしてしまいました。室の內では、暖い火を擁してゐる人、三人四人。さま〳〵自然にむいた考をしてゐます。老父さんは、明日の朝の景色を想像して、何處に雪見にゆかう、誰を誘うて歌を詠みうなどゝ思うてゐます。幼い子、明日達磨を作ろう、雪釣りをしやうと、その用意に忙しい。下女は、路がわるくて、使步きに難澁だろうと愚痴してゐる。兄と妹とは、ズット風がはりに、燈火の下で、この雪を理科的に

研究してゐます。

妹「この雪は、兄サン、何處から來るのでセウ。?

兄「天から來るのサ。

妹「天の何處から來るノ？。

兄「雲から來るノ。

妹「それでは先刻夕方に見た、あの灰色の雲から來るのかしらむ。

兄「ソウダ。雲は水から出來てゐるのだもの。川や、海の水が太陽の熱を受けて、水蒸氣という目に見えない氣體になつて、上昇つていくだろう。それが上にいつて、冷たい空氣に逢ふと、冷えてネ、細かい水球になつて、烟のやうな形になるのダ。それが、アノ雲だヨ。アノ祖父様の御そばの鐵瓶が今煑沸つてゐるデセウ。アノ口を御覽。白い湯氣が出てゐる。あれは、雲と同じものだヨ。鐵瓶の湯から出た目に見えない蒸氣は、鐵瓶の口から出るとすぐ、周圍の冷たい空氣にあつて、冷えて、アノ白い烟のやうになるノ。

妹「ア、そう。でもね、如何してその烟のやうな雲から、あんな冷たい雪が、降るのでせう？。

兄「ソレハ、かうすれば一番早く分るヨ。あの鐵瓶のところへ、硝子のコップを持ていつて見やう。……ホラ硝子が霧がかゝつたやうに、曇つたろー。ソラ〳〵水がたまつた、ア、流れる。……分つたかへ。何故水が出來たか？。ネ、硝子にかゝつた霧は、鐵瓶から出たさつきの湯氣なのだが、硝子のやうな冷たいものに觸つて、冷えたために、元の水に歸つてしまうたのですヨ。かういう風に、雲もネ、冷たい風や、寒い山にさわると、冷されて、其の儘でゐられなくなつて、水に戻つてしまふノ。すると、重くて上にゐられないから、落ちて來るのダ。でも、之は雪ではなくて雨だ。この雨のことをいはなくては、雪のことが分らないから、さきに一寸いうておくの。

妹「ソレから、どうして雪になるの

兄「今の雲がネ、極〳〵ひどい寒さに遇うと、雨にならないで、一つ〳〵凝結した細い片になつて落ちて來るノ。それが雪サ。

妹「デハ雨も、雪も、雲も、みンな畢竟は同じものなのネ。

兄「アヽ。先刻、始に降つた霰も、やはり同じものだが、唯、あれは雨になつて氷つたものなノ。だから、雪だつて、霰だつて、此處みたやうな暖かい處に持つて來れば、直に溶解て水に成つてしまうヨ。

妹「マー。ほんとに同じものから出來てゐるといひながら、兄様、雪と雨とは大ちがひネ。アレ／＼御覧なさいヨ。



モウ、あんなに積もりましたヨ。雨ならば、ドン／＼流れてしまうのに、之はチヤンと落ちた處に止まつてゐますノネ。マー面白い事。けれども、あんまり甚く降ると、植物が可憐さうですネ。サゾ寒いでせうに。

兄「ところが雪は、大變植物にも、動物にも、役に立つのです。雪が積もると、其の御陰で、地面の熱が保護されて、植物は寒氣のために枯死することがないし、虫や何かも、地中に暖ま

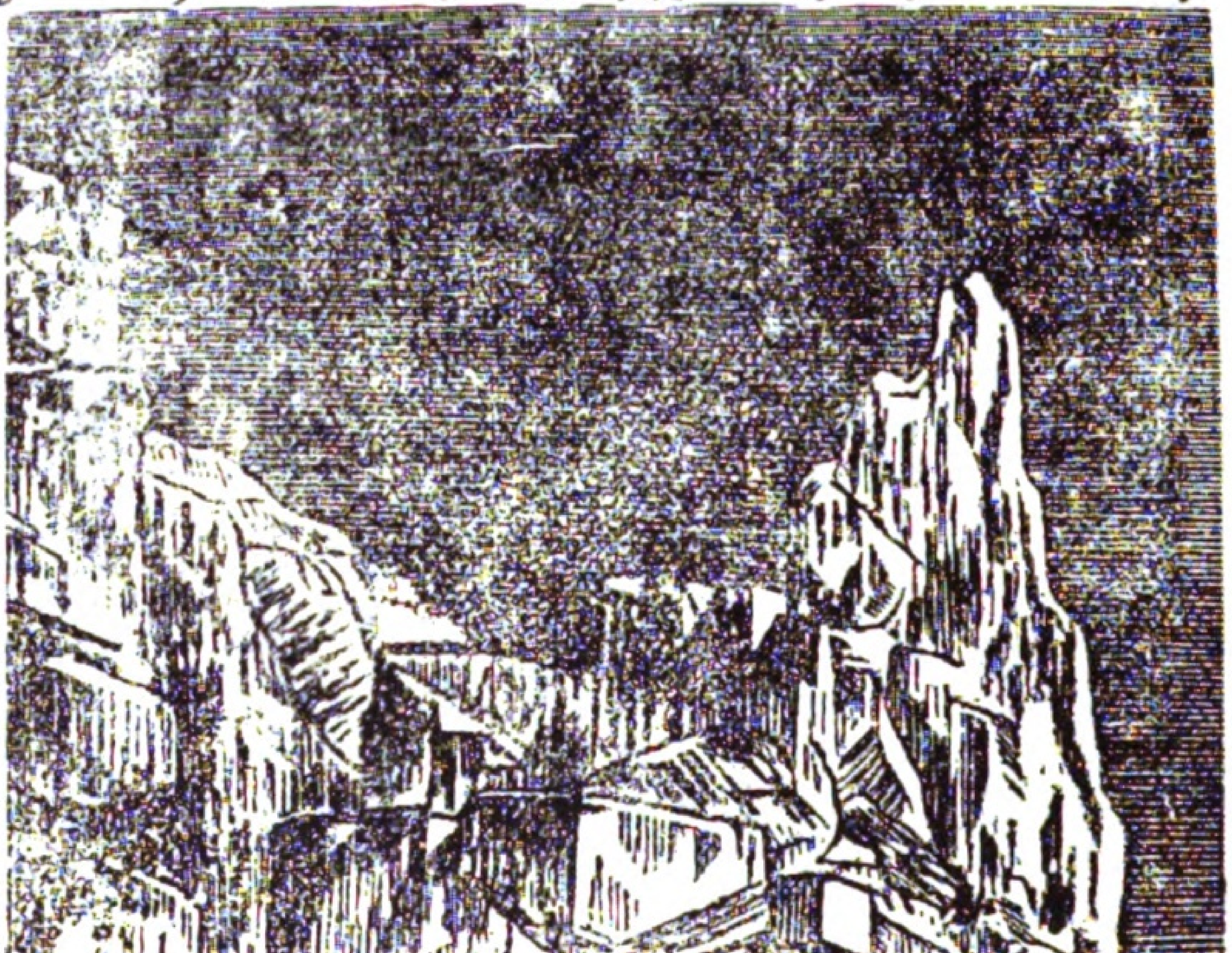
つてゐる事が出來るの。奇妙な物さネ。
妹「兄樣、何故雪は白い色をしてゐるのでせう?
兄「あれは、白いのではなくて、白く見えるのです。眞實は、水のやうに透明つてゐるものだ。一片か二片黒いものゝ上に載せて、よーく見ると分るが、一つ〳〵透明な氷の結晶から出來てゐて、みンな六角の星形をしてゐますヨ。かく破れやすいから、中には形のこわれてゐるのもあるけれども。それで、之が白く見えるのは、その結晶した面から、反射する光の工合によるのです。一片取つてごらむ。
かく話しながら、二人はガラス窓を明けた。狂へる風に乘じて、室内に舞ひこむ吹雪の勢、凄じく、面の向けやうもない程であります。

(三)雪の山、氷の海、

雪といへば、白い、輕い、美しいもの。氷といへは、薄く、透明つた、清らなもの、との考は、我々に直ぐ浮びます。この輕いもの、この薄いものも、寄れば、厚い、重い、力の強いものになります。この美しい、清らなものも、集まつては、凄い、嚴な、恐ろしいものになります。いざや、やさしい雪景色や、小川の薄氷を後にして、氷海、雪山に渡つて見ませう。
まづ、雪の山へゆきませう。峰が高くて、夏も尚絶えぬ雪を戴いてゐる山々の、その景色の壯大さい、なか〳〵言語に盡くせませぬが、まあ申して見れば「目も眩ゆい眞白の峯々は、濃い蒼空に向うて、屹然と聳つて、岩の陰や、山の凹みがそれに紫色の陰影を添へてゐる。見下ろせば、山から山、谷から谷、たゞ白さの限りで、またその靜さというたりありません。折々、吹き荒む風に送られて耳に入るものは、遠い山を落つる瀧の音が、さなくは、殷々として雪の大塊の、斷崖を崩れ落つる響ばかり。それもすぎては、また一層の寂莫の境になつて、更に人の世とは思はれない。」
というやうな有樣でありませう。
かやうな處に、失せるあてがない雪が、年と共に積もりに積もつて、いつたらどうでせう。百年、千年の後には、雪の山は天に達くてせう。地球の南北兩極地方はダ

〳〵高くなつて、終には地球の形が、南北に長くなるだらうかと、思はれます。けれども、我〳〵の以前に千年はおろか、何千年たつたか分らないのに、別に天に上る、梯子になる山が出來たともきかず、地球はやはり圓いといはれてゐます。して見れば、何かそれの妨げをするものがなくてはなりません。

その妨害をするものを數へ上げて見れば、一つは蒸發でわります。雪でも、氷でも、水のやうにやはり蒸發するものですが、仕方は遲う御座います。併し高山の頂上では、空氣の壓力が少ないから、地面の上で蒸發するのよりは、早くわります。



今一つの作用は雪崩です。冬の間、積もりぬいた雪も、春さきになれば次第に溶解して、下部から搖ぎ出して、崖を滑べり落ちて、谷へ入ります。丁度雪が溶けて、屋根からすべり下りるのと同じです。之は、山に絕壁が多く、雪の分量が多ければ多いほど屢〻あるわけで、時としては、村中之が爲に埋もれる

などゝいふ慘事があります。之の最多い時節は、春なので、その頃、かゝる雪の山を旅行する人は、餘程注意しなければいけないので、大きな聲でもの言うても、その響で、重い雪が釣合を失して、大雪崩を生ずることがあるさうです。

次は氷河です。風や、雪崩で谷々へ落ちた雪は、自分の重さと、融解するのとでダン／＼に固まつて氷になります。この氷が、何時までも、其處に居れば、なんでもありませんが、いつか自躰の重さが支へがたくなつて、運動を始め、低地の方へ滑り出します。之が氷河であります。之は、運動の途々で他の谷から出た氷河に逢ふと、次第にその面積が大きくなつて、中には深サ數百尺、廣さ數百方哩に至るものがあります。之がいよ／＼進んで暖い所に來ると、氷はズン／＼溶けてしまつて、即氷河が終になつて、そこから泥水の河が出來るのであります。歐洲のライン　や　ローン等いふ大河の源は、これらの氷河であります。

さて此氷河は、雪に被はれた山々の、そこからもこゝからも、雪が中央の谷間へ落ちて、こゝで氷河を形つて、谷の形の通りにまはり／＼つて行くと、その氷のとけ口から、川がどん／＼流れてゐる處もあります。（氷河の圖は畧す）

河流と氷河とは、似てゐる處が多くあります。川は流れながら、その兩岸を削り、泥や、砂や、石を共に海に運んで行きます。氷河にもやはり同樣の事があります。山の巖面の水は凍つて、其が爲に、岩が破壞すると、その碎片は轉落して谷に陷つて、遂に氷河の兩側に達します。すると、それらの岩石は、間斷なく氷河に伴行して、低地に趣き、氷河の融解する塲所にいつて、はじめて墜落して、堆層を作ります。

それから又、氷河が流動する時分に、屢々其の面が裂けて大窪を生ずる事があります。その時に、その大孔の中へ多くの岩石が、ころげ落ちて、氷河の下底にゆきます。すると、この岩石は、氷河の過ぎるところの地盤を削つて、許多の溝を刻みつけます。だから、氷河は地球の一彫刻者だといはれてゐます。

今度は氷の海へゆきませう。北極地方の海では毎年、冬は、殆七尺の厚さに氷がはるのです。併し、實際、北洋に航行する人は、しば〱數百尺の高さの浮氷に出遇う事があると、いふ事です。それらの氷は、何れも水の上には一分、水中にその七分から九分までが入つて居るものです。だから、水上に百八十尺出てゐるものならば、水中には千五百尺なければならない譯です。如何して、このやうな大きな氷が出來るかといふのに、之は海で出來るのではなく、陸で出來るのです。かの氷河が流動して來て、海に入る場合に、その一部分が破壞して、水中に陷り、いはゆる氷山として海に浮ぶのであります。

この氷山の有樣について、記載したものがありますから、大意をかきぬいて見ませう。

日の及ぶかぎり、海の色は濃藍色で、波濤は高く低く日光に輝いてゐる。その中に巍然として浮んでゐるのは、一個の巨氷島で、その缺刻には、濃い蔭をやどし、その尖端には、日光が燦爛としてゐる。實に壯絶快絶たとふるに物がない。周回二里餘、高さ數百尺に及ぶであろう。波に從うて動搖する度に、その頂上は雲間に頷づき、その麓には巨濤をうけて白花を散らしてゐる。折々轟然たる響の起こるのは、大塊が崩壞して水中に轉落するのである。その色は、大體としては藍色であるが、下部は氷つた白泡をもて被はれ、それから上にゆくに從うて、色が次第にうすく透明になつて頂上の純白で終つてゐる。

（完）

虎の話（動物談）

高等女子師範學校教授　藤堂梅軒

昨年は丑の年といふから、本誌新年の初刊に牛の話をして聞かせた。ところで本誌も一週年の榮を保つて、今度目出度く寅の年を迎へることになつた、それで年の名といふに因みて、今年の春初にも其の虎の話をして聞かせたいと考へる。只此處に困ることには、虎といふ獸は日本には居ないものであるから、此の前の牛を話

したように都合よくは行くまいと思ふ。それで此處に表してある虎の圖を見て、よい加減に想像して貰ひ度いのである。

全躰動物の身でありながら、他の動物を掻き荒して以て生活して行くものは、何うしても殘忍の性たるを免れないは勿論、造物者が設けた者の間に存する美と平和とを破壞するものといはねばならぬ。我々、即ち造物者が造つた人間が我等仲間の或者に苦痛を負はせることを好まない所からいへば、造物者がそんなにも多くの動物をして慘らしく死なせ、又覿面に恐ろしい苦痛を忍ばせるといふことのあるは、如何にしても不思議といふの外はない。これに付いては、近頃まで明瞭な解答を與へたものはない、猛獸が慘殺を逞くするは、之を以て反つて神の愛を加味するやうなもので、それといふも下等の動物は人間が堪らない程に感ずる苦痛を、左程にも感じないからである。しかし、あらゆる動物は明白に自ら苦痛を感覺するものであるとか、又多數の動物は鋭くそれを感知するものであるとかいふは、取るに足らぬ説である。寧ろ苦痛に感じか鈍いものは、それだけ愉快の感覺も薄いといふことがありそうなことである。

そこで今眞正の解答を擧げように、最も慘酷に最も劇烈なる害を受くるものは、其の毒手に罹るや否や全く苦痛の感を失つて了ふものだといふことである。斯のような經驗を實際其の身に直接に味つた人は、抑々有名なるリビングストンといふ英國の一探險者を以て始とする。其の人の紀行文に、先づ己れが一の獅子に狙を定めたといふことを記して、續いて左のように書いた。

「余は身を起して半ば振り向いた刹那、今や余へ躍びかゝらんとする獅子あるを認めた、時に余は稍々小高い上に在つたから獅子が余の肩に躍びかゝると直様共倶に下に墜ちた。すると獅子は恐ろしくも余の耳の邊に差倚つて、恰も狂犬が鼠に行ふがように余の身を振つたのである。其れがため余の氣の轉動は、又丸で小鼠が猫に振られたときのようでもあらう。ところで昏々として氣が俄に遠くなつて、さしもの苦痛即ち怖れの感

覺を失つて了つた、縱令それが何事の起りつゝあるかの前後の知覺は更にも失せないに。この樣は決して心からの結果ではなくて、其の余を打ち振つたことが、余の怖れを總て去りて、余に此の恐ろしい獸を見返つて怖れの念を起さしめる裕餘も與へなかつたのである。斯のような不思議の狀態は、猛獸に襲はれる所の總ての動物にも左樣であらうと思はれる。若しも左樣であるとすれば彼の慘毒の爪牙に罹るといふも、全く死の苦痛を輕くするもので、即ち造物者の慈悲ある所である」

こんな恐ろしい經驗は只て止むものではない、其の事實が異なるによりて益々價がある。此處に亦同樣な物語がある、そは生け獨逸の紳士で今は印度軍の役人となつて居つた人が突然にも虎に襲はれたのである。其の人も亦後にリビングストン氏のように記した。それに斯ういふことを述べて居る、我が身の感は騷々として居るだけに、心地好き睡氣がさしたようで、寧ろ此の猛獸が如何にして余を喰ふであらうかといふ如き物珍しい心もしたと。只彼の人の未だ失せやらぬ理解心が、其の塲合到底百事終つたと見たであらう。恐らくは、そんな不意な振り搖しに遇つて、心が一時神經から離されて、而かも復び家に歸つて其の神經から印象を受けようとは、よも思はなかつたであらう。實に斯んな慘毒の顎に罹つた人は幾百と數へられない、而かも其の厄難を逃れて後日其の經驗を人に語ることの出來た人は幾何もあるまい。リビングストン氏



は幸にも其の忠僕が獅子を打ち狙つたによつて命を拾つた、しかし其の忠僕は敢なく獅子に殺された。又此の印度の役人も覺悟の犧牲から圖らずも命を拾ひ得た、そは虎が其の人をいくらか運び去つたも終に投げ棄て空しく何處へか見えなくなつたのである。役人は後に常に語つていふに、是は畢竟、己れの體か痩せて肉少なであるから、彼の肉に飽かんとする虎を滿足させなかつたのであらうと。

亞非利加大陸の上は到る所、獅子の領分に屬して居るが、しかし亞細亞大陸に於ては彼は虎と雄を爭はなければならぬ。虎の其の大さに於ても、力に於ても、勇氣に於ても決して獅子より一歩をも讓るものではない、而かも其の狀貌の壯麗であると、働作の堂々たると、毛皮の鮮美なるとは慥に拔んずること、一段であらう。虎の住地は獅子の如く妄りに廣い區域には渉らない、即ち新世界(亞米利加)にはなく亞非利加にも見ず且つ一二の地方を除いては、現に其の居住しつゝある所でも容易に姿を表はさないことがある。專ら虎に住はるゝ地方では、其の姿をチラト見るてさへ住民を戰慄させるほどである。

凡そ毛皮の美しさに於ては虎の有する色斑に及ぶものはあるまい。鮮かに燈へたる赤黄の地に様々の黒の斑が置かれて、丸で彫刻か何かを見るようで、且つそれが胴や脚を横に刻んで居る。或る虎には其の斑が二重の線となつて居るものがある、しかし多くはそれが一重である。胴の下向、胸、喉そうして横顔のフサ〳〵としたる毛は殆ど白くて、其處には斑が茫焉として段々と薄いて消えてしまつて居る。尾は胴の上よりも白みがゝつて亦、黑の環を斑として居る。

こんなにもマア閃やかな扮裝をして居る以上は、どうしても樹陰草叢を往くに目立たなくてはならぬ譯である、ところが虎ほど其れ自身を旨く晦ますものはない、其の歩くによくも秘密に樹の下を縫うて往く。これ其の縦の斑が彼れの好んで住める、乾いて、こんもりとした茂みの草と和合して、草か斑か、斑か草かのいづれを區別し得られないほどで、迚も機敏に且つ經驗ある目

てなくては覺られない。これて以て巧に身を隱すものだから、たとひ草の低く疎な處でも、他の目を忍んで匐つて行くのである。それに彼れの歩は、決して耳に留められない程に靜かである。且又彼は自分の呼吸を殺し、身の毛を仆してそれだけ身の容積を出來るだけ小く見せるような不思議の習慣がある。斯のようにして彼れは獵師から忍び危難から避けつゝあるが、その時の樣は最も意氣地なくあるから、何處に日頃の猛勇らしい所が見えるかと疑はれる程て、しかも一旦猝然として怒り、危きを顧みないようにならうならば、猛然として驀地に蹶



かし髪天を衝くともいふべきである。

餌を求める時には、彼れの全力を明らさまには表はさないで、それに接近するまでは勉めてあらゆる蔽に身を托して匐ひ行くので、いざ近よるが最後、突然に躍り込む。獅子の如く虎は又油斷して居る動物を襲ふものであるといふことて丁度其の動物の後を歩々付け狙つて近づいて行くのである。人を襲ふにも亦此のようにするそうだ、そうしてその虎は特別に「人喰ひ」といはれて、其の外貌は多少變つて居る、即ち肌の色が較々黒ずんで白眼の處が赤くなつてあるのが一見尋常のと異なる點であるといふ。その人喰ひでさへも亦公然と人に逼まるのではない、潜に其の後を付けて狙ふが上に、それも小兒や

女子を撰んで獨り男子を見逃すそうてある、その譯は其の地方の男子は大概身に用意の武裝を以て固めて居るからであらうと思はれる。

虎は兎に角彼れの餌として狙ふ地點を撰ぶことが甚だ旨い、その地點とは樹蔭岩角の都合よい所である。そうして其の狙ふ路筋は彼れが度々慣れた所を好んで、殊に茂みが最も深くて、其の傍に水のある所を選ぶのである、喘ぎつゝ而かも呼吸を殺して狙ふものだから、どうて喉の渇くことがある。

奇妙ではないか、虎はいつても自分の巢穴の側に寄つた方の路傍に待伏せをすることとてある、それが甚だ巧なことで、餌を引懸ると直ぐ樣それを穴へ運ぶことが出來て、態々路を横切るような面倒が要らない。若しも虎が餌を狙つて飛びかゝらんとして之を外したならば、毎もオロ／＼として耻し氣に、如何にも失措つて合はす顔がないといふやうな樣をなしてコソ／＼と隱れて了ふ、どうして最一度遣り直さうなどの考で以て元の場所へ引返さうといふ勇氣も出ない。虎に捕りそうな最も危險な場所は、谷の深味で一條の水が潺々と流れて居るような所を通り過ぎることである。其處へ土人が無頓着と來て居り、虎は慾張りと來て居るものだから、日々其處を通り掛る土人や、又其の連れ牛が捕まることが實に多いもので、彼等土人はそれでも危險を懼るのといふような鹽梅は更になく、只ゝ事によると護身符を携へて往くものが少々あるばかりである。時とすれば虎の仲間には大恐慌を生じて、全躰の移轉をすることがある、その理由は何だか一向分らない、しかも長く住み慣れた古巢を離れて、嘗て餘り來たことない場所に不意に現はれることがある。

斯んな恐ろしい動物が住つて居る地方へ行けば、どうしても不意に之に出來逃すことがないとはいはれない、獵人が野豕を獵せんとして、切りに野豕の草食ふ所を漁つて居ると、驚くまいか虎が其の草の蔭から不意に現はれることがある。その獵人は勿論のこと、その獵馬の愕きと怖れとは非常なもので、忽ち其の場から逃れて了ふ。或馬が一度虎に驚かされてからは、以後虎に

でなくても虎斑して居る動物に出遇へば怖れて進まない所から、或る機轉の利いた主人が、故と虎斑して居る犬を其の馬と同じ小舍に置いて狎れ合はせてから漸く、そんなに怖氣付かぬやうになつたといふことの話がある。

爰に鹿を獵せんとして計らずも虎に紹介せられた紳士のあつた例がある。其の紳士は一匹の眠つて居る鹿を狙ふに充分適當な足場を計つて居つた、頓て狙を定めた、何分にも僅五六間はかりの距離であるから慥に手の內の物である。今や引鐵を引かんとする一刹那、不審議や鹿の彼方五六尺離れたる草の上に何物か波立つやうなもの



のあるに注目された。それは即ち虎の尾であつた、丁度其の鹿に近寄らんとしつゝある虎が草の上から尾ばかり表して居るのであつた。紳士は砲聲一發鹿を射止めたと思ふや否や、直に其の何物とも知れぬものにも再び火蓋を切つた。すると虎はヌックと草の下から現はれて其の鹿に躍りかゝつた。サア驚くまいか此の紳士、此の第二の獲物に心を寄せるどころか、全く之を見棄てゝ、極めて忍び足に逃げ去つたといふこと。

印度の一地方に居る鹿はポツ〱とした斑のあるのが普通で、それが虎並に人間に最も喜ばれる。孔雀も亦此の地方に飛んで居る、そこで斯ういはれる、斑鹿や孔雀の居る所は屹度其の近くに虎が居ると。或る時亦外の獵者が孔雀を打ち止めたが、其の孔雀は暫時空中に羽搏した後に草原の稍々開けた所へ落ちた。斯ういふ鳥は其の飛びつゝある間は中々速くて追ひ付かれようもないが、頓てそれが落ちると、獵人は直樣走け附けて今や之を手の内へ取らんとする瞬間に、三頭の虎が脚元から現はれた、實に此等は今まで其處に眠つて居つたので、俄に砲の音を聞きつけて、目を覺し邊を見廻はしつゝあつたのである。其處へ思掛なく孔雀が其の前へ落ちかゝつて來たので、これ幸と早速に御馳走に取りかゝつた、その間にヤットのことで獵人は踵を還してホウ〱の體で逃げたといふことである。

虎の有用なる武器は彼れ自身の巨大なる足である、それには鋭い鎌のやうなる爪があつて、其の力ある足で以て一打すれば全く洋刀の如き働をする。たとひ其の爪が縮み隠れて居るときも、其の足で輕く打てば、それて既に牛のやうな大獸を仆すに足るといふ強力である。若しも其の強力なる足の打に研ぎ澄ましたる爪の助を以てするならば、それこそ恐ろしい結果を與へるものと想像せられる。

さしもに恐ろしい虎でも人間の智慧には叶はない、脆くも之れが退治されるもので、其の方法は種々巧なものがある、今其の二三を話さう。

先づ每に用ひらるゝ手段は跳弓である、それは虎の通り行く小徑に置かれてあつて、それから二本の紐が徑の兩側に並行に引張られて輪止にまで支へられてある。それから別に一本の紐が徑に橫切らせてある、虎が此の徑を辿つて來ると自然と此の紐を胸の邊で壓すような裝置になつて居る。斯樣にして虎が此を壓すや否や忽ち弓は跳ねて瞬間に矢が飛ぶ、此の時は早や虎の心臟が見事に貫かれて居る。何にせよ其の矢の尖には恐るべき毒液が浸してあるから堪らない。

次に又斯んな法である、それは人間が直接に虎に對す

る法で隨分危險ではあるが、しかし勝玉次第で仕止められる。即ち堅固な竹小屋を築いて置いて全く人間が其の中に圍まれて待つて居るのである。晩景になると虎がノソリ／＼と遣つて來る、丁度此處へかゝると此の竹小屋の中に人の臭がする。サア捨てゝ置かない此の虎は。ヌツクと後足で以て立ち上がる、それで中を瞰く、前足の爪を以て切りと竹垣を掻く、そこで中の人間は手頃の鎗を以てグサリと虎を一突。

次の方法は甚だ手際で、少しも危險なことはない。即ち豫め無果花のような潤い葉を幾枚ともなく掻き集めて之に鳥捕に用ふる黐を塗り付けて、虎の最もよく通りそうな徑に寄せ集めて置くのである。今若し虎が何も知らずに其の葉の一つを前足で踐んだとせよ、それが既に虎の運の果である。其の一片の葉を認めて何でも之を離さうとして振る、ところが駄目である。すると之を顏に當てゝ擦り取らうと試みる。すれば黐が鼻や目に粘り着いて瞼を閉ぢつけて了ふ。必定此の間にはモツト多くの他の葉をも踐んで、更に愈々困難になるてあらう。サア斯うなると堪まらない。地面に轉り、そうして頭を地に摺り付けて益々之を取らうと急せる。すると愈々粘葉が更に頭や躰や足に附着いて、今まで柔かさうであつた毛が剛ばつて粘つて、其上に葉と黐とでスツカリ包まれて終ふ。そうなると七顛八倒爪を以て地を裂き怒りと落膽との叫を發し、終には長い苦みの爲に疲れ果てゝ終ふのである。丁度此の叫聲が待ち伏せて居る土人等が聞き知る合圖ともなつて、手に手に銃、弓、又は鎗を翳して何の苦もなく、斯の盲となり又弱はり切つて居る虎を仕止めるといふことである。

今我々が虎の話を尙少しく續けたいが、殘念ながらこれで諸孃にお暇を貰はねばならぬ。實は虎に關する話は盡きないほどに多くて、諸孃が新年の長夜のお慰と併せて多くの智識を得られるであらうとは思ふが、そこが悲しさには、我々の時が許さない、それに又此の本誌にも新年にかゝる種々雜多の記事が外にも澤山集まつてあらうから旁々、これで切り上げる次第である。どうも新年早々亂暴な肉食獸のお話をして痛み入る

が、何分にも今年が虎の年といふから仕方がない、世の諸嬢よ、虎の話が不都合といはれるならば、先づどうか年の名から咎められ度い。

（完）

伊勢參宮（歴史地理談）

文學士　喜田貞吉

　伊勢こそ神のみやこなりけれ（康永參詣記）

すめろぎの、始と思へば、千早ぶる

「神風の伊勢の國は、常世の浪の重浪、寄する國なり、潟國の可怜國なり、此國に居らんと欲す、」とは、之れ天照大神が垂仁天皇の皇女倭姫命に誨へ給ひし大御言なり。史を按ずるに、はじめ、崇神天皇殊に神祇を尊崇し給ひ、天照大神と同殿にまします事の、或は神威をけがす事あらんを恐れ、古より皇祖大神の御靈として、宮中に齋きまつりし八咫の神鏡を、皇女豐鍬入姫命につけて、大和の國笠縫の邑に祭らしめ給ひき。次で垂仁天皇の御代に及びては、更に皇女倭姫命をして、専ら大神に仕へしめ給ひしかば、命は、大神を鎭め奉るべき地を求めて、先づ宇陀の郡篠幡に至り、更を還て近江に入り、東の方美濃を廻つて、この伊勢國に來りしに、忽ち右の神敎あり、命即ち敎へのまに〳〵、神殿を五十鈴川の川上に立てゝ、こゝに大神を安置し奉りたるなりと傳ふ。○以上日本紀の本文による　かくて、伊勢神宮の基礎は、はじめて定まりぬ。之れ即ち今の內宮にして、宇治町の南端にあり。

內宮を西北に去る事五十町ばかり、外宮あり。豐受大神を齋き祀る。豐受大神は五穀の神なり、そのこゝに鎭座し給へるよしは、學者の最も信用する古書の中にも、すでは明記しあれば、固より疑なき事なれども、其鎭座の由來につきては、信用すべき古書には、何れも其傳へを缺きて、明ならず。神道家の往々好んで信用せんとする、神道五部書の類の書に、記する所によるに、豐受大神は即ち天御中主神なり、嘗て天上にありて、天照大神と幽契を結び、永く天上天下を治め給ふ。崇神天皇の御代に、天照大神の丹波の國○今の丹後　與謝の郡眞井の原に遷

り給ふや、○此事信用すべき古書には所見なし豊受大神天より降りて、明を合し德を齊ふ事、天上に於ける時の如くにして、雙びましゝき。然るに雄略天皇の二十一年の當りて、天照大神夢に倭姫命に告げてのたまはく、天上に於ける時の如く、天が下にても、豊受大神と一所に坐さずては、御饌も安くは聞こしめされずと、云々、かくて豊受大神は、丹波國より迎へられて、伊勢國山田の原に鎭座し給ふ事と成れり、と。之れ神道五部書のうち、御鎭座次第記事に傳ふる所なり。又傳へて曰く、天照大神の託宣に、我が祭りに仕へ奉らんには、先づ豊受大神を祭り、然る後に我が宮の祭事に勤仕すべしとあり、之によつて諸祭事には、先づ豊受宮を以て先となすなり、云々。之れ同じ五部書中の、御鎭座本紀の記する所なり。これ等の所傳は、何れも事實として、存在し、豊受大神は、外宮として、天照大神の內宮と相對し、兩々等しき世の尊敬を受くるなり。

片そきの千木は内外と變れ共
ちかひは同じ、伊勢のかみ垣　度會朝棟

内外兩宮斯く相並びて、崇敬を受くるにつけても、時に或は、兩宮に奉仕する人々の軋轢より、其間に互に鎬を削りて相爭ひし事なかりしにもあらず。衰微を極めて、恐れ多きさまに立ち至りし事なかりしにもあらず。今を去る四百十餘年前、文明長享の頃の戰爭の如きは、頗る甚しく、血を以て神殿を穢し奉るに及べり。內外兩宮兵亂記といふ書あり、塙檢校編輯の群書類從中に收む。此書の記する所を見るに、山田は北にあり、宇治は南にある地理なれば、宇治の內宮に參詣する道者は、いきほひ山田を通過せざるべからざるに、文明の比山田衆は、岡本といふ所に砦を据えて、道者の內宮に通ずるを遮り留むるが如き不法の擧ありき。されば宇治よりは、之に向つて故障をさしはさみしも、山田衆應ぜざりしかば、即ち多氣の御所へ訴へけるに、外宮方にては、多氣殿の命をも拒みて、愈々關を構へ、あまつさへ、文明十九年十月には、榎倉何某張本として、一切內宮への通路を留め、宇治衆は兵粮にも難儀する場合に立ち至れり。多氣殿には、伊勢國司北畠氏の事にて、南

北朝の比宮方に仕へて、最も勤王の實を擧げたりし北畠親房の三男顯能が、伊勢の國司に任ぜられてより、代々其職をつぎて、此の地方を領せるなり。されば國司は、山田方の言語同斷の仕打を怒り、十二月に兵を發して山田を燒き打ちにす。山田方散々の敗亡にて、榎倉何某は恐れ多くも神殿に火を懸けて腹を切るに至れり。

さればこの度の山田の敗滅、ひとへに宇治の所行ぞと、深く遺恨を挾み長享二年六月に至つて、機の熟するを見て山田衆一齊に起り、其の勢幾千騎といふ數を知らず、宇治を幾重にも取り圍み、十七箇所の攻め口より攻め入りしかば、此の度は宇治衆散々の敗北にて、大半逃れて菩提山の茂みに隱れたるが中に、年寄足弱などは、盡く瑞籬を破つて、神殿に逃げ入りしが、敵數百人、御階の下まで亂入し、行歩も叶はざる手負年寄共を、當るに任せて切り捨て、御殿の內にて、指し違へて生害するものすらありきといふ。誠に奇代の珍事、恐れ多き極みなり。

其後戰國亂離の世の中となりては、皇室の御用途する御不自由勝となりし程なれば、兩宮に於ても殊の外衰へて、神殿の御造營すら打ち絕えし事もありき。されば或は用途を寺院に課し、或は比丘尼が勸財に其資を求めし事もありしが、織田信長勤王の實を擧けて、神宮御造營に力をいたし、豐臣秀吉、德川家康相ついて之を行ひ、明治維新後ます〳〵崇敬を加へて、遂に全く上代の尊嚴に復するに至れり。

そも〳〵伊勢神宮が、其御造營の費を寺院に課し、或は比丘尼の勸財に求むるが如きは、實に非常の事といふべし。元來神宮は、我國家の宗廟として、皇室の尊崇最も厚く、深く佛法の近づくのを忌み、學者が、或は佛徒の手に成りしにはあらざるかと疑ふ程の、神道五部書の中には、「佛法の息を屛け」との文句あり、奈良朝崇佛の世にあたりて、伊勢神宮の爲に大神宮寺を建立せし事ありしに、大神の祟ありて遠く他郡へ移しゝ事もあり、出でゝ伊勢の齋主となる、皇女の御方は固より、奉幣使となりて參向する公卿達も、いづれも齋戒沐浴し、つとめて佛事を避けしものにて、鎌倉時代の末まで

も、殿に僧尼の境に入るを禁じたる有様は、自ら入らんとして排斥せられし虎關禪師が、悔しまぎれに、其趣を記し置きたる、元亨釋書の本文に徴するも明なり。此事は維新前までもつゞき、僧躰のものは決して境内に入る能はざりしなり。たゞに僧尼を近づけず、佛事を避けたりしのみにあらず、神宮にありては、苟も佛法臭き事穢れある事は、一言をも口に出す事能はざりしなり。それが爲に、神宮の忌詞といふものあり、延喜式といふ書に出づるを見るに、

佛を中子　經を染紙　塔をあらゝぎ
寺を瓦葺　僧を髪長　尼を女髪長
齋を片膳　死ぬ事をなほる　病をやすみ
泣くを鹽たれ　血をあせ　打つを撫でる
宍を菌　墓を壤　堂を香燃　優婆塞を角筈

などあり。

たゞに佛法と、僧尼と、穢れとを近づけざりしのみならず、神宮は皇室の御祖先にましまして、崇神天皇すら、已に、殿を同うし給ふ事の、神威を瀆すあらんを別殿に安置したる程なれば、もと臣民の參拜を許さず、皇后、皇太后、太皇太后、皇太子は奏聞を經て、はじめて幣するを得る程の嚴重なる制なりき。世降つては、此制も次第にすたれ、足利將軍はしば〳〵參詣せし事あり、戰國を經て德川時代になりては、お蔭參と稱して、庶民の參宮するもの多く、或は拔け參りと稱して、家族にも知らせず、若者など四五人寄りあひ、はなしの序などに、急におもひつきて、其足にて參宮する事もありき。かゝる拔け參りにありては、行く道々にて、施行の品を貰ひて、滯りなく參宮せしよしにて、今も老人など、文政の時の拔參りに行きしもの、數年前までながらへて、其當時の事を余に語り聞かせたるものもありき。

お蔭參り、拔參りは、常にあるものにはあらず、古くは慶安三年に、全國のもの思ひ揃ひて參宮せし事あり、次は、五十五年を經て寶永二年に天下一般に行はれ、次は、六十六年を經て、明和八年に、次は、五十九年を經て、文政十三年に行はれたり。されば年に定まりはなきも、大抵は六十年内外にして一回ありし順序なり。其時

には、人々殆んど狂したる程にて、稼業をも打ちすて、世の中の事ども、すべて忘れはてたる樣なりきとぞ。お蔭參りの年の外、平素の年にも參宮者は絶えず、日本に生れたるもの、一生に一度は、必ず參宮すべきものと、定まれる樣に心得、打ち連れて旅するが故に、參宮街道は、この道者のみを以ても、頗る繁昌し、宇治、山田の兩町も、之を以て其繁昌を維持せり。

春めくや、人さま〴〵の伊勢まゐり

（次號完結）

生花速成

自然古流家元　梶野智水

今回はお正月に生ける可き目出度花の生け方をお話し致し、諸流に於て秘傳とする所の變躰の次第を詳しく演べて年始の瑞相を祝します、尤も爰には松、梅、柳などの圖を以て變躰を示すけれども、變躰の趣きは千草萬木如何なるものにても屈曲したる枝に出會た時に意匠を加へて自然の趣味を具備せしむるものである、依て諸君は時々物々其枝、葉、花の變に應じて技藝の研究あらんことを望む。

▲松竹梅の生方

松、竹、梅と三種を一瓶に挿すことは多く正月に生けて他の時には餘り生けぬものである、併しながら婚禮の席などの花には十二月でも二月でも新生の意を表して生けてよろしい。

普通の生方





右は長き竹を禮の枝配りに居へて上の節左後に生じたる枝を以て忠孝の姿を兼ね、下の節右前に生じたる枝を以て義禮の形を備へて松の仁に配當し梅にて智信と居へるのであります。これを昇躰と云て禮より忠孝を補ふといふ變躰でございます。

右は忠仁禮智信の五躰みな座を殘して悉く枯れて仕舞た、そこで孝の小枝立昇て忠を補ひ、忠の枯れ留りを以て仁と見なし、義の枝舞ひ降て小枝にて禮を補ひ、何、梢頭の降りし所にて智信の姿を兼備して七躰を具足せしめ、根元に福壽草をあしらうといふ變躰てあります。

右は忠孝仁の三枝は枯れ留り居るが故に智の座より若梢生じて大に立昇り以て忠孝仁の姿を補ひ、信の小枝にて智の形を兼ねて七躰を完全せしむるといふ變躰てあります。

圖に顯す時は皆何れも一本の樹のやうに見ゆれども、これは何本遣ふても差閊ありません（尤も一本なれば至極妙なれども到底一本にて完全のものは得難ければ）然



れば何うして右の如き花形を生けるぞといふに先づ而

白き古木を一本見出して、これに適當の枝を添へて禮義智信等と形姿を調の



へ若梢のよく通りたるものを前後に挿して七躰を具足せしむれば圖の如くなるのであります。

變躰は皆前にも言ふ通り、コレハ面白と見込だ枝の有た時夫れにいろ〳〵と意匠を加へて降りし枝は降躰となし、昇りし枝を昇躰として、人工の所作を施し自然の雅致を備へしめて、而も人工を脱するのである、一歩これを誤まる時は自然の義を害して生花と造花の區別が甚だ不明になりますからよく〳〵注意を願ひ升。

畫學の心得

武村耕靄

本邦繪畫の今日宇宙に光輝を放ち他邦に推尊せらるゝものは、其運筆の活動して氣品の高尚なる故で御在ます、是は元より古今の名手にして、かゝる畫も出來得るので御在ませうが、一つには我帝國人民の固有の氣格に據ると申してよろしからん、扨繪畫と申ものは筆者の本性が筆に表れ、譬へは英邁なる人の畫は、强健なる筆意表れ、又温厚なる人の筆は、温雅の所を表します、されは如何に健筆にて上手に書かれしものにても、品格なき人の畫は氣品わがらさるものと申されますれは、苟くも繪畫に志す人は、思想を高尚優美になさねはなりませぬ、然るに女子の本性は幸ひにも此長所を具へて居りますれは、どこまでも此天性を發揚して、本邦女子の繪畫に光彩を添ることを希望度します。

然れども此品位を表す事は難き事にて、手易く得らるべき事て御在ませんけれ共、着眼は高き所に置く可きものと信し、初に此事を御話致します、扨此氣品を高め

るにも其基本と致す處は、筆の練習にありますれは、手腕の練習といふことは、第一に必用で御在ます筆意か少し理解したる時には、進みて布置形象又は濃淡等をもよく學ひて、其趣味を解する樣に成のて御在ます、かやうにして繪畫の大體を理解せしときは、唯手本のみによりて練習するといふ事を止め、自分の意匠で以て新圖を作るといふに至らねはなりませぬ、抑も繪畫を學ひて夫を應用することか手來ねは、普通教育の本旨に戻るもので御在ます、畫の巧拙はさてをき、自ら欲する所のもので畫きて、實用に充つるといふに至りて、初めて畫を學ひたる甲斐もあるもので御在ます、故に新圖を作るといふ事を致すには、其參考に充つ可き材料もなくてはなりませぬ、故、古今の能畫を師とするといふ事を勗めねはなりませぬ、是は古來より名手の手に成りし能畫を熟視したり、又は之を摸範として摸寫したり、又は縮圖といふて、其大なるものを小さく縮めて摸寫したり、種々の方法にして材料とするので御在ます、尙此外に造化を師とすることを致さねはなりませぬ、是は天然のものを寫生致すことゝて御在ます、此寫生と申事は容易なる事では御在ませんが、只纔一輪の花一葉の草などより、漸々入りて學びますれど、目に觸れ心に感じたるものを寫して、なかく愉快なる事にて、且緻密なる觀察力をも得て易する事尠なからぬもので御在ます、

されば前に述べたる運筆の練習より、寫生又は新案といふ所まで、進みて研究を致さねばなりませぬ是が大體の順序で御在ます、

又古人の申たる事に、畫はもと法なく、無法の中自然に法ありと申して、法則といふ事を述べ立て、之に拘泥致すは、筆の流暢を妨げてあしきとも申しますれども、古說のうちにも心得置きて裨益になるべき要法は會得し置く方宜しきことゝ思ひますゆゑ畫傳の中で著名なる六法といふ事を述べませう、六法と申すは、第一氣運生動第二骨法用筆第三應物寫形第四隨類傳彩第五經營位置第六傳摸移寫此六つで御在ます、

◎氣運生動

氣運生動は繪畫に於て、第一に尊としとする所である、故に畫を學ぶの初めより、此事を心がけねばなりませぬ、其畫く所はいか程細美緻密に形躰を整へたりとも、描出せし、花卉鳥獸山水等其眞の氣韻がなく、唯形ちを寫せしまでに止れば、それは眞の繪畫といふべからず、是を以て其書きたるものが、何れの形ちの上に、精神あり活氣ありて、眞物を眼前に見るの思ひを起さしめてこそ、初めて氣運生動の具りしものといはれませう、是は神品といふて、非凡の性質を備へたる人が、多年運筆の功を積たる後でなくては能はすと、書論には述べてありますが、實際其人の勉强次第で神品に至らずとも、練熟の結果普通の性質を具備したる人ならば、其修養次第で此本旨を貫くことが出來得るであらうと思ひます、奮勵をなされまし、

◎骨法用筆

筆を用ふる法は、手腕の練習に御在ます、手腕が自在になりますれば、筆も意の如くになり、隨て形狀も容易に畫き得るもので御在ます、又筆を把るの法は、畫くものゝ細大粗密に依りて、一定も致しませぬが、大率初學は筆の中央より少し上部を執りて、懸腕直筆に紙面を輕く動すので御在ます、手首を以て左右致してはよろしくないので御在ます、又骨法はすなほなるを良とし、筆勢の強きを可と致します、弱き筆は畫論に三病と申して、板、刻、結なる三つの惡き弊と致して、此弊に流れざるを旨とすべしと述て御在ます、とにかく板といひ、刻といひ、結といひ、皆手腕の滯りて行べき所へゆかず、筆か流暢致しませねば、活動なき畫の出來ることを申たので御在ます、扨骨法用筆と申ても、筆ばかりの事をさすのでなく、墨の使ひ方も含て居ります、故に墨の事を簡單に述ますれば、畫傳に墨を惜むこと金の如しと申す格言もありまして、用墨は用筆に次で大切で御在ます、畫きしものゝ濃淡分明にして、よく遠近向背を示すを活墨と云ひ、之に反して塗抹一色にして、濃淡の分ち無を死墨と申ます、故に此潑墨の事も逆筆を正しく用ひて求むべき事で御在ます、

編物實習

女子職業學校教員　豊原繁尾子述

編物は裁縫につ﹅いての女子の技藝でありまして、當分の樣な寒氣のきびしい折は、申までもなく、夏期の頃にても實用品に裝飾品に隨分需用の多いもので、それ故當校でも年々此科を修めるものが多くなりました、從て獨習するものも多くある樣でございます。から、大概皆樣に御わかりであらうと思ひますが、扨御話しを致します事になりますと、矢張なるべく簡單のものより申上た方がどうもよろしい樣でありますから、先つ最初靴下より始めませう、編物をいたしますには、編針の種類とか糸の種類とか編方の方法名稱とかは、又追〱其物に就て御話しいたしますとに致しませう。

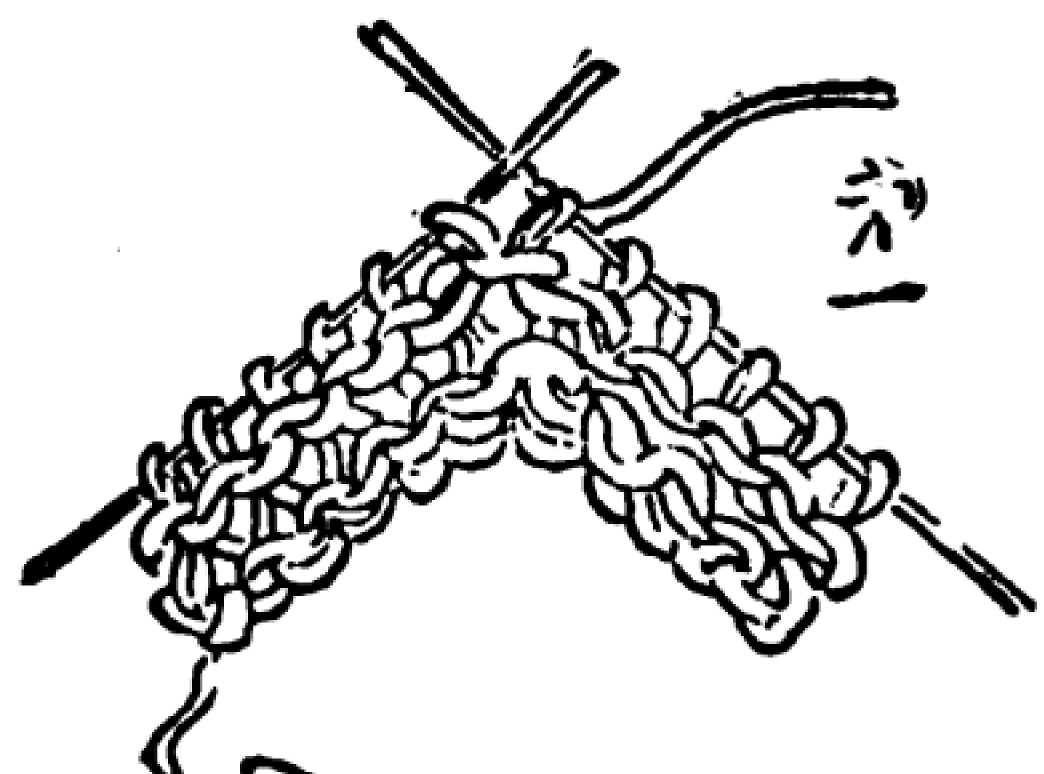
●大人用靴下

靴下を編みますには、先かねの棒五本を用ゐます、此棒にも番號によりまして、細きと太きとの別がありますが、こゝに用ゐますのは十四番といふのでございます、

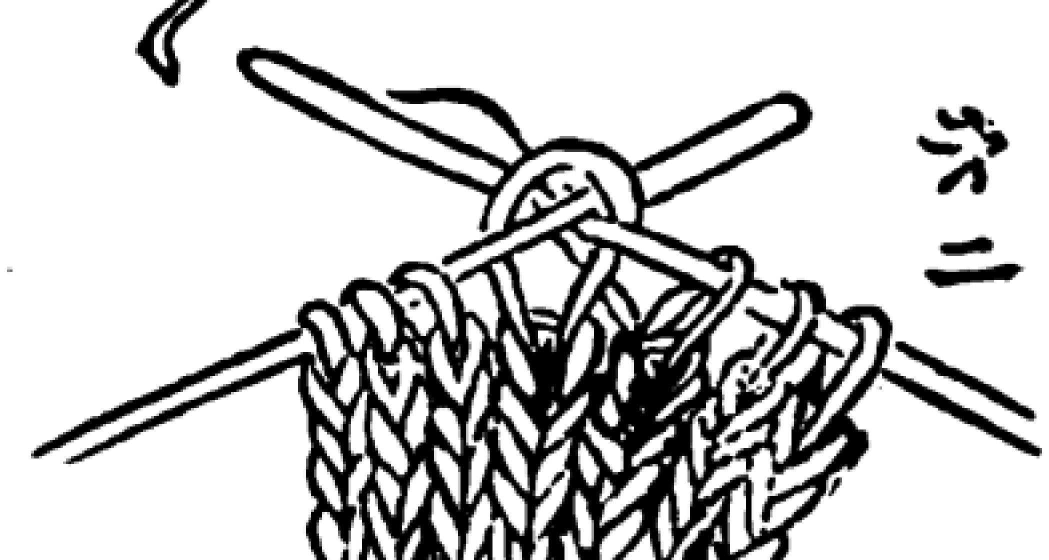
糸は熟練してまいりますれば、種々の糸を用ゐますが、初めには先つスコッチを以て編方の練習を致します、並の大人用の靴下を製しますには、大抵四テンスにて出來上ります、扨編み始めますには、二本の編み棒を揃へて右の手に持ちて糸をかけます、此糸をかけます數が三十八即ち三十八目數ができるのでございます、又次に棒二本を前の樣に持ちまして、糸をかけます、之も亦目數三十八個と致します、これが靴下の總目數で七十六の目數になります、次にこれを四本の棒にわけ移します、次に左右の手に棒を持ちまして、左の手にて糸を繰りまして編てまゐります、即ちかけ目の手前の左より棒を入れて右の向ふに出し糸を下よりかけまして拔き出します、この樣にして編みました目を本目と申します、初め一廻りは皆此本目にあみます、(此はしめの編目四ッ計は、かけはじめの糸の殘りと、これより編てまゐります糸と共に二本にして編みます、)次の二回目からは、本日を二ッ次には糸を手前に出して置き棒を右の橫より入れて左の前に出し糸を棒の上よりかけ

て抜き出します、かやうにして編みました目を逆目と申します、この目二ッ次に本目二ッ逆目二ッといふ工合にして三十八回いたします、この様に本目逆目と互に編でまゐります、編み方をゴタ編と申します、それより大抵八分(此寸法は皆鯨尺を用ゐますから以下其おつもりで御覽下さい)許本目にして編みます、次は終りの目三つを殘し置きまして、其中の二つを一度に本目に編み次に殘りの一つをまた本目に編みます、それより次の棒にある初めの目を一つ本目にあみまして次の目を一つ編ますにたゞ右の棒に移し置きまして、又次の目を本目に編みまして、之に前に右の棒に移し置きました目をかぶせます、これより本目ばかり八回まわりましたらば又前の通りに、棒の末より目數を減します、次に七廻り本目に編みまして又目數を減します、次に六回本目に編みまして又編目を減し次に五回本目に編みまして目數を減し又五回めに目數を減し猶五回目に目を減し都合七度目數を減する樣になります、それよりは只本目ばかり一寸五分編みます、これより踵の編方になります、丁度今殘りの目數が六十二となりましたから之を四本の棒に分ちますと十五つゝとなりまして、二つあまりますこの二つの目を踵の方に入れますから踵を編みます方の一本の棒の目數が十六となります、即ちこの十六つゝの目のかゝつて居る二本の棒にて踵を製るのでございます、只今まで御話しいたしました目數の減した所を中央として編てまゐります、此所の編方は他の部とちがひまして、輪になりて居りませんから、表を見て編むときは本目ばかり、裏を見て編みますときは逆目ばかりと致します、此二本の棒の總目數が都合三十二ありますが、その兩端の目に表より編むときは、糸を向ふに置きまして、右手に持て居ります棒に初めの目を編ますにたゞ移しまして次の目から並に本目に編みます、又裏より編みますときは糸を手前に出し置きまして、初めの目を右の棒の横より棒を入れてたゞ右の棒に移しまして、次よりは逆目に編みます、この樣にして三十度編みます、そこで丁度側面の、、、クヒ目が十五出來ます、それより三十二の目を二つに

分ちまして、（踵の所を一本の棒にてあみましたときにはこゝにて二本に分けますので、もとより二本になつて居るのはよろしいのでございます、）中央より二本の棒に移します、これより次の棒即ち左の棒のかけ目を三つ本目に編みまして四つめの目を右の棒に移し五つめの目を本目に編みまして、前の移し置きました目をかぶせます、次を一ッ本目に編みまして、直に裏にかへります、そして初めの目をたゞ移しまして、四ッを逆目に編みまして、次の棒にある目三ッを逆目に編みまして、次の四ッと五ッめとの目を二ッ一度に逆目に編み次の目を一つ逆目に編みます、それにて直に表の方を手前に向けて初めの目をたゞ右の棒に移し四ッの目を本目に編みます、又次の棒の目數四つを本目に編みまして五ッめを一目棒に移し六つめの目を本目に編みまして前に移してある目を之にかぶせます、七ッめの目を本目に編みまして又直に裏にかへし初めの目は前の通りに棒に移しまして、六ッの目を逆目に編み次の棒の目を四ッ丈逆目に編みまして、五ッと六ッとの二ッの目を一度の逆目に編みます、それよりまた直に表に向けまして、前に申しました通りに裏表より編みまして、だん〳〵に目を左右に進めて此側の目の終りになりますまで編てまゐります、次には此側面に出來ました目、即ち踵の横の目を裏と見て下より上へと十五（此十五の目は前申上ました三十回表裏をゆきかへりまして出來た目でございます、）を拾ひ表を見まして、本目に編みまして、踵を編み初めました前に殘してありました二本をも此折から本目に編みます、次に又踵の側面（前に拾ひました所でなく其他の側の目）目を下より上に拾ひまして此度は此拾ひました



才一



才二

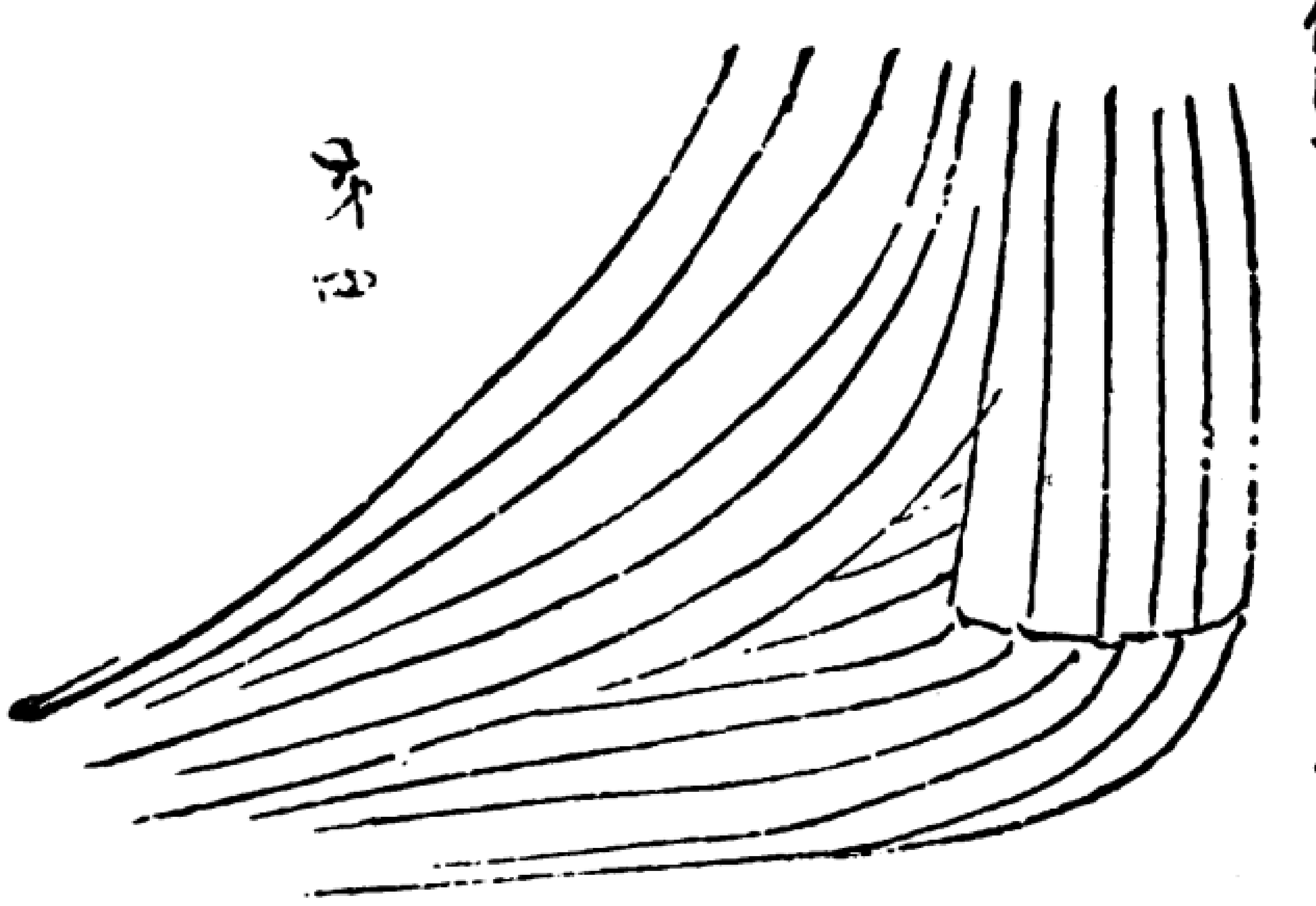


才三

目だけは右の横より棒を入れて向ふに出しまして編みますが初めの目の拾ひ方の所が並のとちがひますからかやうに編でまいりまして本目になるのでございます、これよりあとは初めに踵の側面で目を拾ひまして（即ち十五の目數をつくりました所）側の終りの所で二つ一度に本目に編みまして次の二本は並に本目に編みます、又次の棒の初めの目を右の棒に移し置き次の目を本目に編みまして、前に右の棒に移し置きました目をかぶせます、次の一回丈は本目に編でまわりまして、次は又踵の兩わきて前申した通りに目を減します、又次は本目ばかりて一回致します、個樣にして總目數六十二まで減しそして踵の側面の目を拾ひました所からおよそ四寸位あめましたら次は爪先きの所のこしらへかたに移りますので漸々目數を減してまゐります、其方は矢張踵の中央をこゝにても中央と見て一つ目を右の棒に移し次の目を本目に編みまして前に移し置きました目をかぶせます、次には目數五つを本目に編みまして前の移してある目をこゝにかぶせます、又次を目數五つを本目にあみまして、又其次の目を減すといふ樣にして此一廻り編みます次からは本目ばかりにて目數を減さずに五回まわります、次の一回はまた前の如く目數四つを本目にあみまして、次の目を右の棒に移し次を本目に編みて前の移した目とかふせて目減し次をまた四つ本目にあみましては一つ目を減し此の樣にして一回いたします、此次は目數を減しないで四まわりは本目でまわります、次は三つ本目に編みまして、一つ目數を減しますこの樣にして一回いたしましたら次の三回は目を減しないで編みます、次は二目本目にあみまして次の目を減しるといふ工合にして順次右の如く致しまして、殘りの總目數が八つになりましたらは、殘り糸を七寸位に切りましてそれを毛糸針（之は裁縫に用ゆる針とはちがひまして尖端の鈍き針孔の細長いものでございます、）に通しまして爪先きの中央の所より裏に拔き出しまして、二度ばかりよくよくとめ目をひろひまして二度ばかりゆきかへりしてとめるのでございます、左右ともこの樣にして一足の靴下が出來

るのでございます。一寸申加へて置かなければならぬとがありますかそれは踵にかゝります前の目數は大人並は六十二ときめてありますけれども、足の大小によりまして斟酌して或は六十四或は六十六位にするともあります、つまり編む人の手加減に致しますのでございます、又糸の繼きめでございます、此の場合には目數四つばかりは前の糸と後に繼ぐべき糸とを二本にして編みまして後次の糸のみて編てまゐります、この繼きましだ糸の兩はしは爪先きの樣に毛糸針にてよくとめをきます、くれ〲も糸の繼き目はかやうにして編ませんと其出來上りましたものが用をなさぬ樣になります、よく糸のつぎめを結び合せる人がありますが若し左樣にしてこしらへ上ましたものは直に其結ひ目より糸がホツレまして破損しますから、前申上ました樣にして二本の糸を繼ぐ樣にしていたゞきたうございます、猶今一度

第四



申して置きますがこの編棒で編み上げますもの例へは靴下、手袋、脈とめ等其他數へきれませんが、先つかやうなものはいつれも初のかけ目（棒二本にて初めてかけましたときの目）と最初一同編みますときとは極々ゆるく致しませんと工合が惡うございますから之もあわせて申上て置きます、第一圖は逆目、第二圖は本目、第三圖ゴム編、編み上げました所は逆目は表より見ては見えませんたゞ本目ばかり見ゆるのでございますがこの圖は編目を開きて見た有樣でございます、又第四圖は靴下の踵の所で線は本目の向きでございます。

裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子述

昨年引續き御話し致しましたときに、遂折がなくて、千鳥返しぬひ、マツリ等に就きまして委しく申上ませ

んでしたから、こゝで一寸御話いたしませう

●返し縫ひ

返し縫は名の通りに針を返して縫ふのでございます、其縫ひ方は第一圖の通りに、(イ)より針を入れて(ロ)に出しまして、又もとの(イ)の所に針を入れまして、此度は(ハ)の所に針を出し、又(ロ)に針を入れて(ニ)より表に抜き出します、順次この樣に致してまゐりますので、其針目の間は品物によりまして差異かありますが、先づ五厘位より一分までといたします、之は飾の方の縫ひ方で、シャツ、ヅボン下、西洋前掛其他ミシンを要すべき縫ひものを、手縫ひに致しましたときに、飾りミシンのかはりに致しますので此種の返し縫ひを本返しと申します、今一つは第二圖の(イ)より針を裏に出し(ロ)より此度は表の方に針を出して抜き、次は(ハ)の所より針を入れて(ニ)の所に針を抜き出します、次はまた(ホ)の所に針を入れて(ヘ)に抜き出します樣にします、次は順次(ヘ)より(ト)、(チ)より(リ)、(リ)より(ヌ)、(ヌ)より(ル)といふ工合にしてまゐります、之を半返しと申しましてミシン縫ひの代りに致しますが、前申した本返しとちがひまして、外に縫ひ目の出ないものに用ゐます、即ちシャツ、ヅボン下などの内部の所其他フランネル單衣、帯の上仕立などに、此縫ひ方を用ゐます。この返し縫ひの裏は繩の樣になるのがよろしいのでございます。

●マツリ縫ひ

マツリ縫ひはシャツ、ヅボン下の見返し、裾がけ等其他此類に用ゐるのでございます、先づ裾がけに就て御話を致しますれば、裾の切を三つ折にして裏を見てマツリはしめます、扨はしめは表の切を極く細き針目にすくひ、直に上の切の極く端に針を出します、次はこゝより斜に五厘位さきの方の表の切を小針にすくひます、この樣に漸次表の切と裏の切とをマツリゆくのでございます、このマツリはなるべく表の針目を斜にならぬ樣に注意せねはなりません。次は

●千鳥縫ひ

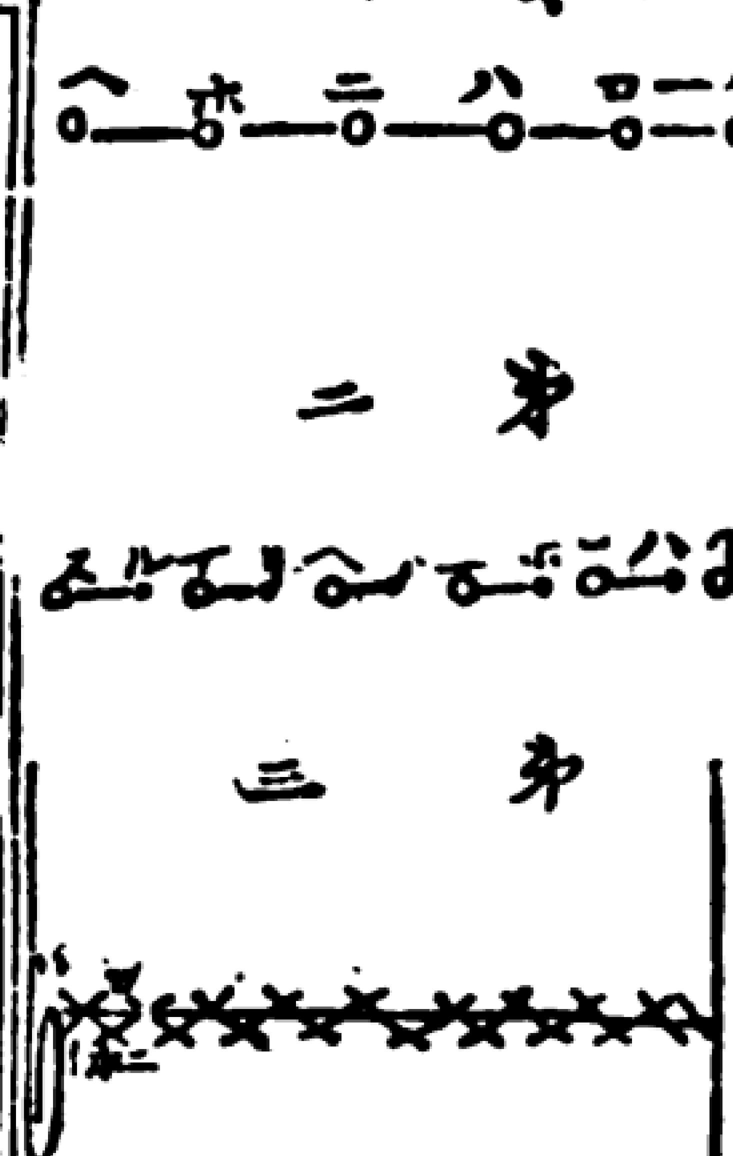
千鳥がけとも申します、これは裾がけ、縫ひ込み等の端

を二つ折若くは三つ折にして、ふせるときに此縫ひ方を用ゐます、扨此縫ひ方を始めますには、第三圖の如く(イ)の中央より針を出しまして、(ロ)の所にて表の切を極く少々すくひます、次にまた(ハ)の所に針を出しまして(ニ)より針を入れ、表に針を出さずに上の布だけをすくひまして、(ホ)の所に針を出します、此の如く順次表及裏の切をすくひて縫ひゆくのでございます、針目の大さは第三圖の通りのが丁度よろしうございます。以上の縫ひ方はシャツ、ヅボン下、フランネル單衣其他洋服一切に用ゐる縫ひ方でございます。以上の返し縫ひ、マツリ、千鳥等御話し致しましたからついでに此縫ひ

第一圖

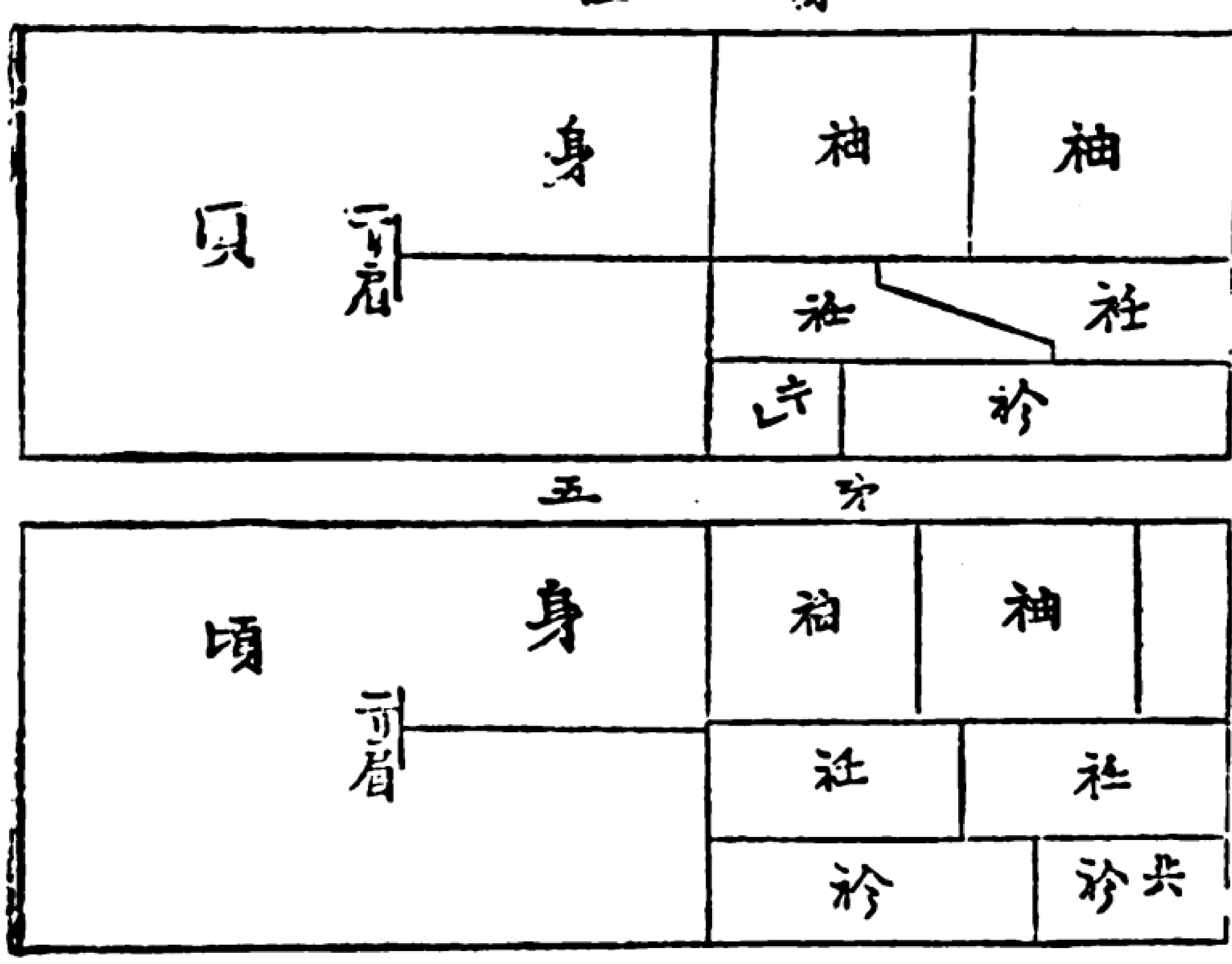
第二圖

第三圖



第四圖

第五圖



方を用ゐるフランネル單衣に就て御話しを致しませう。

◉フランネル單衣

裁へ方は、第四圖の通りに致します、積り方も圖によれば大概御わかりになりませう、しかしフランネルによりまして、片面の樣に見えますのがありますから其ときには衽を鈎に裁つわけにはまゐりませんから第五圖の樣に致します、之は身の丈の四倍より九寸(衽下りの二倍)を引きて用布を得ます、又第四圖の裁ち方で衽に衿の殘切を繼ましても出來ぬとはありませんが、あまり繼目などが厚くなりますから、多くは繼がない方をとりますのでございます、標のつけ方は單衣同樣縫ひ方もなみの單衣

と同様でございますが、上等の仕立になりますといつれの所もみな半返しに縫ひます、(半返しに縫ひますときけ縫ひ込みの返る方を裏にして、縫ひ目の見える方を表に見て縫ひます、縫ひ込みのふせ方はいつれも千鳥縫ひに致しますが又袖口、裾がけ、衿の絎け方等は、マツリ縫ひにするともあります、又縫ひ込みは片方にかへさずに、両びらきにする事も有ます、次には

●懸綴

の仕方を申し上ませう、先づ懸綴を致します布をとりましたらは、なるべくは次に申上ます様な場所を継き目に用ゐて継きませんと工合がよく厶いませんから御注意申上て置きます、しかし丈のつまりて居ますものは致しかたもありません、扨其継くべき所は横縞のものなれば、縞のある所、中形若くは粗き小紋の様なものは形のよく目に立つ所を撰びます、無地ものは別に致しかたもありませんが、織方によりまして紬、太織の如き節のある物は緯糸の太き所を継き目にいたします、其継き方は継ぐべき布の端を布目を通して真直に裏に折りまして、二枚を表と表と合せ折り返しの端を外に出しましてよく合せて躾にて動かぬ様にとめます、(縞のあるものは縞をよく合せます、たとへ其縞と縞との間又は模様等の間に布の伸縮がありましても、よく縞及模様をよく合せ若し伸た方があれば少しくイセて継きつけるのであります、)次に針をとりまして、手前より向ふに針を抜き出しまして、布目の一目一目に極く浅く針をかけて縢りゆきます、此懸綴に用ゐます糸は其はぐべき切のホツシ糸か又は布と同色のケシ糸の細きものを用ゐます、針も矢張細きものをよいと致します、大概は絹のつぎ針位のものを適當といたします、継き終りましたらは、蒲團の様な柔きもの丶上にのせまして、(表の方を蒲團につけて裏を上に出して)其上にまた半紙なり何なり清潔な紙をのせまして其上に鏝をあてます。

民法上の女子（法律談）

法學士　永安晋次郎

緒言

近年女子の教育は、實に盛なもので、高等女學校は各地に陸續建設せられ、遂に女子大學の設まであるやうになつた、國家の爲め甚だ祝すべきことであつて、未來の妻たり母たるもの丶教育が、斯樣に進歩するときは、其の家庭も亦從て發達整頓すべきことは言ふを待たないことである、然し其の課程を見ると、法律思想を養ふべきものは殆ど無い、之は甚だ遺憾なことであると思ふ、勿論現今の狀況にては、女子を法學者とする必要はあるまいが、普通學の一科として、女子は法律上如何なる地位に居るものかといふ位のことは、少くとも中等の生活を爲すもの丶、心掛て居て益になつても、損にならぬことである、或は女子が權利とか義務とかいふことを口にするは、如何にも生意氣である、夫れでなくとも、女學生は、今日或部分のものは、女子として、如何はしい擧動で、淑徳といふ女子になくて叶はぬ性格が薄らいで來る傾のあるに、益々この傾をして、甚だしからしむる虞があるといふ人もあるか知らぬが、之を當を得ない論であると信ずる、濫りに男女同權とか、或は女權擴張とかいふは、何故法律が男子と女子との間に、其の享有する權利、負擔すべき義務に、等差を設けたかといふ理由の存する所を知らぬからである、又一方に於て、女子であつても、其の享有する權利、負擔すべき義務は、如何なるものであるかといふとを、知て置くのは、處生上及び齊家上甚だ必要である、斯樣なことは、戸主たり又は夫たる男子が知て居りさへすれば、よいやうであるが、若しも戸主と家族、若くは夫と妻との間に、利害の相反することが、起つた時は、如何にするか、又斯樣な事が起らぬ無事平穩な時であつても、人の妻として、又は母として、如何なる權利義務をもつて居るか、其の程度範圍を知て置くことは、甚だ必要である、第一自身女戸主となつた時は如何するか、女子の享有する權利義務は、或る一部分のものが、想像するやう

に、さう廣く又大なるものではないが、又他の一部分のものが考へるほど、狹く小さなものでもない、本編は、之等のことを成るべく、平易簡單に說明し、法律上の思想がないものでも、解し得らるゝやう、序述したのである、素より法理の奧義に涉るといふやうな、高尙なものではない、又女子として、殊更心得べきことを、說明するのを、主眼としたもので、民法全躰の說明ではないから、男女共通のことは、省た所が多い、此點は豫め斷て置くのである、

(第一)未成年者

一家の戶主でもなく、又人の妻でもなく、單に未成年者としては、女子も男子と、少しも違う所はない、即ち、未成年者は、皆法律では、所謂無能力者であつて、如何なる事でも、法律に關係したことを爲るには、法定代理人の同意がなければ出來ぬ、從て、未成年者は、法律上特別の取扱を受けるものであつて、人は皆此の境遇を、一度は經過せねばならぬのであるから、先づ順序として、未成年者の法律行爲の事から說き始めやうと思ふ、

●法律上の無能力者

凡そ人は母の胎內より生るれば、直ちに、完全なる私法上の權利を得るを原則とする、私法上の權利とは、民法とか商法とかいふ、一箇人と一箇人との間の、法律止の權利をいふのである、憲法行政法などのやうに、國家と一箇人などの、法律上の關係をきめるのは、私法に對して公法といひ、公法上の權利といへは、例は、國の政治に參與するの權、又は國の干涉を受けさる自由、即ち自由權の如きないふのである、この公法上の權利は、女子と男子との間には、大なる差があつて、政治に參與する權利の如きは、今日男子の獨占であつて、女子には與へられて居らないのである、然しながら、人の位置身分、又はその他の事情など、種々の原因から、法律は、假令、其の人は權利をもつて居ても、之を實際に行ふ上に、制限を付ける、此制限を受けるものを、法律上に無能力者といひ、法律に關係した事をする完全な能力がないものと定めたので、▲未成年者▲心神喪失者瘋癲、白痴の如きもの▲聾者▲啞者▲盲者▲浪費者、及ひ▲有夫の婦即ち妻の入てある.

●法律上の能力

先つ未成年者の一般の法律上の能力に就て說明し、女子も未成年者としては、どれほどの權利を、有するかといふ事を明らかにしやう、

成年者とは、滿二十年以上の者である、之は民法第三條

に定めらるゝ所で、滿二十年以下のものは、即ち未成年者である、此の未成年者が、法律上の行爲を爲すには、必ず其の法定代理人の同意がなければ出來ぬ（民法第四條）法定代理人といふは、普通は父である、父がなきときは母、父も母もなきか、又は或事情があつて、父も母も代理人となることが出來なければ、後見人である、總て如何なる事でも、法律に關係したことを爲るには、必ず此の代理人の同意を必要とするのである、然し之は皆未成年者は、所謂一人前にならない者であつて、學識なり、經驗なり、共に未だ乏しく、成年者と契約其の外の取引を爲すに就て、損害を蒙る虞があるから、法律で之を保護してやるといふ主意に出でたのである、尤も實際上二十歲未滿のものでも、完全なる能力を具へて居るものもあるに相違ない、從て成年の年限を定めるにも、國によりて、種々であつて、滿二十一年以下の者は、幼者とする所もある、然し何れにするも、實際の能力は、各人に就て調へる外致方はないが、斯様なことは、取扱の上に唯混雜を增すのみである、夫れ故、我邦の立法に於ては

◎舊來の習慣

によりて、滿二十年を以て區別の標準となし、二十年未滿の者は、その多數に從て悉く無能力者として、法律の特別の保護を與へるのである、であるから若し未成年者の行爲が、未成年者自身に取て、利益になつても、決して害にならない事なら、假令法定代理人の同意がなくて爲た事でも、有効に成り立つとして差支はない、法律の語を以て言へば、處分行爲は法定代理人の同意を必要とするも、管理行爲は自ら爲すことを得るのである、例は、人から贈與を受けるやうなことは、實質などゝは違つて、少しも損失を蒙る虞がない、かやうなことは、法定代理人の同意がなくてもよいのである、然らは、若し法定代理人の同意もなくて、所謂處分行爲を爲たらどうであるか、この時は何時でも取消すことが出來る（民法第四條第二項）例は、未成年者が父の同意もなく物を買たのならば、其の後に之を取消すことが出來るのである、斯様にいふと、未成年者と取引を爲たも

のは、何時までも不安心で、損害のみを受け、未成年者は、また自分の勝手なことばかり出來るやうであるが、さうは行かない、成程取消すことの出來る行爲は、未成年者本人は勿論のこと、其の代理人からでも出來るが（民法第百二十條）或行爲を取消すといふは、恰も其行爲を爲なかつた時のやうな元狀に恢復するのであるから、例ば物を買たのであるならば、未成者者は、其の物を賣主に返し、賣主は代價を戻し、全く

●賣買以前の有樣

通りにするのである、然し未成年者が其の買た物を、一部分消費したり、又は他へ賣たりした時はどうか、此の時は、其の殘りか又は他へ賣て得た代金（若し其中を消費したときは其の殘金）だけを、賣主に返せばよい（民法第百二十一條但書にいふ「無能力者は其の行爲によりて、現に利益を受くる限度に於て、償還の義務を負ふ」といふのは、即ち此の意味である、故に若し賣買の目的物が飲食物のやうな、直ちに消費さるべき性質ものであつて、未成年者が悉く之を消費した後であるならば、何も返すには及はないのである、斯樣にして取消した行爲は、その取消した時から始めて無効となるのである、夫れ故、取消し得る行爲でも、取消さぬ間は有効な法律行爲であつて、之が無効の行爲を取消し得へき行爲との區別のある所である、從て又之と反對に、取消し得べき行爲は、追認することも出來る、さうして追認すれば最初から有効なものと看做さるゝのである（民法第百二十二條）夫れ故取消し得へき行爲は、唯其の儘にして置けば、法律行爲として法律上効力が不定のものであつて、之を取消すか又は追認するか、其の時に始めて効力が定まるのである、

序にいふて置くが、法律に「看做す」といふ語と、「推定す」といふ語とがある、看做すといふは、推定よりは効力が強く、單に法律上の推測に止まらず確定するのである、即ち推定といふのは、反對の證據があれば、之を覆すことが出來るが、見做すといふと、反對の證據を擧ぐることを許さぬのである、

（以下續出）

銀行の話（一）

法學士　克堂主人

はしがき

昔時の人は、いかに金錢に裕かであつても、たゞ之れを土藏の中に積み置くばかりて、所謂資の持ち腐れとなり、之れを利殖す道を知らず、否全く知らないでもないが、僅かに個人間に於て貸借を爲し、最も不確實な利殖の方法があつたばかり而して又一方に於ては金の無いのに苦しみ、志はありて資本の足らぬを嘆じても、容易に資金を得るの便宜を得ずして較々もすれば高利に苦めらるゝを免かれず、此の如く、金を貸すものと、金を借るゝものとの間に於て、相互の融通方法の便宜がないのは、是れ實に銀行のなかりし時代の狀態なり、然るに、經濟社會の進運に伴ひて、信用制度の行はるゝに至るや、此に銀行てふ金融機關は世に出來し、最も便利なる方法によりて、貸借の媒介となり、以つて世の金融を助け昔時不便を感じたる所のものは全く除去せらるゝに至りぬ、而て唯に夫のみならて、銀行なるもの世に出てたる爲に、一般の人々が受くる所の利益は頗る多大なるものあり、たとへば、昔は少なからぬ費用と、保管の心配とを以つて、其餘金を己れの土藏中に貯へ置きしも、今日は之れを銀行に預け置けば、寢ころんで遊び居るも、利殖の方法相立ち、銀行家は其遊金を利用して有用の資本たらしむることを得べく、而して銀行に金を預くるには、貯金なれば一圓未滿、預金なれば十圓未滿の小金にても差支なく、僅かに數十圓の預金を爲しても小切手を使用することを得、之れに根抵當にても差入るれば、金の必要ある時、世間の聞えも惡からぬやうに融通するを得るが如く、つまり銀行の効用は、己れを利すると共に又世間をも利するものなれば、其經濟社會に及ぼす所の利益は尠少ならざるなり、されば、銀行てふ機關は、實に文明の利器なりと云ふことを得べし、然るに、世人は彼の鐵道や、郵便や、電信、電話などの交通機關をば文明の利器として知れども、銀行の利器たるを知る者稀なり、否其利器たるを知るも、未だ十

分に之れを利用するの道を知らず、時勢に後れ勝ちの田舍は勿論のこと、開化を誇る都會にても、商工業者以外のものには普ねく利用せられざるが如し、是れみすみす文明の恩惠を辭退すると等しきのみ、故に余は、此に最も通俗的に、銀行のことを說述し、讀者をして其大要に通曉せしめんと欲するなり。

（一）銀行の性質

銀行（*Bank*）とは、如何なるものか。先づ其性質より說明せん、そもそも銀行とは、自己の信用に由りて、資金を集收し、之れを運用して世の金融を助くるを業とするもの也、換言すれば、世間の金融を助くるが爲めに己れの信用（株金と預金とを主たる基礎とせるもの）に基き、汎く公衆一般に對して、資金の餘裕ある所より借り、之れを不足せる所に貸付け、以つて貸借の媒介を爲し、其間に於ける利子の差額を以て、營業所得とするを主たる目的とするものに外ならず、尤も貸借以外に、割引、爲替、取立等を取扱ひ、又た紙幣發行の特權併し之れは銀行の附隨的營業である、平たく言へば、貸借媒介の道具、即ち金融機關と言つてよろしきもの也、此の如く銀行は、金融機關の性質を有するものなれば、其の一般社會に利益を與ふるもの少なからず、殊に農商工業者等、多くの資本を要するものゝ爲めには、最も便利なる金融方法を與ふるもので、直接には、資本の需用供給の便を得せしめ、間接には諸般の生產的事業の發達を幇助するの効あるものなり、夫れ金融の經濟社會に於けるや、尙ほ血液の人躰に於けるが如とし、若し血液の順環にして不可ならんか、人躰の健康は得て保つべからざる如く、金融の流通にして不良ならんか、社會百般の事業到底振興せしむる事能はず、金融の通塞の社會經濟に及ぼす影響亘大なりといふべし、銀行の事を說くに當り沿革並に其の組織に就て說明を要すべきも事頗る煩はしく初學者の了解に困難なるべければ、其の說明は後段としまづ其の効用より說き起さん。

（二）銀行の効用

銀行の効用を大別すれば凡そ三種あり即ち一は預金の側より見たる効用、一は借主の側より見たる効用、一は

世人一般の側より見たる効用即ち是れ也、いま此の三種の効用に付きて少しく說述せんとす、

◎預主の側より見たる効用　とは即ち預主が銀行に對して受くる所の利益なり、たとへば此に餘裕の金あり、又は地金銀及貴重物を有する者あり、自己が之れを保管せんと欲せば、爲めに土藏にても築き、其中に納めて夜の目も寢ねずに心配せざるべからざるも、之れを銀行に預けなば盜難火災等の憂ひなく、よし之れあるも銀行は償賠の責任あるものなれば、此等の預けを爲す者のためには、完全なる保管所といふを得べく、また無駄に寐かし置くべき金錢も、之れを銀行に預け置けば相應の利子が附くものなれば、銀行は便利に利殖をなさしむる所といふを得べく、而して銀行に取引をなせるものは小切手を利用して、現金を受渡するの煩なく、取引を完濟せしむることを得、また遠方に隔り居りて金錢を送取するには爲替といふ便宜なる方法あり、實際金錢を遣り取りせずに、書信と帳簿の上にて其取引を相濟すことを得るを以て、銀行は手形を利用するの便ある所といふを得ん、倘ほ此の外に預主が受くる所の利益多からんも、此等は其中の重なるものなり、

◎借主の側より見たる効用　とは借主が銀行に對して受くる所の利益なり、少しく之れを說かんか、一躰人が金の必要ありて、之れを借るときには、多くの場合に於ては、相應の利子を拂ふものなれば、左程有難き恩義あるものにあらねど、實際は然らず、借る者は貸すものに對して非常の恩義を受くるが如く、平身低頭して之れに依賴し、高き利子を拂ひ、お負けに進物にても遣はさねば、願ひ中々叶はざるが如きは世間の狀態にぞある、されば其の奔走のみに時間と勞力を費やして、急速を要する場合の間に合はさるの遺憾あり、然るに兼ねて銀行と取引を爲し居れば、此等の馬鹿げた眞似と無駄骨を折らざるも、速かに其用は辨せらるゝなり、銀行は實に金融の道具なりといふべし、殊にも農工商業者、其他の事業家は、普通の人よりも比較的多くの資本を要するものなれば、此等の者が資本の必要を感ずるとき、敏速に資金を融通するには銀行に如くものなかる

べし、されば、銀行は、實業家のために最も必要なる金庫といふべし、

以上の如く銀行は金融を爲すのみならず、借主が個人より借るゝと、銀行より借るゝとは大差あり、銀行よりせば世間の自己の負債を知らしめず、洵に躰よき借金方法たるなり、以上は借主が受くる利益の重なるものなりといふべし、

◎世間一般より見たる効用　とは銀行の金融作用に由りて、世間の公衆一般が受くる所の利益なり、いま之れを說かば、銀行といふ金融機關ある爲めに、世間に空しく遊び居る大金小金は、漸次集收せられ來たり、而して此の遊金に對しても、相當の利子が付くものなれば、公衆一般の貯蓄心を奬勵して、益々天下の無駄に寢て居る遊び金は、悉く銀行に向つて集まり來る、されば銀行は貯蓄を奬勵するもの也、而してまた銀行は此の集れる資金を、必要ある所の者に對して貸付け、以つて金融の流通を便ならしむるのみならず、事業家が此の資本を利用して、農工商其他の凡ての生產事業を振興せしむる原動力となすものなれば、銀行は金融機關たると同時に、又た資本の効力をして增加せしむるものといふべし、此等は銀行か世間一般に對しての効用の主たるものなり、

以上說く所は、是れ銀行の効用の一斑を示せるに過ぎざるのみ、若し細密に涉りて、其の効用を列擧せば、げに濱の眞砂の數多きより多からん、故に其効用の說述は是れ位にて止めぬ。

序でに此に一言したきは、銀行と得意先との關係なり、之れを歐米諸國と我國とを比較せば、實に雲泥の差あるを見る、歐米諸國にては、銀行と取引するには、能く其確實なるものを選び、一旦之れと取引せば十分に信用して、永く其取引を繼續し、また銀行が得意先に對しても十分に其人物品行等を熟察し、一たび之れと取引を開始したる以上は、可及的得意先の便宜を計ることを勉むるが如き樣なり、然るに飜へつて我國の狀態を見れば、全く之れに反し、其の取引極めて確固ならずして、恰かも浮氣なる花客の娼妓に對するが如し、たと

へは、他銀行の利子高きを見れば、忽ち從來關係せる銀行を棄てゝ其の高き方に走り、甚だしきは銀行の信用如何をも顧みずして、唯利子の少しにても高き方へと驅け廻るの風あり、されば、銀行と得意先との間柄は、歐米諸國に在りては恰かも親族付合の如く、我國に在りては恰かも他人付合の如しと評するも不可なし、此の如くして何ぞ、二者の間に完全なる取引を爲し、以つて銀行を利用するの道を全うするを得ん、是れ我國に於いて、商業道德心未だ大いに發達せず、爲めに信用制度の充分に行れざるに由るならんも、吾人は社會經濟のために之れを慨くなり。

（次號には此編の續きにして、即ち銀行の沿革、銀行の種類、手形のこと、銀行の仕事、銀行と取引開始のこと等の諸項あり）

家屋の話（家政）

茗溪女史

家屋は即ち住居にして衣服と共に人生缺くべからざる所のものにして、寒暑風雨をさゝへ、外物の侵入を防ぎ、身體の健康を保護する等、すべて生活上の爲のみならず、茲に一家團欒の樂しみを取り、和合を計るに大なる關係を有せり、住居の宜しきは其快樂を增し、秩序を整へ、且つ品位を保つなり、一家の品位はやがて一國を整然たらしむるものなり、されば家屋築造の注意は決して輕忽に看過すべからず、同じ金額を費しても其撰定方法の宜しきを得ば實費よりも尙はるかに壯麗にして而かも衞生經濟便利上甚だ益するものなり。

●土地の撰定

土地は高燥の地を撰ぶべし濕地に住めば種々の病に感じ易く就中脚氣、リヨマチス等に罹ること多し、殊に傳染病流行の際は其感染最も速かなり、又冬は高燥の地より寒さ一層強くして夏は食物を腐敗し、衣服調度にカビを生じ、衞生上經濟上共に不利益少なからざれば土地低き處、坂下、山崖、沼地、谷間の如き場所はなるべく住居すべからず、止むを得ざる時は溝渠の流通を注意し且つ家の床を高くし床下をよく掃除して清潔にし一面に木炭末を敷き、以て濕氣の室内に上るを防

ぐべし。

▲家屋の向　は陽に向ひ、陰にそむきて建築すべし、南を以て第一とし、東南、西南之に次ぐ、すべて日光を受くる所は空氣の流通宜しくして、常に和溫の暖氣をとり、冬は暖かにして夏は涼しく、能く身體に適へり、（つれ〳〵草にも家の造りやうは夏を旨とすべし、冬は如何なる處にも住まる、暑き頃わろきすまひは堪へがたき事なり）とあり之に反して北向の家は健康に不適當なるのみならず、家具の保存其他にも大なる損失あるをまぬかれず。

▲飲料水　は一日も缺くべからざるものにして家屋を定むるに當りては第一に注意すべきは飲料水の其良否にあり若し水の惡しき時は身體に疾病を醸し食物の腐敗及び洗濯等に大なる不利益なり、又井に遠く水汲みに困難なれは隨て廚房の淸潔、衣服の洗濯等、兎角怠り勝ちに至るものなればよく注意すべきことなり。

▲空氣の新鮮　家屋の近傍には程〻に樹木あるをよしとす、淸淨なる空氣の生物に必要なることは、恰も魚の水中にあるが如く、人は常に鼻口より絕へず空氣を吸ひて之れを體內に送り、血液を淸淨にし、以て全身の營養を全くするを得るものなれば、空氣は寸時も缺くべからざるものなり、人は空氣を呼吸して其中の酸素を吸取して以て體內のはたらきをなし、而して此酸素と血液中の炭素と化合して炭酸となりたるものを吐出するなり、故に衆人の集まる場所にて往々頭痛、眩暈等發するは、即ち多量の炭酸を空氣中に混じて人體に必要なる酸素を減ずるが故なり。然るに此人の吐出する炭酸は草木には必要のものなり、すべて植物は炭酸を攝取して其の內の炭素を取り、養分となし、而して酸素を放散す、故を以て家の近傍に樹木を植ふるを必要なりとす、且つ四季草木の茂れるは人心を爽快ならしめ、眼を喜ばする等其他少なからざる利益あり、之れに反して空氣の不潔有害なるを吸取すれば、身體を害するとも亦少なからず、即ち人家稠密なれば炭酸氣多く、大厦高樓に接

近せる陋屋は空氣の流通惡しく、又製造所、浴場の如き多量の烟煤を飛散する處、又は塵埃多き道路等、空氣の不潔なる處など皆人躰に害ありと知るべし。

▲便利　凡そ家屋を定むるには人々により異なれど務め人は各其官省なり、會社なり、工場なりに餘り遠隔せざる所、商賈は人家稠密にして行人の往來繁き場所に卜するが如く、各自其職業によりて便利上撰ぶべきは勿論にして其他猶子女の教育上に付き重き責任を考へざるべからず、即ち能き學校の設ある土地に住み、通學に不便ならぬやう注意すべきなり、いかに教訓の厳かなる家庭にても、道の遠隔せる爲、雨の日、雪の朝、或は時刻の後れたる爲めなどに、車を用ゆる時は兒童は知らず〱の間に安逸に流れて、遂に懦弱の習慣を養ふが如きことあらば、子女にとりて此上なき不幸なり、又子女通學中は此處彼處と度〱居所を移し、其爲め屢〱學校を轉ぜしむるは宜しからず、學業の進歩を妨げ且つ兒童の心を浮薄ならしむるの恐れなしとせず、されば公務上其他已むを得ざる外はなるべく轉居を避けんことを務めざるべからず。又近隣の風俗野鄙にして、常に鄙歌三絃の絶へざる場所、又は貧民多き巷などは斷じて之を避くべし、實に人は周圍の情況によりて感化を受くる事少なからざるものなれば、よく〱注意すべきことなり、即ち學校附近の兒童は常に讀み書きの業を覺え。花柳の巷に接近せる女兒は歌謡ひ立舞ふ業を見習ふといふ其先入の主色となる實に戒むべく恐るべし、孟母は其子の教育の爲三度居を移せしと誠に注意すべき事なり。

▲交通の便否　住所は交通の不便ならざる所をよしとす、郊外の地は閑靜にして心身を養ふに宜しく衛生上得る處多ければ、已に世務を終へて餘世を長閑に送らんとする老人には適すべきも、交通不便なる時は人々との交際も從て疎く、自ら世上の事に遠ざかるものなり、故に少年の人にして事業を營み、子弟を敎へて世の文明と共に進歩すべき者なれば、住所はなるべく、四方の交通に便利にして、親戚友人とも

あまり隔離せずして、相互に往來して、其情を温め、市街にも遠からずして日用品の購求に都合よく又醫師の近き所をよしとす。

人の身體は何時如何なる發病にかゝるか、或は不測の負傷などなすとあり。斯る時醫に遠ければ遂に手後れとなり爲めに生命を失ふに至る、よく考ふべきなり。

尚主婦は各々其家の事情により、一家長の意に從ふは勿論なり、然らざれば快活なる家庭をつくる事能はざるなり、右は住居の撰び方に付一寸心得迄に述べたるなり。

▲家屋の構造　家屋の構造に付ては先づ一家の人數の多少によりて廣狹は心のまゝたるべしと雖も、其身分職業により、客室の多きを要し、或は玄關、店頭、厨房の廣きを要すべし、人數のわりより狹きは不便にして餘り廣きに過ぐるも萬事經濟の爲宜しからず、即ち間數多ければ疊、建具の破損も多く、其掃除にも多くの人手を要し、其他燈火の數を増す等又戸口多き時は盜難の虞も少なからざれば、よく其得失考ふべし。

▲建築の法　には樣々あり即ち、屋敷風、商家風、農家風西洋風等各異なれり。

▲建築の種類　は石造、煉瓦造、土藏、木造等にして各其特色を殊にし保存同じからず、費用も亦差異ありと知るべし。石造、煉瓦造は人家稠密にして火災多き土地には最も宜しく、されど二種共に建方に限りありて自由に窓口等設くること能はず、故に空氣の流通宜しからずして、光線の射入乏しきものとす、尚右の家屋は地震等の時は敗壞し易き虞あれば、其地盤より土臺等、最も堅牢なるを要す、されば其費用も又多しと知るべし。

土藏は即ち土藏の造り方を用ひたる家屋にして堅固なることは、粗造の煉瓦造よりも却て優れりといふ、且つよく火災を防ぐ故、商家に最も多し、されど堅牢を主とする故に柱多く、間取自由ならず、從て風通し惡しく、陰氣なり、然れども土地により此奥暗きを好

み、普通の家にても殊更に奥暗くなす處あるがごとし。

木造は我國一般用ゐる所にして氣候風俗に適し其建築法も衞生上、經濟上最も適當にして、建築の宜しきものに至りては百年の久しきを保つものなり、されば先づ木造の家を以て可とす。

▲家根の種類　も石盤、瓦片、木片、鐵板、草葺等の種類ありて其土地により各々差異あるものなり。

瓦葺は火を防ぐに宜しく、且つ保存上に利ありて普通の家には最も適當なり。

板葺には檜皮葺、木片葺等ありて檜皮葺は神社等に用ゐる其他高貴の人の住ひにも之れを用ゐることあり、最も品格宜しきものなり、木片葺は價の廉なる丈けに品格宜しからず、すべて板屋根は濕氣にわひて腐敗し易く且つ火災に堪へざれば保存も宜しからず、又鐵板葺は火を防ぎ風雨の害を受くること少く費用も瓦より廉なれば場所によりて便利上之れを用ゆるところあり。

草葺には茅、藁を用ゐこれ田舍に多し、夏は涼しくして冬は暖かなり、又よく風雨には堪ふれども、火を防ぐに惡しければ都會の地には殊に稀れなり、屋根はすべて勾配の急なるかた雨露を流して保存よし谷の多ければ損じ易しと知るべし。

▲建築に用ゐる木材　は檜、松、杉、柏、欅の類なり、就中松、杉は我國至る所生ぜざる地とてはなくして、實に日用、必需の料たり、此他の諸材は木質美なるもありて、且つ保存も宜しけれども價貴くして平常の用には供し難し、すべて木材は伐り時に伐りてよく乾枯したるものを擇ぶべし、即ち木は六月竹は八月頃伐るをよしとす、乾かざる木材を用ゐる時は後に至りて屈曲を生じ易きものなり。

▲地形　は建築上最も緊要の業にして先づ土地をよくならし土臺及び柱を建つる所に小石又は砂利を入れ、よくかたむるなり、地盤堅固なれば地震の時破損少なしと知るべし。

▲土臺　には御影石を最上とし、立山石の青きもの之

松竹梅（刺繡圖案）



武村耕靄女史新案

新年梅

（刺繡圖案）



武村耕靄女史圖案

れに次ぐ、木は欅、檜を第一とし、栗材もまた久しく保つと云ふ、すべて家のまわり風通しの悪しき所は殊に注意して堅牢なる木材を用ゆべし。

▲柱　は丸柱と角柱ありて角柱の方保ち宜しくすべて柱は太きをよしとす、其材料は檜、槻、杉、栂などにして、就中檜は最上なれど價甚だ貴し、床柱は皮むきの檜、或は赤杉、其他珍奇の材を用ゆるもよし、敷居と鴨居は柱と同じ木材を用ゆ、鴨居の上に欄間をあけて障子をたつれば家の内あかるく又暑時の開閉にも便なりと知るべし。

▲棟　梁、桁などの木材は目にたゝぬ所には節などあるも妨げなし、たゞ堅牢を旨とすべし、

▲椽　ぬきなど人目に見ゆる所は注意して良材を用ゆべし、

▲牀　はなるべく高くはるべし、牀高ければ洪水、霖雨の時も濕氣の昇り、汚水の浸すなどのこと少なく、身躰の健康にも家具の保存にも大に利あり、牀板は削らざるも宜しく、たゞ隙間なく造るべし、透間あれば冬寒きのみならず濕氣の爲め疊を損じ、衛生上にわるし、故に上等の建築には二重牀になすことあり。

▲窓　は下地窓、平窓、櫺子など、むそうまど、竹格子窓、丸窓、角櫺子、張櫺子、等の種類ありて、其製作もさまざまなり、窓の方向もなるべく光線の射入空氣の宜しきやうに注意すべし、其向き宜しからざる時は室内薄暗く、且つ濕氣の去り難きものなり、然れども戸口の數多き時は、家の堅牢にも宜しからず、又建具を多く要する故に、漫りに窓を造らずして、よく其位置方向に注意すべし、非常の事ある時などには大に便利を感ずることあり。

▲椽　は竪はり、横はり、矢の羽、きりめ椽、いづれも良材を選ぶべし、竹椽、ぬき椽、はた便宜をはかり隨所にはるべし、拭板じき、廊下の類も又見ぐるしからぬ材料を用ゆべし。

國文學講義

文學士 尾上柴舟

緒言

平安朝の文章、源氏物語を以て白眉となす。源語は、紫式部の著はすところ、結構の巧妙なるは、云ふを俟たず。妖艶華麗の筆、よく、其景を描き、婉曲緻密の文、巧みに、其情を傳へ、一讀人をして恍然自失せしむ。啻に平安一朝のみにあらず、我上下三千年の文學を通じて尤も傑出したるものといふべし。然れども、別に、これ、と時を同じくして、殆んど、遜色なきものあり。何ぞや。曰く淸少納言の枕草紙これなり。奇氣坌湧、悉く、人の意表に出て、筆鋒鋭利直ちに人の肺腑を指し、而して、光燄萬丈なるところ、却て、源語の上に出づるものあり。爰に取れる翁まろの一篇は、たゞ、その一節のみ。未だ、以て、其全豹を窺ひ知ること能はず。要は、本書を取りて熟讀玩味するにあり。

淸少納言は、梨壺の五人として、傳稱せらるゝ歌人淸原元輔の女。一條天皇の中宮藤原定子に仕ふ。學和漢に通じ、才識群に絶す。嘗て、雪ふりたる朝、中宮左右を顧みて、香爐峯の雪は、と宣ひしかば、少納言、直ちに起ちて、簾をかゝげたり。これ白居易の詩に「香爐峯雪撥簾看」の句あるによれるなり。後、落魄して、陋屋にあり。年少の殿上人、車を驅て、これが前を過ぎて冷笑す。少納言中より答へていふ、駿馬の骨を買ふもののあるを聞かずや、と笑ふもの答ふる能はずして去れりといふ。其才氣の横溢せる、概ねかくの如し。

枕草紙は、その隨筆なり。その仕へて宮中に在る時見聞するところに從ひ、其事實と所感とを記したるものなり。滿廷、皆脂粉の氣あり。有髯男子の、女子の舌端に翻弄せらるゝのところ、寫し出し

て、殊に、痛切。大權の武門に移る、其當に然るべきを見る。枕草紙の名は、蓋し後人の付するところ。而して、其來る處は、此書の終りに、內大臣伊周、中宮に料紙を奉らせし時、中宮、少納言に向ひて、これに何をか書かむ、上(一條天皇)は、史記といふ書をかゝせたまへり、と宣ふに、少納言「枕にし侍らむ、」と答へまつりしかば、「さらば與へむ、」とて、賜はりたり、よりて、この紙に、わが所感を書す、といふにあり。乃ち、枕にせん、といひしより、命ずるに、此名を以てしたるなり。草紙は、草案、草稿の意なり。

翁まろ（上）

上にさぶらう御猫は、冠たまはりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、かしづかせたまふが、はしに出てたるを、

上、とは、天皇の御上を指して云ふなり。此時の天皇は、一條天皇なり。天皇は、仁慈にして、深く、民を愍ませたまひ、極寒の夜、御衣を脫して、下民の饑寒を推しはからせたまひしなど、今も傳稱せらるゝところなり。○上にさふらふ、は、天皇の御あたりに侍るをいふ。○冠、たまはる、は、五位に叙せらるゝをいふ。天皇の寵愛させたまふあまりに、かく、位を賜はせしなり。○命婦のおもと、(あるは、命婦のおと、)は、此叙爵したる猫の名なり。五位になりたる女房を命婦といふ。おもと、は、人を親みて呼ぶ詞、大方は、女にいふ。おとゝ、とあるは、蓋し誤寫ならむか。○をかし、は趣味あるなり。可愛らしきなり。○かしづかせ、は大切にせさせたまふなり○はし、は端なり、端の方なり。大意、宮中に侍る御猫は、天皇より五位の位をたまはりて、其名を命婦のおもとゝ呼ばれて、其樣態、いと可愛らしければ、天皇は寵愛せさせたまひけり。さて、其猫、ある時、端近う出てたりければ、なり。

乳母の馬の命婦、「あなまさなや。入りたま

へ」と呼ぶに、きかて、日のさしあたりたるに、うち眠りて居たるを、威すとて「翁まろいづく、命婦のおもと食へ」と、いふに、誠か、とて、しれもの、走りかゝりたれば、おびえ迷ひて、御簾の中に入りぬ。

乳母は、猫の乳母なり。猫の養育を命ぜられたる人なり。馬の命婦は、その乳母の名なり。命婦は、前にいへり。○あな、まさなや、は、あな、は感動の詞、あゝ、といふにおなじ。まさなや、は、まさなき事や、なり。まさな、は、正無なり、悪きこと、善からぬことを云ふ。や、は感動の詞。○威すとて、は猫を威ちむ、とてなり。○おきなまろ、は犬の名なり。○しれもの、は癡れたるものなり。犬を貶しめて、かくいふなり。おびえ、は、怖れ、驚くをいふ。おびえまどふ、は、怖れて、狼狽するなり。

大意、猫の端近う出でたるを見て、猫の乳母なる馬命婦といふ女房、猫を制して、「あゝ不行儀なることかな。此方に入りたまへ、かく、端近う出づべきものかは」といひて、呼びたれど、猫は、更に聞き入れずして、日の暖かに照りわたりたるに、背を曝して、うち眠りて居たりければ、馬の命婦は、其を威さむとて、「翁丸は、いづくにある、早く來りて、此命婦のおもとを食ひ殺せ」とて、翁丸といふ犬を呼びたるに、癡れたる犬は、まことか、と思ひて、猫の方に走りかゝりければ、猫は驚き狼狽て、御簾の中に逃げ入りたり。○以上、第一節なり。何といふ事はなけれど、猫の横着にして犬の愚直なるさまなど、をかしく寫せりといふべし。

朝餉の間に、うへは、おはします。御覽じて、いみじう、驚かせたまふ。猫は、御懷に入れさせたまひて、をのこども召せば、藏人忠隆まゐりたるに、「此翁丸打ちてうじて、いぬ島につかはせ、只今」と、おほせらるれば、集りて、驪りさわぐ。馬の命婦も、さい

なみて、「乳母かへてむ、いとうしろべたし」と、仰せらるれば、畏まりて、御前にも出ず。

朝餉の間、は、清涼殿の南にあり。朝餉は、朝の御膳なり。此御膳を聞食ところを、やがて、朝餉の間といふ。○御覧じて、は、猫の狼狽て、迷ひて、走り入りたるさまを、天皇の見そなはしてなり。○そのこども、は、男子どもなり。此處にては、官人等の意なり。○藏人忠隆、藏人は、藏人所に收められたる物を初めて、殿上の事、何くれとなく、預り、監督する官をいふ。忠隆は、源忠隆なり。當時藏人たりしなり。○打ちてうじて、は、犬を撲ち懲すなり。てう、と音讀せるは、當時の慣習なり。○いぬ島、は、備前國にあり。いぬ島に遣はせは、犬を、その島に流し遣れ、と天皇の宣ふなり。されど、此處は犬の事なれば、其聯想より、犬島へ、とは仰せられしにて、必ず、京都より、遙々、備前まで流し遣せ、との御心にはあらざるべし。○驅り騒ぐは、人々、犬を追ひ廻して、打ち騒ぐなり。○さいなみては、叱責するなり。此處は馬命婦が、叱らるゝなり、責めらるゝなり。○うしろべたし、は、心もとなきをいふ。後の事の、不安心なる意なり。うしろめたし、におなじ。共に後目痛より來る。○畏まりて、は、恐縮して、なり。

時恰も、天皇は、朝餉の間におはせしが、猫の、あはて騒ぎて、走り入りたるを、御覧じて、甚く、驚かせたまひけり。さて、猫をば、御懐中に入れさせたまひて、殿上の官人、誰かある、とて、召し呼ばせたまへば、藏人源忠隆、御前にまゐりたり。天皇「猫を驚かしたる此翁丸をば、打ち懲して、犬島に流し遣はせ。只今直ぐに、取りはからへ」と、仰せらるれば、官人ども、打ち集りて、犬を追ひ廻はして、走り騒ぎたり。馬の命婦も、その連坐にて、天皇の御叱りを蒙ぶりて、天皇、「今よりは、猫の乳母をば更へむ。馬命婦は、不束なれば、後の事ども、いと氣遣はし」と、宣へば、馬命婦は、恐縮して、御前にもえいてす、籠り居たり。○これまた、一節なり。猫の寵、犬の罰、女子的の宮廷、目に

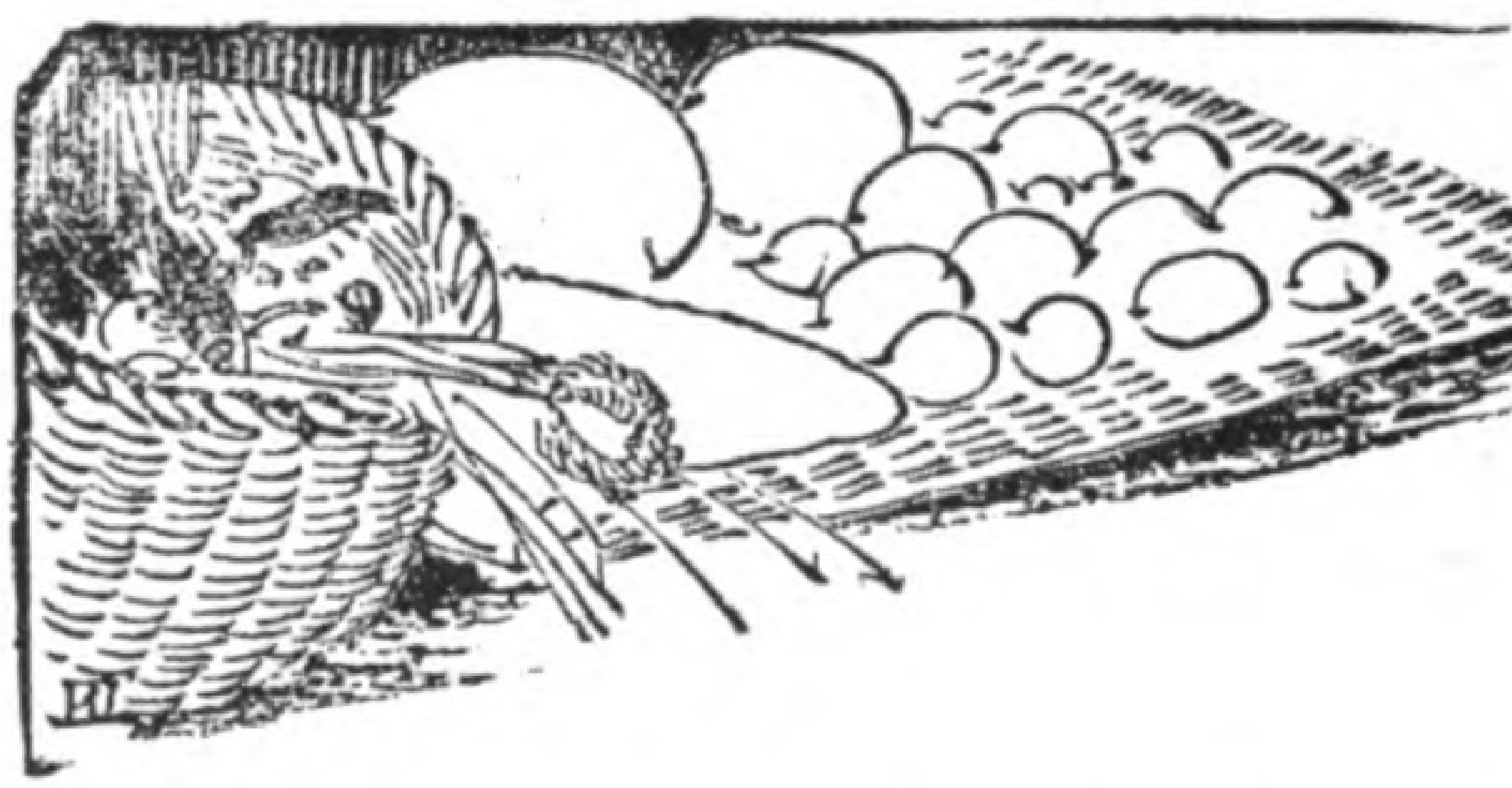
観るが如し。大權の武門に移る故なきにあらず。

犬ばかりは、かり出て、瀧口などして、追ひつかはしつ。「あはれ、いみじく、動き歩きつるものを。三月三日に、頭の辨、柳のかつらをせさせ、桃の花、挿頭にさゝせ、櫻、腰にさゝせなどして、歩かせたまひしをり、かゝる目見むとは、思ひかけむや」と、あはれがる。「おものゝ折は、必ず、向ひ候らふに、さう〴〵しくこそあれ」など、いひて、三四日になりぬ。

瀧口、は、藏人所の下司、藏人の下に侍るもの。御溝水の落ち瀧る口に陣すれば、瀧口とはいふなり。武藝に堪るもの之に補す、といふ。○追ひ遣はしつ、は、遂に、犬を宮の外に、追ひ遣りたるなり。○頭辨、頭は、藏人頭、辨は辨官なり。この頭辨は、藏人頭、權左中辨藤原行成を指す。行成は、有名の能書家にて、世尊寺流の祖となりし人なり。○柳のかつら、柳の糸にて、作りたる、犬の頭の飾りなり。

○挿頭は、髮さしにて、今のかんざしなり。

○おものゝ折り、は、天皇の御膳に向はせたまふ時をいふ。おものは、御召しあがりものなり。○必ず、向ひ候ふば、犬が、天皇の御前に、向ひ侍るなり。○さう〴〵しくは、さび〴〵しく、なり。寂寥たるなり、騒々しきにはあらず。



かくて、犬のみは、驅り出して、瀧口などをして、宮の外に、追ひやらしめけり。是を見て、女房ども、「あな、あはれなる事かな。彼の翁丸は姿かたち、類無く、立派に、歩き廻りたりしものを、今は、さるべき罪もなきに、逐ひ出されたり。三月三日の節句の日に、頭辨行成卿、この犬に、柳にてつくれる鬘をつけさせ、桃の花を、頭にさゝせ、櫻の枝を腰にさゝせなど

して、歩ませたまひしが、この時、この犬は、後に、かゝる憂き目に遇はむとは、ゆめ思ひかけざりしならむ、」など、云ひ交はして、憐れがりけり。「げに、天皇の御膳に向はせたまふ時は、この犬必ず、御前に向ひ侍へりしに、今は、其影だにもなし、いとく、さびしく、物足らぬ事かな、」など、云ひてある中、犬の逐はれてより、三四日過ぎにけり。○これ亦一節。犬に、同情を寄せたる女子の口吻、いとおもしろし。初めより、此處まで、一段なり。翁丸、所罰の經路を寫して、甚だ趣味あり。

晝つかた、犬のいみじく啼く聲のすれば、「なにその犬の、かく久しくなくにかあらむ、」ときくに、よろづの犬ども、走り騷ぎ、とふらひに行き、みかはやうどなるもの、走り來て、「あな、いみじ、犬を藏人二人してうち給ひ、死ぬべし。流させたまひけるが、かへり參りたる、とて、てうじ給ふ、」といふ。

なにその犬、なにそ、は、何其なり。何の犬、いかなる犬と、いふにおなじ。○とぶらひ、は、見舞をなすをいふ。こゝにては、たゞ、見に行く位の意なり。○みかはやうど、は、御廁人にて、卑しきもの禁中の御廁の淨めなどする女をいふ。○あないみじ、は、あゝ、甚しき事かな、と驚きたるなり。

三四日過ぎたる日の晝ごろ、俄かに、犬の甚しく啼く聲聞ゆれば、記者淸少納言は、「いかなる犬の、いかなれば、斯樣に、長く、久しくなくならむ、」と思ひて、聞き居たるに、御廁人といふもの、走り來て、「あゝ甚しき事かな。藏人二人かゝりにて、犬を打ちたまふなり。犬は死に果つべし。先頃、流し遣りたまひけるに、また、宮中に還り參りたれば、とて、打ち懲したまふなり。あはれなる事かな、」といふ。

此文の始めの晝つかたは、前文の終りの三四日になりぬ、につゞけて、三四日になりぬる晝つかた、と、あるべし、といふ說あり。これ或は、當時の文體よりみれば、正しからむと、今更に、改めむと私事なれば、原

文の儘になし置けり。

心うのことや。おきなまろなり忠隆實房なむうつ、といへば、制しにやるほどに、からうじて、なきやみぬ。

心うのことゝは、心憂きことゝなり。心苦しきことゝなり。○忠隆實房、忠隆は前に云へり。實房も、忠隆とおなじく藏人なり。前に、藏人二人して、といふは、この兩人なり。○制し、は、とむるなり、罷めしむるなり。○辛じて、は、やう〳〵にしてなり。

淸少納言、御厠人の詞を聞きて、「心くるしきことかな、その犬は翁丸なり。」と思ひて、猶聞くに、二人の藏人は、忠隆實房にて、この二人にて、犬を打つなりといへば、人を使して止めにやるほどに、犬はやう〳〵になき止みたり。○これまた一節なり。犬の恐惶、女子の慈愛、輕々寫し來て、眞に迫れりといふべし。これまた一節。

死にければ、門のほかにひきすてつ。といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげにはれ、あさましげなる犬の、わびしげなるが、わなゝきありけば、「あはれ、まろか、かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、「翁丸」とよべど、耳にも聞き入れず。

門の外に、門は朔平門なり門の外は、やがて、北の陣の外なり。一本には、陣の外、とありといふ。これ或は正しからむか。○ひきすてつ、は、犬の屍體を引き出して棄てたるなり。○いみじげにはれ、あさましげなる、は　顔體などの打たれたるが爲め、甚しく腫れて、姿もあさましくなりたるなり。あさまし、は、卑しく、きたなきさまなり。○わなゝきありけば、は、ふるひ〳〵歩むなり。○まろか、は、翁まろか、と疑ふなり。まろは翁まろの畧。○耳にも聞き入れず、は、翁まろが、淸少納言の詞を聞き入れざるなり。

さて「翁まろは、あまりに打たれて、遂に、死に果てければ其屍體をば、門の外に引き出して棄てけり、」と、

人の云へば、淸少納言等の女房共憐れがりて居たる夕暮に、顏かたち、甚しく、腫れわたりて、姿きたなく、賤しげなる犬の、悲しげなる樣したるが、ふるひ〳〵御庭の中を歩みをれば、女房等、「あゝ彼の犬は先頃殺されたる翁丸にてはなきか、翁丸の外、このやうなる犬の此頃見えたることなし、」などいへば、聲をかけて、「翁まろ、」と呼べど、さらに、耳にも入れて、寄りても來ず。

漢文評釋

幼烈女阿富傳（森田節齋）

文學士　久保天隨

●●●●●（作者小傳）森田益、字を謙藏といつて、節齋は其號である。大和五條の生れで、若い時分に賴山陽に就いて學び、文を爲ることに於て最も勝れて居た。節齋は平生史記を愛讀して、その神髓を得たと云はれた位であるから、こゝに出したやうな傳記は、一番面白く出來て居て、その簡淨の處は、とても後人の眞似さへ六つかしいと思はれる程である。節齋は、かゝる文才のあつたに拘はらず、一生頗る不遇で、明治元年、年五十八で歿した。その遺著としては、節齋文略といふ本があつて、七八年前に出版された樣に覺えて居る。節齋の令室は無弦女史といつて、才學を以て世の聞こえ、其後長く生きて居たとのことである。

浪華之市。戸不下十萬。而其間幼蒙旌賞者。向有義童。頃有烈幼女。義童以身殉主。距今不遠。而人不記其姓名者無由傳也。烈幼女之事。及今不記。余恐數十年後。人或逸其姓名。故爲之傳。

●●（字解）浪華は大阪の古名、○戸は戸數○蒙旌賞とは、善行上に聞こえ、名を天下に揭げ、且つ賞與を賜はりしこと○向は曩又は前と同じて、「さきに」と訓すれば宜しい○頃は近頃○殉主、主の爲に己が身を棄て、其跡を追ひしこと○距今不遠、そんなに古るい事では

無く、此文を作る前、僅かの年數であるとの意〇不記の記は記臆の義〇無由傳也、傳記を書こうと思つても、致し方がないといふ意〇逸其姓名、名前が分らなくなること。

●●（文義）大阪の市は、賑かであるが、戸數と云つては、ざつと十萬ばかりて、さして大都といふことも出來ないが、不思議にも、この町の中で、年の幼きに似合す、善行を爲し、其名上に聞こえて、賞譽を賜はりしものが、二三ある。先頃には義童があつたし、頃は又烈幼女があつた。その義童といふのは、何でも命を棄てゝ主に從ひ、其跡を追つて死んだと云ふことてあつて、さまで古るい事ては無いが、不幸にも今は其名を何と云つたか、それさへ知つて居る者が無いから、傳記を書いて見ようと思つても、材料が無い。かくの如き有樣であるから、今度の烈幼女も、今の中に傳記を書いて置かないと、これも亦た數十年の後には人に忘れられて、名さへ傳はらない樣に成るだろう。だから、今こゝに筆を執つて、此文を書くに立ち至つた次第である。

●●（評論）この一段は、文傳の主意を述べたもので、傳記としては變體である。義童を以て陪客とし、烈幼女に相對せしめたのは、天然の湊泊が面白く出來て居るので、頗る味がある。

女名富。家在內久寶寺街。僦人屋。以鬻紙爲業。父早歿。遺孤四人。女其第二也。一夜賊數人突入。擧家皆逃。獨女與長兄仁三郎及弟吉藏在。賊挺刀劫兄。問財所在。時女甫十歳。以身蔽弟。出所蓄星金。乞赦兄。賊怒刀背連擊女。女委身刀下。曰殺兒赦兄。無兒如家何。辭氣悽惋。賊相顧感嘆引去。

●●（字解）僦人屋、他人の家屋を借りて住むこと〇鬻紙は、紙屋商賣〇遺歿、忘れがたみ〇突入は亂入、勢の凄まじきを形容したものである〇擧家は家內中〇挺刀は、刀を抜き離すこと〇劫兄、兄に向て脅迫するこ

と○財は金圓○甫ははじめてと訓す、やつとと云ふ程の義○蔽弟、弟の前に立ち塞がりて擁護すること○星金は、一朱銀、一分銀など細かき貨幣をいふ○刀背。刀の脊、刄のなき方○委身、身をまかし、惡るびれざる義○兒は自分を稱する言葉、私といふと同じ○辭氣、言葉ぶり○悽惋、悲しげにして人を動かすこと。

(文義)その烈幼女の名は富といつて、家は大阪内久寶寺町て、紙屋渡世をして居るとのことであつた。元來父が早く死に、跡に殘つた忘れがたみの子供が四人あつて、富女は其二番口であるそうな。扨て愈よ本題に取りかゝるが、その事實は下の樣な事であつたのだ。ある。夜、强盜が五六人、家の中へ荒ばれ込んで來たものだから、家内中びつくりして逃げ出して終まつて、殘つたのは子供ばかり、富女と兄の仁三郎と弟の吉藏とであつた。そこで、盜賊どもは。刀を拔き離し、兄を引き捕らへ、例の脅し文句をならべ



て、金の在家を敎へろといつた。この時、富女はやつと十ばかりであつたが、弟に怪我でもさしては大變と、身を以て弟をかばひ、自分が貯へて持つて居た小粒の金の在り丈を出して、どうぞ此を持つて還つて、兄だけは赦して下さいと賴んだ。すると盜賊どもは何を小癪な娘といふので、刀の脊て續け樣に富女を打ち撲つた。富女は身を刀の下に委かした儘、逃げもせず、殺すなら私を殺して。兄だけは何卒ぞ赦して下さい、若し兄が居なくなると、この家は立つて行きませむからと賴み入つた。その言葉つき、如何にも悲しげであつた者だから、さしもの盜賊どもも、思はず感に堪へかね、驚いた餘、互に顏を見合はせ、何も取らずに引き拂つて終まつた。

(評論)この一段が烈幼女の事蹟で、全文の精神とも云ふべきである。これを能く〱吟味して見ると、一つも無益な文字がなく、誠に巧者に出來て居る。その中には女甫十歳の一句を挿んだところなど、

怱忙の中に間地を開いたものであつて、文章の波瀾といふのは、こう云ふ處にある。

後賊被レ捕自拾。市尹召二女及兄一親問二其狀一。以聞二大府一。大府賜二銀十錠一旌レ之。實嘉永元年七月十九日也。距二遇レ賊之日一百有餘日。

●●（字解）自拾とは前に犯した罪を殘らず白狀すること○市尹は大阪町奉行○大府は幕府○旌は賞誉として與ふること。

●●（文義）その後、かの盗賊どもは捕へられて、やがて今まで為た事を殘らず白狀した者だから、烈幼女の事も初めて分かる樣になり、町奉行は取り敢へず宮女と其兄とを召し寄せ、當時の情狀を問ひ正された上、愈よそれに違いないと云ふところから、事の由を以て幕府に申し上げ、幕府では銀十錠を御褒美として下された。その事のあつたのは、嘉永元年七月十九日であつて、宮女の家に盗賊の押し入つた日から僅に百日あまりしか經たなかつた。

●●（評論）この一段は、事實が自然と片付く樣に出來て居る。距遇賊之日の一句は、本當の事を其儘書いたので、別に不思儀も無いが、何ともなく趣がある。それは外でも無い、つね〴〵は天道是か非かと嘆げく場合の多いのに拘はらず、この件ばかりは、善惡の應報、いかにも覿面に來て、烈幼女の烈たるところ、愈よ明かに見られるといふ事である。

森田子曰。烈幼女之事。傳聞多二異同一。余使二人親聽一二其家一。記レ之如レ此。至二義童一。則余將レ搜二索他日傳一レ焉。

●●（字解）傳聞多異同、人の口に語り傳ふるところ、孰れも岐々であるからと云ふ意○聽其家、宮女の家に就いて取調べたと云ふ義○搜索、尋ねさがす。

●●（文義）かばかり評判の烈幼女の事であるが、傳ふるところ聊か一定しない節があるから、自分は第一に正確なところ、宮女の家に人を遣うて取調べた結果、この文を作つた次第である。そこで義童の傳はらな

いのは、如何にも口惜しい事であるから、いづれ其内十分に尋ねさがした後、其傳を爲くらう。

（評論）この一段は、文章の餘波で、いはゞ論贊である。だが、議論めいた一條は、文の起首に載せてあるから、こゝでは極めて簡潔に書き流した。そこで、義童の事を又ぞろ言ひ出したのは、前と照應させる積であつて、これだけは取り除くことは出來ない。大凡文を爲くる者は、この類の用意を苟くもしない樣にして欲しい。

歷代和歌評釋（一）

文學士　鹽井雨江

古今和歌集よりはじめて、二十一代の勅撰集の中より、我が最も優れたりとおぼゆるを選びて、順次にこれを評釋して、諸孃に紹介せんとす。先づ初めには古今集のを選ぶ。古今集は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之が、紀友則凡河内躬恒、壬生忠岑等と共に、勅をうけて、撰びたる歌集にて、所謂勅撰和歌集のはじめのものにして、我が敷島の道には、必ず忘るべからざる集なり。

君が爲め、春の野に出て若菜つむ
　我が衣手に、雪はふりつゝ。

○此の歌は春の卷にあり。光孝天皇が未だ皇太子にておはしける頃に、ある人に若菜を給ふとて、それに添へて、おくりたまひし御歌なり。

○歌の意は、貴方樣へ進上しようと思ひまして、春の野に出でて、若菜を摘みます我が袖には、雪が降りかゝり降りかゝるといふ事にて、ある人に若菜に贈らんとて、雪ふりかゝる野邊にいでて若菜をつむ折りの寒く辛きさまを言はれたるなり。若菜を贈りたまふに添へて、其の若菜をつみたる時の苦みをのべて、其の人を思ふ心の深さをつげて、さて賞美したまひてよと言ひやりたまへるなり。

○君とは、若菜を贈りやりたまへるその人をさせるなり。衣手とは袖の事なり。

○雪中若菜を摘みたまへる　折りの苦辛をのみ言ひて、我が心の深きを知り賞美したまへといふ意を、言外にこめたまへるも、面白し。且つ、苦辛をいひてやりたまるところ、今の人の粗末なるものなれども飾りつくろひて言ふとは異りて昔の虚飾なき着實の人情見えて、いとおもしろし。情も誠にこもりてあはれにきこえたり。

ふる里となりにし奈良の都にも、
　色はかはらず花は咲きけり。

○これも春の巻にあり。これは平城天皇の御歌なり。
○ふる里、舊くなりたる里にて、もと都なりしを、今はあらずなりたる故に、かく言へるなり。○奈良の都。大和の奈良にて、此處は、元正天皇より光仁天皇まで七代の帝都たりし地なり。
○歌の意は、舊都と成りてしまひたる奈良の京にも、花は都でありし時のやうに、色は變はらず咲いたワイといふ事なり。桓武天皇が山城の平安城に遷都したまひし故に、奈良は、舊都となり、もと帝都たりし時とは、もの丶有様、皆變はりはてたり。さらに、春の花のみ變はらず、昔のやうに咲きたるを見て感じてのたまへるなり。
○一首の詞も調も、すなほにして、限りなきの感情あはれにひゞきたり。心をきざまず、詞をたくまず、よく自然にして、自から感深く、詩趣多きは、古歌の長所なり。よく〱味ひ見よ。

花の色は、うつりにけりな、徒らに
　我が身世にふるながめせし間に。

○これも、春の巻にあり。小野の小町の詠ぜしなり。
○此の歌は、表面の意と裏面の意とあり。表面は落花をなげき、裏面は我が花の姿の衰へたるをなげく述懐なり、表面の落花は、一首のよそへにて、裏面の述懐が一首の實に趣意なり、詞も其の二面の意をきかせたれば、そのつもりにて見るべし。
○花の色。表は梢の花の色にて、裏の趣意は、我が紅顏の色なり。○うつりにけりな。色のさめ衰へたる事ワイなと嘆息したる詞にて、表は梢の花の色の

衰へ散りたるをいひ、裏の趣意は、我が紅顔の衰へさめたるをいへるなり。○なは感動の詞なり。○我が身世に。此の詞は、裏面の述懐の趣意をのべたる方には、大に意味のある詞なれど、表面の落花をなげく意味の方には、唯だふるといふ詞をいひ出づる序詞として見るべきなり。○世にふる。表は雨の降る意にて、裏は我が世をすごす意なり。○ながめ。表は長雨（毎日〳〵雨のふりつゞきたる）にて、裏の趣意は、獨りものをつく〴〵と思ひわづひ歎きて居る意なり。古今集の戀歌に「つれ〴〵のながめにまさる涙川、袖のみひちて、あふよしもなし」後撰集春歌の部に「春立ちて我が身ふるうるながめには、人の心の花も散りけり」などのながめも、これと同じく、此のつく〴〵とものを思ひなげきて居る意のながめを長雨にかけたるなり。

○一首の意は、表は、雨の永く降りつゞきたる間に、何時しか木ずゑの花の色は衰へ散つてしまつたワイ。殘念なるよといふ事にて、裏の實意は、我が身が世をすごすとて、いろ〳〵とものを思ひわづらひ、つく〴〵と歎きくらす間に、何時しか我が美しかりし花の姿も衰へはてゝしまつたワイナアーと述懐したるなり。雨の降りつゞく間に、徒らに花の散りはてたるといふによそへて、我が身が空しく世をすごすとて、いろ〳〵思ひも歎きもして居る間に、紅顔容姿の衰へはてたるをなげく意をうたひたるなり。

○花と紅顔、落花と衰貌、降ると經る、長雨と悵望、其の詞のかけ合はせの、すなほに面白く、調もやさしくあはれに、其の情も、おとなしき婦人の心情げにとおぼえられ、誠に輕薄なる人情の世の中に、薄命の佳人が老後の述懐、さこそと思ひやられたる名吟にこそ。女流にして六歌仙に數へられたる、此の一首にても首肯せらる。彼の淸女が老後、駿馬の骨を買はずやあると意張りたるは、冷やかなる人世を罵倒しつくして、其の意氣の壯なる、誠に愉快なれども、此の小町が老後の此のあはれなる詞は、なか〳〵に、婦人の心として可憐なりといふべし。

昨日こそ、さなへとりしか。いつの間に、
稲葉そよぎて、秋風の吹く。

これは、秋の巻にあり。讀人は知らずの歌なり。

○さなへ。稲の苗なり。○いつの間に。知らぬ間に早く時のすぎたる意なり。○稲葉そよぎて。稲の葉が、そよ〳〵と風に動くけしきなり。○秋風の吹く。秋の吹く事よと、末に感動の詞をこめて見るべし。

○一首の意は、昨日、苗をとりて、田植ゑをしたと思ふに、いつの間にか、マアー、稲ものびて、今日は、稲の葉がそよ〳〵となびきて、秋風が吹くワイといふ事にて、苗を植ゑたるは、なほ此の頃の事であつたと思はるゝに、既に秋風の吹きて、稲葉のそよ〳〵となびくを見て、時節の早く移りかはり、月日の早くすぐるを感じてよめるなり。

○別にめづらしき意匠にはあらねども、よく自然に、よく切に、折りからの感情、うたひ得たりといふべし。

山里は、秋こそ殊にわびしけれ、
鹿の鳴く音に、めをさましつゝ。

○これも秋の巻にあり。壬生忠岑の詠ぜしなり。

○殊に。殊更に格別にといふ意なり。○わびしけれ。辛く悲しく難義であるワイといふ事なり。けり｜は感動詞なり。○めをさましつゝ。目のさめつさめつしてといふ事にて、幾度か眠りさむることなり。

○山里の住居は、いつも辛く悲しく難義であるけれども、秋は殊更に辛く悲しく難義である。悲哀なる鹿の聲に、幾度か目のさめつ。さむる度毎に、いよ〳〵身にしみて悲しく、いろ〳〵の事も悲しく思ひいでられなどして、秋は、一番辛く難義であるといふ事なり。鹿の鳴く聲のいとど悲哀にして、いとど身にしみ、それが爲めに、山里の住居は、秋が最もわびしきよしをいへるなり。畢竟は鹿の鳴くねの悲哀なるをいへるなり。秋の山里、鹿の鳴くねの悲しく身にしむよしは、此の古今集の同所にも「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき」。西行法師の吟

にも「山おろしに鹿のねたぐふ夕ぐれを、もの悲しとはいふにやあらむ」。續古今集にも「山里の秋のねざめぞあはれなるそことも知らぬ鹿の鳴くねに」などあり。萬葉集にも

山近く家やをるべき。さをしかの
音をきゝつゝ、いねがてにする。

といふあり。此の歌も、悲哀なる鹿の聲の身にしみて、幾度かねざめせられつ、いろ〳〵悲しくもの思はれて、安眠の出來ぬ意なり。されど、この忠岑のに比ぶれは、其の詩韻劣れり。忠岑が「山里は秋こそ殊にわびしけれといひたるは、「山近く家や居るべき」と言ひたるよりは、趣きあり。且つ、忠岑が「めをさましつゝ」といひたるは、「いねがてにする」と露骨にことわりたるよりは、大に詩韻深し。よく〳〵味へ見よ。

萩が花散るらむ小野の露霜に
ぬれてを行かむさ夜は更くとも。

○これも、秋の卷にあり。讀人は知らずの歌なり。

○散るらん。萩の花の咲き亂れたるさまをいへるなり。

○露霜單に露といふてもよき所なり。寒き頃のけしきをこめて、露を露霜といひたるなり。○ぬれてをゆかむ。濡れて行かむといふに同じ。をは單に意を強むる爲めに用ひたる。感動の詞なり。○さ夜、夜といふに同じ。さは、語調を整へん爲めにつけたる詞にて意なし。

○歌の意は、よしや、夜は更けたりとも、厭はぬ。萩の花の咲き亂れたる野べの露は深く、寒くとも、厭はぬ。その野べの露をふみわけて、是非に行かんといふ事にて、これは戀歌にて、夜は更け、野邊の露は深くとも、その露にぬれてでも是非に、我が思ふ人の所に行かむといふ戀情の歌なり。

○此の歌畢竟、夜は更けたりとも、深き露にぬれんとも、是非に行かむといふ意なるを、萩の花のちるらん小野といふけしきを言ひ添へたる所、殊更に何んとなうあはれなる風情をそへて、大に面白し。一首、深く切なる心情見えて、誠に可憐なる歌といふべし。

（つゞく）



春潮

川上眉山

(一)

牛込の、矢來へ入つて、只有る屋敷町の中程、左右を石垣に疊上げて、門から中へ坂になつて右に折れて、枝を重ねた赤松の蔭から、破風作りの玄關先が見える一構えの邸がある。路に接して百坪ばかりの庭を取つて、座敷に續いて八疊の書齋、寐間、茶の間、化粧部屋、別に離屋の小座敷を合せて八間、東へ廻つて、湯殿、車夫部屋、井戸、物置といふ可成りな住居。

南を受けて、一面に日の差込んだ椽先に、金茶の紋綸子の座蒲團が、五枚ばかり押連ねて干してある。閉切つた障子の上に、花には未だ早い梅の片枝が、恰も光琳模様のやうに面白い影を見せて居る。枯木の梢に、一羽二羽、稍暫く雀が音を立てゝ居たが、何か見付けたやうに上のが不意に立つと、下のも後を追うて隣邸の植込の方へ飛んで行つた。

其時茶の間の障子を開いて、何心なく出て來たやうな、二十二三の、丸髷の婦人、常着らしい節絲の小袖に、中古の、黒縮緬の羽織すらりとした見よげな姿で、椽に立つて庭を眺めて居たが、軈て下立つて、庭下駄に、飛石傳。

春は名ばかりの、未だ冬構えの此頃ではあるが、朝から風もない日和で、急に時候の變つたやうに、一枚脱いでも可いほどの暖かさに、そこはかとなく、四邊のさまに目を移して、右手に織部形の燈籠の、上を振冠つて未だ骨ばかりの、百日紅が枝を差翳して居る下を拔けて、芝生に處々小松をあしらいた脇の姫垣の前へ立つと、家の前の通りは直ぐ目の下に、道行く人のさま〲の姿は、見るともなしの眼に入る。

途端に、

「お前、本當に其氣なのかえ。」

といふ聲が不意に聞えたので、只見ると下の石垣の傍に、四十恰好の、肥つた、血色のいゝ内儀と、未だ年若の、小作りの女房風のと、二人立話をして居るのであつた。

「あれ叔母さん、誰が這麼事を冗談に言ふものかね。此間も那麼に言つたのに未だ本當にしておくれてないんだね。」

と若い方のは恨みがましい。

「それぢや何うでも出る氣なんだね。そりやアお前の事だから、よく〳〵厭氣になつたんでなければ、此間も那麼事をまさかに言ふまいとは思つたけれど、何しろ困つたんだねえ。だがね、兎角に若い中には、何彼と思違ひのあるもんだからね、ま、惡い事は言はないから、最う一度とッくりと後先を考へて見ては何うだね。」

言ふも聞かず抑返すやうに、

「最う此上の考へやうはありやアしない。私だつて外聞の惡い出戻りなんかして、好んで肩身を狹くしたいとは思ひもしないし、叔父さんにも心配を掛けたかアなし、家へ歸つたつてそりやア、私の立場が甚麼だかッて事も知つてるけれど、私ア最う那樣事に搆つちやア居られなくなつちやつたんだもの。」

「まア此處で込入つた談話も出來ないが、まア早い處が、末の見留めが付かないからといふのだね。」

「然うさ。今の中に覺悟をしなかつた日にやア、此先甚麼目に逢ふか知れやしない。叔母さん、彼人は本當に、私を達磨茶屋へ賣りかねやしないよ。」

「仕方がないねえ。然う脊中合せになつて了つちやア。あれ程仲のいゝ夫婦だつたのにねえ。」

と流石に嘆息するやうに、言葉を途切らしたが、

「然しお前、那樣事にして好い心持はしなからう。」

「でも那樣事を言つて居ちや此方の身が立たないもの。」

「けれども情愛といふものは然うしたもんぢやないがね。」

「おほゝゝ、叔母さんは暢氣だね。」

「え、」
「矢張脊に腹は替へられないわね。」
年上のは呑込めぬ顔、稍氣色ばむで、何をか言はうとしたが、不意に氣をかへて、談話を切上げるやうに、
「それぢや兎も角、晩にでも隙を見てお出、よく又お前の了簡を聞いて見た上の事にしやう。」
「ぢやア晩に行くからね、濟みませんが叔父さんにもね、」
「あゝよく話して置かう。」
「何うぞね。」
「承知したよ。そんなら可いかい晩ね。」
「はア、其處等のものを了つたら直に行きますよ。」
別れて西東、家路を指して歸つて行く。上の姫墻の傍に、未だ半身を見せたまゝで、去りもやらず談話を聞きさして居た婦人は、其儘ぢッと後影を見送つて、物思はしげな姿に佇立んで居た。
ゆくりなく來合はせ たばかり 談話も片端を聞いたゝけで、深くは樣子も知れぬけれど、婦人は今叔母さんと言はれた方の言葉を道理に聞いて、その相愛の情にさへ不足が無かつたら、假令何のやうな事を犧牲に供さうとも、少しも悔ゆる事はないであらうに、
此やうな夫婦もあるものか、と二人の去つたあとの何となく打目戍られたが、それに付けても、何故又此やうな事を、際立つて深く身に感ずるのであらうと、不圖氣が付くと、顏には安からぬ色が見えて、誰に忍ぶともないに、押へたやうな大息と共に暫く俯向いて居た。
三人連れて、學校歸りの女學生が下を通つて行く。隣邸にいつもの謠が初つて、今日は小鼓の聲さへ聞えたが、うつゝに聞流して居た耳元に、清い、爽やかな聲で、
「千枝さん。」
吃驚して目を上げると、いつの間に其處へ來たのか、外の石垣へ寄つて、栗毛の、三才駒の、七寸ばかりなに、ゆらりと跨つた若い紳士が、其清しげな眼に、通つた鼻筋、濃く秀いてた眉の、清らの面を直と向けて微笑を含んで居たのであつた。
「あれ、晋さん、御免なさいまし、ついうッかりして居


桂

て。」
と急がはしく會釋した。此婦人の近しい親戚で、丸山晋一郎といふ男。
たつ〳〵と前へ出やうとする、馬を乗静めて向直ると、
「暫くだつたね、達者かね。」
「はい、有難う。貴郎、那邊へ入らつしやるの。」
「一寸音羽まで。」
「お上んなさいましな。」
「いや今日は然うしちや居られない。歸りに白山まで行かんけりやならんから。千枝さん、此頃は些少も來ないね。夏が酷く恨んで居るぜ。」
「あれ然う。濟みませんね。何うぞ宜しく仰有つて下さいな。」
「近い中に是非お出な、夏も待つて居るからね。皆で又昔話でもしやうぢやないか。」
「はい、私もね、餘り御無沙汰をして居るから、此頃に是非參上る心算で居ましたの。」



「それは猶更だ。屹度お出それでは今日は急ぐから、これで、」と別れを告げて行かけた。
「然うて

すか。では何れ近日。」

「夏にも然う言つて置くよ。」

「はい、何うぞ。」

手綱を掻繰ると、晋一郎は乘出して、其儘馬を走らせて去つた。今更のやうに、千枝子は其体格のいゝ後姿に目を留めたが、影が見えなくなると、前よりは一層物思はしげに、折しも通掛つた職人風の男に顔を見られて、急に逃げるやうに跡へ引返した。すると今度は、母屋の方で、

「娘さん、」

と何處やら確りとした、澄切つた聲。

「はい。」

返事と共に、千枝子は急足、見ると椽に立つて、義妹の登志子といふ、脊の高い、頬の剝けた、眼のきりゝとした、口元の目に立つて引締つた、打見にも勝氣のやうな婦人、髮は束髮に結つて、柄も男物のやうなぢみな扮裝に、年よりは更けて見えるのが、端居に近く千枝子を待受けて居るのであつた。

（二）

「お客樣は？」

と近づくまゝに千枝子は問掛けた。

「今歸りましたの。」

と言つて登志子は事ありげの面持、

「實はね、打捨つて置けない事を聞きましたから。」

千枝子は目を瞬つた。

「何ですの。」

「まア上つて入らつしやい。」

と登志子は中に入つて、茶の間の長火鉢の脇、何か不興らしく、眉を寄せてぢツと考へて居る。何事かと、千枝子は跡を追つて衝と入つて來て、火鉢を挾んで坐に直ると、落付かぬ眼に、

「何をお聞きなすつたの。打捨つて置けないつて、ま、甚麼」

と口早に、慌たゞしい。それには答へず、登志子は腹立たしげに、

「兄は實に怪しからん男です。」

「まア、何を仰有るの。」
呆れて打目戍ると、
「貴女、兄の不仕舞を御存じですか。」
「不仕舞！」
「然うです。まアお聞きなさい。」
と膝を進めた。さては、と千枝子は思當る事もあるのか、前よりは騒ぐ色もなく、登志子の言葉を待つて居ると、
「一體なら貴女に隱して置くのでしやうけれど私然ういふ事は嫌ひですし、罪は罪で何處までも正さなければならないと思ひますから、貴女にも又確りと考へて戴かうと思ふのです。」
と重々しく、重ねて又、
「先達中から、役所の方が急がしいとか、やれ調べ物だ、やれ出張だ、と云つて度々家を明けましたね。それが皆、那樣眞面目の事ぢやないのだから呆れるではありませんか。
未だ斷る中が殊勝なんだと今來た客は申しましたが、大手を振つて那樣事を爲るやうになつては、最うお談話になりはしませんわ。
那樣兄では決してなかつたのですけれどね、此頃は貴女、藝者買もすれば、花牌も引いて歩くさうですし、それは最う聞いて居られないのです。貴女や私は、そりやア欺すに造作はありやアしませんが、何にしても兄の、以前が以前でしたから、少し位訝しな事があつても、まさかにと私も思つて居ましたのに、此不始末は何うでしやう。私恁ういふ一圖の女ですから、兄だと言つて決して容赦はしません。
まアそればかりか、兄は脇に圍ひ者を置いて、追付け此夏、子供が出來るのだといふではありませんか。
恁う打明けて申したのも、何も私の手を拔かうといふのではありません。貴女は言はゞ侮辱されたのだすから、私お氣の毒でならないのです。何處までもお味方しますから、貴女の爲さるだけの事を充分に爲さいまし。
それにしても、貴女、まア何うなさいます。」
と我事のやうに、登志子は躍起となつて言つた。談話の

途中から、千枝子は俯向いて了つたが、軈て悲しげな色に、強いて笑顔を見せて、

「何かと思つたら、其事ですか。此間中、貴女は伯母さんの方へ行つて居らしつたから、何も御存じなかつたのですが……」

「えツ、それぢや貴女、最う知つて居らつたしやるの。」

「はい、其事なら、疾うから薄々は。」

「あれ、そして貴女、默つて見て居らしつたのですか。」

千枝子は口籠つて、

「けれども私が、それを何うする事が出來ましやう。」

「そ、それだから可けません。兄に過失があつたら、何處までも改めさせるのが貴女の勤めでしやう。兎もあれ貴女といふものを差置いて、這麼氣隨な事をして居るのを、貴女が何も仰有らないといふ事はありません。全體兄は何ういふ了簡なのでしやう。家庭を何うの恁うのといふ事は、貴女の嫁らつしやらない前から、それは最う口僻のやうに私に言つて居た位でしたのに、肝心それを實行しやうといふ時になつて此始末なのです。それは私にしてからが、恁ういふ兄を持つて居ると云つては、人に顔を向ける事も出來はしません。」

「然しさう嚴しく仰有つても……」

登志子は聞きも敢へず、

「何が嚴しいでしやう。兄の耻なり、貴女の耻なり、延いては私の耻ではありませんか。」

「なにそれは、良人が一人惡いのではありません。詰りは私が行屆かないからです。」

言つたが流石に、心には餘るか、其儘押默つて、屹と唇を引緊めた。登志子は肯かぬ顔、押返して、

「いゝえ貴女が自分をお責めなさる事は少しもありません。今にも歸つて來たら、私思ふ存分言つて遣ります。」

「けれども恁ういふ事は、正面から荒立てゝは、却つて可くなからうかと私は思ひます。それは私だつても、隨分言ふ事は知つて居ますが……」

と言つて跡を躊躇つた。

「ですが私は、何うでも此儘にしては置きません。」

と一本氣に、登志子は跡へ退かぬ。
「然し機を見て仰有らないと……。」
と氣をかねるのを、
「なに構ひますものか。」
一言に消して屹とした。
「嫂さん、今夜見て居らつしやい。」

（三）

喫爐には火が盛んに燃立つて居る。マーブル臺の上の銀の鷲は、並べて据えた遠州松の盆栽の下に、羽を伸して今にも飛ぶばかりに見える。中の卓子を離れて、火の傍に椅子を寄せて、親しげに語つて居るのは千枝子と晉一郎の二人、
「折角來てくれたのに、生憎夏が留守で大いに拙いね。然し其中に歸つて來やうから、まアゆツくりしてお出な。今日は些少は遲くなつても可いのだらう。」
と晉一郎は殊に氣を置かぬ言葉付、遠慮もなく葉卷の烟を立てゝ、談話の中にも絶えず微笑を含んで居た。千枝子は今日は素鼠の御召風通に、下着を揃ひにして帶は寂茶地の繻珍、黒の無双の羽織に、髮は夜會に結つて居た。打解けた調子で、
「でも餘り遲くなつては。尤も登志子さんによく然う言つては來たのですけれど、」
「可いさ。偶だもの。なに此方といふ事が知れて居れば、用が出來たら迎ひに遣すだらう。可いさ。まア落付くさ。」
「然しそれでなくつたつてお邪魔なんだから、」
「なに今日は用無しだ。其中に夏も歸つて來るだらう。」
といふ時洋扉を開いて、仲働の若といふのが、チヨコレートに時節の菓物を添へて、盆に載せて中へ入つて來た。
「おゝ其處の小さな卓を此處へ。」
命じて上へ持つて來た品を揃へて、薦めながら、
「千枝さん、洋食は何うだね。今日脇から貰つた鳩がある。」
「あれ、最う構つて下すつちやア可けませんよ。」
「何だな。此處へ來て遠慮をする奴があるものか。」
「おほゝゝ、でも餘りお客扱ひをなさると、何だか勝手

が惡くつて可けませんわ。」

「何の、客扱ひなぞをするものか。此通りぢやないか。いつも千枝さんが來ると、夏が嫁入してから家へ來た時には、丁度這麼心持だらうと思つて居るのさ。」

と匙を執つて、チヨコレートを掻廻しながら、蒔繪の食籠を持つて再び入つて來た仲働に、支度を吩附けて退がらせると、

「千枝さん、芝居へ行つたかい。」

「いゝえ、此頃は何處へも行きはしません。」

「然う言へば、此方へはかりかと思つて居たら、千枝さん、此頃は里の方へも些少も行かないさうだね。」

「はい全て出ませんわ。」

「何か手が離されなかつたのかい。」

「いゝえ。」

「少し血色が好くないやうだが、何處か惡かつたのかね。」

「いゝえ、」

「では何うしたのだ。」

とぢッと見たか、

「千枝さん、何か氣にかゝつて居る事があるのだね。解つた、何だね、聞けば長岡(千枝子の良人)は此頃大分遊ぶさうだが、那様這麼で氣が進まないのだね。なに構ふ事はない、私だから言ふが可い。」

千枝子は、直に言葉も出なかつたが、

「まア、貴郎までが良人の事を御存じなのですか。實は其事で、貴郎にも御相談をしやうと思つてお寄申したのです。」

晋一郎は多く聞かず首肯いて、

「然うか。其事ならなに然う心配するには及ばない。千枝さんは少し我慢して、却つて機嫌を好くして巧く梶を取つて居る方が可い。」

「ですが私は……」

「まア可い。その方は當分まアそつとして置くが可い。折を見て私から熟くり長岡に話すから、私に任せて落付いて居るが可い。今は逆上せて居るから、何を言つたつて耳に入りやしない。ひよいとぐれたのさ。一時の

事だ。いつまで續くものか。なに那麼風だけれど、勤める處は勤めて居るし、何うして其方は中々上手に立廻つて居る。案じる事はない。氣を大きくして居るさ。」

輕い調子で言つて、只見て又、

「然し恁う言つたからと言つて、全つきり千枝さんの心持を考へないで居るやうに思はれては困る。私は千枝さんに、餘計な苦勞をさせたくないと思ふから言ふのだがね、千枝さんは又外に何か好い考があるのかね。」

千枝子は默つて居た。

「千枝さん、私に任かして置かれないかい。」

「いゝえ、那樣事は決してありません。私は母よりも貴郎の方を憑りにして居るのですから。」

と言つたが又伏目になつた。晋一郎は冠せて直ぐ、

「然う思つてくれゝば猶更だ。今日は最う此談話はしない事にしやう。千枝さん、遲くなつても構はない晩まで遊んでお出。何か思入れ氣の晴れるやうな事をしやうぢやないか。夏は何をして居るだらう。最ういゝ加減に歸つて來れば可いに。」

と葉巻を出して口を切つて、吸付けながら、

「千枝さん、夏が歸つて來たら今日の髷を見て遣つておくれ。當人自慢だけど、其とぼけて居る工合と言つたら有りやしない。顏と髷とは全で別々でね、何の事はない猿芝居さ。」

「まア、那樣惡い事を。」

「なに惡い處か、妹だけに餘程贔負分に見立てゝ遣つたのだ。鏡のない國に生れはしまいし、何うでも那麼髷に結ひたければ、雁首をすげ替へてから掛かるが可いのさ。來たら見て御覽、兎に角噴飯すから。」

「那樣酷い事を仰有ると、其通り夏子さんに言付けますよ。」

「構はんさ。有の儘の事を言ふのだから。醉興な何も骨を折つて腹の皮を捻らせるやうに結ふには及ばないぢやないか。自体が猫脊だから、あれで尻尾が蛇ならば、鳴く聲鵺に似たりけりと言ふのだ。はゝゝゝ。」

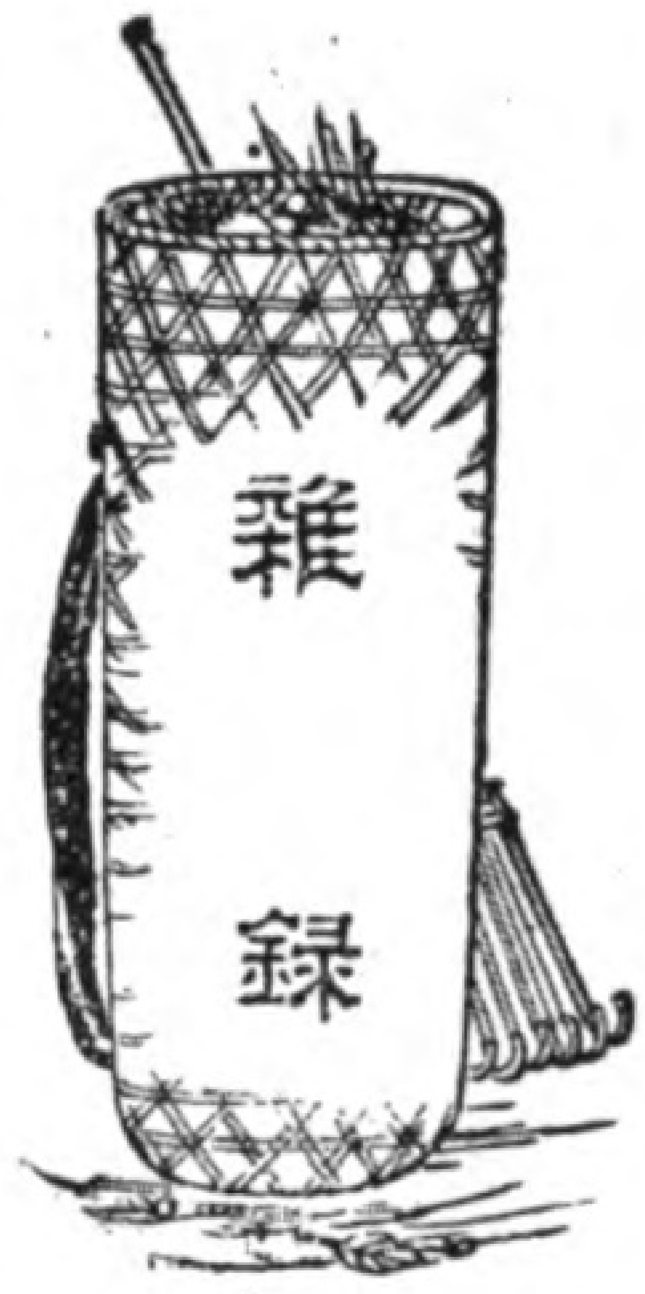
「まア、覺えて居らつしやい。私本當に言付けて上げるから」

噂をすれば、其時洋扉が半は開いて、すいと入つて來た十九ばかりの物越。

晋一郎は直ちに振返つて、元氣よく、

「ヤツ、漸く遣つて來たな。」

(未完)



をさな兒の最期

(原作者白耳義のシエークスピア)

マーテルリンク　作

大塚楠緒子　譯

人名

ヌンタジル　小さき男の兒

イグレーン　其姉

ベランヂエール　同じく

アグロバール　家來

外に女王の侍女三人

一の幕

城を見おろす山の頂上にタンタジルの手を引きてイグレーン出で來る

イグレーン　タンタジルよ、さぞや始めての夜は淋うて其方のためには難義であらうな、あれ直側で海が叫び樹の呻るとゝとはいの、夜も更けたかして月はちやうど御城を隱してゐる柳の後に入りかゝつてゐる……ほんに此處には私共ぎりてあるに、それに油斷も隙もならぬつひ用心ばかりに日を暮して居らねばならぬ不安心さ、極々些細な幸福さへ私共へは近よらさぬやうに、張番が附いてゐる樣な心地がする、或時私は胸の底の――それは迚も神樣でもお聽きなさることは出來まい程深い所でそつと――我身は幸になるであらう、とそつと自分で自分にいふて見た事があつたが……たゞそれ丈の事でさへ其罰が當つてか、間もなく年寄つた父樣は亡くなられ續いて二人の兄樣は誰れひとり御行迹を知る者もなく消える樣になつてしまはれ、今では私とあのいぢらしい妹とそして年齡もゆかぬ其方との同胞

三人ぎり……してまあ行末の事も覺束ない……さ、さ、此處へ來て私の膝の上へ坐つてゐや、まあ私に接吻してたも、そして其方の小さい腕をしつかりと、さあ其樣に私の頸の周圍に纏ふてゐや……そしたら彼奴等が來たとて其方を離して連れて往く事は出來まい……其方はあの、夜寢床へゆく折此姉に抱かれてはな、長い窓の無い廊下を通るとては燈火の影を怖ろしがつたあの時の事を覺えてか……今朝不意に其方に逢ふた時はほんに吃驚して魂が唇の上で震へたやうに思ふたぞや……遠い所で安穩に暮してゐるとはかり思ふてゐたもの……誰れが其方を此處へは送つたのじや……

タンタジル　それは知りませぬ御姉樣、

イグレーン　どの樣なことを聽かされたかちつとも知らぬといやるか、

タンタジル　あい、只出立せねばならぬと聽かされま



したばつかり、

イグレーン　何故其方は出立せねばならなんだのじや、

タンタジル　それはあの女王樣の思召ゆえ、

イグレーン　何故それが女王の思召であつたか彼奴等はなにも其方にいふては聽かせなんだか……大かた種々な事を澤山いふたであらうと思ふが……

タンタジル　いゑ、いゑ、なにも聽きませぬ御姉樣、

イグレーン　彼奴等が仲間同士話を爲た時はどの樣なことを話したぞ、

タンタジル　彼の人どもは小さい聲でばつかり話をしましたもの御姉樣、

イグレーン　始終そうであつたか、

タンタジル　あい、御姉樣……彼の人たちが私の方へ對してゐない時はいつも小さな聲でばつ

かり……

イグレーン　して彼奴等は女王の事を何とも申し上げなんだか、

メンタロル　女王様は御見上げ申したことはないと申しました、

イグレーン　船の橋の上に其方と一同に居つた者共もなにも言ひはせなんだか、

メンタロル　あい、たゞ風と帆とのことの外は構はずに居りました御姉様、

イグレーン　嗚呼……　そうてあつたであらう……よい兒じや、

メンタロル　彼の人ともは私をたつた一人置いて往つてしまひました御姉様、

イグレーン　まあ聽きや、此姉が知つてゐる丈の事を此方に話してきかせませう、

メンタロル　御姉様は何を知つていらつしやります、

イグレーン　澤山知つて居るといふのでないけれど……其方の小さい姉様ゞ私とは生れてから何事をもちつとも知ずに此處に育つて、ほんに長い月日の間此島に盲の女のやうに住むでゐました、そしてそれがなんの不思議でもない自然の事とばかり思ふてゐたので、空飛ぶ鳥や木の葉のそよぎ、薔薇の花の開くことより外には何をも知らずに、園の果物が落ちる音にさへ吃驚しては窓から頸を出して見る程ひつそりと周圍は靜かであつたのじや……そして少しも疑といふものは持たずに住むで居つたが、不圖ある晩私は何か怪しい、事が在るに違ひないと氣味惡く思ひ浮むだことがあつたので……此處から逃げ出そうとして見たのであつたがつひ果す事は出來なんだのじや……　これ其方は話したことを合點したかや、

メンタロル　あい、あい、御姉様の仰しやることはいつでもよう合點しまする、

イグレーン　よしよし、秘密な事をあんまり話すのはよしにしませう……あの其處に空を毒害でもするやうに聳えてゐる枯木のうしろ、谷の底の方に御城が見えるであらう、

タンタジル　あゝ、あの黒いので御坐んすか御姉樣、
イグレーン　ほんに黒く見えることはいの・・・
・・・・影の圓形劇場のずつと底に建てられてゐる樣じや、私等はあそこに住むでゐるので・・
・・・・元來彼の御城はあの取り圍んでゐる大きい山の頂上の方に建てゝもよいのであつたものを・・・山は何時も靑々と崖の一方には海も見え牧場も見えゐるし、そしたら私等はどんなにか快く息をすることが出來たであらうに、彼奴等は谷の底の方をすき好むで彼の樣な低い空氣さへもろく／＼屆かぬ處に建てゝしまふた、そして漸々荒れてゆくけれど誰れも搆ひつけもせぬ・・・・・あれあの通りに壁は崩れかゝつてゐる・・・・・大かた其方は影の中へ溶け込むでゆくのだといふであらう・・・・・けれどもたつた一つ其處に雨にも風にも荒らされぬ塔がある、すばらしい大きいもので他の建物は悉皆隱されてしまつて其塔の蔭から出ることは出來ぬのかや。



タンタジル　あれ彼處に火が見えまする御姉樣、あれ、あれ、大き赤いい窓が・・・・・
イグレーン　おゝ、タンタジル彼れが其塔の窓なので、光の見られるのはあれからばかり、彼處に女王の御坐所があるのじや、
タンタジル　女王樣を見あげることは出來ませぬか、
イグレーン　誰れも見た者はありはせぬ、
タンタジル　なに故でござります、
イグレーン　もそつと近う此方へ寄りや・・・
・・・一羽の鳥にても草の一葉にても聽かしては惡いゆゑ・・・・・
タンタジル　草の一葉も此處には無いでは御坐りませぬか・・・・・(と默して)・・・・・あの・・・・・女王樣は何を爲さります、
イグレーン　何を爲さるか誰れも知りはせぬ、獨きりてあの塔の中でお住ひなされ誰れにも姿は

御見せなさらぬのじや……そしてお仕へ申す侍女らも晝は決して外へは出ぬ……もう餘程御歳をとつてゐられるので……私等の母樣の千の母樣じやもの……そして獨で王位を領してゐられるので、それは妬み深い疑深いお方で氣が違ふてゐられるといふものもあるくらゐじや、たゞ他人に位を奪はれやうかとそればつかりを氣遣ふてゐられる、其方を此處へ連れ寄せたも大かたその御懸念故であらうと思はれる……其また御命令はどうして行なはれるかとんと不思議で……決して下へとては降りて來られぬにそして塔の戸は夜も晝も年中閉め切りてあるのに……私はちよつとでも御姿を見たことはない……見あげたといふ者もあれどそれはたゞ昔のおわかい時の御姿なのじや、

タンタヂル　醜い方で御坐りますか、

イグレーン　さあ、お美しうはないといふ事じや、そしてだん〳〵おみおきうおなりになるといふ事……けれどもお見あげ申したといふものは其樣なお噂は決して口に出さぬ……お見上げ申したといふさへ實は當にならぬのじや……おにゝせよ女王は怪しい氣味の惡い權力を持つてゐられる故此處に生きてゐる私共の心の上には大きな無慈悲な重量がかゝつてゐるやうに思ふ……けれどもこれ、餘りに怖いと思ふてはなりませぬ惡い夢など見てはなりませぬぞ、私等がしつかりと守護つて居るものをタンタヂル……魔者も近よることは出來まい、私とベランヂェール姉樣とそして私等の守護役のあのアグロバールの側から決して離れてはなりませぬ……

タンタヂル　あのアグロバールの側から離れてもなりませぬか御姉樣、

イグレーン　おゝアグロバールの側からも離れてはなりませぬ……彼れは私等をよう可愛がつてくれるはいな、

タンタヂル　けれどもあの樣に年をとつて居ります、

イグレーン　年はとつて居つても彼れは賢い……私

共の撰つて殘した一人の相談相手じやものそして能く物事を知つてゐる……思へば不審な、女王が誰れにも知らさずに其方を此處へ連れ寄せたは……私は何を思ふてゐるやら自分ながら解らぬ……此姉は其方がずつと遠い海の彼方に無事でゐると聽いて悲しんでそしてまた喜んでも居つたのじや……ほんにまあ吃驚したことはいな山へ昇る朝日を見やうと思ふて今朝出かけたのであつたが入口に其方を見て……私は直に其方と知つたぞや……

メンメロル　いゑ、いゑ、御姉樣、私が先へ笑ひかけたので御坐ります、

イグレーン　私は直とは笑ふことも出來なんだ……それは其筈と思ふてあらう……おゝそれ、もう歸らねばならぬ時刻じやタンタジル、風が荒れて海がだんだん黑くなつて來る……これ立ち上らぬ前にしつかりと幾度も接吻してたも、私等は其方をどの樣に可愛いと思ふてゐるかそなたは知らぬのじや……手を出しや……離さぬやうに引いてゆかう、そしてあの滅入るやうな御城へ、さ、さ、歸らうはいな……

欧米婦人の片影（一）

法學士　森山朋雲

三年家を去つて桑麻を事とせざりし身も、風樹の歎は、未だ忘るゝに忍びず、月を鏡とするも兩地の心を照らすによしなく、花を懷にするも故園の夢を結ぶべくもなく、降る亞米利加、風はお露西亞、雪の夕に孤村の鐘を叩つ西比利亞の曠野も、いつしか過ぎて、豺狼食をあさる三防嶺の夜半、月に長劍を敲きて、三韓の險を越え、船路三日、煙長き對馬を望みし時は、いかに嬉しき心地せられけむ、家に雙親ありてわれ遠くはしるに惘く、霜夜の桐火鉢をかこみて、つゝけ出すは旅疑のよしなし言なり、

◎露西亞にゆきて、殊にうるさく感ぜらるゝは、尼共の往來に立ち、停車塲に入り込み、はた客車にまで入り込

みて、錢を乞ふことあり、黒き頭巾に黒裝束にて宛然强盗じみたる形をするは、流石に人民の膏血を絞りて、寺院と僧尼を潤ほすお國柄と思へば不思議ならず、寺院には附屬の學校ありて、その卒業生は、良家の保姆に雇はるゝもあり、あるひは尼となつて餘生を聖像に捧ぐるもあり、總じて貧家の娘や、世にも果敢なき孤兒の、なさけある神の手によりて、救はれむと希ふなれば、夫に別れ子に後れ、教門に歸依して煩腦の絆を斷ち、風に雨に其行を澄まさむとするものならで、凡俗の慾は月に花に動くこと頻なり、この尼と云へるもの、胸に掛けたるブリツキの箱に、投げ込まるゝ塵積て山となり、錠を開きて百留となれば、これを寺院に納め、尼の位は一等進むとかや、千留に至れば再び街に出でゝ錢を乞はず、安逸して餘命を寺院に養はるゝざためなれば、叱られざる僧尼の特權を揮り廻して、いともうるさくつけ纏ふなり、



◎露國の婦人にて上流社會のものは、一人として獨佛の言葉をあやつらぬはなく、文學の嗜好あるものは別に羅甸、希臘または英語を學び、口を開けば詩家文人の批評をなし、小にくらしき心地せらるれど、米國の端女がいやにすまして、悧巧ぶるよりは、はるかに勝れり、女子にて大學に遊ぶものは、數に於ては獨米に超えざれども、教育はさまで劣れりとも思はれずおかしきは、醫科大學への入學者が殆んど其全躰を占むる事なり、

◉波蘭の女子には學者出でざれども、相當に學問するものは多く、中流の女子も尚ほ巧に三四の國語を轉りて、交際も極めて拙ならず、惟ふにこの國民は露國人

殊に大露西亞人に比すれば、頗る神經質なるを以て、女子としては何となく、甚はしき心地せらる、

●女權の盛なる米國にては、近來頻りに女子の天職を論ずる一派の巾幗者流を生じ、女子の義務は家庭を整頓して、内顧の患なからしむるを第一とし、交際場裡の跳梁に至ては、抑事の末なるもの、若夫政權を與へよと叫ぶ如きは、狂人じみし事なるべしと唱ふ、物窮すれば即ち變ずべく、こゝしばらくの間、海老茶袴に、牛の皮靴でも鳴らし、「妾は」を三度怒鳴つて小理窟ても唸る浮世に、われ不幸にして住まざるべからざるをかなしむ、

●英國人ほど憎らしく傲慢なるものはなく、殊に英國貴族ほど人を蔑にするは類なし、妙齡を過ぎて、情に涸ぎし眼の色は、いつしか慾に輝く無殘の光を放ち、物言さへもわれは、貴族なるぞやと力氣み返り、平民を見ては犬猫とも思ふ老婦人これぞうれしからぬ英國流ともいふべし、當世の持參金女房には、往々かゝるけしからぬ振舞あること、胸惡き心地す、

●おかしきは朝鮮なり、良家の子弟、十三四を過ぐれば、早や髷をあげて、チョンガーと呼ばるゝを好まざれど、其妻はと云へば十八九より二十三四に達す、蜘蛛夫婦とや云ふ可き、

●米國の女子は輕跳に、英國の女子は眞面目に、佛國女子は輕薄に、獨國女子は貞實に、露國の女子は熱情なりと傳へらるれど、表裏は浮世の習にて、理窟云ふもの、存外馬鹿らしきことあり、半日鏡の前に咲顔を學ぶ、一脊曲を弄んで妙音を放てば、兎角女子の本分足るべし、

三十五年前の東京

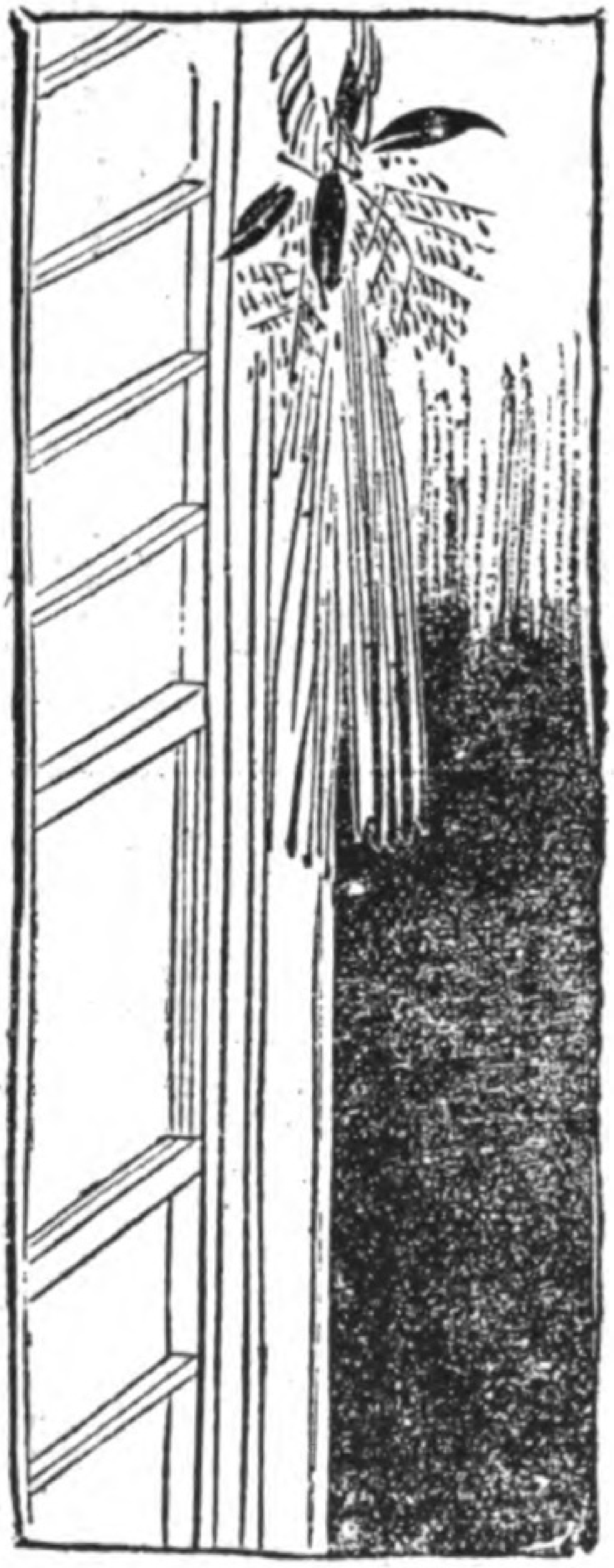
（大奧老女の懷舊談）

鈴木まさ子

江戸の瓦解

指を屈ふれば今より三十五年の昔し慶應四年の閏四月(新政府の明治元年)て幕府の瓦解を致しましたのは恰ど此の時でございます、尤も其の前年の十二月に駿府

の隱居樣(慶喜公)が將軍職を御奉還になつたといふ事を聞いてからといふものは江戸市中の人心は一と通ならぬ有樣でございました、照德院樣(家茂公)が慶應二年の七月二十日に京都で御薨れに相成つて間もなく(約一年四ヶ月)又ぞろ將軍樣が御政治を奉還になつたといふのであるから江戸中の人心は上でも下でも騷動かへさずにはをれません、彼れ是れするうちに伏見で、戰爭があッたといふ風評でございました正月の三日の事でしてね其の報知がまだ確まらない内に將軍樣は蒸滊船に乘ッてそうッと品川へ御着になる、御城内からはまだ御迎ひも出ないうちに御粗末な御服裝で御歸城になりました、すると何たか委細の事は薩張知れませぬが奥向では一方ならぬ御心配の御容子で、譯を存じたものは一人もない、けれども噂に依ると將軍樣は此の回朝



敵の汚名を蒙ッて御謹愼遊ばさるとの事で大姑天璋院樣を始め和宮樣も御臺樣も是ればかりは實に案外に御思召されたとの事、況して我々奥向に仕へてゐるものの身に取ッては何樣でありませう、神君以來天下の將軍職を御勤めになつて十四代、御代々の事は申すまでもなく永年天朝へ對して御忠勤のあつた其の大將軍樣に朝敵の烏散がかゝるなんといふのは、唯事でないから之を聞くと表の諸役人大奧を始、旗本御家人の末々に至るまで苟にも天下の御扶持を頂いてゐるものは一人として憤懣せずには居れません、併し全くの所を申しますと、もう以前から斯樣な浮説を耳にした事も度々で上下ともなく一般に人氣が狼狽してゐたので唯もう大騷ぎを遣るばかりで役人の中でも心を落着けた考へを出すものは殆んどございません、其處で將軍

樣は上野の大慈院へ御引籠りになるゝ老中若年寄の身分でも御對顏が出來ぬといふ、其の折の御服裝が檳榔子染の木綿羽織て小倉の御袴といふのであるから本統に涙の翻れた次第、又御城內では何時薩長の勢が押寄せて來るかも知れぬといふので、其れ等の防禦をするとて日がな毎日取り込んでゐるから諸事萬般行違が多い、所て旗本の中て多少血氣のある者どもはそれ〴〵人數を組んて日光山へ栖籠るとて騷ぎ出すのもあり、朝臣となるのを不面目におもつて會津藩へ脫走するのもありました、そこて官軍が押寄せて來たら江戶市中は忽ち兵亂の巷となる事とて老人小兒を引伴れて近在へ送り出すやら家財を取まとめて運ぶやら、大きい家臺を踏まへてゐるものは、そうも出來ませんから、內々て土藏へ仕舞ひ込むのが多い、それて天下大亂の兆が現はれる市中へ無賴者が出沒して種々亂暴を働らく、商家の中ても、茶屋、料理屋とか、待合とかいふやうな弱い稼業をしてゐますものは狼狽者に踏み込まれて每日のやうに難題を喰ふ、それどいふのも畢竟政府といふものが瓦解して仕舞つてまだ天朝の仕置が始まらない內であるから迷惑するものは市中の人民、官軍が江戶市中へ這入り込んだのを好い機會にして諸藩の流れ者や、眞鍮鞘の木刀差した折助や性質の惡い勤番者なんぞが無暗に錦裂を肩に付けて吉原や品川板橋あたりの遊廓を荒して廻るのがあります、盜賊や追剝が時を得顏に振舞ひます、唯打こわしが始まらないばかり此の時の江戶は全くの無政府の有樣て賴みとしたのは唯俠客の力で新門の辰五郞なんかの骨折でもつてやつと治まつてゐた位でございました、

大奧の狼狽

天下を御取りになつて二百七十年、金城鐵壁の固めに據つて儀容、格式尤も鄭重を極め二百八十の大小名をして其の內殿に祗候せしめ、天下の珍寶奇品を一所に致し、綺羅金繡を飾り善盡し美盡して結構の莊嚴は海內第一とまをしました、德川家の內庭も一朝の頓挫に狼狽爲す所なく、閣老參政と申して日頃社稷の肩で風を切りました重役も朝廷と申する一種不思議の御靈光

に對しましては施さんに術なく、中には憶病神に取りつかれて何事も手控えを第一とし、人心の狼狽と事實の齟齬とに持て剩して一同手を束ねて唯勢ひの趨く儘に看過すの有樣でありましたましてや内庭大奥の周章は如何でござりましたらう心細さは女性の常、柱とも賴みました將軍家は朝敵の汚名を蒙られての御幽居とありては此の末如何成り行かうかと日毎に憂思の增すばかりでありましたが、大奥には天璋院、靜寛院の御兩所より京都へ向けて軍勢東下の御中止を願はんとて御目代とし上臈年寄を差遣はされましたが其れ等の事何れも長途の困難に日數がかゝりまして手後れとなり、征東軍の先鋒で東海道勢は既に品川まで進軍され猶中仙道よりも追々繰り込みて四月二十日といふには江戸市中へ錦の旗影を見るに立至りました、征東總督の宮より江戸城開け渡しの談判に及ばれまして天璋院、靜寛院の御兩所も據ろなく城内、御立退となりましたが、此の時の騷動、表、大奥の狼狽はどんなでありましたらう、日頃は金絲銀絲の縫ある綸子の襠を着し、畫眉、口臙脂けば〳〵しく粧ひ、殿中を一個の世界として更らに浮世の風波を知らず、御膳、御手水、御召替の都度〳〵茶の湯、香、花の催ふしある折り〳〵御臺所の膝元に侍き仕へ、或は殿中にありて下々の御用を勤めた奥向女中で日頃朋輩の外には人を知らず、女同士の外には滅多に人を見た事のない程、深閨裡に寢起したもの、まつ八百人と申します其の中流石に上臈、お年寄中年寄など身分あるものは見苦しい狼狽をば致しませなんだが、表使、御小姓、御祐筆、御坊主、御次なんど御目見え以上の御殿女中を始め御仲居、御末、御使番、御三の間、御犬小供なんと申する身分の輕きもの、又は下々の女は上を下へと混雜し、立退を命ぜらるゝと共に己が所持品の始末に困し朋輩に賴みても中々埒明かず、たもんを生家に馳せて母親妹など呼ひ迎ふるもあり、又部屋〳〵にては手當り次第に長櫃の蓋を閉ち得られぬまでに衣類其他の諸道具を詰め込み〳〵、これも自分が頂戴物、彼れも自分の所持品なれとて此の際に當つて猶慾張根性を出して果ては荷物の始末に困じたるも

あり、筆太に書き記した札付の荷物の如何かして間違ひをして、牛込の方に行くへきを芝の方角に迷ひ、宰領が何人で、何處へ持ち運びましたやら、中には屆所の知れずして空しく途中に彷徨、果ては似而非官軍の荒武者共に捕り押へられ辱の目を見るもありました其の混雑狼狽の樣實におかしくも又眼にある哀れでした、

旗下の末路

旗本は八萬旗と申せど其實眞正の旗下は一萬三四千だと申しました千石以上の家々に於きましては家來、用人若黨、中間、草履とりに至る迄多いのは五六十人少ないのも二三十人の眷族を有ちまして其人數は頗る多いのでございます其邸宅も今の大名華族方の私宅程でございまして嚴めしい門構へ玄關奥向の裝飾、御殿作りを擬へまして結構の善美を盡し美を盡せる庭園の好み、殆ど侯伯の



御構へてした、此の如き大身者の一朝祿に離れましておい〳〵と町人の中へ這入りました。これがまことに憫然な次第でございます、旗下と申せば大した御殿樣のやうに人々は思つて居りますが其實表面ばかりで太平二百年の間に奢りと、だらしない風俗に大抵は其魂を腐らした者が多く、さあ薩長の兵が來たと聞くが否、眞正に忠義の志を表した者は上野へ立て籠つた彰義隊位の者で、大抵は御恭順を口に藉りて一身の安危を計る腰ぬけに過ません、それで駿州へ御伴して行つては見ましたもの丶何が扨て江戸に居るやうな面白い事はございませんから二三年立たない間に大抵は歸つて來る、前の屋敷は最早人手に渡ッて歸らうにも家のないのが多い、偶に金でもあるものは居食などしてゐましたが、それも大抵は一二年で皆無くして仕舞

ひます、覺えた藝と言へば旦那が長唄でも唄ッて奧樣が踊りが上手位な事、そうかといつて與逆藝人で御飯の喰べられる譯にはまいりませんから、飄輕に汁粉屋などを始めて前垂掛て團子を捏るなんといふのがありました、三千石、五千石取ッた殿樣に其樣なのが多うござんした、中には不斷少しばかり鑑定眼があるといふので、器物や刀劍類をひねくりまして道具屋に成ッたのも多い、それから旗下の二男三男といふのは世が世てゐてさへ道樂で身の持てないのが多い位でありますから、況して斯樣いふ世の中に成つて見ますると最早御二男樣の幅も利かないから、横濱へ出て何處へ異人が入り込んだのを幸ひに庖丁や料理番に成ッたものなんぞが多くございます、それから容色のよい娘を持たものは、手ッ取り早く藝娼妓に賣るのもある、御家重代の甲冑武具を賣り拂ッても、世が段々太平になッて時世がころりと變ッて來たので二足三文、唯今でこそ刀劍類にせよ、鎧冑にせよ珍らしくて直の出ましたものゝ、其の節の賣相場と申しては壓殺とした名人の打ッた大小が十本揃めて二兩二歩だの、刷貝の數が僅かに二朱、今まで持こたへてゐたらば古器物として少くも二三千圓がものはある、槍、薙刀の長いものなど幾何あッても金にはならない、商人は焚物にもならぬと申しまして手に手に買ッて呉れません、又熨斗目の小袖、祉袮が長持で一杯賣り物に出てからが、三十兩と纏ッて商いになッたものはございません、總別瓦解の間際に物を賣ッた連中は皆な馬鹿を見ましてそれから五年と十年持ちこたへてゐたものは餘程工面の善い物、今日三千圓五千圓の價のある家屋敷を無代に他人に與つて仕舞ッたのが多く、旗本屋敷など大抵は山の手で今日何樣な所でも直の出ない所はない位、十年立たぬ内地面家作の價は三層倍にも成りましたかと思ふに今では十層倍もしてゐる所があると申す事です、馬鹿を見たものは旗本衆でございます元の家來や草履取をしてゐたものゝ中に大變な出世をしてゐるものもありまするが、皆な運で、瓦解の時折角主人の家屋敷を悉くり讓り受けながら官から面倒がかゝッて來るといけないから

つて、態々人へ賴んで其の地面家作を呉れて遣りましたのがある、それが三四年立つて三千圓に御買ひ上に成ッたなぞといふのを聞いた事もありますが、一寸先の分らぬ世の中で皆が泡を喰つて仕舞つたとは申しながら、其の時の江戸が斯樣繁昌するやうにならうとは誰れしも思ひ掛けません事で、舊幕臣は申すに及ばず、町家の者一統將軍樣が居なくなれば八百萬石の城下は忽ち衰微して商内はぴつたり止つて仕舞ふは眼に見えた事、地面家屋敷を始め金目な器物何一つとして價のなかつたのもまア其筈でございませう、（完）

家庭の新空氣

和田鞆子

家庭の讀書（圖書室の備へ）

家庭に讀書と云ふとがなかつたら其家庭は極めて野卑て少しも進歩がない夫れて一つの家庭には必らず一つの讀書室がほしい、而して其處は極めて神聖にして卓上には花を活け楣間には英勇學者の肖像、都市山川の風景をかけ書棚には四書、五經、聖書、萬葉集、源氏物語「ゲーテ」「シルレル」の全集、沙翁の作、「スコツト」の集などを具へ其の外好み〳〵に從つて科學上の書籍は勿論、新刊の書籍、雜誌類にも可成弘く渡り新聞の如きも缺いてはならぬ小說の如きもあながちに捨つべきでない、偖暇だにあらば徒らに時間を空費するとをせず必らず此室に因つて多少の利益を得る樣にしたい勿論家族同志でも知らぬ事は互に敎へたり聞いたりすれば非常に利益が多い、書生時代には男も女も高尙な考を以て居るがいざ一家を搆へるとなると机も書棚も物置に押込んで讀書などを思ひ付く者は極めて少ない每日の新聞をよむも精々である而して暇がないと云ふのを口實として居るが實際は暇がないのではない暇を作らぬのである一日に一時間や二時間の讀書時間はどうしてでも出來る讀書時間は僅かに一時間や二時間でも讀書室を充分利用すれば家庭を自ら高尙に導き精神を修養し智識を開發する點に於て著しい利益があるのである

家庭の趣味（一家團欒）

日本の家庭に趣味のないと云ふ事は既に一般認めて居る處であるが是れは日本の家庭が個人的であつて家族でないからである假へば主人は獨りで料理屋に行く細君は下女と芝居見に行く老人は一人で參詣に行く子供は子供で他所へ行くと云ふ風であるのが抑もの缺點である又こう云ふ個人的になつた極限には家内の風波が絶えない樣な事になる夫れで一家庭をなす以上は凡て家族的でありたい何處かへ出懸けるにも茶一杯飮むにも家内中が打集うてやる樣にしたい、そふ云ふ具合にして行けば自然と家庭に趣味が出來る、大躰の主意は是れに過ぎないが尚ほ細かに趣味を作る方法に立ち入つて說いて見れば次の樣である

郊外散歩、第一に勸めるのは郊外散歩である每日〳〵天氣の快晴で春水が四澤に滿つる彌生の頃、主人も老人も、子供も婢僕も家族打つれて黃金の如き菜花の間、毛氈の如き若草を踏み土筆ぬき根芹つみ花の木陰に團欒して辨當の風味を味ふ實に愉快の極ではないか況んや歷史上の古跡を尋ねたり地理上の名所を探ぐつたり生物や礦物の採集でもしたら知らず〳〵の間に大なる智識を得る事であらう

演劇とか見世物とか云ふ物も高尙な物ならば見てもよいが是れも勿論家族的でなくてはならぬ然し芝居の如きは群集の塲所であるから衛生上には餘り宜敷ない東京で云へば植物苑とか動物苑とか博物館とか水族館の如きは幾度行つても必ず利する所が多い

說敎、敎會へ說敎をきゝに行つたり名僧智識の演說を聞きに行くとも極めて利益が多い又學者の科學上に關する講演なども折さへあらば家族打つれだちて聞きに行くがよい日本人は一躰說敎とか講演とかを重要視せない、そう云ふ者を聞きに行くは只男子のみに限つて居る樣に思つて居る然し決してそう云ふ譯の物でない極幼兒は別として少くとも相當の年齡の者は男子でも女子でも主人でも婢僕でも學者の說をきいたり宗敎家の敎を聞くとは極めて必要である、そう云ふ說を折〳〵きけば其家庭は必ず高尙になり必ず進歩する大きく云へば國家の進運にも關する譯である、

●園藝　牽牛花を植えたり菊を培養したりするのは只花の美を賞するばかりでない家庭の趣味を高尚にする一つである又狹い所にても油菜や豌豆を蒔いたり茄子や大根でも作つたりする時には其量の多少其出來不出來に不係何となく實に無限の趣味があるものである夫れで地面が少してもあつたならば園藝と云ふとは至極面白い

●音樂　古今東西を論ぜず音樂は之を敎育の方法として用ゐて居る、秋夜月、中天に澄んで庭の梧桐がはら／＼と落つる樣な時に一曲の笛がきこえたら其時の感情はどうである月もおぼろに花もかすむ春の夕暮、ゆかしき和琴の曲がきこえたら其時の感情はどうである氣が沮喪した時にても勇壯なる琵琶を聞いたら必らず肉が躍り血が湧くではないか悲愁に沈んだ時にても和暢なる洋琴をきいたら心中が自ら豁然とする



音樂が人心に影響するとは此の如く非常なものであるから音曲を撰定すると云ふ事は勿論必要である撰定と云ふとむつかしいが凡て俗曲を家庭に入れぬ樣にすれは大抵はよいのである夫れて主婦たり娘たる者が多少の音樂を心得て置て折にふれ時に應じて其高尚なる者を奏したならば家庭は自ら和氣に充ち自ら高尚となり殊に夫が晝の勞れを休めようとして夕方はし近く月ても賞して居る折に一曲の幽美なる音樂を奏したら如何に夫の心を慰むるてあらう又家族打よりてお茶でも飮む場合に一曲の音樂があつたら其時の快樂は又如何程であらう男子でも音樂を自ら奏する事は出來ずとも音樂や美術に關する趣味を持つと云ふとは是非必要である

●節句　誕生日、正月、盆其他凡てこう云ふ折には一家

族は勿論其上親戚やら親しい友だち迄打よりて茶を飲み菓子を食ひ老人も子供も婢僕も主人も一緒になつて何か面白い遊戯でもしたり音樂でも奏したりして遊ぶのは實に家庭をして趣味多からしむると同時に又家庭と親戚、朋友間の交情を温めるに於て大に利益がある歌の會や碁の會等も折に因つては開くがよい

●運動　散歩も勿論獎勵すべきであるが又家庭的遊戯としてはロテンニスが至極適當である過劇ならず悠長ならず男女に適して尤もよい一つの家庭には必らず一つのテニスコート位は設けて置いて親戚朋友迄も打まぢりてやる折にふれては家族親戚朋友一同がテンスの競技を行ふも又妙である

家庭をして趣味多からしむるには勿論色々の事があるが先づ大體は前の方法に從つて行けば一家は平和の光に充ち幸福の樂みに浴する事が慥である家庭が此くの如く趣味多くなれば男女の外遊も自ら止み婦人の役者騷ぎも自らやむ譯である男子の外遊する事の多いのは全く家庭が無趣味だからである然し此處に注意すべきは内中が何處かへ出懸けようとすると男子は勿論其儘で出かけるが婦人は髮を結はねばならぬ衣服を着かへねばならぬなどゝ云うて大變に作りたて繪どりたてゝ衣服の展覽會、化粧の競爭會へでも行く樣な體裁であるから遂には其樂しい家族的外出が出來なくなつなり時刻が大變に遲れたりするは一般の狀態であるが是れは充分婦人等の注意すべき事である勿論婦人は一體に美的に出來て居るから化粧したり衣服を飾つたりするは勿論よいが夫れには自ら程度があるとを承知し置いて貰いたい

下田歌子と奧村五百子

(某伯爵談)

先日女學世界で女子教育上の話をして呉れといふ事であッたが、教育上の話をすると長くなるから、其の内順序を考へて御話をしやうが、まづ何よりも今日の婦人界に必要なるは、婦女子の地位を進めるのぢや、尤も女子の教育は中々盛んになッた、又教育上なり、社交上な

り段々と盡力する人も出たが、今日の處ではいまだ十分婦人の地位を進めやう、希望を伸べやうといふ側に立つて盡力する人が尠いやうである、唯斯樣な事はすべて運動とか奔走とかいふて兎角從來の日本婦人には不得手なのであるから必要とは知りながら表面に立つてやる者がない、風俗の改良なども專ら婦人が卒先してやる方が効能があらう、併し何にしても困難なは其の辯舌を得る事ぢや、時代の風潮を呼吸して演壇を立つといふやうな事は女には中々容易でない、イヤこれは從來の習慣が餘程むづかしいものにしてゐるからである、これから段々世が進んで、婦人に社交的の働らきの必要が起つて來れば第一に辯舌を尊ぶ、これまでのやうに辯舌は無用といふやうな考ではいかん、今日て我輩の見る處ろて婦人の雄辯家は數人あるが、就中下田と奧村が立派な者ぢや、ドチラも中々快辯ぢやが單に演說家としては下田の方がよほど立派に見へる、これは學問もあり見聞も廣く、世間の智識を廣く應用するといふ才能があるから、横から見ても竪から見ても博識の學者と見へる、それから演說家の態度もまづ備はつてゐるが唯惜い事に辯士に必要な熱誠といふ點に缺けてゐるかと思はれる、そこへ行くと奧村ぢや、これは學問の方はない、又見聞も下田のやうに廣くはなからうし、別段に新らしい說を述べるといふのぢやないが、何樣奧村の演說には熱がある、又女の辯士に必要な涙が多い、聽衆が自然に感動する、下田の方は學者の辯で、どこまでも學問のある人の說ぢや、仕組も大きい、道具立もちやんと備はつてゐるが、辯舌の底にどこか浮いた調子が見へて聽者を感動させる力に乏しい、そこに至ると奧村は始めから終まで一本調子ぢやが、慷慨淋漓、血あり涙あり時としては鬼氣人を襲ふといふやうな調子があつて、人が恍惚として聞き入る、まづこれは宗教家の演說で、感情を惹く事が多いやうぢや、先達てもいふた事ぢや奧村は南無阿彌陀佛を一つ言はないで爺、媼を泣かせる、爺媼ばかりじやない、堂々たる男子をも泣かせる、當今得難い辯舌ぢや、當今婦人社會に斯樣な熱心家を出したのは奇特な事である、云々

（記者筆記）

社交

音物贈答の心得

◎音物の要旨　贈物の趣旨は素より一にあらず、第一人を敬ふ精神よりするものあり或は謝恩の意を表する爲に贈ることあり、又朋友、親戚の間柄に於て互に相親しむ情よりして物を贈ることもあり、其他祝賀の意を表し弔問の深情を知らしめ、慰問の誠意を表する等種々あれども、何れも其精神の誠を表するためなれば、情を厚うする點に於て眞に美なる業なれとも、世には卑劣不潔の心を有する者少からざるが故に、此誠心を表すべき贈物を邪曲諂佞の具に供せらるゝこと往々にしてあるを以て、其方法に注意せざるべからず、もし是等のことに注意せずして、其場合と關係とを顧みざる時は、人の卑しみを受け、或は先方に對して却りて無禮となることとあるべし、

◎場合の種類　贈品は先方の身分、又は其家の模樣、場合等に由りて異るべきものとす、即ち男女老幼、共に好む所を殊にし、又其家の模樣に依りても、其必要とする所同じからず、かつ吉凶、其他種々の場合もあるべければ、各之に相應したる品を贈るを主意とし、以て其種類を選ぶべし、

およそ親戚、朋友の間に吉事あるは誰も喜ぶことなり、既に喜ぶ心あれば之を祝するは當然のことにして、其之を祝するにつきては、先づ其人をして悦ばしむると同時に、如何にも賑はしからしめんことを欲するは、これ人情なるべし、故に其心を以て其品物をも選ぶべし、凶事の場合に於ても亦同じく同情を表するためなれば、成るべく其品物も華美ならずして、誠に悲哀の情を表するに足るものを選ぶべし、かつ弔問には死者を弔するは勿論、生者をも慰むる心もちあるべし、

祝賀及び凶問の中に於て特別なるものは、婚禮と弔問との贈物なり、婚禮の贈物は、通常鏡臺、針箱等の調度類、或は衣服、帶（たゞし片側物は成るべく避くるを可とす）等、稍下りては帶上げ、帶留、襦袢の衿、袖など

もあるべし、其他には鰹節、壽留女等を多しとす、凶事の贈物は多くは茶、菓子、香、蠟燭の類を用ゐ、又通常の贈物には、金圓を贈ることを無禮として人のせざる所なれども、弔問の時のみは、香奠として金圓を贈ること古來の習慣なり、されとも交際餘り親しからざる間に於ては、品物を贈るを普通とす、又慰問には、病人ならば、其平生好む物を贈りて其心を樂しましむべく、類燒水災、震災等に罹りて、家屋、器具、衣服等に不自由なる場合には、日用必需の品物、例へば器具、反物類など重寶なる品を贈るを可とす、

喪中見舞は、親しき間柄などにて、喪中に人を訪問して其愁傷を慰むるものなれば、何にても其人を慰むるに足るべき品物を撰びて贈るべし、則ち茶、菓子、或は造花、野花、盆栽等、先方に應じて撰ぶを可とす、又餞別は其人遠方へ出立するに贈るものなれば、成るべく輕便にして、かつ重寶なる物を撰ぶべし、即ち道中の用に供せらるゝ物、或は到着地に於て不自由と認めらるゝ物等の如し、其他人に慇懃を通ずるため、又は謝恩のためには、庭園の果物、蔬菜、手製の物品等を贈りて、親密の情を表することもあるべし、總べて贈物は、其時其人に應じて撰び、先方の人を喜ばしむべき種類の物を贈るを可とするなり、

◎音物の價格　贈るべき物品の價格は、己の身分に應ずるを可とす、先方に應ぜんとする時は、富貴の人に對して貧賤の者の力の及ぶべきにあらず、總べて贈物は其分限に從ふを可とす、餘り華麗に流れて身分不相應なるは却りて禮にあらず、さりとて又鄙吝に失するも禮を失ふものなれば、能く其適度を踰えざるやう注意すべし、

およそ贈物の貴きは價格の如何に由るべからず、故にいさゝかの贈物にても、身分に應じ、好意より出でたるものならば、實に貴き贈物といふべし、

◎裝飾　物品を贈るには相當の裝飾を要す、其方法は場合、物品、身分等に依りて異ることあり、普通の裝飾は紙にて包み、水引を掛くれば足れり、包紙は奉書、杉原、糊入等にて、通例の場合には二枚紙を用ふるを可と

す、

水引には紅白及び青白あり、吉事其他普通の贈物には紅白を用ひ、凶事には青白を用ゐるなり、結び方には、結び切と返し結とあり、婚禮及び凶事には結び切にし、其他は總べて返し結とす、金水引、五色水引等は、地方に依りて用ゐる所あれども、古例にはあらず、

熨斗は、古へは正月或は婚姻の式等に用ゐ、又は祝賀の贈物などに用ゐしが、今は弔問を除く外一般に之を添ふることゝなれり、然れども魚鳥類には添ふるに及はず、婚禮其他鄭重なる祝の時には、長熨斗を用ゐ、其他の場合には、包み物の大小に相當したるものを用ゐるべし、

新年婦人の服裝

●十七八の令孃向　（中流以上の好み）

△上着は縮緬地御殿色又は濃紫紺の高砂模様ぼかしとし模様は松に根笹上下見切りの御簾の中に透しの枝梅俗にこれを大內模様と云ふ△下着は二枚通し櫻鼠の縮緬にて對模様（此三枚襲れ價百七十五圓）△長襦袢はお召綸子とし絞り本紅地櫻花の散らし形模様地白圓形の中に老松覗き鶴に鶴の摸様（價三十五圓）△半襟は白紋綸子に金モールの菊形（價八圓）△帶は海老茶の蝦夷錦五釜位の雲形に丸龍の摸様（價二百三十圓）△帶揚は本紅地綸縮枝梅の染拔摸様にて花の香ひは金銀糸の縫取り（價八圓五十錢）以上東京大丸呉服店見立

△頭の道具　島田差し無地本鼈甲の櫛笄は中京形とし櫛は丈三寸一分幅一寸四分厚さ三分五厘、笄は丈八寸五分幅四分五厘厚さ三分五厘（一組價三百五十圓）△同後差は菊桐に鳳凰の差込にて花の大さ三寸、脚の丈七寸（價五十圓）△同前差は四君子の大さ一寸五分のもの（價十八圓）以上神田長岡商店見立

△蒔繪物　島田差し櫛笄は遠州形黑鼈甲蒔とし摸様はこぼれ梅又は花舟、吹寄等（此一組價三十五圓）△簪は赤銅金にて百合花又は牡丹等の丸彫り或ひは寶石入りのもの（價三十八圓）△根掛は金環にて草花又は山水の肉彫或ひは寶石入りのもの（價四十五圓）△帶留は赤銅金に牡丹或は菊花等の彫刻寶石入りの金具としこの紐は褐色地金入り繻珍にて幅四分のもの（價六十圓）△指環は赤銅金寶石入りの薄肉彫り（價四十五圓）△箱世古は赤地金入り繻珍の品（價十二圓）右附屬の簪は銀の平打下り附きにて定紋又は雪月花松竹梅等の彫刻あるもの（價五圓五十錢）以上東京池の端玉寶堂見立

△下駄は南部表黑塗り又はメメ塗りの二段小町形にて高さ二寸位、鼻緒は牡丹色又は金入り繻珍にて大網の摸様附（價五圓）淺草茅町香取屋見立

●二十二三歲の婦人向

△上着は鴨川御納戸縮緬にて裾摸様は鶴ヶ岡若松の裏に金砂子入り△下着は二枚通し薄小豆色對摸様（此三枚襲れ價百三十圓）△長襦袢は本紅鹿羽二重にて大形の疋田絞り鶴形（價三十圓）△半襟は白の紋鹽瀨にて千羽

鶴の模様（價二圓）△帯は唐織錦紫繻六釜位の唐冠模様は本平金糸入り（價百二十圓）△帯揚は鴇淡紅色の紋羽二重光琳松の疋田絞り（價三圓）以上大丸屋呉服店見立

▲頭の道具　丸髷差し本鼈甲無地の櫛笄は中京形にて櫛は丈二寸九分幅一寸三分厚さ三分五厘、笄は丈五寸七分幅四分二厘厚さ三分二厘（價二百圓）△根掛は古渡り本珊瑚四分五厘丸八粒附（價三百五十圓）△後差は鼈甲松葉脚にて古渡り本珊瑚五分五厘丸付（價百八十圓）△前差は本鼈甲松に羽衣大さ一寸の向差（價十五圓）以上長岡商店見立

▲蒔繪物　櫛笄は遠州形黒鼈甲蓋に金蒔繪溜の彫込み又は吉野龍田等の模様（價三十圓）△根掛は幅狭き金環に秋草の薄肉彫（價二十三圓）▲帯留は金に赤銅の色繪ある金具にて栗の丸彫又は金の松に銀の鶴の色繪丸彫とし紐は御納戸縮珍の小模様又は亀甲模様（價三十五圓）▲指環は赤銅金寶石入りにて梅又は牡丹の肉彫の裏を抜くしたるもの（價三十八圓）以上玉寶堂見立

▲下駄は南部表黒塗りの二段小町形高さ一寸八分位、鼻緒は繻珍にて紫繻地、梅鼠地、中形更紗等の模様（價三圓五十錢）香取屋見立

◎二十六七歳令閨向

着類は上着は紫鼠縮緬にて江戸褄模様、原霞に影日向のこぼれ松、香は朱彩色△下着は二枚通し對模様（此三枚襲ね價百二十五圓）△長襦袢は鴇紅梅色地大形の紋縮緬にて大竹模様の白抜（價二十圓）△半衿は白御召綸子小模様（價一圓五十錢）△帯は黒地繻珍織にて総地木目形影日向緒合の松に金銀糸の縫み莫（價百四十五圓）帯揚は鴇柿色縮緬葛尾草白糸の縫取り（價三圓八十錢）以上大丸屋呉服店見立

▲頭の道具　丸髷差し本鼈甲無地の櫛笄は中京形にて櫛は丈二寸八分幅一寸二分厚さ二分三厘、笄は丈五寸五分幅四分厚さ三分（價百五十圓）△根掛は古渡り本珊瑚四分丸九粒附（價二百五十圓）△後差は十八金赤銅象眼秋草の透し彫五分玉本鼈甲松葉形の脚附（價三十圓）以上美岡商店見立

▲蒔繪物　櫛笄は遠州形黒鼈甲蓋に菊模様又は月に雁の模様（價二十八圓）△根掛は寶石入り金環の細きもの（價二十五圓）▲帯留は金銀色繪青と水の図又は折枝短册赤銅の色繪金具にて紐は御納戸繻珍小模様幅三分のもの（價二十六圓）▲指環は赤銅金寶石入りにて巾の細きもの（價二十五圓）以上玉寶堂見立

▲下駄は南部表黒のサバキ塗り関刹形にて高さ二寸位とし鼻緒は黒天鵞絨にて太さ八分位又は白茶繻珍小模様附（價三圓）香取屋見立

流行の春着

◉男子向正服

▲羽織袴服正服の羽織には黒の五ツ紋付にて地質は鹽瀬羽二重、羽二重斜子、本亀綾にして無双羽織の裕とせば胴裏の模様は富士の山瀬切の處を霞にし其間から遠見の松を地色の黒にて染出す趣向とするか又は瀬切を菱形に稽古本壹册を開き其側に梅の苓れを三ツ四ツ五ツそれで餘り意氣過ぎるとあれば梅の大樹を瀬切とし淡彩の梅に月一痕是れ氣の句意なるべし但し袷胴裏を繻珍とせば燕茶地に臙脂入の印度模様金茶地に甲冑と矢の段織模様とか利久茶地友貫の千羽雀背の處は色糸入に織出したるもの又は縫ったもので高尚な屑裂とあれば大幅ものにて白の紋鹽瀬なるべし（仕立上代價五十圓より六十二圓位）

▲衣服品格高尚の衣服には鎮癡斗目に限るべし紋は織細の五ヶ所地色は源氏花色松葉色なるべし其下着には白羽二重か紫鼠鼈鼠の無垢にして三枚襲（仕立上代價七十五圓より六十圓位）

黒の紋付とせば上着は鹽瀬羽二重か羽二重綸子にして紋は五ヶ所其大きさは鯨の一寸或は一寸一分位にし裏は鼠羽二重の通しとす下着二枚は鹽瀬或に羽二重にし其裏地は表と同質同色のものなるべし若し變り物の撰には小紋斜子、小紋羽二重又は色無地の秋田織（仕立上代價五十圓より六十六圓位）

▲縞物の上着としては風通御召、風通平御召、東華織、桑都織、緊糸織、市樂織等にして地色は藍鼠、紺鼠、藁茶に縞柄は代名縞、上布縞、薩摩縞、胡摩殻縞等有來りの柄合なれど之れ等の柄に幾分の變化を加へて名も付け難き柄合數々ありと知るべし

▲下着一枚は上着と同し對重れとするか又は變り物が面白しとせば風通織、八端織、小紋羽二重、小紋斜子か今一歩意氣の粹なとあれば鳳織縮緬の白茶の格子縞か吉野糸織の細格子織但しは大島紬の變り龜甲に鼠羽二重の裾廻し胴裏は細口の白羽二重（五十圓より六十圓位）

▲胴着と襦袢長胴着として土耳古摸樣か有職摸樣の友染縮緬裏は鼠羽二重又は中花絹

襦袢も胴着と同樣とし袖は鳳縮緬の無双にて奥袖に摸寫を染分けたるもの半衿は何れも禮服には鼠羽二重とし其他は黒八丈（二十五圓より三十圓迄）

▲帶茶苧、博多、仙臺、後泉平但しは博多の兩面織、裏地は茶苧、仙臺五泉の裏地又は甲斐絹にて茶の玉蟲鼠か焦茶なるべし（三十圓より十五圓迄）

▲帶上等物には綴織是れは鐵色地に白茶の一本獨鈷又は焦茶と紺の織別けに白の唐草繋ぎ

次は紺と白茶の紋織綴珍さなくば博多紋織、縫取織、風通織、博多織（二十圓より六圓迄）

◉令孃向の正服　（十六七歳）

▲上着　地質は縮緬にて定紋は鯨九分の五箇所色合は新流行の薑色、小豆色、熨斗目色、藤色、牡丹色にて摸樣は暈染めの波に桜の彩色摸樣か同じく暈染に春の錦の柳櫻柳は綠に花は紅ゐの色々に、雪降の雨天摸樣間々赤糸の縫をあしらふ又は地落染も影と日向の千羽鶴又は梅の大幹を薄鼠に花を白に香と蘂を金泥に染出す

是れは三枚重を對とするか下着二枚を胴貫仕立にて上着より薄き色にて同摸樣に染め出すなるべし（仕立上代價八十圓より百圓位）

▲帶は地質を綴珍又は幽圖織にて紫根地白茶の飛鶴に友實松の上紋、金茶地、金銀霞に松竹井破れ龜甲、白茶地金糸の流水に牡丹縱菁子等の春草摸樣（七十圓かり廿圓位）

◉令閨向　（二十歳より二十五六歳）

▲上着　地質は、やはり縮緬にて定紋五箇所紋の大いさ鯨九分位地色は黒、御納戸、栗梅、藍鐵色但しは濃梅鼠などとなるべしされど正式の場合には黒に限るべし其摸樣には淡鼠の鐵菁子實を金銀の泥描に或は梅の見切に敷松葉

▲下着二枚は黒なれば白羽二重か白紋羽二重、白紋縮緬、白八ッ橋、色物なれば前の拾七八歳の者附と同く上着と同色同摸樣とするか又は上着よりも薄色を撰びて同摸樣とするなるべし長襦袢は縮緬にて淡彩春草の繪羽友禪或は友禪染め紫紺色鏡とりに四季の花摸樣（七十圓より九十圓位）

▲帶は綴珍の鐵納戸地、白茶、焦茶の色糸にて檜垣形に蹴たる摸樣又は錆茶地金糸入鳳凰に唐艸摸樣（廿五圓より三十五圓迄）

▲縞物の服裝

上等は小紋御召、小紋縮緬、縞御召、風通にて地色は紫根地、小豆色、紅掛色等なるも縞物には種々の色糸を以て配色を爲すものなれば紺糸あり

[illegible]糸あり茶糸あり白茶あり鼠糸あり其他種々の色糸の配合なれば何の地色とか定めて言ふ事を得ざるも流行なるものは前段の色合に寄りたるものを妙齢向の色合とす

下着二枚は同地質のものを胴貫仕立にするか又は更紗縮緬、縮珍織にて襦は御召縮緬を用ひて三枚重とす小紋縮緬なれば無垢即ち引返し付にて下着二枚は胴貫仕立とす夫れから襦袢しは上着の地色に配色の好きものを撰ぶべきなれども先づ流行の色合は藤色、牡丹、淡紫紺より松葉鼠勝色柳鼠なるべし(五十五圓より七十五圓迄)

袷は近來の流行は總て色合は濃き傾きありと知るべし

長襦袢は友禪縮緬、友禪紋羽二重、紋縮緬の絞染或は疋田染縮緬或は紋羽二重なり(十七八圓)

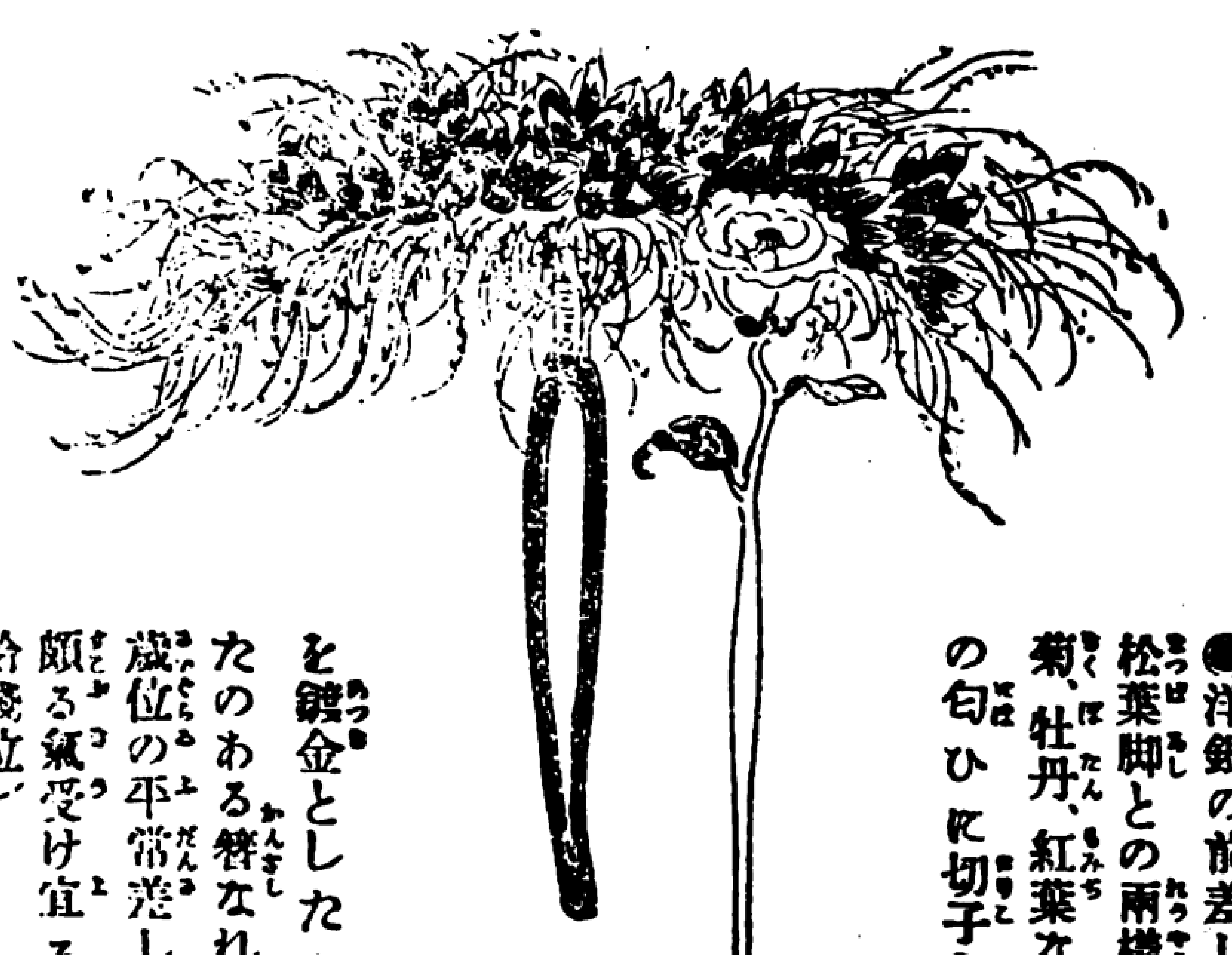
▲帶は最上等は羽織なり此綴織と云ふものは古より最上の織物として歡迎せられたるもの今も古に異ならず贅澤家は己が好いたる摸樣を織らしめて身に纏ふもの少しとせず

其他は繻珍、西婆絞、繻谷織、博多織、厚板織等にて柄合と色合は種々ありて是れも一概に記しがたけれども近來は友貫物中々も流行せり(拾五圓より五十圓位綴織なれば貳百圓以上なり)(以上東京三井吳服店)

流行髮飾品々

●洋風の前差しアルミニュームの一本脚、西洋の御髪搔ぎが延髪にする蹄鐵形の搭に舶來切子を鏤めたる和洋折衷の簪にて、銀杏返し又は束髪用として十七八歳迄に似合し、代價はアルミニューム製貳拾八錢五厘、又銀製にルビー(赤色)サフローヤ(淺黄)エメラルド(青色)を鏤めたるにて四圓半位なり

●洋銀の前差し一本脚と松葉脚との兩様ありて、菊、牡丹、紅葉などの花物の匂ひに切子を入れ、葉を鍍金としたる、差し繁たのある簪なれば十六七歳位の平常差しとして、頗る氣受け宜ろし(價四拾錢位)



●捻り松葉の簪 普通の松葉形と違ひ、葉先が一緒にな

り居る新形にて、殊の外差しよしとの評判なるが、松葉は總躰赤銅、葉柄は無垢製にて、眞珠匂ひ入りの無垢の梅花を附けたる品のよきものにて廿四五歳の婦人には前差、四十歳位の年配の方には後差として似合はしかるべし(價貳圓六拾錢)

●婦人用被布　被布は概して上流向なるが小供に安物



を用ふるもの追々流行の傾あり普通の婦人用被布地は七子形又は斜綾の薄羅紗にして其他に織出しの摸樣もの即ち梅花、櫻花等を現はせしもの數種あり色は紺或は黒など用ふるもの最も多き摸樣なり

●肩掛類の新形　コートに因みて婦人用肩掛類の新柄ものを紹介せん本年新着の分は極めて華やかなるもの多きは全く需用者の嗜好の一變せし故なるへし昨年の嗜味あるものを好みしに反して昨年は秋季より先づ牡丹色、紫紺色、青竹色、藤色の類最も賣行き好く此等は何れも新着の分なるが續いては黒、紺、焦茶の類なり此の價格は四圓以上十三四圓位までなるも周圍に捻房或は羽毛の附きたるは稍や高價にして品質も好しといふ

●襟卷兼用の肩掛　形も普通ものは四角にて之を半より折りて和服又は吾妻コートの上に着する事の流行せしが昨年度よりは又半肩掛と稱す三角形のもの現はれたり之は襟卷と肩掛を兼用するものにて實用的のものなれは大に流行の摸樣あり價格は三圓以上五圓位までありて何れも獨逸よりの新輸入品なり

娛樂

歐米 戶外遊戲

バスケット、ボール(Basket. Ball)

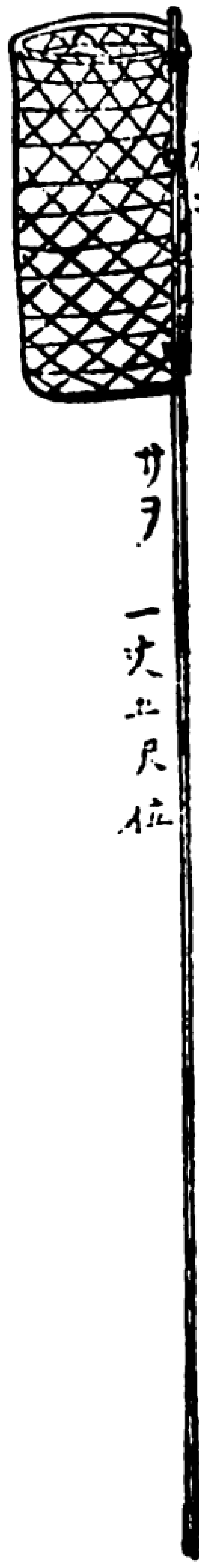
●遊戯の方法

バスケット、ボールと云ふのは高さ一丈か一丈五尺位

の高さに揚げられたる籠の中に毬を投げ込むと云ふ簡單な遊びである、此の方法を種々に變化して遊戯に編成してあるので各自に考へれば幾位も遊び方が出來るのであるが今玆に歐洲に行はれて居る二三の例を紹介しやう

◉遊戯の器具

一　細長き竹竿（國旗の竿の如きもの）
一　細長き籠（屑籠の如きもの）
一　毬（手毬の如き麁末のもの赤色數個白色數個）



これ丈けで極めて簡單である竹は國旗の竿を代用し、籠は反古籠を代用し、毬は正月に用ゆる毬の古きもの若くは護謨毬にてもよし、

◉遊戯の方法

（其一）

▲準備　竹竿の上に籠を結付け圖の如くす（之れは何れの方法にも通ず）、之を源平二組に各一個つゝ備へ此の籠を稍年長の者が眞直に立てゝ持つて居る、此籠を持つて立てるものゝ周圍に源氏組の方は白き毬を二十個（之は十個にても七個にても二十個にても遊戯をする人員にて適宜に定む但し源平兩組は同數なるべし）を散し置き其組の者は遊戯を始むる用意して待つて居る、源平兩組とも同し事

▲運動開始　此兩組は假りに各十人つゝと定め此の外に審判者一人局外中立にて勝負を判定す

この審判者は遊戯の準備出來たるを見て信笛一短聲を吹く（始めと號令しても宜し）此の號令にて各組の者は下にある毬を空中に投げ上げ竿頭の籠の中に入る、何れにても定められたる數の毬を早く籠に投げ入れたる方を以つて勝とす、何れか投入れ終りたる時は審判者は運動停止の信笛を吹き勝負を宣告す、

公運動の要領　籠の口は天に向て居る、投げる毬は多少斜めに投げ上げらるゝに依り容易に籠の中に入るものでない、それ故に籠を持ち居る者は上に向つて投げ上げられたる毬が下に落ちる所を籠にて受くる樣にして常に籠を以て空中の毬を掬ふ心持にならざれば勝を得ること難し、又毬を投げる者も注意して成る可く籠の近所にて上より眞直に直下する樣に且つ數個の毬が間斷なく空中にある樣にしなければ籠にて受けるものは餘程困難をする、數人同時に始めると毬が空中に上る時は數個同時に上る故に落る時數個同時に落ち籠にて受けるものは彼れを受け樣か是を受け樣かと思ふ内に數個の毬は一も受けること能はずして同時に落下し所謂二兎を追ふて一兎を得ない譯になる、故に數人は間斷なく交るゝ毬を投げ上げ受けるものを迷せない樣にするのが秘法である、

（其二）

（其一）と同じ方法にて源平各組は各人一個つゝの毬を持ち自己の毬を覺へ居り、運動開始の號令と共に自己の毬を投げ入るれば此の遊戯中自己の責任を了へたるものとす、

勝敗は矢張り早く投げ入れ終りたる方を勝とす故に自分のみ投げ入れたればとて自己の組に容易に投げ入れ能はざるものあるときは反つて敗を取ることあり故に弱きを助け協力して運動せざる可からず、

（其三）

（其一）と同しく配置し運動開始前に源氏の組より違者の人を二人なり三人なり敵中に混入させ平氏の組も同し事二人なり三人なり敵中に間者を放ち置き、

運動始まるや敵中に混入せる者は敵の毬を拾ひては之を遠方に投げ遣り敵をして其毬を拾ひ集むるに時間を費さしむるに勉む互に間者として入込たるものは機敏に働き敵をして奔走に困ましむる樣なすべし、勝敗は前と同しく自己の組全躰が早く毬を投げ入れ終りたる方を勝とす、

（其四）

今度は源平入亂れて一團となり毬も白赤混合して散

布し置く、併し各組は矢張源平と敵味方を分け男子ならば白帽赤帽を被りて其組を明白にすることを得、運動開始の號令ありたるときは同時に自己の組の毬を手當り次第に籠に投げ入れ敵の毬は手當り次第遠方に投げ捨てる、故に一の籠の中に源平白赤の毬混入し居る譯なり

勝敗は矢張り早く投げ入れ終りたる組を勝とす

（其五）

今度は前と少しく方法を異にす



毬は一個にして大さは籠の口より少し小さな位にし上より落ちて漸く籠に入る位にし籠の口徑一尺あらば毬の直徑九寸位をよしとす

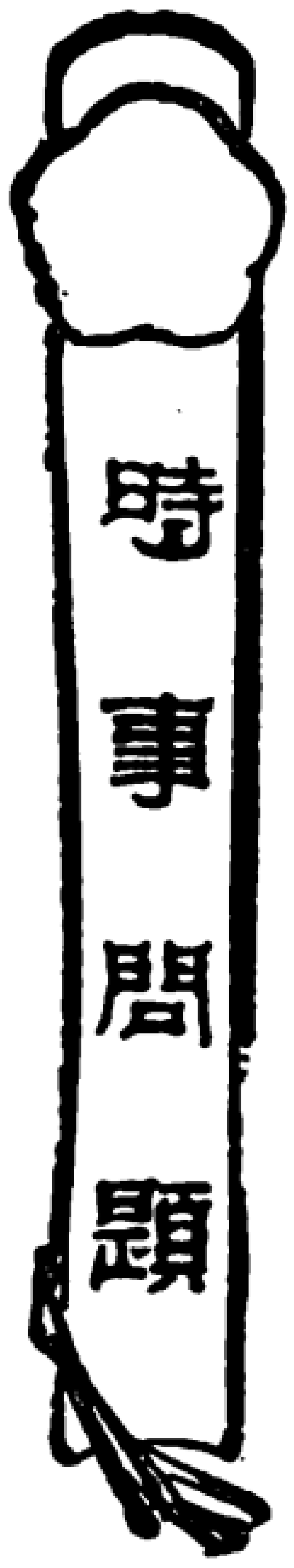
▲運動準備　審判者は源平兩組に分て各組一個の籠を備へ各組の間を四間程明け置き各組のものは籠の周圍にありて運動の準備をなす

審判者は源平各組より一名つゝ其中間に呼び出し此の兩人に向って大毬を投げ與ふ、各組の代表者は爭ふて之を拾ひ自己の組の線内に投げ込む、

其以前に於て各組は各二三人づゝの間者を敵中に派遣し互に敵方運動の妨害をなさしむ

▲運動の方法　前の如く味方の代表者より大毬を投込み來りたれば之を受け取りたるものは其毬を空中にある籠に投げ入る一度にして入らざる時は二度三度其毬の自組の方にわらん限り繰り返して投げ入る、

其中敵方に入込み居る間者は毬の落ち來る時之を敵方より奪ひ取りて自組の方に投げ與ふ、投げ込まれたる組は前と同じ方法にて幾回となく繰返し首尾能く籠に投げ込みたる方を勝とす（西川政憲）



歲暮年始の贈答

內外の事務日に繁多を加ふる其中にも歲暮年始の贈答必ず例年の例に從て盛に行はるゝことならん、其贈答の用意も亦一入の苦勞にして即ち多忙中の一大個條と云ふも可なり、親戚朋友極めて親密なる間柄に心ばかりの品物を遣り取りして互に舊來の交情を溫め將來の情誼を厚うするは自から人間交際の方便として敢て咎む可きに非ざれども、近來一方には交際往來の盛なるに隨ひ自から贈答の區域も廣がりたる其一方には生活の程度と共に其贈答の品類も上進して復た昔日の海苔鰹節等に安んぜず動もすれば生活の程度以上に增長して奢侈分外の品物を贈答し內實は互に迷惑を感ずるが如き實に馬鹿氣切たる所行にして現に贈答者自身に於ても事の面倒なると臨時の費用の嵩むとに堪へずして甚だ迷惑、何分にも困るとの言は萬口一律我輩の常に耳にする所なり然るに百人は百人千人は千人皆その迷惑を心の底に感ずるのみならず、公然愚痴をこぼしながら強ひて瘦我慢を張て互に競爭の狀あるこそ不思議なれ果して迷惑困却とならば互に申合せるが如く即日より此習俗は廢滅に歸して人々苦患を免かる可き筈なるに衆人共に馬鹿氣たるを知りながらも尙ほ其事の止まざるのみか年々歲々多々ます〳〵增長するの勢ありとは、人間界の一大怪事にして理以て解す可らざるに似たれども習俗流行の力は甚だ強大なるものにして或は之を稱して世間の義理人情と云ひ苟も獨立獨行俗間の毀譽を物の數ともせざる毅然たる大勇の士人に非ざる限りは能く此義理人情の外に超然たるを得ざる程のものなれは、世人が此習俗を厭ひながら尙ほ其羈絆を脫する能はざるも無理ならぬ次第なり然りと雖も凡そ世の中の習慣流行は畢竟人爲に出でたるものにして天より降りたるにも非ず又地より湧きたるにも非ざれば贈答の增長も生活の程度の上進に伴ひたりとは申しながら實際には自から其循を作りたるものなかる可らず即ち一朝の幸運に俄に地位を得、富を致して自から其富に醉ひたるもの又は本來の下司下郞輩の外に取り柄なく唯己れの富有を衒はんとする輩が先達と爲りて此流行を助成したるものに外ならざる其の證據には贈答の最も盛に行はるゝ所は俸給に衣食する官吏民吏の奉公人社會に在るを見て知る可し而して其奉公人中の上位を占むるものは多くは本來無一物の深寒貧より俄に立身出世したるものにして此輩先づ奢侈の手本を作り遂に奉公人全體の風を成したるや疑ふ可らず我輩が常に是種の輩に對し

小心翼々深く前後の關係に注意して大に其所行を愼しむ可しと忠告して止まざるも此邊の事情を知ればなり、人の貨殖に汲々たるは後日已れの意の儘に、其蓄財を散ずるが爲めにこそあれは大に積んで大に散ずるは決して他人の容喙す可き限りに非れども、之を散ずるには自から法あり假令ひ其財は其人の私財にして散財の法も亦其人の勝手次第たる可しと雖も若しも之を散ずるの法宜しきを得ず爲めに社會の風儀を紊し他人に迷惑を及ぼすこともあらば其人の私財なればとて社會公共の爲めに決して之を默々に附す可らず、歳暮年始の贈答の如き決して富豪の名を衒ふに足らずして却て他人に迷惑を及ぼし廣く云へば社會公共の風儀にも關係することなれば心あるものは深く此邊の事情に心すること甚だ肝要なるべし(時事新報)

兒童の德性涵養

小學敎育の首腦は、兒童の品性陶冶にありといふも不可なし。苟も事情にして妨げず、機會にして求め得らるゝ限り、兒童敎育の任に當るものは、宜しく是の究極の目的の爲めに、總ての場合と、多くの時間とを湊會、善用するの用意無かる可らず。小學校の德育は、單に修身書の講義にのみ止む可きに非らず。

故に小學校に於て、其の兒童に向つて、例せば唱歌を授け、體操を敎ゆるに當りても、宜しく其の兒童の品性陶冶に、如何なる影響を來すやを考慮するとを忘る可らず。勿論其の體操を爲さしめ、唱歌を敎ゆるは、それぐ直接の目的とするものなきに非らざる可し、即ち體操は以て、生徒の身體を壯健ならしむ可く、唱歌は以て、生徒の音樂的能力を培養す可し。然も其の究極の目的は何ぞや、即ち兒童其者の、德性涵養に資するものにあらずして何ぞや。

然りと雖も、是れを授くるに、其道を得ず、是れを敎ゆるに、其宜しきを得ずんば、折角に德性涵養の爲めに、利用し、善用せんとしたる、唱歌、體操は、遂に害用し、惡用せらるゝに了るべし。若し其の敎授する所にして、其の目的とする所と、相反するの結果を生ずるが如きあらば、之れ最初より、是れを試みざるに如かず。

小學敎育に於ては、主として、素直にして、快活なる兒童を養成せられざる可らず、即ち何事も畏縮せず、ヒチクレズ、活潑、敢爲、能く長上の敎導に從順なると同時に、亦た自主自恃の氣象を養成するは、小學敎育に於て、最も力を効さゞる可らざる所たり。故に唱歌、若くは體操をして、兒童の德性涵養に資せざる可らずといふは、畢竟するに、是れによりて、斯くの如き、氣象を養成するの謂に外ならず。

斯の如き見地より、觀察すれば、吾人は今日の小學校の唱歌に對して、尠なからぬ遺憾を有す。手近き例をいへは、近頃小學兒童の流行歌たる楠公湊川討死の歌の如き、其の調子、若くは其の現はしたる思想の如き必ずしも兒童をして快活なる氣象を養はしむる所以に非らざるが如し。若し歌としての價値は、吾人が今玆に品評する所にあらずと雖も、其の調子の沈鬱にして、悲哀なる、或は生別死別の悲を說きたる、若くは七度死して七度生き賊軍を討滅せんといふが如き。詠し去り吟し來りて凄婉涙を垂れしむるもの果して兒童をして快活なる氣象を養成せしむる所以なる乎。吾人は疑ひなき能はざる也。若し兒童をして、快活なる氣象を養成せしめんとせば、今少しく調子の快活なるものを撰ばざる可らず、悲哀憂鬱なる調子を以て、兒童の元氣を減殺するが如きは、吾人の取らざる所なり。

若くは、兒童に體操を敎ゆるに當りても、單に是れにより、其の身體を强健ならしむるのみを以て足れりとす可らず。須らく是れによりて、兒

童相互の致力協同の慣習を養成し、自己の利益を犧牲とする獻身的精神を鼓吹し、若くは相爭ふに當つては、公平にして卑劣ならず、男兒らしき勝負を試むるが如き氣象を發揮せしむるに努めざる可らず。斯の如きは兒童の德性を涵養する上に於て、利する所必ずや尠しとせざるべし。兒童の德性涵養に資すべきもの、豈に啻に、唱歌と體操とのみならんや。吾人は小學教育の任に當るものが、兒童の德性涵養の爲めに、充分なる注意を拂ひ、幾多の方法と、機會と、場合とを湊合し、善用して、以て兒童をして素直にして、快活なる氣象を涵養するに其力を效さんと勸告す。蓋し萬殊の教科も、其の歸する所は、一本にあり、一本とは兒童其者の品性陶冶にある也。（國民新聞）

家屋の改良

家屋の改良も衣服の改良と同じく、早晩研究問題となるであらうが、家屋を經費の點から言つても、使用の點から言つても衣服の如く輕便簡易のものでないから、愈之を實際問題とするのは隨分困難なる事には相違ない、且つ我社會の狀態は家屋の改良を促すこと衣服改良の如くに急切の氣運に趨いては居ないけれども、實際問題として之を考究すると、家屋の改良は衣服の改良に先つべきもの、少くとも同時に改良を圖るべき性質のものであらうと思はれる、例へば我女子の衣服の如きは昨年以來頗る改良の氣運を促して、正服にせよ常服にせよ各種の考案世に現はれ意匠にこそ多少の相違はあれ、兎も角世態變遷、社會の進度を參酌して、從來の女服に改良を加へた處は、孰れも皆同一である、余輩は一日も速に衣服改良の一般に實行せらるゝに至らんことを祈る。

併し家屋改良の難きは衣服改良の難きよりも尙難し、之が改良の方法考案等は無論專門家の考究に待たればならぬのであるが、余輩が差向我家屋の建築に就て、先づ改良を加へたいと思ふて居るのは、家屋の構造を今少し衛生的にして貰ひたい、即ち新に家屋を建築する場合には、多少衛生上の見地からも考へて、成ろべく健康に不利なる構造を避ける樣にして貰ひたいのである、家屋の構造が人の天壽健否に大關係のあるなどゝは」改めて言ふまでもないことであるが、由來日本の家屋を見るに貴賤尊卑となく衛生上の事に關しては殆んど何等の考慮をも費して居らないのが普通である、今一々實例を列擧して說明することは出來ないが、例へば光線の明暗、空氣の通塞、床下の高低、土地の燥濕、便所の遠近等の如き誰れても我身が大切なら第一に考へればならぬような事でも、一向頓着しないで居る、尤も衛生の觀念がなくて自然に衛生的に出來て居るものもあるけれども、是等は稀有偶然の事であつて、一般の家屋はすべて衛生を度外にして居るといふのが事實である都會に於いて死病者の最とも多い所を調らべて見ると、必らず非衛生的の家屋が最も多く立ち並んで居る區處である、家屋の構造が健康の點から等閑に附することの出來ないのは是でも分るのである家屋改良の端緒として、せめては先づ衛生の目的と一致しないまでも背馳しないように改良を加へて貰らひたい。（讀賣新聞）



才媛詞藻

懸賞文披露

和歌

文學士 鹽井雨江先生選評

〔天〕 新婚　埼玉縣北足立郡上保谷　岡本しづ子

必ずよ敎へしことを忘るなと
　嫁ぐ門出に母ののたまふ

〔評〕何にといふ事はなけれども、よく實境に出てゝ、且つ多少の心も、餘韻にひゞきたり（雨江）

〔地〕 新婚　下谷區南稻荷町二十八番地　白井すみ子

通ひなれし學やの道よゆひぞめの
　まる髷ことにおもくおぼえし

〔評〕調はやゝむづかしく苦しげなれど、意匠に新しく面白きところあり（雨江）

〔人〕 立春　備前國御津郡江與味村江與味　富田登茂

ひさかたの春立ちけりな昨日今日
　梅さき初めて鶯なきて

〔評〕意は甚ゝ、あれど、調に新しきところあり（雨江）

秀逸

●立春　下谷　白井すみ子

日あたりの納屋のうしろにむしろしきて
　まゝごとすべき春は來にけり

●仝　奈良　天野照子

朝日影神代ながらに霞みつゝ
　大和島山春は來にけり

●仝　山口　草賀きくの

今日よりは春や立つらむ神風の
　伊勢の神杉かすみたなびく

●仝　信州　三宅きみ子

文机の上にさしける梅柳
　かたみにゑみて春はきにけり

●仝　伊勢　小西雪子

鶯の聲に晨の夢さめて
　のどかに迎ふ御代の初春

●新婚　下關　熊谷ふさ子

慕ひてしやさしき君を姉上と
迎ふる今日のわが心かな

●仝　山口　梶間まさ子

のしえぶとりかはされし夕より
ゆめさわがしき身となりにけり

●仝　信濃　竹鼻はる子

親につかへにども育てし田の業に
君と樂しくわが世おくらん

●仝　埼玉　大亦たか子

玉の緒よたえねとてそはかこちしか
こよひうれしき千代のさかづき

●仝　大坂　井上しの子

手をとりて心のかぎり歌はなむ
十年あまりも秘めおきし歌

佳調

◎新婚　埼玉　石井ふみ子

例なき笑ひさゞめく聲すなり隣が伏屋も新嫁の來て

◎同　鳥取　尾崎なみ子

よそひして窓によりたる夕ぐれをしらぬ涙の袖にちるなり

◎同　仙臺　松坂哲子

わがせこと昔かたりの織車の窓に故郷てらす月のさしいる

◎同　大坂　武田ことみ子

けふよりは雪も嵐も何ならん千とせを契る相生の松

◎同　長門　松田國子

新夫の温き手にくませむと夕日匂へる窓に茶をたく

◎立春　大坂　岡あき子

天さかるひなの暦は美しき梅にかすみに春を知りぬる

◎同　信濃　服部縫子

雪はまだふる野の末の山松も今朝あらたまる春の色かな

◎同　紀伊　江村すみ子

春立つや川に衣を洗ふ子の髪になり〱ふるゝ青柳

◎同　埼玉　岡本まつ子

わが庭のものと思ひし不二のれの春立つ今朝は遠くかすみぬ

◎同　信濃　増田年子

いつのまにくりかへしけむきのふかも暮きぬと言ひし年のをだまき

◎同　信濃　小林ひさの

指折りて待ちし少女が手すさびの鞠の音より春はたつらむ

◎同　伊勢　神尾咏女

軒近き白梅一枝花咲きて今日天地の春立ちにけり

◎同　武藏　保谷てい子

み冬つき春來にけらし武藏野はまだ霞まねど鶯の聲

◎同　下谷　立花はる子

春立ちて羽子つき交す少女の晴衣の袖を初風の吹く

◎同　　岩代　去賀雪子

聞なれし庭の木枯けさよりは梅が香送る風となりぬ

◎同　　兵庫　山下とめ子

朝けたく民のかまどの烟りさへ賑むと見えて春は來にけり

◎同　　熊本　下村うみ子

春立ちてわびしきひなもなかりけり君の御代歌ふ聲高くして

新體詩

消えぬ思ひ

下野國下都賀郡中村大字下河原田四十九番地　神山ふみ子

（天）

消えぬ恨みは、根にのこり、
ことしも我れば泣けとてか、
おもへば、昔せのきみと、
花に眠れるめをの蝶、
のどかにかすむ花蔭や、
ちかひしものを、はかなしや、
つきぬ誓のいさゝ川。
ちかひしものを、はかなしや、
かゞみにうつる面影の、
ものや思ふと人とふも、
身はなきものとしりながら、
何にとはなしに、其のかみの、
又くる春にもえいでゝ、
一花さきぬ、すみれぐさ。
袖ふりはへて、櫻がり、
はかなき夢の春なりき。
今日のちぎりのながかれと、
君は嵐にちりはてゝ。
今日のちぎりの絶えざれと、
君は、かへらぬ水泡にて。
やつれはてしも理りや。
我れに得堪へぬつらさ哉。
くりかへさるゝをだまきに、
笑み、まだ消えぬこゝちして。

（地）

新月

陸中釜石　水橋康子

たれをまつらむ
心づくしの
あての姫君
御窓をもれて
細き白なみ
入江のあしや
千くさつゆ艸
いつたどりけむ
戀ひといふとや
狂へりとかや
なれら、きたなき
われつゆしらず、
昔の戀ひに
詩人の飢を
うつゝの愛の
たゞなつかしの
夢となりたる
湖の岸に
なき人ひきし
忘られかれて
これをも戀ひと
すさみにか
琴の音、
すみたまふ
き、ゆなり。
よせかへる
いとすゝき
茂きみち、
夢にして。
世の人ら。
里の子ら。
こゝろかな。
姫君を。
やせはてし
みたせるは、
いろならず。
琴の音よ。
かの夕べ。
うちながむ、
バイオリン、
戀ひしくて、
人いふか。

湖の神ぞ、　しろしめす。
たゞなつかしの　琴の音よ。
つゆ姫君を　われしらず。
琴の音やみぬ。　いざゆかむ。
あな、ともし火も　消れたり。
さらば、姫君、　れぷりませ。
戀ひならねども、　靜けくて。
千尋の上に、　波の上に、
光やさしき　六日月、
清くかわゆき　姿かな。
姫もなさなく　おはしてよ。

（雨紅評）　やゝ詩趣を得たり

孤閨嘆

伊勢宇治山田町岡本藤田喜作方　島村つや子

【人】

村さめ晴れて雲はれて、　松のあらしの音たえて、
露ちる庭の木の間より、　もれくる月の影きよし。
あはれ、いづくの空にして、　こよひの月を、我が夫は。
さても、いかなる宿にして、　この月かげを、我が夫は。
いつは歸りと待つ中に、　秋さへ三度めぐり來て、
つきの桂は、かげすめど、　すまぬは、妾のこゝろ也。
夜ごとを暗き燈火の、　火かげさびしくぬふ衣の、
針目の數は、ありとても、　夫を忘るゝひまぞなき。
逢ぶ日數のあさくして、　別るゝことの、かく許り、
早しと心に、ゆめしらば、　などて契りの早かりし。
思へば、三とせのその昔、　袂をわかちし江上の、
湖はつれにかへれども、　歸らぬ人ぞ恨みなる。

（雨江評）　平凡にはあれど、その情はきこえたり。

國文

枯野の夕ぐれ

埼玉縣岩槻町　大亦たか子

【天】

何となう、たれこめてのみありしほどに、籬の白菊もうつろひはてぬ、さても、ありし花野のさまよ、いかなちむ。人目も草もと打ちかこつらんと、あはれにいとほしうて、すごろ門立ち出づ。刈り込みし樫の生垣、日影を遮る背戸の小路、靜にたどる足の下に、霜の花、さく／＼と音してくだけぬ。

あはれ、榮枯盛衰のことわりなど、いはむも今さらめけど、さるにても見渡すかぎり、凄寂たるは、枯野のさまかな。そもや、わかく、のどやかに、はな／＼しかりつる春野の床、いづらざるは、千草の花のとり／＼、見る眼もあやに、蟲の音さぐりしきのふのけしきは、いづこ。樂しかりしよ、すぎつる春の頃、ゆかりの色うるはしくにほひ出てたる菫の花の、塵のよのけがれもしらぬ微笑を、くるへる駒の蹄に、蹈みにじられむあたらしさに、せめてはあせなむ後の思ひ出でにもやと、あたゝかき吾が手につみて、つくりし紫の花束、それよ、こゝなる小川の水清く、心ありげにゆくが、ゆかしうて、あはれ、何方なりとも、世の塵

遠き境に、永き秋の楽しみをくり返せとて、そとうかべやりし、水はやさしくさゝやきつゝ、うれしげなるかのほゝえみを、のせてゆるく流れき、その行方もしのばるるや、岸邊にたちてさしのぞけば、あなや、水かれがれに薄氷して底に落葉の朽ちゆくも見ゆるに、たが投げ入れけむ、古草鞋の、半は水の上にあらはれたるに、解けやらぬ霜のましろにぞ。

力よわき夕日、斜に枯野の末にうすれゆく、木枯一しきりすさまじく荒れて、廣き野面にたてるは、われのみ。さなり、かしこに見ゆる老松の色ある一本と、われとのみ。げにや、年寒うして霜にやつれぬ松の緑、なごれる色ひやゝかに、枯生を見下してたつ。

神のたくみに、人の世を飾りし岡の紅葉、名残りもなく、やぶりすてにし風のゆくへ、今こそは尋ねあひつるよ。琴の音色のそれならねど、この松陰にたちてきけば、よそにえしらぬ風の聲ぞきこゆ



る、つれなき風の住かならでやは。見あぐる松が枝に、ふと、烏瓜のあくまでもあかきが一ツ、やうやうすがりぬ、おもはすのさまかな。蔓高くも這ひまつはりしことよ。蔓も根も枯れはてしさまの、あはれげなるを、なほしらぬさまに、少し打ちゆらめきたる、かくても頼む稍かとあはれになむ。

しのぶ思ひの穂にいでゝ、かつてはたれを招きけむ、尾花が袖の、見るかひもなく枯れたるが、あなめあなめと、音にこそたてれ、悲しげにわれをさし招くと見ゆるにあさましうて、おぼえず涙こぼれぬ。ゆめのよに、うつゝなき身の一生ながら、さるにても、人の心の奥もしられて、わかき吾が身の老いゆくさきも、頼みがたなう打ちかこたるゝ。

われともわかず、たゝずむ背に、ちひさき足音、ばた〳〵ときこえて、十ばかりなる童の、つと馳せぬけつ。織目あらき布子の、肌うすげなる姿いぢらしく、稚どけの

士、こちたくつきし藁草履、重げにひきて、右手に白てうの德利提げたり。あはれ、誰が家の子ぞ。父が歸りをまちうけの、村酒買ふべくゆけるなるか、野末のかなた、夕げの煙たなびく森かげ、竹の編戸のほとりに立つ人ひとり。夫や歸る、唄か子遲しとまつなるべし。童よ、いそぎて歸れ、さても、今宵、いかに樂しかるべき團欒のまとゐぞ。朔風ぞと肌をさしぬ、いだくも時をすごしけるよ、われにも人のまちて在せむに。

空には、灰色の幕、ひくゝたれて、雪げの風、身をきるばかりに、晩鴉の聲もたえはてぬ。いづこなるらむ、大雪小雪、ふれふれ雪よと、唄るが如き村童のこゑ、かすかにきこえて、今し、六つの花びら、ちらちらと、吾が袖にちりかゝりぬ。あしたはまた、いふに埋れゆく枯野の末ならむ。

（雨江野）　あはれに淋しき枯野の情景、みやびやかにも描かれしものかな。父が酒を買ひに行く村童をとり來たれる、一段の情景を添へて面白し。「我れにも待つ人あらん」の情も誠におもしろし。筆の運びも平凡ならず。趣味の掬すべき多く文才見えたり。

戀しき君

下野國宇都宮清住町
八十番地横塚サト方　青木ふぢ子

（地）
先だつも後るゝも同じ夢の世とはいひながら、契りし君に先だゝれしこそ、こよなう戀しけれ。妾、たらちねの膝下をはなれて、學びの園に遊びしより今に三年、戀しきこと、悼ましきこと、その數を盡せども、未だかくばかり戀しく悼ましきことはなかりけり。何事も共に學戻り業遂けてむ後にこそと、常々おほせられし御言葉も、今ははや仇となりぬ。あはれ、九泉へ行きましし君、今妾の悲しみを如何に見給ふぞや。げにはかなきものは、人の命なり。けにまゝならぬものは、この浮世なり。人の命は草の葉末における露とはいへ、などかくうるはしき君をば散らしし。如何にまゝならぬ浮世とはいへ、などかくまでに妾を苦しむる。二荒の山の春の花、田川の里の秋の月、思へば、昔の夢は、いと樂しかりき。いにし三十年の春なりしか、試驗の休みも今日を限りといふ日、またしばし逢はればとていてまして、日頃好まぬ酒に醉ひ給ひ、いと樂しげに、おのが前途の希望など語り、そなたも必ず怠りの心な出だしぞ、暇あらば歌詠むこともならへよ、文作ることもよくせよなどおほせられて、いと美しき硯さへ給はりぬ。その御硯今こゝにありて、其の御言葉今なほ耳にあれど、この歌、この文、また誰れにか見せまつらむ。あはれ、歌ならへとは、この哀れうたへとにはあらざりしならむに。あはれ、文よくせよとは、この悲しびうつせとにはあらざりしならむに。この御硯、今は千行の涙を湛へて、長へに悲哀の紀念とぞなりぬるかなしさよ。

はじめ、妾の君と相見しは、今より五とせの昔にて、すぎし二十九年の春なりき。未だ公の式をこそ擧げね、その睦び、今より思ひ出づるだに、涙の種なり。去年の秋君が東都に病めりし時の妾の心づかひ、如何なりしぞ。君の病いよ〳〵重りて、人々に扶けられて、宇都宮の停車場に着きたまひし時の御面影、今に忘られず。やつれくぼみたる兩の眼より、熱き涙をはら〳〵とおとさせ給ひて、無言に妾が腕握られし時の心地、更に現とも覺えず。あはれ、その時のおよびの細かりしことよ。力の弱かりしことよ。その時までも、なほ見舞の禮いはれしことの情の深さよ。附き添ひの看護婦より、覺束なきことのよし聞きて、人心地失せし時の

安けさよ。あはれ、その時、やがて此の玉の緒の絶えも果てなば、今此の悲しびはなかりしものを。なまじひに、こゝちの出でて、生きながらへしことのうたてさよ。あはれ、君の逝かれしは、去年の今宵にて、月もおぼろの夜なりけり。幾多の月日病み給ひし御からだは、誠にれむるが如くにて、人々の悲しみも、妾のわめきもよそにして、遂に無情の人となられぬ。あゝ、止みぬるかな。いとしの君、色香なほ盛りにして、秋の木の葉と共に散り。み魂は空しく北邙の山下に迷ふ。君が萬の事休せると共に、妾が萬の事また休せり。悲しきかも、悼ましきかも。あはれうたてき世や。會へばわかれ、生くれば死する習ひとはいへ、いとしの君の、寒風こほるおくつきの下に、人事絶えて眠りませるを思ひやれば、いかでわが涙のかきくらされでやは。あゝ、君逝いて、はや一年の月日は過ぎたれど、妾が悲しみは未だ盡きず。君が紀念なる墓標の文字は、雨に打たれて日々に薄らぎ行けど妾が心なる君の面影は、いよゝ明かなり。あゝ、此の身、あゝ、この身、未だ朽ちずして、血は熱し涙は湧く。忘れむとするも、うべからず。悲しまじとするも、うべからず。あゝ妾が愁の絶ゆ、悲みの止まん時は、妾が涙涸れ、血冷えし時なり。あゝ、味氣なの世や。あゝ、悲しの世や。

（雨江評）文、今一しほとおぼゆるところあれど、筆すなほに、しとやかにして、その情も、一わたりはつくされたり。且つ文才も見えざるにあらず。硯の形見に泣くあたり、殊にこれを示せり。

冬の夕暮

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

《人》

風うす寒き冬のたそがれ、夕日斜に破窓より机の上を照せば、文におき、歌もうかばず、獨り淋しく物思ひに沈み居し妾は、何とはなしに、筆と座をはなれて、いつくか柴折戸を後にしぬ。畔道つたひ、一歩一歩、塵の巷をはなれくれば、見渡す限り田又田、畑又畑、山又山は、皆初冬の色見えて、綠色滴るばかり美しかりし木々の梢は、かげもなく、田の面に黄金の浪を漂はせし稻草は、いつのまにか刈りとられ、野邊の千草も、いろ〱にうつろひ果て、木枯の寒く吹く毎、葉末に暫時はかなさうたふ露の玉の、はらはらと零れ落つるなど、いとゞ、哀れ深く、年頃住みなれし山家も、淋しさのいやます心地せられぬ。何處をそれと定めもなく、心のゆくがまゝ、あゆみはこべば、四方より群立鳥は、遙に見ゆるこんもりと黑ずみたる松原の中に落ちて、みそらには、小さき黑き影きえぬ。仰げば夕ばえの雲は、きら〱と照り添ひて、黄金色なせる大空の、まもなく一むらの紫雲に包まれて、うすく朧に花やかなりし夕暮のなごりを止めぬ。目をめぐらせば、右手につらなる汽車道の堤小高く、そが彼方に、高く低く太く細く立てられたる烟突の、多くは烟をはき出だせるなど、更にめづらかなる眺めにはあらざるも、また塵中の趣あり。折柄、木の下かげに駒とめてと、靜かなる大空の靄をゆるがして、細く可愛らしき聲のひゞきぬ。心にとまりてふりかへり見れば、二三間後の道を、愛らしき少女等二人、夕風に四ツの袂をあふらせつゝ、恥しげもなく、花の唇大きくひらき、かたみに歌ひて歸り行く樣は、まことに物思ひなき人の世の春。雲は少しく漂よひて、夕日は高くうすく、二人の背をてらしつゝ、西の端山に傾きかけぬ。妾は宛然、塵の巷を逃れいでゝ、樂しく平和なる神のみ園に遊びたはぶるかの如く、暫は我にはあらず、二人の後影を見送りゐぬ。夕日はいつか森の彼方に落ちて、眼に見ゆる限り、野も山も漸く黄昏の色を示し、畑には菜の蒼みたる細大根の、シツトリと水氣をふくみ、露重げにうな

だれたる。川下つゞき堤の彼方には、馬の嘶く聲と共に、チンチリンと鈴の音かろく、さては、濁み聲に馬子歌うたふ節をかしげに、煙のやうな人影、ちら／＼とほの見えしが、やがて、また見えずなりぬ。農家漁家より洩るゝ夕烟は、むら／＼と高く昇りて、やがてかすかにうすれゆくとき、商家よりほのめき出づる燈火の三點四點。

妾は猶木立の間を行き行けば、木の葉はら／＼と襟に帶に袂にふれて、落葉にうづ高く道を埋め、あゆめばざく／＼と音もしぬ。風少しく出で、雲は南に流れ、幽にきこゆる夕暮の鐘の、細く長く餘韻をひきて、年ふりたる松の梢にきへぬ、月は早くとさし昇り、さら／＼と音たてつゝ、木立の間をぬうて流るゝ一脈の小川を、白く照せり。

顧れば、いつゝいかにして、此處まではきたりけむ。藁屋根は腐り、軒は傾き、八重葎恣に生ひしげりたる見るかげもなき破家の前に、妾は立ち止まれり。中空を見上ぐれば、星の光りは濃くきらめきて、天のさゝやきを傳ふるかと思はれぬ。妾は、しげ／＼と破家を見つむる事暫、やがて心の底にひそみゐし悲しみは、稲妻の如くひらめき出でゝ、はら／＼と曾頭ぶの涙にむせびぬ。何故なればか。あやし。いかなる故にとか。あはれと云へば哀れ、果敢なしと云へば。はかなしや。そは、忘れもやらぬ去年の秋、葉末の露と消えにたる我が友、立花清子の君の住居にてありければなり。去年までは富み榮えし家も、一朝浮世の逆風に襲はれて、さしも富豪よ高貴よと稱へられし名家も、輙く不幸に傾きかけ、ありとあらゆる家産は、皆人手に渡りつ。さるに、さるに、ぞが上、我が友清子の君には、果敢なき思ひの積りつもりて、悲しや、終に枕も上らずなりはてぬ。實にはかなきは、葉末における露にもまさる人の命や。一日病室をとひまつれば、何事ものたまはで、さだめなき世の樣や、妾はひたすらやさしき死の神の御手にすがらんのみと、たゞにそれのみ、やがて其の日の夕よ、朝の露のそれよりもはかなく消えさせ給ひぬ。後にのこされし妾の心やいかなりけん、思はじとすれば、胸せまり、泣じとすれど、涙はおのづと瞼をはなれ、人知れず秋の露をしぼりしを、幾度なりけん。或は淋しき秋の夕べ、又は霜かれの冬の朝には、袖ふりはへて遊びにし樂しき昔、思ひ出されて、いとゞ口惜しき事のみぞなる。あゝそれよ、そも一年の昔しとなりける今日今宵、君が門邊に只一人昔の事ども忍ひ出て、斷腸の涙をそゝぎつゝ思ひみだるゝ妾あるを、松緑なるおくつちの本にとこしへに眠らるゝ哀れなる君、なつかしき清子の君の、あはれいかに知り給ふらむ。あゝ。

妾は、いつかはてなき想に耽りて、心は夜と共に沈み行くに、庭の松風聲をのみて、一本柳そよ／＼とそよげむ、露か涙かはら／＼と襟元にこぼれかゝりぬ。夕暮淋しき田舍道の小草も、あはれ何をか恨む、さらさらとささやくが如き葉ずれに聲あり。見上ぐれば浮雲空にひろごりて、さつと吹きくる夜風はいと冷たく、露けき衣袂をはらうて、身いよ／＼冷なり。

（雨江評）文、いまだしき所はあれども、鮮しめやかにして、自ら哀も情もあはれにきこえたり。

消息文

梅の初花給はりし人の許に

すみれ

【天】今年はわけてもおさむさ厳しう、隙もる風の身にしみ候て、冬の最中とあやまたれ候ほどにて、まして霜にまかせたるこゝの庭の梅は、紅唇か

たうかみしめて、何時ひらくべしともおもはれぬ折柄、細くなる御文に添へて、にほひ得ないぬ初花たまはりしかたじけなさよ。おん兄君樣の深くたしなみあらせたまふ道のよしは、かれ〲承はり居り候ひしが、この花ひらにこそ、日頃の御丹精あらはれて、床しうながめ入り參らせ候。御文によれば、兄君樣御出入りのさる宮家の大奥へも、これと等しきを奉り給ひしよし。あはれ、花の運もさま〲なる事と存じ候。一つは金殿の中若香の煙にむせぶ姫君が文机のほとりに、その美をたゝへられて、優なる人の御なぐさみ。これはまた賤が伏屋の破窓のもと、何事も足らぬがちなる我等がかひなき伴花やこゝろあらば、雲井の上たかき〲幸をうらやむべくさなくば、これを宿世とあきらめてあるじかおもひに同情よすらんかとも存じ候。

あなた樣は、これより世にいで給ふ御身なり。吹雪の中なほ嚴然とほゝゑむ梅の操にならひ給ひて、これをば、女性が朝夕の心の手本に御らんなさるべく、何事もつゝまやかに女のゆくべき道を盡して、世に交はり給ふやう、御すゝめ申し上げ候なべての女が、梅を理想とし、導者といたさば、女の織手もて世の男子を助け世の中に立つべきいさをも必ず多からんと信じ參らせ候。見そなはせ、ローズを以て一世の花となす泰西の婦人等、あまりにも〲漫心ふかくなりつゝあるやう見うけ申候。よしや、夜會の御襟飾、御胸には紅薔薇かざり給ふとも、心はいつもこの梅の花にならひ給ふやう、近頃さしてがましき申條ながら、右申し上げ候。



もとより我が宿、鶯の媚音もて、このたまもりのにむくゆる事かなひがたきまゝ、御かへしうたなきを、不風流とながめ給ひそ。この一箱は、風月堂の趣向こらしゝものゝよしに候へば。御目にかけ參らせ候。やがて清らかなるお二階のお火鉢の玉露のかをりめでさせ給ふ折、御試み下され度、御口に叶ひ候はば、わがよろこびの心屆きたりとおぼしめし下され度候。

まことや〲、女の交りは、學校に在りし間こそ、細やかなれ。世にいでゝ、妻たり母たるの曉は、現在の愛と親しみかはりゆきて、友情次第にうすれゆく悲しさには、誰れありてか、我が門おとなふ人もなく、世は花に月にはた雪にたのしき折、こゝのみは冬枯のさまにて候。何卒、四季折々、やさしき御心たまはりたく、さても、ものいはぬ花君かみ心のうれしさにけふは我が耳に數々やさしきことのは、さゝやき申し候。この後とてもよ兄君が御こゝろづくしのみむろより、御許樣お手づからのを、偏に〲ねがい上げ參らせ候

あら〲かしこ

（評）　別に優れたる所はなけれども、一わたり整ひたり。一篇の趣向、梅を離れずして書きたる、その題にかなひて、よし。

離婚を乞はんとする妹の許に

信州上水内郡榮村
住良木四八一番地　小林恒子

（地）

美はしかりし四方山のもみぢ、いつしか落葉して、枯れはてし梢に鳴く鳥の聲さへ、そゞろに冬のあはれの知られ候ふ折柄、そなた始め御家内御一統様、如何御暮らし遊ばされ候や。絶えて久しく御無音に打ち過ぎ候ふものから、さらに御様子詳かならず、御伺ひ申し上げ候。いつも同じ事を繰り返すに過ぎざれど、何事につけてもからだの丈夫なるが第一故、折角御養生遊ばさるべく、殊に御地は山國の事迚、寒さも一層強く存じ候間、御注意の上にも御注意なさるべく候。

さても、そなた事縁づかれ候ひてより、早や半年に相成り、四海浪靜にと舞ひ納めたる高砂の曲の尾上の松の相生のみどり、いや濃かに御暮しなさるゝことと斗り存じ居り候處、此の程國元なる母様よりの御手紙にて、そなたの上につきて、思ひもよらぬ事うち聞き、いたく心にかゝり申し候。そなた引き移り候ひてより間もなく、御家内何となく圓かならで、角芽立つ葦の葉風の縺れ合ひも尠なからぬとの御噺のみならず、そなたには、迚も堪へられぬとやらにて、忌ばしき御意見をもそれとうちいでられかねまじき御心底の由、うち驚かれ候まゝ、取り急ぎ申し上ぐる事に候。能く／＼御熟考を願ひ度く、只管願み入り候。あとやさきにていとたど／＼しき筆にはあれど、夜半燈火の光りしづけき所、ふかく／＼讀み味ひて、姉が心を御汲取り下され度く候。才學の點より云へば、斯く云ふ姉は、遠くそなたに及ぶべくもあられねば、あるは何くれと御さげすみも候はんが、姉は年かさなる丈け、それ丈け、曾て世のあら浪にもまれ候ふためしも覺え居り候得者、ゆめ苟めの言の葉と實はせられず、何卒／＼取り分けて御きゝ入れくだされたく候。

すべて内輪の縺れ合ひなど、云ふものは、池の面の漣と等しく、絶えずありとは見ゆれども、ゆゝしきものには御座なく候。なるほど姑御とても當時御つれあひに別れさせ給ひて、さらでも御物淋しき折柄、何かと御氣に觸れ易くと存ぜられ候得共、月日の立つに從ひ、いつともなく御和ぎ遊ばさるべく候。殊に、それとても世間一般の嫁たるものゝ忍ぶ所に候へば、いかで、そなた一人のみえたへぬといふ理あらんや。まして、世間の人は、いづれも、姑御のつよき言はで、嫁のよしあしのみ、とかくに取りはやし候ふ習ひ、あるは云ひしらぬ悲しきことの出來候ふとも、たゞ／＼堪忍の二字を守りて、まげて暫く御しのびなさるべく候。母様もつね／＼『堪忍の袋を常に胸にかけ、破れたら縫ひ、破れたら縫ひ』と訓へられ申し候。又た、夫の武雄殿も、鑛山事業御失敗以來、御品行一變して、放蕩無賴日々につのり、すこしも家事を顧み給はず、日夜花柳の巷に彷徨(さまよ)はれ候ふ由、素より内氣育ちの女子の身迚、とやかく心惱まし候ふも、道理なれど、其の折から丸からぬ事など言ひ出て候ひては、それこそ、波風いよ／＼荒れて、相生の松は名のみに、鴛鴦の契りも破れ候はゝ、復た繼ぎ合はすべき由なくなり行き申す可く候。『糸は千たび切れても繋ぐ、つまと切れゝばつながれぬ』とは、幼き頃より俚謠にも聞き及び居り候。さ候へば、後に至り、何として彼の時あのやうに心短かゝりしか、あゝさまでせぬとも濟みにしものをなどと悔ゆるが、大方の常に候ふが、覆水は終に盆に歸らず候。

願くは、誠意誠實、元々柔順なるおん心ばへを、ひとしほ優しくして、勵りかしづきまゐらせたまへ。もとより相思の情からぬ仲の程も無く、愛を一つの宮として、希望の星も見えそめて、そこに二人が契るなる、晝夜慇懃の睦事に、つひに明くるを惜む位に相成るべく候。猶又た小姑

どのゝふたりしかく〲とか。愆はこれ頑是なく、他愛なきものゝ、意に叶へは懐き、心に合ねば離るゝ、さればたゞ善巧方便臨機應變の手心さへとり玉へば、却りてそなたの幇助とも相成るべく候。其の他の小さき出來ごとは、氣に懸くれば、果てしなきもの、隨分忍び難きを忍び、耐へ難きをこらへて、常に『克己』の精神を養ひ、目つぶり、唇しめて打過ごさる可く候。もとより肉親の姉なれは、片手落ちにそなたのみ惡しとは云はず。唯三界に家無しと云はれし女子の身の、只辛抱が第一に候。見給はずや、やがてわだつみとなるべき水さへ。始めは落葉を潜り、岩にせかるゝためし、辛きは世の中の習ひにて候。また、早瀬の浪にも月は宿り、丸き卵も切り様にて、四角にも三角にもなるさま見れば、何の儘一生の間、やつてやられぬこともあるまじく候。むづかしきためし引く迄もなし、姉も嫁ぎし初めの一年二年は、人こそ知られ、數紗の枕濡らさぬ夜迚は無かりしが、三界に家なしと云はるゝ身の諦めて、深き緣なれはと悟りもしつ。且つは、かゝる運命にこそありけれと、獨り止みがたき胸を擦りて、うき月日を送りしが、今は見らるゝ通り、多年理想の家庭を描き出して、たゞ樂園の心地して樂しくくらし居り候。古き歌にも『事足らぬ世をなうらみぞ鴫の足の短かくてこそ浮む瀨もあれ』。『つらけれどうらみんとばたおもほえずたゞ行末を賴む心に』などいへる心を、よくよく汲み分けさせ給ひて、くれ〲もはやまりたるとは、決してなさる可らず候。尙ほ此の來月は、一寸歸省すべき都合に御座候ふ儘、萬づは其の節にと申し殘し盃らせ候。早々かしこ。

（兩江評）　筆は面白きところなけれども、その意はつくしたり。

姉の亡くなりしを訪はれしに返しゝ文

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

（人）

空はしぐれて晴間も見えず、露けき袖のいとゞ猶打しめりがちの折柄、いつにかはらぬやさしき御玉章、消えなん玉の緖のつなぎもとめられし心地して、いともいともうれしう拜し申し候。

葉末の露のそれよりもはかなきは人の命と、かねてより悟りゐ候ものゝ、すぐせ杖とも柱とも賴みて候只一人の姉の、盛りもいまだつきざるに、思へば思へば悲しく細く、いかなればかくも世を早うせし事ならんと、思へば思へば悲しく情けなく、日頃好める文に心をやらん元氣もうせはてゝ、小さき胸に溢うつ涙と亂れくる淚の雨の、いとしげく、日毎夜毎ひまもなき袖の露、哀れとおしはかり給ひてよ。こん日には、御許樣姉もろとも三人樂しく、忍ぶが岡に紅葉狩りせむと、かたみに契りおき候言の葉も、あはれあはれ、あだと相成り候事のいと口惜しくうらめしく、いかなれば世はかくもつれなきものぞ、あしたに祈る御佛も、夕に願ふ神樣も、風たゝぬ家の幸のみ、仇し心は露ほどなく、誠心こめて、ひたすらにれぎまつりしものなるを、さては、神佛もなき世なりけん、さあらずば、恐しき死の神、憎き々々死の神の、樂しき我等一家を妬みてなせる業にはあらざるか。罪なき姉を、慈しき姉を、暗きよみぢに迷はせしにはあらざるかと、やるせなきまゝ、返らぬ事ども思ひつゞけて、恨みつ歎きつ、はてはせきくる淚とゞめ難くて、いよいよあきらめかれ申し候。

行く水の猶それよりも淸く美はしくかき流し給へる御玉章に、あつき御

情の程見えて、いと〳〵うれしく、讀み終るや否や、せめてなき靈にそなへんものと、佛壇にみあかしかゝげ、白紙はれる位牌の前にぬかづきて、事こまん〳〵と告げまつり、はてなき事どもくりかへして、暫くは身の程の忘られ申し候。さぞや、姉のみたまも、やさしく情深き御許様の御心をいかにうれしく、ほゝゑみてうけしならんと存じ申し候。桐の一葉のそれよりもろく、戀しき姉のうせはてしよりは、そこゝに立てる枯尾花を眺めても、せゝらぐ小川の流れをきゝても、皆悲しみの種となり、千々の思ひを己が身一つにあつめし心地いたし候。そよ〳〵と吹きくる風冷かなる夕には、あはれ、妾も共に無常の風にさそはれて、同じ烟となりもやせんなど、はかなき事のみ思ひうかめられ申すになん。吹く風寒く小雨そぼふる宵々は、いとゞ悲しさ堪へがたく、軒の松風ほと〳〵と柴の戸をたゝく音にも、もしや、もしや、戀しき姉のなきたまのそれかと怪しまれ、心も空に立ち出てしも幾度なりけむ。あはれ、あはれ、そは仇にて候ひしものを。

やさしき御玉章にも、あまり悲しみ歎きておのが身損ぬる事なき様にと、いともうれしき御言の葉もおはす事故、あまりに思ひ屈すまじと存じ侍れど、ゆるさせ給へ、甲斐なき妾の心には、とてもかくても思ひあきらめかね申し候。千々の歎きに思ひ亂るゝはかなき身は、やさしき御許様のとぶらひたまふ事なくば、いかて、いかて、これよりの日をえ過し候はん。夢々忘れさせ給ふな。かく女々しき事のみ申しきこゆるも、皆々かきくらす心の闇、はた、隔てなき間柄故と、御ゆるし下され度候。今宵は窓うつ風の音寒く、庭の木の葉のはら〳〵と地に落ちて、猶一しほ哀れ深う覺え候に、秋におくれしこほろぎの、枯れ〳〵の聲もて、果敢なき世をはむせぶが如く鳴き出せるなど、いよ〳〵亂るゝ思ひに、筆のゆくへも知らず、いと亂れがちなる文の心、よろしく御推讀下され度く候。かしこ。

（雨江評）文、やゝくだ〳〵しけれど、その情はきこえたり。

雜文

◉懺悔錄

和歌山　藤田いさを

（一）

母にのこされ、父にすてられては、弱きは女の常、人の手にやしなはるゝ身となりて、都のそらにあくがれよりてより、我れは、うれひの子となり、かなしみの子となりて、こゝろ常にくらきやみぢをさまよひて、新月のきよけき光をしらず、うつくしのかげ、はえの色、我が目にはうつらずして、秋の日のゆふべの光や、草の葉末の露の色や、はかなきはかなきまぼろしの輝きのそれは、よろこびの思ひをはらひつくして、夜中のもだえ、まだきのなやみ、思ひはいよゝ靜と遠ざかりゆくのみなりき。

（二）

かくして、叫ばむや、聲にかぎりあり、泣かむか、涙はつきてかなしみはなほ殘れるをさとりし時、我れはおそろしき怒りの子となりぬ。心はくるひ、血はもえて、聖が說ける義や道や、心にはその片影だになく、我れをくるしめ人をそこなはむとするものをば、一々うち斃して、其の肉をはみ、其の血をすゝりて、くるへる心の怒りを和げむことを望みぬ。

おそろしの我れよ。

それより我がこゑは、のゝしりのひゞきを傳へ、我が笑みは、あざけり

の意味をたゝへ來りぬ。

（三）

人は笑ひて愚となしぬ。友は誹めて狂となしぬ。

我れ遂に、共に語るべからざるものとなし、都ないとふ思ひ起りて、曇田の濁流を後にし、若溪の悪水を見捨てゝ飄然、父なく母なき、山里のさびしきふるさとの地に今歸り來れるなり。

けがれにけがれたりしかたくなの我が心は、この清淨崇高の風趣に接せし時、うれひは晴れぬ。怒りは解けぬ。いざやいざ、永劫の神のみこゑをしづけき谷間の空にのこしつゝ、流れゆくいさゝ小川の清けき心に、我が過去の罪深かりしを詫び奉り、鬱蒼として地を掩ひ、百合の幽花其の下影に白きワイルダーチスの森嚴なる御姿に對して、過去の小さかりし我が心を悔ひまつらむ。

（四）

あはれなる人の子は、胸には常に情慾を絶たず、野心を忘れず、猜疑の鬼や嫉妬の惡覺に責められ罪惡の種子をまきつ育てつゝありながら、猶天を仰いで萬物の靈長なりと誇れり。

その面わ、その目、その口、憎くからでやは。

紘を呼びて高樓に醉酒するの餘裕ある富者の眼には、凛烈の寒風に吹かれて、當に絶息せんとする貧兒貧女のあはれなる姿はうつらざるか、否否、否、うつれりうつれり。而かも冷眼を以て見ざるを裝ふ。

其の姿、いかで憎くからでやは。

此處には、美人の名を貪らむとして、人道の假面を以て其が黑きけがれたる顔を掩へるものあり。かしこには、獸慾を遂げむとして、徒のうはしき光に、忌はしき心を裝へるものあり。

其のこゝろども、いかで、いかで、憎くからでやは。薄倖なる境遇にありて、これ等濁れる社會の樣を見たるとき、我が怒りは心頭に發して、颱風の如く激動しぬ。

（五）

我が血は火の如く熱し我が骨は鳴りき。丈なす黒髪は、元結切つてふり亂したり。

霹靂の雷霆、閃々の紫電、瞑々としてやさしき光かくるゝ月蝕の夜、火の山一時に魔性を現して、猛然と噴出する熱火、我れの愛でこのおすべてのものはこれなりき。人の衰亡死滅せんこと、疾風怒號して人畜皆鳴せんこと、黑闇々の夜半、匕首を握りて血を大空に吐かんこと、葬の席に於て、俗衆の泣きかなしむ時、呵々手を拍つ快哉を呼ばなんことは、我れの願ひ、望みのすべてなりき。

おそろしの我れよ、サタンの權化か、然なりき。

されど、我れは、かよわき女なり。

（六）

思ふてこゝに至れば、世のにごれるを憤り、あはれなる貧兒の運命になくの涙は、たゝへて我が双眸の中に溢るれど、あはれ我が力、かよわき力、如何ともする能はざることを心に浮ぶれば、氣は自ら餒え、綿の如くつかれし五體、首うなだれて徹夜煩悶の子となるは常なりき。

世人はこの我が樣を見て、殘忍なりと云ひ、冷酷なりと呼び、狂愚とうたひぬ。而してこれ等の名は、我が熱情に對する社會の報酬なりき。

されど、故らに過激の性をためて、けがれ〳〵し人の世の情を迎へんは、我れのよくせざる所。

危ぶやな、實に危ぶやな、我が運命。

（七）

我れ遂に志の伸びざるを自覺しぬ。

この傍見するに堪へざる世の樣を見て、ひとり嘆き、ひとり憤りたりとて、何の實効かある。寧ろ見ざるの安きに若かず。さなり、さなり、生は寄とかや、死は歸とかや、人生何物ぞ、宇宙そも何物ぞ、條理なき此の世に一日生くるは、一日の禍を長うするなりけり。我が生を脱する夫の蟬脱の如くならむのみ。何をかなげき、何をか憤り、何をか狂せむ。我れ遂に、暗黒の一室に、なほきらめく劔を拔きぬ。時よ、その、あはや喉に刺さんとしたる其の時よ、友の最後に遺し置きし言の葉を思ひ出てぬ。その友は、病ひの爲めに現世を去りし人にして、其の言の葉は、天職を盡し得て此の世を去らむかなしさよとの一語なりき。

あゝ、我れは誤れりき。先づ自らに對して質さんとす、何の爲めに、はた何せむが爲めに、天帝は我れを社會の一員として降し給ひしか。

（八）

あゝ、我が故郷の幽靜なる御神に對して、償い奉るは即ち此のおそろしの罪、おそろしの心。

我れ先づこゝなる溪流にのぞみて御身に、謝せむ、我れのかぎりなき浮世の海をのぞみし時、天地の靈性一時に現れ、無限の嚴威を逞うし、怒濤天をつくのおそろしき狀景をのみ思ひて、そひ幽陰の深底には、うす紫の花匂ひ、綠の水あふれ鶯の朗かなるこゑ、波の調べと共に珊瑚のこかげにきこえ、またそこには、グレシアの女神に似通ひたる乙女のいますらむやさしの想ひ湧かざりし、我が情懷の淺かりしを。

森嚴なるワイルダーネスの御姿よ、今や御身に對しては、忘念全く地を拂ふて去り、ヒユーリチー、サブライムの觀念我が心の奥にさゝやぐ。復活の生命を惠み給ひしを感謝す。

（九）

誤れりし哉、我れは地上の平和を咀はんが爲めに生れしにあらざるを覺れり。人の肉を喰ひ、人の血を啜らむが爲めに寛の命を奉じたることなきをさとれり。而して、平和を維持し惡魔を滅絶せむが爲めに、生を享けたるをさとりぬ。

あゝ、故郷のやさしき自然よ、とこしへ我れをすてざれ。われは目前の勝利をすてぬ。下界の榮華をすてたり。捨てゝかへれり幼時の罪なき我れに。あはれ、リボンは未だ紅に、帶を結せる長き編みさげ、こゝの春風にふかせし昔につゆかはらで、あゝ故郷の自然よ、めでませな。我れ今こゝに、細きもろ手を合し、端坐して祈りまつらむ、最後の勝利を永遠にさづけ給へ。天上の祝福をめぐませたまへ。（をはり）

（雨江評）　雄健なる筆づかひ、殆んど女子のものとは思はれず。書きだしは誠によし。されど、その情をしるすに至りて、あまりに理窟がましくして、反て情の人の動かすものなきを惜む。

●夜半のおもひ

信州　金關新子

二なう愛で給ふ夫のある身なるに、かゝる事思はんは、ふた心あるに似て、後ろめたき業なれば、いかで忘れん〳〵と思へども、忘れかぬるは、幼なじみの人なるよ。幾度か逢ふと見ては驚く寢覺の床、人なみならぬ身をもて、今日はいかなる里、明日はいかなる宿、はた如何なる世か送るらん。かゝる身となしまゐらせしも、皆妾が罪なり、ゆるさせたまへ。

かぞふれば、はや二十年の昔とはなりぬ。母樣と添寢の夢あたゝかに、前後も知らず臥し居りしを、ふと目覺むれば、こはいかに、あたりは烟りに包まれて、行燈の光りも、闇に埋れり。母樣や如何にと、かたへを見れば、枕ばかりにて、主はおはせず。渦卷く烟に、聲も咽びて、力の

限り助けを呼びしが、今は息も續かず、礑とそこに倒れしまゝ、その後の事はつゆ知らず。ふと我が名を呼ぶ聲の、遠く聞ゆる樣なるに、驚きて目を開けば、母樣の膝を枕にて、ねぶり居たり。さては、先程の恐ろしかりしは、夢にてやありけんと、四邊を見廻せば、祖父君叔父君を始め、あまたの人々、我が身を圍みて居給へり。母樣は嬉しげに、おゝお新、氣のつきしか、嘸かし苦しかりしならむ。それにつけても、芳松の事をな忘れそ。あごの再び世を見るを得たるは、皆芳松の惠なり。我れもあの時物の燒くるが如き音に、目を覺まし、あたりを見れば、烟は隣室より渦卷き入れり。すは火事よと打ち驚くと共に、離れ座敷にふしておはする祖父君のと、心に懸りて、足のふみども定まらず、戸をあくれば、そこは無事なり、急ぎ助け出だし參らせて、又もこの室に歸りくれば、はや烟みち／＼て入るを能はず。あごや如何になりにけむと、そゞろ心も狂はしく、烟をつきて入らんとするに、誰れかは知らず、我が身をつきのけ、飛び込みし人ありしが、やがて、しかと兩手にあごを抱きかゝへて出で來たりしを見れば、芳松なり。嬉しや、さては無事なりしかと、前後もしらず馳けよれば、我が身を一目見るより、そのまゝあごを抱きながらふしたふれぬ。いかにせしと胸轟き、まひるの如き火影にてらし、よく見れば、たふるゝ木にやうたれし、右の足折れて、血は淋漓たり。こはいかにと打ち驚き、助け起さんとする程に、眼を見開き、この身はかまはず、早く孃樣をと云ふに、其方を見れば、あごは息も通はぬ樣子なり。再び三たびの驚きに、心も狂ひけん、呼び活けんとする智慧も出でず、途方にくれて屋の棟の燒けくづるゝ力を恐みて、茫然たりしに、其の時、叔父上を先に、皆樣の來り給ひて、あごを始め、芳松を此の離れ屋へかき入れ給ひしなり。見よ、彼方を。芳松はあごを助けん爲めに、生れもつかぬ不具の身とはなりはてぬと、襖を開けば、そこに芳松は殆と死しけむやうに、眼をとぢて、布團の上に打ちふし居たり。見るより、心はハッと動きて、仆れぬばかり走りより、おゝ、芳松、先程はと、後は得言はず涙に咽べば、靜に目を瞬き、我が顏を眺めながら御無事なりしかと、唯一言、片頰に嬉しげなる笑みはふくめども、忍ぶ苦痛は面にあらはれしに、頑是なき童心にも、そゞろ氣づかはしく、枕に縋りて咽び泣きぬ。

　其の時、芳松は十五歲、妾は七歲の春なりき。我が身の命の親と、母樣の力の限り、手をつくし給ひしに、芳松の傷は、やう／＼癒えたれども、もとの身とはなるべくもあらず、歩む姿の可笑き迄、見る人每の笑ふを聞く妾は、胸せまりて、更に人事とは思はざりき。

　世に芳松ばかり不幸なる身は、またあらざるべし。幼き時、孤兒となりて、誰れたすくる人もなきを、母樣のあはれがり給ひて、六ツの歲より我が家に引き取りて、はごくみ育てられしなり。されば、外に同胞もなき我が身は、母樣の懷に抱かれし時より、芳松を兄とも、はた弟とも親みて、學校にゆく道は手を引かれ、遊びに出づる時は肩に負はれて、未だ片時も離れし時はあらざりき。

　かく迄親しかりし中も、年を經るに從ひて、やう／＼疎くなり增さりぬ。

　さりとて、我が心は、つゆへだてしにあらず。かたあげも取る頃となりては、さすが打ち連れ立ちて歩くも、何とやらん面見らるゝやうにて、さがなき人の口のはにかからんも、はづかしければなり。されば、三日に一度、五日に一度、顏は合はせど、用事の外は、言葉をかはすことも、絕え／＼になりはてぬ。

　ある夜の事なりき。寢られぬまゝに、起き出でゝ、窓を推せば、秋の夜の月冴え渡りて、軒端の松が枝にかゝれり。このまゝ寢ぬるも、なに

とやら惜しき心地のせらるれば、手風琴を端近く持ち出でゝ、音色ひくゞすがゝけば、訝しや、程しもあらず、籬の外に笛の音起りて・たど／＼しうも、我が樂和に合はせんとするに似たり。彈じ止めば、笛の音もはたとだえつ。それにつけても、思ひ出づるは、披分樂の昔、叔父君より賜はりし笛のありしを、彼の人に與へたりしに、いと／＼う喜びて、我がひきならふ琴に合せて、覺束なくも吹きこゝろみしを。あはれその音色を、今こゝに、いかなる人のすさびなるらんと、あやしみながら床に入りしが、明くる夜も、又その明くる夜も、笛の音の聞えぬ夜迚は無かりしかば、いよゝいぶかしさにたへざりき。

年頃となりければ、ふさはしき方あまた所より、いかてと請び求むれども、我はいつもそをいなみぬ。さはれ、こと心ありしにはあらず。たゞ何となく縁がんもの進まざりければなり。母様も、今は心のせかれ給ひけむ、我が身を一間に呼び寄せ給ひて、いつ迄も獨身にてあるまじき事女の年のふけやすき事より、我れを望む人の家富みて貴き事、さては、其の人の美はしく優しき事迄、くど／＼とのたまはせて、我が身を安心させんとならば、早く身のさだまりを付けて呉れよ。父君はそなたの未だ世に出でざる先になくなり給ひければ、今はそなたを杖柱とも頼めるに、いつまでかくてあらんには、我の心細さはいかばかりぞと、くりかへしくりかへし仰せらるゝに、いまはいなまん由もなくて、ふと窓の方を眺むれば、手桶片手に、水をこぼしながら、とぼ／＼歩む姿は、あの芳松。我れとわが不自由を如何に無念と思ふらむ。これも、皆我が爲めと、見詰むるわが眼は、いつか涙にかすみぬ。

今日は我が一世一代の祝日と、御寡婦の母様さへ、常ならず浮き立ち給ひて、部屋に籠りぬる我れを、いつまでかくてと、いそがし立て給ふに、しぶ／＼身仕舞も終り、衣裳を着などする内に、日もくれぬ。

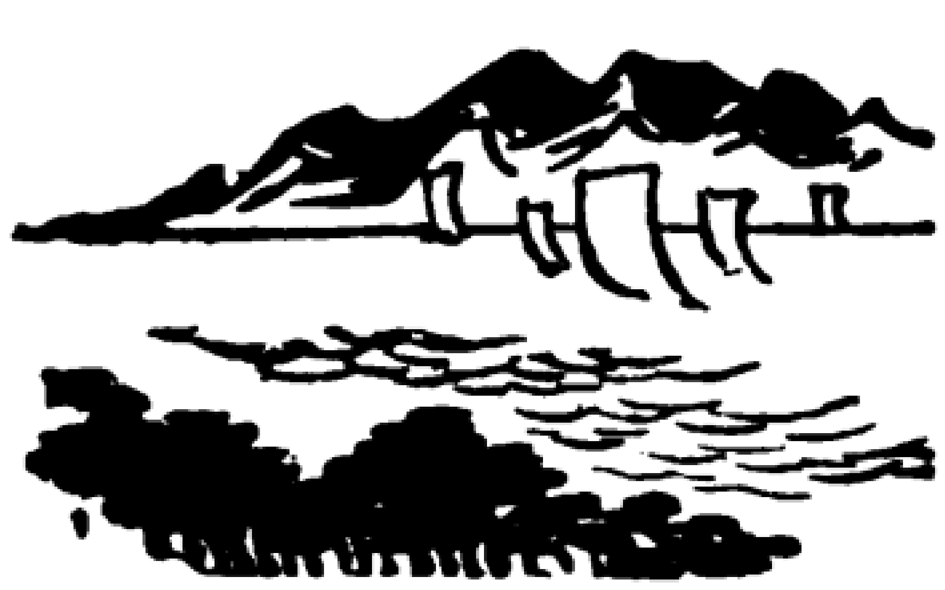
幼な馴染の家を後にして、迎への車にうちのれば、今更名残の惜まれて、ふりかへり見る門の柱に、打もたれて、此方を見おこせる芳松の姿、いと淋しく、色青ざめて病めるが如きに、我れは思はず胸を打たれて、面をそむけぬ。

芳松は、其のあくる日、誰れにも告げず、何故ともなく、すみなれし我が住家をあとにして、何處ともなく姿を隠しぬ。其の居間を探れば、名宛を我れに、一つの箱あり。開き見れば、こはいかに、たゞ一管の笛ばかり。

我れは、此の後のことを、多くは書かざるべし。身は名譽ある金満家の令夫人として、幾多の人に羨まるれども、心の底に深くきざみし森傷(?)は、あはれ、いづれの日にかいゆべき。

げに恨めしきは、浮世のさがなるよ。

(雨江評)　筆に、別に面白き所はなけれども、文整ひて、この婦人が苦しき情、さこそと思ひやられたり。



女學世界春季增刊

懸賞文募集

才媛詞藻

「わか草」

春の卷

投書締切　二月廿日

文種

◉小說（假名付）（二十四字詰三百行限）短篇各種

◉國文（二十四字詰五十行限）文題隨意

◉通俗文（二十四字詰百行限）文題隨意

◉書簡文（二十四字詰五十行限）文題隨意

◉新體詩（七五調三十句まで）詩題隨意

◉和歌（短歌に限ること）春季雜題

才媛文學の發達を計るべき目的を以て、四季に一回づゝ定期增刊を發行し來れる我が女學世界は、茲にまた年の改まると共に來る三月十五日を以て、其の春季增刊『わか草』を發行せむとす、此編に收むべき資料は、全篇二百八頁中その過半紙數を以て懸賞文に充て、剩餘の部分には當代名流の筆に成れる雄篇佳什並に趣味ある記事を以てし、其體裁と實質の上、舊歲の增刊よりも一層光彩を放たしめんことを期す、乞ふ江湖の才媛諸孃よ、長閑なる窓下に、其の思想を練り、旺んに美文佳作を投寄して以つて其文名を新春の才媛文壇に馳せられんことを（投稿手續は別欄規定の通）

三月十五日發行

賞品

特賞　金十圓　壹名

特賞　金五圓　壹名

（特賞は小說の優等者に限り與ふるとす）

甲賞（圖書切符）金參圓　當選者　五名

乙賞（圖書切符）金貳圓　當選者　六名

丙賞（圖書切符）金壹圓　當選者　六名

秀逸（金五十錢相當の圖書を賞與す）十二名

（注意）和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふること投書の封筒に『わか草』と必ず附記すべし
此募集廣告に特定あるものゝ外は例刊の投稿規程を準用することゝす

●懸賞和歌兼題

春季雜題

(二月分)〆切　一月十日

(天、地、人、秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す)

投稿用紙は必ず端書を用ゐること

●懸賞文(文題隨意)

◎國文◎普通文◎小説◎消息文◎新體詩

(甲、乙、丙の外秀逸十種を選び金貳圓以下の圖書切符を呈す)

●懸賞才媛畫箋募集

◎山水◎花鳥◎人物◎氣形◎器財其他

揮毫は絹、書箋紙共隨意、毎號逸品十種を撰び卷頭寫眞版として掲載し、賞金(圖書切符)を呈す

●各地風俗の寄稿を募る

本誌の編輯は、號毎に改頁を施し來たれるも、其の風俗人情に關する材料は、主として中央都會に採りたれば、聊か遺憾なしとせず、由て今後は廣く全國各地に於けるものを掲げ、以て相互に異なれる地方の風俗人情を知るの便に供する爲め、這回左記諸項に關する寄稿を歡迎す、江湖篤志の諸孃よ、乞ふ其地方に於ける特種的の風俗人情に關する事柄を其儘に記述し、續々投稿せられんことを

◎冠婚◎葬祭◎交際◎家庭◎奇習◎俚諺◎生活◎物價◎其他孝女節婦の美談佳話くさ〴〵

投稿規程(必ず守るを要す)

▲本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す▲投書の種類は文章(文は國文體及普通文に限る)詩歌(新體詩及短歌今樣の類)小説は優美にして卑猥ならざる者等とす▲投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る▲投書の用紙は半紙二ツ折り(和歌は端書に限る一葉一首の事)半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る▲投書は各種類を別紙に認め匿名を欲する者と雖も原稿紙には必其姓名住所を明記するを要す▲投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面は『女學世界原稿』と記載すると▲投書は採否に拘らず一切返戻せざる者とす

雜報

迪宮殿下の御平生

皇孫迪宮殿下には、昨年四月御降誕あらせられしより、何の御障りもなく、いとも御壯健に御成長遊ばされ「御兩親殿下の御喜び申上るまでもなく、御祖陛下の御鍾愛も一方ならず在らせらるゝと承るにつけても、吾等臣民たるもの〻歡喜此の上やあるべき、いま御近狀の二つ三つを、洩れ承りたるまゝ左に記せんに、

◉御養育の御方針

昨年御誕生あらせられしより暫くの間は東宮御所に在らせられしが御養育の御方針に就て御評議を凝らされし末お上の御召に依り從來宮中に於て育てまゐらせし方々の兎角御病氣勝なりし例も少なかられば今は方針を變へて寧ろ臣民の手に御育て申上ぐるこそ宜けれといふに決し遂に川村伯爵家へ御預けと相成宮中にては一切干渉すべからずとの御沙汰ありしかば川村伯は大命の畏きに感泣し頓て大命を拜承し伯の主任により て御育て申上ぐる事となりたり

◉大磯へ御引移の事

かゝりければ殿下には昨年七月川村家の御引移あり伯爵夫妻は精神盡力殆んど寢食を忘れて御守立て申上げ折しも盛夏の事とて山の靈氣に觸れさせ給ふ方宜しかるべしと侍醫の注意に八月八日より日光御用邸に御伴ひ申上げしに湖山の風氣御身に適せしと見え御體量も日に御增に相成り其中暑さも去りたれば九月三日に御歸京相成り爾來十月中旬迄は日々十五匁乃至三十匁づゝ御體量を增されしに中旬以來氣候の加減にや暫く御增量なかりしかば追々寒氣に向ふことゝて此度は海濱の御靜養こそ然るべしとて大磯なる鍋島侯爵邸を留し假りの御旅館に宛て之に引移らせられたるは十月廿三日の事なりし。

◉大磯御旅邸の摸樣

此大磯なる鍋島家の別莊としいへば東小磯と稱へて蒼波一碧の海濱に面せる小高き丘上に在り背は伊藤侯の滄浪閣、前には前の大隈伯別莊あり堅牢なる和風平家建の建築にて衛門の傍に巡査の交番所あり門內は細砂遠く庭園を運り泉石水樹の布置頗る其宜を得て假御殿としては差支へなき作りなり御旅邸には御養育主任川村純義伯同夫人春子、同令孃花子主任侍醫加藤照麿同侍醫局勤務本內叔三郞、同小原頼之、乳人小林シゲ同刈谷ノマ看護婦西野ノブ同西方テツの諸人絕えず御附添奉りて御守立て申上げ居れり

◉御發育の事

申上ぐるも恐多けれども御發育の御姿を洩承るに御容貌は御圓顏にて在らせられ御體の遙りふく〳〵と肥えさせ給ひ御目附は御父君殿下のおもかげを受させ給ひ御口元は御母君殿下に肖似させ給ひ其愛くるしさ申上けん言葉を知らず頻にオツコン〳〵など語らせ給ひ伯夫妻お附の者を見

給ふて笑ませ給ふ御姿の體有きは申すも更なり頃日は音までも聞け給ひ侍醫をして其御俐發に驚かしめらるゝと承る

●御生歯の事

御生歯は九月二十九日に至りて少しく提出て翌日は微かに手に觸るゝに至り翌々日は愈よ著しく遂に十一月一日には御下歯二枚明に御生出相成りたる由すべて生歯の頃は一般の小兒に取りて最も注意すべき時にて腦膜炎等の病症を發するは正に此頃の事なる上に父君殿下には曾て此御歯あらせられたりとの事なれば侍醫の人々は早くより如何やと御案じ申上げ物に苦心する所もありたるに殿下には右の如く何等の御異狀もなき御様子を見上奉り一同安堵し奉りたりと

●御日常の御事

日常の御様子を承るに、朝は六時頃お目覺に相成れば先づ前記二名の看護婦御側に伺候して御寢衣を御常服に御着替へ申上げ御乳人を召して御乳を差上げ夫より海邊をおんぶ又は御守車にて御遊れ申上げ一巡了りて御歸邸の後は又御乳召し夫より御庭又はお座敷にて玩弄物を御持せ申上げなどしてお傳し夜は七時に御寢みとなり十二時頃一度目覺になりて御乳を召し給ふ御ならひなりと承る又日常の御居間に宛てさせ給ふ處は十二疊二間にて其周邊には種々の玩弄品など飾り付け伯爵夫人、令孃、看護婦の三名は常にお側を去らず夜も詰めてお離れ申上げず看護し奉れりと

●御召物

殿下の御召物は白羽二重の御筒袖にて其下に毛の莫大小シャツと白木綿羽二重襟附の襦袢を重れ給ひ成るべく御薄着として風召さぬ用心申上げ寒き時はチャン〳〵の中袖を纏はせ給ふ中袖に二領あり一は縮緬にて御背中に菊の御紋を金にの刺繡りしたるもの、一は近頃皇后陛下より御贈呈相成りたる靏中竹の友禪もの、後者は最もお氣に召す由御寢衣は矢張白羽二重に木綿の襦袢にて御夜具も同じく白羽二重無地のものなりとお頭は御生後未た一回も御剃刀を當てまゐらせず近頃少く長きお髪を刈りて殆んど五分位になし奉り、御頭巾として毛糸の編物又は絹糸編のものを用ひさせ給ふ。

●御乳のこと

御乳は二人の乳人をして交々上げしむる事になりあれど量に上るは宜しからずとて一日六回、三時間毎に上げる定めにて先づ一回に一合乃至一合二勺位を八分十分間に吸はせ給ふことゝなり居れり人乳を一回に一合乃至一合二勺といふとに就て奇異の思を爲すものあるべけれど右は御乳を召す前に御體量を計り置き召して後再び計り奉りて此分量を知るものなりとか

御食物は御乳の外總べて差上げざることゝなり居れり今後とても充分御歯の揃ふまで差上げざる由尤も牛乳を上げる必要ある時の用心とて平生より吸口のみは御弄びとして御口に宛がひ申上げ居れりと

●御乳人の事

全躰お乳の事は初より全く牛乳を用ひず人乳を以て御育て申上げんとの方針にて夫れが爲め乳人を撰擇し又乳人には毎日好める卵子、ソップ、牛肉、麥飯等結構の物を食さしめ絶えず運動せしめあれば乳は張切るばかりに溢れ出でけるより頃日に至り今回大磯漁夫の子に逞強くも皇孫殿下と同じ四月二十九日出生せし男子あるを幸ひ其者に餘れる乳を與ふる事となり居れり草深き賤が伏屋の拜み奉ることだに叶はざる身にありながら畏多くも殿下の召させ給ふ御乳のあまりを戴くことゝなしたる果報

者は名を土屋一郎と呼び御乳人の一人たる小林シゲは淺草區人の妻にして御生誕直に召上げられ又刈毬スゞ多摩川在の生れにて去年十一月から上りたるものなり兩人共に健康なる男の子あるを夫々里にやりて御乳人に下りしものゝ由

●竹柏園歌會

氷

◎もみち葉の昨日か散りし足ひきの山したみつはこほりゐにけり　東久世通禧

◎淀ほりし小池につなくつりふれにたまれる水のけさはこほれり　津輕承昭

◎吹さそふ風のさむさのいやましてこほりむすへる時はきにけり　水野忠敬

◎やり水の音もまとほになりぬるやけさうすらひの結ひそむらん　諏訪忠元

◎ちりうける紅葉をとちて薄氷にしきおりいたす池の面かな　木村正辭

◎うなゐ子か氷をたゝく岸かけや水鷄きゝつるところなるらん　三輪秩方

◎水はちにけさ打わりぬ玉まりに夏はくたきてもりしこほりを　三浦千春

◎この夏のまうけにせんと函館の海よりはこふあつこほりかな　相澤求

◎大ふれのゆきかひたえて浦しほのみなととちたり厚きこほりに　瑞忠雄

◎水とりもいつちに床をかへぬらん諏訪の水うみあつこほりせり　矢田香園

◎水の面にやとれる月も氷りゐつゝきえぬひかりの寒くもある哉　土岡達一

◎庖丁かとりまえ刃もうけぬまて魚のうろこのこほるあさかな　山崎房吉

◎けさの霜ふめは音あるこゝちして板井のみつもこほるさむけき　石川学達

◎白熊のあさらしあさる北のうみにすこききこほりの山あまそゝる　水原慶夫

◎いれかねてなく鴦のれそゐはれなる池のみきはやこほりとつらん　又原保行

◎鋸屑にたくはへしこほり殿なして子の熱さめす夜はくたちゆく　石樽千亦

◎月さゆる沖の島わにむすひてしこほりをこえて波よせきたる　横山碩

◎遊ひめくる小舟も見えす冬たけてみきはこほりぬ松かうらしま　關屋昕之

◎橇も馬もとわたる見れは米白の水のこほりの橋となりにけり　井上公二

◎わか山のみなかみけさは氷りけんかけひの水のおとたえにけり　大野泰

◎斥候のひつめのあとのたまり水こほれるうへに豚たはしる　沙川鷹

◎天地のめくみとはかりおもひしを今は人手になるこほりかな　森朋路

淨　式

◎手洗のはちに散りたる山茶花の花そのまゝにこほりゐにけり　大橋達一

◎大海もこほり〳〵て北海の冬の日さむくあられたはしる　石井正文

◎あたりみなり氷り〳〵てかゝみなすいはかれつたひ白かれのおつ　松寺久雄

◎北の海こほりの山のうつにしてきみか千年をいはゝんと思ふ　新井幸太郎

◎胸に包むいつみの面氷りなばはかなき風になかさらましを　金井宣章

◎涼みする國さへあるを北の海は今もこほりのやまなかるてふ　万木敬二

◎水とりの浮はんかたもなきまてに池はひまなくあつこほりせり　高石眞[illegible]

◎赤き手を口にあてつゝ氷ゐるたらひのもとに子らは集ひぬ　落合嘉次

◎風をいたみかれふすあしの葉末よりむすひそめたる薄こほりかな　龜山新一

◎夏ならはいかにうれしき今朝みれは水といふ水こほりはてたる　大橋文之

◎朝さむみあるしまたこぬ河きしいかたの床よこほりはてたり　中島歌子

◎たなそこの玉とさゝけてうなゐ子かけさもてはやすはつこほり　岡中みの子

◎さゝなみもけさはたゝすと思ひつるいけはこほりの結ひそめけり　根岸公子

◎昨日の夕へ大根あらひしかと川の水もけさこそうすらひにけれ　大澤圓子

◎早咲のうめさしいれし花かめのれしめもかたく氷ゐにけり　大河内圓子

◎勇ましくしもとふりあけて童へのうてはくたくる池のうすらひ　池田愛子

◎水底のさもへちりさへかくろひてうへうつくしき厚こほりかな　石原米子

◎里の子か石をなけてもあそふかなかとの小川やこほりはてけむ　大竹以勢子

◎寒けさの果なき國にわかとものかよふ舟路もいまこほるらむ　長谷川柳子

◎さきのころ小菊いけたる花かめもこほりつめけり霜もよふあさ　片山柳子

◎道のべの小さき溝のたまりみつちりのまゝにて氷ゐにけり　佐藤朝嘉子

◎北の海こほりとさして舟ゆかすくかのむら山ちかく見むれとも　久保花子

◎見るからに寒さおほゆる氷をは手ことにもちて遊ふうなゐ子　加藤[illegible]子

◎山の手はよそより寒みみつかめにむすひそめける薄こほりかな　有賀晴子

◎火をとりて鼠おひやりしくりや寒み鍋なる水はうすこほりせり

◉かけやせし柳うつりてこのあした御濠のみつはうすこほりせり　堀　孝子

◉はりつめし池のこほりの上ふみて小犬のむれのあそふなるかな　田中たゞ子

◉星のかけやとせし凾にあかつきのみあかの樋口氷ゐにけり　水橋康子

◉ひつち穂に雁かれなきて筑波れのしつくの田井は氷ゐにけり　市田とよ子

◉あさ風に白川の氷ふみわたり我せのきみかからの旅すも　菊池末子

◉もみち葉の二ひら三ひら水に落てなかれもあへす氷るけさかな　岡田と代子

◉北のはてきはむといにし友よいかに書よむ手さきこほる夜牛かな　佐々木信綱

●有志婦人と鑛毒問題

鑛毒問題は、單に政治上の問題にあらず　また法律上の問題にあらずして、實に正義人道に關する問題也、されば、婦人社會にても、此問題の爲めに盡力せんとて、昨年末の頃、矢島楫子、三輪田眞佐子、潮田千勢子、島田信子、山脇房子、松本英子等の諸氏打揃うて、鑛毒地方へ出張し實地に、被害の慘狀を目擊したる上、其被害の最も甚しき群馬縣邑樂郡海老瀨村及び谷中村に於ける被害窮民の幼女を引取りて、之れに獨立生活の道を敎へ、又た病者をして治療を受けしめん爲め上京せしむることゝなり、先づ第一回として芝口の鑛毒事務所へ着したるもの左の如し、而して此等幼女等は、遠く兩親の膝下を離れたる悲みを忘れて、只管喜び合へるを見ても、日頃窮困の狀を察するに足るといふ、

群馬縣邑樂郡海老瀨村窮民幼女松本ヒヤク（十二）小林チカ（十三）須永ツル（十五）小林トモ（七）石田トメ（一）齋藤キサ（十三）大塚キヨ（十）橋本セキ（十）小森谷ハツ（十二）平石モン（十）平石イヨ（十）

栃木縣下都賀郡谷中村下宮同茂呂宮知（十五）茂呂ヒロ（十八）群馬縣邑樂郡海老瀨村窮民乳汁缺乏婦人長谷川ツマ（廿六）携帶兒藤一郞（二）須藤リン（廿四）携帶兒幸一郞（一）栃木縣安蘇郡堺村大字高山病者山口喜平（廿五）

●英國の菫花節

英國にては、來年行ふべき故女皇の紀念日には、菫を以て特別の飾となすことに定め其日をば菫花節（ヴイオレツト、デイ）と呼び、將來此日を守ることゝせり

●百歳以上の人間

長壽の人は暖國に多くして、寒國に尠き事は人の知る所なるが、今最近の統計によれば獨逸にては五千五百

萬の人口中、百才以上のもの七百七十八人あり佛國は四千萬人の人口中に二百十三人、英格蘭には百十六人、蘇格蘭には四十六人瑞典には十人、那威には二十三人、白耳義には三人、丁抹には二人、西班牙には四百一人、瑞西には一人も無し、然るにセルヴィアに至れば二百二十五萬人中百才以上のもの五百七十五人あり、そして世界の最年長者は南米リオ、デ、ジャネイロ市に住むブルーノ、コトリムなるものなりといふ

●口繪說明

本誌卷頭に掲げたる寫眞版「平和」は羅馬人の未だ世に顯れざりしころ、其附近にザビニと云へる民族ありき。其領內には美婦多かりしかば、羅馬の將、ロムラス、欺きて多くの女子を吾が領內に導き來りて、己が臣下の妻たらしめたり。ザビニ人大に憤り、大擧して羅馬の城壘に迫りぬ。羅馬人逐ひ擊つて、今や慘憺たる戰塲の開けむとするや、囚はれたる婦女子等、產れたる子を抱きて戰塲の眞中に出で、父を慰め、夫を和げ、爲に兩軍戰を收めて城に歸り、是より兩國の平和は、とこしなへに結ばれたりとぞ。親子の情、夫婦の情、すべて愛なる文字を以て蔽へば、愛は世界の平和の源たるを示さむとて、佛國の有名なる歷史畫家ルイ、ダヴィッド(千七百四十八年生千八百二十五年歿)が、茲に材料を選べるなり。と。

新年附錄　當代貴顯夫人解

◎公爵母堂　毛利安子の君は故長州藩主毛利元德公の未亡人にして現公爵元昭公の母堂なり

◎伯爵夫人　大隈綾子の君は前總理大臣大隈伯の令夫人にして嘉永三年十月の出生

◎伯爵母堂　黑田瀧子の君は故遞信大臣黑田淸隆伯の未亡人にして文久三年八月の出生

◎公爵夫人　岩倉久子の君は樞密顧問官侍從職幹事長岩倉具定公の令夫人にして文久二年十月の出生

◎子爵夫人　福岡貞子の君は樞密顧問官福岡孝悌子の令夫人にして天保八年十月の出生

◎伯爵夫人　戶田極子の君は前伊太利公使今の式部次長舊大垣藩主戶田氏共伯の令夫人にして安政四年十一月の出生

◎子爵夫人　高島春子の君は樞密顧問官高島鞆之助子の令夫人にして安政元年五月の出生

◎侯爵夫人　鍋島榮子の君は舊佐賀藩主今の式部長鍋島直大侯の令夫人にして安政二年五月の出生

◎侯爵夫人　西鄉淸子の君は元帥海軍大將西鄉從道侯の令夫人にして得能良介翁の長女なり

◎男爵夫人　西ミネ子は前清國特命全權公使西德次郎男の令夫人にして明治元年五月の出生

◎男爵夫人　細川正子の君は樞密顧問官細川潤次郎男の令夫人にして弘化元年五月の出生

◎子爵夫人　黑田良子の君は樞密顧問官黑田清綱子の令夫人にして天保八月十月の出生

◉楓幃女塾

本塾は女子教育に篤志なる中井終子刀自が今回家兄木莵麿氏監督の下に開き、女子に必要なる國語漢文の研習を專らとして、淑德圓滿なる女生養成の任に當らんとし、本月十五日を以て授業を開始する由、塾主中井氏は浪華の鴻儒中井甃庵翁の後にして、懷德書院は實に先代の家塾なりし、刀自の家兄黃裳氏先業の絶へたるを悲み明治二十六年懷德書院並に水哉館女學の再建に務めしも時否にして果さゞりしを今回刀自家兄の志を紹ぎ祖水哉館女學の規模に倣ひこの楓幃女塾を開始したるなりと束脩一圓月謝一科に付五十錢塾は神田小川町五十七番地に在り

◉小說劍俠（下篇）

英國探偵小說家の泰斗コナンドイルの作中規模最も大に結構錯綜の妙を極めたる探偵小說を[illegible]氏の健筆もて譯出したるもの[illegible]に比して一層の面白味あり（定價[illegible]）

◉女子の演說と理想

大阪なる廣岡夫人幷に小宮某氏は何れも女學校生徒に向て一場の演說を試みたしとの希望により去月二十四日淸水谷高等女學校に於て閉校式の後に演說せしむる由なるが又た同校に於て生徒一同に向ひ

（一）諸子は男子であるのと女子であるのと孰れが好ましきか其理由如何

（二）諸子が從來人より聞き又は書籍新聞等にて知りたる人物の中にてどの男子若くは女子の如くなるを希ふか

との設問を與へしに女子たるを好しとする者百十七名に對し男子たらんを好しとする者百二十八名の多數ありたりこは畢竟日本に於ける女子の地位の低きよりしてかゝる奇態を見るに至りしならんと思はるゝ節多く又第二の理想の人物の問に對しても現に世に在る人の擧げられしは福島安正、下田歌子等のみ、其他跡見花蹊を除きては皆遠き歷史上の人物のみにて算するに二三項とも答案の着實ならざるはやがて設問の頗る架空にして且未だ生徒が解釋の力に合はざるものあるを知るべし大村校長はこの答に對し一々批評を與へんといひ居たりしが答案方法こそ最も批評すべきこと多かるべけれと評するものあり

●興風會の納會

同會にては舊臘十日午後二時より星ヶ岡茶寮に於て東久世副會長を始め鍋島侯、池田政禮侯、津輕各伯、松平（乘承）、水野、前田、諏訪各子爵、長谷信成、西三條實義諸氏以下御歌所所員等三十餘名會合の上納會を開き席上競點及び兼題の披講あり午後六時頃散會せしが本年度月次兼題を左の如く定めたりといふ

明治三十五年興風會兼題

一月二十八日　青山有雪（懐紙）　別題　太安麿（短冊以下同）
二月十八日　鴛衾（短冊以下同）　同　高架鐵道
三月十八日　堤柳　同　鎌倉右大臣

同日出詠

各　評　花中落葉（小短冊一題各二首）
四月十八日　春の夜文をよむ　同　電話
五月十八日　稍々爭成竹　同　淡海公
六月十八日　棟　同　彫刻
九月十八日　あれたるやにて月みる　同　小式部内侍

同日出詠

各　評　草廬秋雨稀（小短冊一題各二首）
十月十八日　山水秋深　同　晨樂
十一月十八日　檜　同　吉田松陰
十二月八日　連日時雨（懐紙）　同　外文

但別題出詠は隨意

●世界奇聞

▲接吻の價一萬弗　西洋では接吻に付種々の奇談も多くあるが頃日も米國クレメンシヤ市の某家の愛孃子ルソンと呼ぶ今年十六歳の少女が或日夕飯を終りナイフを洗はんと眞暗な廚房に這入つた途端突然少女の頸に抱き付きて右の頰に接吻したるものがあつた少女は餘りの意外に驚いて室外へ逃け出たれど之が爲め強く腦を刺戟して病人となり醫師は到底滿足に全快することは出來ぬとの診斷をしたソコデよく〳〵此の惡戲をしたるものを詮索すると一ヶ月前に此家に雇はれたクーン、コッホといふ者と判りたれば裁判所に向つて一萬弗の損害賠償を求めたとて同地では大評判である

▲土國帝室の巨費　土耳其帝室費は一年少くも六百萬磅を下らないが此中百五十萬磅は單に後宮女御の服裝費に充てられ皇帝御自身の被服料は八萬磅を要し他の百五十萬磅は賄物料、百萬磅は御小使料尙ほ百萬磅は賤民の一級等に費さるのである、何故に皇帝御一人の爲め斯る莫大の費額を要するかと聞いて見ると後宮にある美人は千五百人もありて奢靡放逸の生活を爲し居る爲めであるとの事だ

▲空腹は衞生上利ある事　獨逸の一醫學雜誌は悉く總ての宗教の開祖は其徒弟に向つて或る度まで絕食を勸むることに於て孰れも一致せりこは肉慾を制し食を貪る習慣を破らんとするものにして大に道理あることなり實に大食は大飲と同じく頗る健康を害ふものなり而して其食物滋養分多ければ多き程害多しこれ蛋白質の過剩を生ずるを以てなり多くの人は空腹の感ある毎に直ちに之を滿足せしむることを必要なりと信ずる如しこれ大なる誤謬なり又多くの人は慾に適するまで食せざる可からずと思惟する如し是も亦大なる謬見なり人は其體格に依りて適當なる發育を要す或る一部分の異狀なる發育は頗る健康を害す例へば十五貫の體量に適する心臟を有する人が廿貫に體量を增したりとせよ即ち其人は不完全なる心臟を有する人となるなり恰も百噸の索引力ある機關車をして百五十噸の列車を引かしむると同じく其力に堪へざること勿論なり滋養物の過剩は神經組織をも錯亂せしむるものなり幽鬱病の如きは其適例なりと

女流十二大家投票披露

過般來、當代十二女傑の投票を募るや、熱心なる讀者より續々として撰擧せられ、回一回毎に、其の數を増し、當選の榮譽は大抵豫定されたりしが、舊臘十二月以降に至り、期日切迫に際し、全國各地より飛び來れる、個人及び團躰の投票頗る夥だしく、形勢俄然一變して、票數に於て大變動を生じ隨て其の結果又殆んど豫想の外に出でたるの觀ありき、此の如く投票諸君の熱心なりしもの、是れ各々其崇敬する人物を推さんとの衷心より出でたるものならん、いま其結果示せば左の如し投票紙接總數四千六百八十五

教育家

千六百二十七　**棚橋絢子**

千三百三十三　三輪田眞佐子

八百七十四　跡見花蹊

六百四十三　下田歌子

三百四十二　矢嶋楫子

百六十七　津田梅子

百四十九　奥村五百子

百二十八　安井哲子

七十七　山川二葉子

五十六　中嶋歌子

五十一　野田八重子

四十八　平尾光子

三十四　嘉悅孝子

二十八　岡田光子

宗教家

千二百六十九　**村雲日榮尊師**

九百七十一　奥村五百子

四百五十三　潮田千勢子

二百十六　河野關子

五十七　島村光津

二十八　長谷川喜多子

著述家

千二百四十八　下田歌子
四十二　小金井喜美子
二十七　後閑菊野子
二十三　國分操子
十七　三宅龍子
十三　佐方鎭子

英學家

三百七十五　津田梅子
百四十三　長谷川喜多子
百十六　安井哲子
三十七　大山捨松（侯爵夫人）
十二　加藤錦子

交際家

三百八十一　大隈綾子（伯爵夫人）
三百七十二　下田歌子
三百六十三　鳩山春子
二百四十六　戸田極子（伯爵夫人）
百四十九　原禮子
百二十一　鍋島榮子（侯爵夫人）
百十六　奥村五百子
四十三　廣岡淺子
三十四　毛利安子（公爵母堂）
二十七　山脇房子

女丈夫

三百四十六　谷久滿子（子爵夫人）
三百三十八　奥村五百子
三百二十一　鄭濱子
二百九十三　野中千代子
二百十二　原禮子

事業家
六百二十一　**奥村五百子**
百四十三　下田歌子
百二十七　原禮子
十二　深井仁子

小說家
二百六十八　**三宅花圃**
二百四十七　大塚楠緒子
百四十九　小金井喜美子
十二　古在紫琴

書家
六百四十一　**跡見花蹊**
三百三十五　中島歌子

音樂家
三百六十四　**幸田延子**
百二十七　橘糸重子

歌人
三百七十八　**中島歌子**
二百二十一　小池道子
百四十七　大谷章子
七十二　鳳晶子
五十七　下田歌子
五十六　佐々木雪子
四十三　三宅花圃
二十一　服部德子
十八　千種任子

畫家
六百八十二　**野口小蘋**
四百四十七　跡見花蹊
百四十六　武村耕靄
百二十一　跡見玉枝
四十三　佐久間棲谷
四十二　馬杉青琴
十二　塚本律子

女學世界第二號記事要目

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊／增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	四十三錢	三十五錢	三十錢	
半頁卅二行	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢	
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅五年一月五日發行（第貳卷第壹號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

恭賀新禧

博文館主 大橋新太郎

大橋進一

編輯局員

（イロハ順）

博文館編輯局主幹 坪谷善四郎

在獨乙 巖谷小波
岩田鳥山
石倉翠葉
長谷川天溪
德田秋江
苫米地日東
川上齋庭
片山春帆
河野揚齋
文學士 高山樗牛
武内桂舟
田山花袋
田村松魚
武田櫻桃
鷹野止水

文學士 中内蝶二
中川葦舟
中村笛南
上村左川
文學士 大町桂月
山中古洞
松原二十三階堂
藤本藤陰
國府犀東
江見水蔭
齋木菊雨
齋藤紫白
岸上質軒
三宅青軒
法學士 森山鵬雲

事務員

博文館營業部

支配人 羽田福太郎
副支配人 杉山常次郎
副支配人 内山正如
元方支配人 大野金太郎

野口竹次郎
上村恭三
宮川大壽
堀野賢龍
里見謙吉
田中六藏
加野十次郎
田中庄八
富士原秀穗
來島茂三郎
金子督太郎
枝川錠太郎
古賀豐策
長瀬綾次郎
小峯正一

細野佐藏
片山宇吉
有田利雄
松原濱之助
關謹平
兒玉幡太郎
永井泰
大谷濱次郎
權藤文雄
荒井芳太郎
淺沼滿次郎
佐治清吉
番塲宗八
横田地巴

（後付の二）

恭賀新禧

東京堂主　大橋省吾

恭賀新年

博愛堂主　大橋幹二

恭賀新禧

博進社洋紙店

專務理事　山本留次

事務員

山本九兵　富田新太郎
大野孫平　富谷松三郎
山中保二郎　金原要一郎
上原董司　横山幸七
武藤吉次　長谷川金之助
澤田宮三　黒澤倉治
石井次郎　宮崎仁助
白井熊吉

博進社大阪支店

支配人　中村孝吉

事務員

藤井英二郎　松本作三
上村新之助　野藤佐吉
大貫丑之助　岡村九十九
山本瀧三郎

恭賀新年

博進社工場

理事　大橋光吉
支配人　大田馬太郎
副支配人　水谷景長

事務員

佐藤憲斌
高橋正信
市川七作
近山喜代三
小田内東藏
中西榮次郎
富井龍次郎

稻波寅吉
薗田三佐雄
大内德亮
浦山鐸太郎
桑村常之助
山崎祐吉
西山豐三郎

職長

内山長吉
深見豐次郎
田中安藏
飯塚市郎治
菅熊作

吉田平吉
西郷勝
多賀新太郎
蛭沼武守
吉岡泰五郎

偉大の効驗（女學世界の廣告）

女學世界は昨年發刊以來發行高の多き殆んど海内に比類無之隨而廣告の効驗も偉大なるべく而して其廣告料は比較上非常に低廉に有之候間江湖各位御試みに御掲載の上其効力御實驗あらんことを奉希望候

追而女學世界廣告に依り廣告主と御取引之際は其廣告に依りたる旨御附記の程願上候

博文館廣告部

（後付の二）

少年世界

毎月一回一日發行　第八卷第壹號　一月一日發行

▲正價

一冊拾錢●四冊(三ヶ月分)前金三十八錢●八冊(半ヶ年分)前金七拾五錢●十六冊(一ヶ年分)前金一圓四十錢◎郵税一冊金一錢五厘宛

我少年世界は新年と共に大に舊面目を一新して舊來の黄色表紙を斷然廢止し白色表紙色刷と改善し更に内容の各欄を擴張し少年愛讀家の歡迎に背かざらんことを期せり本誌に就て徴せよ

記事要目

●幼年談●冒險談●小波通信●史傳

●地理●科學●海軍●軍事

●名士家庭●遊戲●雜俎●參觀

●文壇●少年通信 記者通信 討論新題●時報●口繪

寫眞銅版口繪

皇孫迪宮殿下 近衛秋季大演習●艦中の猛虎●大鳥男の家庭◎戸隱山探險隊●白耳義海賊退治紀念像●東京瓦斯會社工場●鎌倉建長寺と長谷寺●御題新年の梅●伯林端書通信

▲新年大附錄　角力雙六　江見水蔭君案　武内桂舟君畫

(後付の三)

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六冊袖珍美本

風雅文庫第壹編

都々逸の栞

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雜題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を掲集し卷末には雜題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雜俳家のみの重寶にはあらず

製本既成
正價金貳拾錢
郵税六錢

風雅文庫第貳編

冠句の栞

雜俳中の流行物なる冠句は冠附、傘附、狂俳等の名は變れども全國に廣く行はる、本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網羅し、卷頭には冠附の作例を擧けて初心の爲めに東西を指し、冠附題林中には冠句の題數百を蒐集し、附錄には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし

附り前句付
正價金貳拾錢
郵税六錢

續刊目次

狂俳句の栞
狂句の栞
狂歌の栞
雜俳の栞

上記の六册を纏めて美帙に裝ひ明窓淨几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齡も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

新刊 **俗曲大全** 全壹册
鶯亭金升君校訂
正價金六拾錢 郵税拾六錢

再版 **都々逸一千題** 全壹册
鶯亭金升君編纂
正價金參拾五錢 郵税六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の四)

續帝國文庫

博文館編輯局校訂

第卅八編

校訂 續馬琴傑作集

全壹冊洋裝總クロース背皮金文字入美本
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

我國近代の文豪曲亭馬琴の作は曩に一卷を刊せしも尙名作の遺編多きを以て玆に其續編を公にす其撰載する所は復讎奇談稚枝鳩新累解脫物語句殿實々記青砥藤綱摸稜案全後集絲櫻春蝶部綠八丈倚談是なり近代文豪の傑作其趣味益深し

既刊目次

正價 一冊六十錢 ● 六冊三圓五十錢 ● 十二冊六圓九十錢 ● 廿五冊十三圓 ● 郵稅一冊十六錢宛

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(挾付の五)

卅五年一月新刊

第八卷
第壹號



發兌元 博文館

正價金二十五錢
郵税此號に限り三錢

紙數三百二十頁

博文館總目錄相添

一月一日發行

口繪

羽子(精彩木版畫)……武内桂舟筆

几帳(精彩石版畫)表紙……山中古洞筆

美人風俗(アートペーパー四面色刷)遊藝人新影諸國景勝寫眞數頁挿入

小說

箱根草……幸田露伴君

佐渡の文覺……遲塚麗水君

海底の美……江見水蔭君

心中手鞠唄……渡邊霞亭君

(雜錄)近松門左衛門の虎、饗庭篁村、新説虎物語幸堂得知、百年前後雪中庵雀志、新年のつらね樋口二葉、水村の新春岡本綺堂、素人寫眞坪谷水哉、憐小猫辭中内蝶二、邂逅警語國府犀東、求婚廣告森山鵬雲、新年の虎岸上質軒、權助の哲學上村左川、除夜の鐘武田鶯塘、歳首の辭田村松魚、此三十五年三宅青軒(浮世眼鏡)東京藝妓不通庵、京都の花柳霞軒(譚海)江戸力士事情好角翁本場所通本所生、江戸の氣質草の舍、土佐の鯨捕り鯨海漁長(藝林)芝居の新年紅梅樓、稽古所の正月早鶯子(講談)大磯の虎御前邑井一、金魚の藝者三遊亭圓遊、諸國奇談、諸國風俗、諸國墳塋、諸國名勝、時文、詞苑、時報

新年大附錄 ◉美人の名畫 寫眞銅版大額面

(後付の六)

巖谷漣山人著有名畫伯挿繪

毎月壹回發行
全部壹百冊

世界お伽噺

菊版洋裝美本

既刊目次

第卅五編

武内桂舟君書

洪牙利

鐵の王子

一名 雷神丸

全壹冊

正價金七錢 郵税貳錢

洪牙利の口碑を漣山人か例の快筆を以て叙したるもの日本にしては素盞雄尊に似て居る雷神丸といふ一王子か自分の料から兄弟五人地の底に潜り入り龍王の捕虜となり樵夫婆さんの助けによつて八頭十二頭の龍王を芽出度退治するといふ武勇譚其間には又鍛冶屋の挺ゝ打たれたり鵠のやうに割かれたり活殺自在の大魔力縱横無盡の筆づかひ寅の年の眞見に龍を退じたるお譚は芽出度くもまた可笑からずや

發兌元 正價 前金壹冊七錢●六冊四拾錢●拾貳冊七拾八錢 郵税壹冊貳錢宛 博文館

（後付の七）

毎月一回
五日發行

太陽

一册三十錢
四册一圓十五錢
郵税一册三錢五厘

月一日發行

第八巻第壹號

正價三十錢
郵税三錢五厘

寫眞銅版口繪

大附錄 虎の名畫

皇孫迪宮殿下

外二十面精巧美麗無比

本文附錄

明治卅四年史

發兌元
東京日本橋區本町三丁目

博文館

博文館出版圖書總目錄

歷史書類

日本史

通史

●大日本通史　東京帝國大學講師文學博士萩野由之君著
全三冊　上卷　背皮上製　大判一〇〇〇頁　正價一圓五拾錢　小包送四百匁　中下卷近刊
茫々二千五百餘年間、治亂盛衰の迹、得失汚隆の狀、幽を闡き案を汰し、叙述井然、一目瞭然たらしむ、國史の精華此に盡くと言ふべし

●增訂帝國史略　法學博士有賀長雄君著　第十版
全一冊　背皮洋綴　大判一〇三〇頁　實價一圓五拾錢　小包送四百匁

●新撰日本外史　落合直文　小中村義象兩君著　畫伯數名密畫挿入　第八版
全一冊　背皮洋綴　大判一一〇二頁　實價一圓二十錢　小包送四百匁

●中等教育日本歷史　文學博士萩野由之君著　沿革地圖挿入　文部省檢定濟　第廿六版
全二冊　背皮洋綴　中判六七五頁　正價一圓十錢　郵稅十六錢

●中等教育日本歷史要解　文學博士萩野由之君譯述　第五版
全一冊　洋布上製　中判四二四頁　正價五十錢　郵稅六錢

●日本歷史評林　文學博士萩野由之君編述
全二冊　洋　並製　大判　頁　正價一圓二十錢　郵稅四十錢

●日本歷史　文學士木寺柳次郎君著　第四版
全一冊　洋並製　大判三七六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●新撰大日本帝國史　松井柏軒君著
全一冊　洋並製　大判五六四頁　正價四十錢　郵稅十二錢

●通俗日本歷史　足立栗園君著　第六版
全一冊　洋並製　大判三三四頁　正價二十五錢　郵稅八錢

●新撰日本小歷史　文學博士栗田寬君校閱　増田于信君著　西洋木版畫挿入　第十九版
全一冊　洋並製　大判二一七頁　正價十五錢　郵稅六錢

●新體日本歷史　大和田建樹君著
全二冊　洋並製　中判二一一頁　正價二十四錢　郵稅八錢

●初等日本歷史　文學博士栗田寬君校閱　今泉定介君著　文部省檢定濟　全部木版
全二冊　和本並製　大判一四二頁　正價十九錢　郵稅四錢

●幼年讀本日本歷史　巖谷漣山人著　梶田半古君密畫　第三版
全一冊　洋並製　大判一四〇頁　正價十五錢　郵稅四錢

●標註本朝通鑑
全八十四冊　和綴　大判四五六二枚　正價拾一圓　小包送
幕初の大儒林道春先生の起稿にして、春齋先生に至て大成せるもの、叙述詳密、行文平易、本邦史を修むる者必ず一讀せざるべからず

●明治新刻日本政記　學橋大鄕穆君著　全部木版
全十冊　和本上製　中判一六九八頁　正價一圓六十錢　小包送四百匁

時代史

● 通俗明治歴史　第三版
坪谷善四郎君著
全一冊洋裝並製　大判三五〇頁　正價廿五錢　郵稅八錢

● 通俗德川十五代史
岸上質軒君著
全一冊洋裝並製　大判三三四頁　正價二十五錢　郵稅八錢

● 德川太平記
南梁小宮山綏介君著
德川幕府二百七十年間の事蹟を、紀傳體に編述せられたる者、德川史に精通せる南梁先生の著なれば、精確贅言するを待たず、文辞流暢
全二冊洋布上製　大判　頁　正價一圓五十錢　小包送八百匁

● 德川十五代史
前東京帝國大學教授內藤耻叟君著
江戶幕府の制度典令に精通せる內藤先生の著にして、二百七十年間の大事要目及ひ法令等網羅して遺さず、德川史の絕好材料と言ふべし
全十二冊洋裝並製　大判二九五二頁　正價二圓七十錢　郵稅七十二錢

● 元祿時勢粧　新版
文學士笹川臨風君著　密畫挿入
全一冊紙皮上製　小判二六〇頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 奈良朝　新版
文學士笹川臨風君著　密畫挿入
全一冊紙皮上製　小判四四四頁　正價廿五錢　郵稅六錢

● 校註神皇正統記　第八版
內藤耻叟君校閱　大宮宗司君校註
全一冊洋裝並製　大判二五八頁　正價廿五錢　郵稅六錢

● 吉野拾遺詳解　第二版
中郁秋香君著
全一冊洋裝並製　大判一五二頁　正價廿五錢　郵稅四錢

● 水鏡
● 大鏡
● 增鏡
● 榮花物語
● 平家物語
● 保元平治物語
校訂　落合直文　小中村義象　萩野由之三君校訂標註（以下六書日本文學全書）

水鏡　全一冊洋裝並製　中判四六八頁　正價廿五錢　郵稅三錢
大鏡　全一冊洋裝並製　中判三九五頁　正價廿五錢　郵稅三錢
增鏡　全三冊洋裝並製　中判一二三五頁　正價七十五錢　郵稅九錢
榮花物語　全一冊洋裝並製　中判六四二頁　正價廿五錢　郵稅三錢
平家物語
保元平治物語　全一冊洋裝並製　中判三八四頁　正價廿五錢　郵稅三錢

● 太平記
全三冊洋裝並製　中判　頁　正價七十五錢　郵稅九錢

● 日本風俗史
文學士坂本健一君著　密畫挿入
全一冊洋裝並製　大判三四二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

外國史

通史

● 世界史　全二冊　上卷背皮上製　下卷近刊　新版
文學士史學專攻坂本健一君著
世に世界史と稱するもの少からず、但其記述する所大抵歐米二洲に限るの觀ある、一大缺典と言ふべきなり、本書は斷然此陋習を排し、東西洋古今の事蹟を併叙して宇內万國を一貫す、始めて眞世界史あり
大判一〇八〇頁　正價一圓六十錢　小包四百匁迄

● 通俗世界歴史
長谷川天溪君著
全一冊洋裝並製　大判三三四頁　正價廿五錢　郵稅八錢

● 新體萬國歴史
大和田建樹君著
全二冊洋裝並製　中判四〇四頁　正價廿四錢　郵稅八錢

● 幼年讀本　世界歴史
漣山人著　中村不折君密畫
全一冊洋裝並製　大判一三八頁　正價十五錢　郵稅四錢

● 中等敎育　東洋歴史
文學士木寺柳次郎君著　沿革地圖及密畫入　文部省檢定濟　第四版
全一冊背皮上製　大判二八七頁　正價八十錢　郵稅十二錢

● 文學士木寺柳次郎君著 **西洋歴史** 沿革地圖及密畫入 第四版
全一冊 背皮上製 大判 二六六頁 正價七十錢 郵稅十二錢

● 文學士吉國藤吉君著 **西洋歴史** 第二版
全一冊 洋並製 大判 三四八頁 正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

● 東京專門學校講師松平康國君著 **世界近世史**
全一冊 洋布上製 大判 四二〇頁 正價一圓廿五錢 郵稅十二錢

● 米國ウヰツトソン著 大内暢三君譯 **歐洲十九世紀史** 新版
全一冊 洋布上製 大判 四一八頁 正價一圓廿五錢 郵稅十二錢

● 文學士幸田成友君著 **十九世紀史**
全一冊 洋並製 大判 四一〇頁 正價五十錢 郵稅十二錢

● 文學士高山林次郎君外十一學士分擔編述 太陽紀念發行 **十九世紀** 寫眞銅版畫數十葉挿入
全一冊 洋並製 大判 三六六頁 特別價廿五錢 郵稅五錢五厘

● 澁江保君著 **西洋事物起原**
全一冊 洋並製 小判 二〇〇頁 正價四十錢 郵稅四錢

● 文學士高山林次郎君著 **世界文明史** 第五版
全一冊 洋並製 大判 三七六頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

各國史

● 河上清君著 **通俗獨逸歴史** 新版
全一冊 洋並製 大判 三三四頁 正價三十錢 郵稅八錢

● 法學博士高田早苗君校閲 山本利喜雄君著 **露西亞史** 沿革地圖挿入
全一冊 洋布上製 大判 四四〇頁 正價一圓廿五錢 郵稅十四錢

● 佛國ボリユー著 有賀長雄 織田榮吉 兩君閲 林毅陸君譯 **露西亞帝國**
全一冊 背皮上製 大判 九〇六頁 正價二圓 郵稅二十錢

● 英國マッカアシー著 法學博士高田早苗外二君共譯 **英國今代史** 一名女皇之御宇
全一冊 背皮上製 大判 一〇七六頁 正價二圓三十錢 小包送四百匁

● 岡友重章君閲 恒屋盛服君著 **朝鮮開化史** 地圖挿入
全一冊 洋布上製 大判 五六六頁 正價一圓 郵稅十四錢

● 文學士白河次郎 國府種德兩君合著 **支那文明史**
全一冊 洋並製 大判 三二六頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

● 中西牛郎君著 **支那文明史論**
全一冊 洋並製 大判 二一〇頁 特價二十錢 郵稅六錢

● 法學士立作太郎君譯 **最近之支那**
全一冊 洋並製 大判 一六四頁 正價三十五錢 郵稅四錢

● 文學博士三島中洲君校閲 山名善讓君訓點 **資治通鑑** 全部木版
全七十冊 和上製 大判 五一二二枚 正價拾三個 小包送
司馬溫公の資治通鑑は、古來有數の良史と稱す、獨り議論敍事の精整なるのみならず、文辭亦漢文の好模範たり、本書印刷鮮明美本なり

● 標註 **春秋左氏傳校本**
全十五冊 和上製 大判 正價二圓廿錢 小包送六百匁

● 點註 **五代史**
全八冊 和裝上製 大判 正價一圓四十錢 郵稅十八錢

● **廿二史言行略**
全六冊 和裝上製 大判 正價一圓 郵稅十五錢

● 校訂 **史記讀本**
全二拾冊 和上製 大判 一三五三枚 正價三圓 小包送八百目

● 城井悔庵君講述 **史記列傳講義**
全三冊 洋並製 中判 一七四三頁 正價七十五錢 郵稅二十四錢

● 萬國史標 **十八史略評註**
全七冊 和裝上製 大判 正價一圓二十錢 郵稅二十錢

● 大田淳軒君講述 **十八史略講義**
全二冊 洋並製 中判 八八六頁 正價五十錢 郵稅十六錢

三

平井啓宗君講述
戰國策講義 全二冊洋並綴 中判八〇〇頁 正價五十錢 郵税十六錢

増田貫校閲 藤田久道著 中等教育
支那史 全七冊和裝上綴 中判四〇七頁 正價一圓 郵税十一錢

戰史

日本

紫山 川崎三郎君著 寫眞版畫十六葉挿入
増訂 西南戰史 全一冊洋布上綴 大判一三五〇頁 特價一圓五拾錢 小包送六百匁
明治十年西南の戰は、我邦維新以後の大事にして、亦舊日本を送り、新日本を開くの戰端たり、我邦の近世史を知らんと欲する者必ず一讀せざる可らず、本書其基因より戰鬪攻伐を叙して委詳を極む

紫山 川崎三郎君著 寫眞銅版畫數十葉挿入
日清戰史 全七冊洋並綴 大判　頁 特價一圓九十錢 郵税五十六錢
日清戰は日清兩國の實力を始めて全世界に發現せしもの、少くとも近世東洋の一大事件たり、本書之を叙述して目睹親經の感あらしむ

陸軍大將野津道貫君序 藤野房次郎君著 寫眞銅版畫入 第七版
平城包圍攻撃 全一冊洋布上綴 大判七八二頁 正價七十錢 郵税十八錢
▲分本製 洋並綴二冊 一冊正價三十錢 郵税八錢

海軍大將伊東祐亨君題辭 平田勝馬君著 寫眞銅版畫入 第三版
黄海大海戰 全一冊洋布上綴 大判八三八頁 正價九十錢 郵税二十錢
▲分本製 洋並綴二冊 一冊正價四十錢 郵税八錢

海外

博文館編輯局編纂 寫眞銅版畫四十八葉挿入
北清戰史 全二冊洋並綴 大判六六六頁 正價六十錢 郵税四錢

北京籠城者文學士服部宇之吉著 寫眞銅版畫八葉挿入
北京籠城日記 全一冊洋並綴 大判一四一頁 正價十錢 郵税一錢

北清從軍記者水田南陽君著 寫眞銅版畫挿入
北京籠城 全一冊紙皮上綴 小判二九五頁 正價廿五錢 郵税四錢

坪谷善四郎君著 寫眞銅版畫（著者實寫）十六葉挿入
北清觀戰記 全一冊紙皮上綴 中判二六八頁 正價四十錢 郵税六錢

澁江保君著
米國獨立戰史 全一冊洋並綴 中判三二二頁 正價十八錢 郵税六錢

柏軒 松井廣吉君著
米國南北戰史 全一冊洋並綴 中判三〇八頁 正價十八錢 郵税六錢

越山平三郎君譯述
英米海戰史 全一冊洋並綴 中判三〇〇頁 正價十八錢 郵税六錢

柏軒 松井廣吉君著
伊太利獨立戰史 全一冊洋並綴 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

柳井絅太郎君著
希臘獨立戰史 全一冊洋並綴 中判二九七頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著
英國革命戰史 全一冊洋並綴 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著
佛國革命戰史 全一冊洋並綴 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

柏軒 松井廣吉君著
英佛聯合征清戰史 全一冊洋並綴 中判三一〇頁 正價十八錢 郵税六錢

● 印度蠶食戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三五三頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 波蘭衰亡戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三二六頁　正價六十錢 郵稅八錢

● ナイル海戰史　蛯山平三郎君著　全一册洋裝並製 中判二九六頁　正價六十錢 郵稅八錢

● フレデリック大王七年戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三四七頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 三十年戰史　岡府犀東君著　全一册洋裝並製 中判三三三頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 歴山大王一統戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三一六頁　正價六十錢 郵稅八錢

● ピユニック戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三二八頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 希臘波斯戰史　澁江保君著　全一册洋裝並製 中判三一六頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 羅馬戰史　セザール、ポムペー　岸上操君譯述　全一册洋裝並製 中判三二五頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 南洋之風雲　比律賓　マリアノポンセ著　法學士宮本平九郎君譯　全一册洋裝並製 大判二一六頁　正價四十錢 郵稅六錢

● 新建國（トランスバール戰記）　日南福本誠君著　全一册洋裝並製 大判一二四頁　正價二十錢 郵稅四錢

傳記

日本

● 青淵先生六十年史　一名 近世實業發達史（男爵澁澤榮一君傳記）　大藏省總務長官法學博士坂谷芳郎君著　第二版　寫眞石版畫挿入　全二册洋布上製 大判二二一九頁　特價四圓 小包送一貫目

身を實業家に起して、其私を計らず、遂に華族の貴爵に列せらる、其人既に貴ぶべく、其事固より傚ふべし、洵に希覯の近世實業發達史なり

● 三百諸侯　戸川殘花君著　全一册洋布上製 大判　正價一圓二十錢 小包六百匁

● 坂垣退助君傳　栗原亮一君 宇田友猪兩君共著　全一册洋布上製 大判三八一頁　正價一圓十二錢 郵稅

● 陸奥宗光　坂崎斌君著　寫眞銅版畫數葉挿入　全一册洋布上製 大判三五六頁　特價三十錢 郵稅八錢

● 藤侯實歴（伊藤博文侯直話）　大橋乙羽君著　寫眞銅版挿入　全一册洋布上製 小判二四六頁　正價三十錢 郵稅六錢

● 元勲談　伊藤侯 山縣侯 井上伯三君直話　寫眞銅版眞蹟肖像挿入　全一册洋並製 大判二〇二頁　正價三十五錢 郵稅六錢

● 明治人物評論　太陽記者 鳥谷部春汀君著　全一册紙皮上製 小判四二三頁　正價二十五錢 郵稅六錢

● 續明治人物評論　同　全一册紙皮上製 小判四四八頁　正價三十錢 郵稅六錢

● 明治名家古人評論（近衞公外諸名士が古今偉人を評論せし珍書）　勢多章之君編　全一册紙皮上製 小判二三四頁　正價二十五錢 郵稅四錢

● 名士の嗜好　中央新聞社編纂　全一册紙皮上製 小判三四六頁　正價二十五錢 郵稅四錢

- 無何有道人編 ●名士の平生 全一冊 紙皮上綴 小判 二四五頁 正價二十五錢 郵税四錢
- 文學士笹川臨風君著 ●遊俠傳 全一冊 紙皮上綴 小判 二八八頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 鈴木光次郎君編 ●明治豪傑譚 全一冊 紙皮上綴 小判 三八五頁 正價三十錢 郵税六錢
- 同 ●明治閨秀美譚 全一冊 洋並綴 小判 一七二頁 正價十二錢 郵税二錢
- 熊田宗次郎君著 ●明治才媛美譚 寫眞版十二葉挿入 全一冊 紙皮上綴 中判 六〇六頁 正價五十錢 郵税八錢
- 岸上操君著 ●和漢婦女龜鑑 全一冊 洋並綴 大判 一八二頁 正價十五錢 郵税六錢
- 依田百川君著 ●譚海 全四冊 和並綴 小判 四六六頁 正價七十錢 郵税十二錢
- 中山利貞君著 ●南木誌 全五冊 和並綴 大判 正價七十五錢 郵税八錢
- 干河岸貫一君編撰 ●近世百傑傳 全一冊 紙皮上綴 小判 五六七頁 正價五十錢 郵税六錢
- 同 ●續近世百傑傳 全一冊 紙皮上綴 小判 四八八頁 正價四十錢 郵税六錢
- 南梁小宮山綏介君編 ●洋學大家列傳 全一冊 洋並綴 中判 一八六頁 正價十錢 郵税四錢
- 内藤燦聚君著 ●近世大儒列傳 全二冊 洋並綴 中判 四〇二頁 正價二十四錢 郵税八錢
- 有耶無耶樓主人著 ●俳諧名家列傳 全一冊 洋並綴 小判 二二三頁 正價十錢 郵税四錢

- 山路愛山君著 ●高山彦九郎 全一冊 洋並綴 小判 二六八頁 正價二十五錢 郵税四錢
- 角田音吉君著 ●水野越前守 全一冊 洋並綴 小判 二七四頁 正價十三錢 郵税四錢
- 依田百川君著 ●豐臣太閤 寫眞銅版十三枚挿入 全一冊 洋並綴 大判 三三二頁 特價二十一錢五厘 郵税二錢
- 伯爵大隈重信君講演 ●菅公談 木版肖像入 全一冊 洋並綴 大判 一三〇頁 正價三十錢 郵税四錢
- 落合直文 小中村義象 兩君著 家庭教育歷史讀本 ●花の白雲 舊伯數名密畫入 第十版 全一冊 洋並綴 大判 一九二頁 正價十八錢 郵税四錢
  目次 ●日本武尊の事蹟 ●曾我兄弟の復讐 ●神功皇后の事蹟 ●護良親王の事蹟 ●和氣清麿の事蹟 ●菅原道眞の事蹟
- 落合直文 小中村義象 兩君著 家庭教育歷史讀本 ●卯花月夜 舊伯數名密畫入 第十版 全一冊 洋並綴 大判 二一四頁 正價十八錢 郵税四錢
  目次 ●源義家の事蹟 ●佐々木高綱事蹟 ●那須與一の事蹟 ●平重盛の事蹟 ●俊寛僧都の事蹟 ●袈裟御前の事蹟 ●靜御前の事蹟 ●忠興夫人の事蹟
- 落合直文 小中村義象 兩君著 家庭教育歷史讀本 ●紅葉の錦 舊伯數名密畫入 第十版 全一冊 洋並綴 大判 二一〇頁 正價十八錢 郵税四錢
  目次 ●平敦盛の事蹟 ●阿新丸の事蹟 ●森蘭丸の事蹟 ●藤原師賢の事蹟 ●兒島高德の事蹟 ●楠正成の事蹟 ●加藤清正の事蹟
- 落合直文 小中村義象 兩君著 家庭教育歷史讀本 ●枯野の雪 舊伯數名密畫入 第九版 全一冊 洋並綴 大判 二三六頁 正價十八錢 郵税四錢
  目次 ●北畠親房の事蹟 ●新田義貞の事蹟 ●楠正行の事蹟 ●赤穗義士の事蹟 ●林子平の事蹟 ●高山彦九郎事蹟
- 依田學海君著 寺崎廣業君畫 ●三條實美公 第三版 全一冊 洋並綴 大判 一一四頁 正價十三錢 郵税四錢
- 春山鶴峯君著 中澤弘光君畫 ●島津齊彬公 全一冊 洋並綴 大判 一九四頁 正價十三錢 郵税四錢

書名	著者	畫	版	體裁	頁數	正價	郵税
近衛忠凞公	勢多章之君著	中村不折君畫		全一冊洋大判並級	一三〇頁	十三錢	四錢
水戸烈公	野口勝一君著	横山大觀君畫		全一冊洋大判並級	一五六頁	十三錢	四錢
白川樂翁公	中邨秋香君著	富岡永洗君畫	再版	全一冊洋大判並級	一三四頁	十三錢	四錢
井伊掃部頭	巖谷小波山人著	小島沖舟君畫	再版	全一冊洋大判並級	一一二頁	十三錢	四錢
水野越州	中村二葉君著	小林永興君畫		全一冊洋大判並級	一三〇頁	十三錢	四錢
松平伊豆	法學士森山吐虹君著	鈴木華邨君畫		全一冊洋大判並級	一二〇頁	十三錢	四錢
春日局	岸上質軒君著	菱田春草君畫		全一冊洋大判並級	一二四頁	十三錢	四錢
佐久間象山	塚原澁柿君著	宮川春汀君畫		全一冊洋大判並級	一五〇頁	十三錢	四錢
藤田東湖	大和田建樹君著	中村不折君畫		全一冊洋大判並級	一一六頁	十三錢	四錢
西郷隆盛	川崎紫山君著	水野年方君畫	第三版	全一冊洋大判並級	一四八頁	十三錢	四錢
桐野利秋	春山育次郎君著	小坂象堂君畫		全一冊洋大判並級	一八四頁	十三錢	四錢
橋本左内	法學士桐生悠々君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋大判並級	一七〇頁	十三錢	四錢
坂本龍馬	坂崎紫瀾君著	水野年方君畫		全一冊洋大判並級	一九六頁	十三錢	四錢

書名	著者	畫	版	體裁	頁數	正價	郵税
横井小楠	大野酒竹君著	中村不折君畫		全一冊洋大判並級	一二二頁	十三錢	四錢
高野長英	干河岸貫一君著	宮川春汀君畫		全一冊洋大判並級	一三〇頁	十三錢	四錢
渡邊華山	渡邊霞亭君著	筒井年峯君畫		全一冊洋大判並級	一八二頁	十三錢	四錢
釋月性	干河岸櫻所君著	宮川春汀君畫		全一冊洋大判並級	一三四頁	十三錢	四錢
平野國臣	文學士白河鯉洋君著	山中古洞君畫		全一冊洋大判並級	一一六頁	十三錢	四錢
周布政之助	堺枯川君著	高橋松亭君畫		全一冊洋大判並級	一二四頁	十三錢	四錢
河井繼之助	戸川殘花君著	梶田半古君畫	再版	全一冊洋大判並級	一三四頁	十三錢	四錢
雲井龍雄	玉木椿園君著	齋藤紫白君畫		全一冊洋大判並級	一五四頁	十三錢	四錢
大鹽平八郎	堀紫山君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋大判並級	一五六頁	十三錢	四錢
池大雅	田山花袋君著	下村觀山君畫		全一冊洋大判並級	一四六頁	十三錢	四錢
曲亭馬琴	饗庭篁村君著	下村觀山君畫		全一冊洋大判並級	一一四頁	十三錢	四錢
新井白石	文學士武島羽衣君著	山田敬中君畫		全一冊洋大判並級	一三六頁	十三錢	四錢
荻生徂徠	内田不知庵君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋大判並級	一三〇頁	十三錢	四錢

貝原益軒	石原笠堂君著　宮川春汀君畫	全一冊洋並製	大判一四六頁	正價十三錢	郵稅四錢
中江藤樹	國府犀東君著　山中古洞君畫	全一冊洋並製	大判一一四頁	正價十三錢	郵稅四錢
熊澤蕃山	文學士幸田成友君著　水野年方君畫	全一冊洋並製	大判一三六頁	正價十三錢	郵稅四錢
野中兼山	北村香陽君著　遠藤耕溪君畫	全一冊洋並製	大判一四八頁	正價十三錢	郵稅四錢
小栗上野介	躬多卒之君著　山中古洞君畫	全一冊洋並製	大判	正價十三錢	郵稅四錢
高島秋帆	櫻痴福地源一郎君著　水野年方君畫　第四版	全一冊洋並製	大判一七八頁	正價十三錢	郵稅四錢
伊能忠敬	幸田露伴君著　富岡永洗君畫	全一冊洋並製	大判九四頁	正價十三錢	郵稅四錢
間宮倫宗	文學士笹川臨風君著　山中古洞君畫	全一冊洋並製	大判一二八頁	正價十三錢	郵稅四錢
中濱萬次郎	石井研堂君著　遠藤耕溪君畫	全一冊洋並製	大判一三八頁	正價十三錢	郵稅四錢
錢屋五兵衛	法學士桐生悠々君著　富岡永洗君畫　再版	全一冊洋並製	大判一二八頁	正價十三錢	郵稅四錢
山田長政	遲塚麗水君著　菱田春草君畫　再版	全一冊洋並製	大判一二八頁	正價十三錢	郵稅四錢
木内宗吾	松原二十三階堂君著　宮川春汀君畫	全一冊洋並製	大判一二八頁	正價十三錢	郵稅四錢
二宮尊德翁	幸田露伴君著　彩色密畫挿入　第十七版	全一冊和並製	中判一一四頁	正價十二錢	郵稅四錢
近江聖人	村井弦齋君著　彩色密畫挿入　第二十版	全一冊和並製	中判一四三頁	正價十二錢	郵稅四錢
維新三傑	川崎紫山君著	全一冊和並製	中判一三〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
河村瑞軒	高橋太華君著	全一冊和並製	中判一三五頁	正價十二錢	郵稅四錢
太閤秀吉	高橋太華君著	全一冊和並製	中判一四〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
德川家康	矢部五洲君著	全一冊和並製	中判一五〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
新太郎少將	高橋太華君著	全一冊和並製	中判一八〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
賴山陽	三宅青軒君著	全一冊和並製	中判一二五頁	正價十二錢	郵稅四錢
上杉鷹山公	大橋乙羽君著　寺崎廣業君畫	全一冊和並製	中判一五〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
菅丞相	遲塚麗水君著	全一冊和並製	中判一五〇頁	正價十二錢	郵稅四錢
日蓮上人	幸田露伴君著	全一冊和並製	中判一三二頁	正價十二錢	郵稅四錢
平賀源内	水谷不倒君著	全一冊和並製	中判一一八頁	正價十二錢	郵稅四錢
高山彦九郎	村上浪六君著	全一冊和並製	中判一二六頁	正價十二錢	郵稅四錢
加藤清正	江見水蔭君著	全一冊和並製	中判一二三頁	正價十二錢	郵稅四錢

● 加藤清正　小倉秀貫君著　全一冊洋並製　中判一三〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 德川吉宗　草野正義君著　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 平相國　文學士高山林次郎君著　少年史譚　全一冊洋並製　大判　正價四十五錢　郵稅四錢

● 紀文大盡　村井弦齋君著　彩色密畫挿入　第十壹版　全一冊洋並製　中判一五六頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 大石良雄　原抱一庵主人著　彩色密畫挿入　第九版　全一冊和並製　中判一二〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 契沖阿闍梨　宇田川文海君著　彩色密畫挿入　再版　全一冊和並製　中判一一五頁　正價四十二錢　郵稅四錢

海外

● 菩提達磨　國府犀東居士著　下村觀山君畫　全一冊洋並製　大判一六二頁　正價三十錢　郵稅六錢

● 釋迦　文學士高山林次郎君著　第七版　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 耶蘇　文學士上田敏君著　中村不折君畫　第四版　全一冊洋並製　大判一四二頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 麻謌末　文學士坂本蠡舟君著　北蓮藏君畫　全一冊洋並製　大判一四八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 孔子　文學士吉國藤吉君著　横山大觀君畫　第五版　全一冊洋並製　大判一四〇頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 王陽明　文學士白河鯉洋君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一五二頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 孟子　法學士永井惟直君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一四〇頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 漢高祖　文學士三浦菊太郎君著　北蓮藏君畫　全一冊洋並製　大判一四〇頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 岳飛　文學士笹川種郎君著　渡邊金秋君畫　全一冊洋並製　大判一三二頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 孔明　法學士安東俊明君著　高橋松亭君畫　全一冊洋並製　大判一九四頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 成吉思汗　法學士大田蒼溟君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一四四頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 彼得大帝　法學士佐藤信安君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 歷山大王　文學士幸田成友君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 那破翁　文學士土井晩翠君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一三四頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 華聖頓　文學士福山義春君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大判一六八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 虞蘭得將軍　法學士佈施塚太郎君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一一八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 戈登將軍　法學士赤松紫川君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一三二頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● ハンニバル將軍　文學士大町桂月君著　渡邊審也君畫　全一冊洋並製　大判一三二頁　正價四十三錢　郵前四錢

著者・畫家	書名	體裁	定價
法學士島田文之助君著　北澤藏君畫	●ネルソン將軍	全一册洋並製　大例一五二頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士岸崎昌君著　中村不折君畫	●ガリバルヂー	全一册洋並製　大例一三六頁	正價十三錢　郵税四錢
文學士酒井小太郎君著　中村不折君畫	●ガーフヰールド	全一册洋並製　大例一六六頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士松岡國男君著　遠藤耕溪君畫	●クロンウエル	全一册洋並製　大例一四六頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士近松宇太郎君著　中村不折君畫	●グラッドストン	全一册洋並製　大例一八二頁	正價十三錢　郵税四錢
文學士久保天隨君著　中村不折君畫	●ソクラテース	全一册洋並製　大例一五四頁	正價十三錢　郵税四錢
文學士高木尙介君著　宮川春汀君畫	●ウエリントン	全一册洋並製　大例一六六頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士名尾良辰君著　遠藤耕溪君畫	●クリスピー	全一册洋並製　大例一七〇頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士森山守次君著　宮川春汀君畫	●メッテルニッヒ	全一册洋並製　大例一八五頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士谷野格君著　佐藤紫水君畫	●甲比丹屈克	全一册洋並製　大例一四八頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士笹川潔君著　小坂象堂君畫	●ビスマーク	全一册洋並製　大例一五三頁	正價十三錢　郵税四錢
法學士中村可雄君著　高橋松亭君畫	●シエクスピーア	全一册洋並製　大例一三四頁	正價十三錢　郵税四錢
文學士十時彌君著　山中古洞君畫	●デモスセネス	全一册洋並製　大例一三八頁	正價十三錢　郵税四錢

著者・畫家	書名	體裁	定價
法學士桐生政次君著　白瀧幾之助君畫	●コロンブス	全一册洋並製　大例一四〇頁	正價十三錢　郵税四錢
慶應義塾教授菅緣陸君著	●カーネギー	全一册紙皮上製　中例一五四頁	正價廿五錢　郵税四錢
著名文學政治大家合著	●近世 世界十偉人　再版	全一册紙皮上製　小例八八二頁	正價五十錢　税税八錢
著名文學政治大家合著	●東西二十四傑	全一册紙皮上製　大例五六二頁	正價三十五錢　郵税六錢
從二位伯爵勝安芳君題辭　米山梅吉君著	●開國先登 提督彼理	全一册洋並製　大例一九一頁	正價二十錢　郵税六錢
大和田建樹君著	●英米文人傳	全一册洋並製　中例一九二頁	正價十二錢　郵税四錢
漣山人　鷗山人共撰	●獨逸文壇 六大家列傳	全一册洋並製　小例一八六頁	正價十錢　郵税四錢
德富蘇峯君　志賀重昂君序文　靄山迎兵衞君譯述	●三大革命巨人 バーク	全一册洋並製　小例二四四頁	正價十錢　郵税四錢
荻原消進君譯述	●英傑之典型（ワシントン及ハンプトン）	全一册洋並製　小例一七九頁	正價十錢　郵税四錢
矢部新作君著	●ウエルリントン	全一册洋並製　小例一二六頁	正價十錢　郵税四錢
澁江保君編纂	●泰西婦女龜鑑　第三版	全一册洋並製　大例一八四頁	正價十五錢　郵税六錢
東邦協會々員	●大院君實傳	全一册洋並製　小例二〇〇頁	特價四錢　郵税二錢

地理書類

日本

理學士 中等教育 佐藤傳藏君著
● 地理學教科書 第五版
全二冊 大判 四二四頁 背皮洋綴 正價壹圓 郵稅十八錢

佐藤先生は斯學の名家なり、而も此書の編著に潜思從事する者數年、始めて能く疏を脫す、其正確尋常普通の者と實に異なるを見るべし

理學士 佐藤傳藏君著
● 日本新地理 第七版
全一冊 大判 三一三頁 洋並綴 正價三十五錢 郵稅十錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

大和田建樹君著
● 通俗日本地理 再版
全一冊 大判 二九六頁 洋並綴 正價三十錢 郵稅八錢

佐野川泰彥君著
● 新編地理
全一冊 大版 三一五頁 洋並綴 正價十八錢 郵稅六錢

巖谷小波君著
● 日本地理
全一冊 大判 一一八頁 洋並綴 正價十五錢 郵稅四錢

海外

理學士 佐藤傳藏君著
● 萬國新地理 第三版
全一冊 大判 三三七頁 洋並綴 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

澁江保君著
● 通俗世界地理
全一冊 大判 三四〇頁 洋並綴 正價三十錢 郵稅八錢

巖谷小波君著
● 幼年讀本 世界地理
全一冊 大版 九七頁 洋並綴 正價十五錢 郵稅四錢

地學

志賀重昂君著
● 地理學講義 第十版 統計表挿入
全一冊 中版 一六二頁 洋並綴 正價三十五錢 郵稅四錢

志賀重昂君著
● 日本風景論 密畫挿入 第十三版
全一冊 大判 二五八頁 洋並綴 正價五十錢 郵稅十錢

志賀重昂君著
● 河及湖澤 密畫挿入 第五版
全一冊 大判 二二八頁 洋並綴 正價四十錢 郵稅六錢

學習院教授 峰是三郎君著
● 中等教育 新編地文學 第六版
全一冊 中判 四〇〇頁 洋並綴 正價五十錢 郵稅八錢

理學士 佐藤傳藏君著
● 地質學 第三版
全一冊 大判 三三五頁 洋並綴 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

澁江保君著
● 小地質學
全一冊 中判 二一〇頁 洋並綴 正價十二錢 郵稅一錢五厘

谷口政德君著
● 簡易地震學
全一冊 中判 二一七頁 洋並綴 正價十二錢 郵稅一錢五厘

地圖

理學士佐藤傳藏君著
●中等教育 日本地圖 寫眞版三十二葉挿入 第七版
全一冊洋上製 大判七〇頁 正價四十五錢 郵稅八錢

理學士佐藤傳藏君著
●中等教育 萬國地圖 寫眞版四十葉挿入 第四版
全一冊洋上製 大判九七頁 正價六十錢 郵稅八錢

小宮寛制君編
●日本詳密全圖
大判形布洋上製 統計表三五二頁 正價壹圓 郵稅十二錢

小宮寛制君編
●支那北京市街圖
全一冊中判一枚 特價五錢 郵稅二錢

田中紹祥君編
●新撰朝鮮國全圖
全一特中判一枚 特價五錢 郵稅二錢

日本紀行

大橋乙羽君著
●増補千山萬水 寫眞版廿八葉挿入 第十二版
全一冊洋布上製 小判七〇二頁 正價五十錢 郵稅十錢

大橋乙羽君著
●續千山萬水 寫眞版廿八葉挿入 第五版
全一冊洋布上製 小判六五〇頁 正價五十錢 郵稅十錢

大橋乙羽君著
●耶馬溪 彩色美麗寫眞版五十七葉挿入 再版
全一冊洋布上製 小判一五五一頁 正價四十錢 郵稅四錢

大町桂月君著
●一蓑一笠 寫眞版八葉挿入
全一冊紙皮上製 小判三七六頁 正價三十錢 郵稅六錢

文學士久保天隨君著
●檜木笠 寫眞版十六葉挿入
全一冊紙皮上製 小判四七四頁 正價四十錢 郵稅六錢

田山花袋君著
●南船北馬 寫眞銅版十六葉挿入 第三版
全一冊紙皮上製 小判五〇〇頁 正價四十錢 郵稅六錢

田山花袋君著
●續南船北馬 寫眞銅版十六葉挿入
全一冊紙皮上製 小判五一六頁 正價四十錢 郵稅六錢

饗庭篁村君著
●旅硯
全一冊紙皮上製 小判六二八頁 正價四十五錢 郵稅六錢

幸田露伴君著
●枕頭山水
全一冊洋並製 中判二二四頁 正價十五錢 郵稅四錢

○

大橋乙羽君編
●紀行文集 密畫二十葉挿入
全一冊背皮上製 中判一〇〇六頁 正價六十錢 郵稅十六錢

岸上質軒君編
●續紀行文集
全一冊背皮上製 中判一〇三四頁 正價六十錢 郵稅十六錢

岸上質軒君編
●續々紀行文集
全一冊背皮上製 中判一〇〇六頁 正價六十錢 郵稅十六錢

佐藤飯八君校訂
●俳諧紀行全集 古俳人手蹟寫眞銅版挿入
全一冊洋並製 大判四〇〇頁 正價三十錢 郵稅八錢

●**紀行文選**　大和田建樹君著
全一册洋裝並製　大判一六〇頁　正價十五錢　郵税六錢

海外紀行

●**歐山米水**　大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入　第三版
全一册特別上製　大判一七〇頁　正價一圓五十錢　郵税八錢
故乙羽君遊を好み、遊ぶ毎に必ず記あり、而して其觀察の奇警にして行文の輕妙なる世皆之を知る、此書は乃ち歐米の遊を記する者にして其製幀の美を盡し善を盡せる、眞に錦上花を添ふる者なり

●**歐米小觀**　大橋乙羽君著
全一册洋布上製　小判二六二頁　正價四十錢　郵税四錢

●**歐米漫遊雜記**　鎌田榮吉君著
全一册紙皮上製　中判四二四頁　正價四十五錢　郵税六錢

●**大英國漫遊實記**　水田榮雄君著　寫眞版挿入
全一册皮紙上製　中判七〇〇頁　正價七十錢　郵税十錢

●**米國漫遊雜記**　松井廣吉君著　寫眞版十六枚挿入
全一册紙皮上製　中判二八六頁　正價三十八錢　郵税六錢

●**白山黑水**　文學士石澤發身君著　寫眞版十六枚挿入
全一册紙皮上製　中判三二六頁　正價四十五錢　郵税六錢

●**燕山楚水**　内藤湖南君著　寫眞版十六枚挿入
全一册紙皮上製　中判三三八頁　正價四十五錢　郵税六錢

●**波斯之旅**　吉田正春君著　回疆探險
全一册洋裝並製　大判二〇〇頁　正價二十錢　郵税六錢

○

●**清俗紀聞**　中川忠君輯　木版密畫挿入
全六册和裝上製　大判五六二頁　正價壹圓四十錢　郵税十壹錢

●**支那人氣質**　澁江保君譯述　寫眞版八枚挿入
全一册洋裝並製　大判四五一頁　特價二十錢　郵税八錢

●**清國一斑**　西島良爾君著　實歷
全一册洋布上製　小判二五〇頁　正價二十五錢　郵税四錢

●**歐洲巡遊通信**　羽化仙人譯述
全二册洋裝並製　小判四〇〇頁　正價二十錢　郵税八錢

名所案内

●**日本名勝地誌**　野崎左文君著
全十二册洋裝並製　中判五一〇〇頁　正價一册三十錢　郵税一册八錢
五畿八道臺灣琉球を分ちて十二卷とし、一々其國郡の沿革變遷より、名勝舊蹟神社佛閣は勿論、旅店の名稱、舟車の價格に至るまで、精細調査して之を掲ぐ、本邦惟一の名勝地誌にして、完全無比なる全國のガイドブックと言ふべし

●**改正漫遊案内**　野崎左文君著　寫眞版三十二枚挿入　第廿四版
全一册洋布上製　小判四八五頁　正價四十錢　郵税八錢

坪谷善四郎君著 第三版
● **通俗明治歷史**　全一冊洋並製 大判 三五〇頁　正價廿五錢 郵稅八錢

岸上質軒君著
● 通俗 **德川十五代史**　全一冊洋並製 大判 三三四頁　正價二十五錢 郵稅八錢

南梁小宮山綏介君著
● **德川太平記**　全二冊洋布上製 大判 頁　正價一圓九十錢 小包送八百匁

德川幕府二百七十年間の事蹟を、紀傳體に編述せられたる者、德川史に精通せる南梁先生の著なれば、精確贅言するを待たず、文辛流暢

前東京帝國大學教授內藤耻叟君著
● **德川十五代史**　全十二冊洋並製 大判二九五二頁　正價二圓七十錢 郵稅七十二錢

江戶幕府の制度典令に精通せる內藤先生の著にして、二百七十年間の大事要目及び法令等網羅して遺さず、德川史の絕好材料と言ふべし

文學士笹川臨風君著 插畫挿入 新版
● **元祿時勢粧**　全一冊紙皮上製 小判 二六〇頁　正價三十錢 郵稅四錢

文學士笹川臨風君著 挿畫挿入 新版
● **奈良朝**　全一冊紙皮上製 小判 四四四頁　正價廿五錢 郵稅六錢

內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註 第八版
● **校註神皇正統記**　全一冊洋並製 大判 二五八頁　正價廿五錢 郵稅六錢

中邨秋香君著 第二版
● 校訂 **吉野拾遺詳解**　全一冊洋並製 大判 一五二頁　正價廿五錢 郵稅四錢

落合直文 小中村義象 萩野由之三君校訂標註（以下六書日本文學全書）

● **水鏡**　全一冊洋並製 中判 四六八頁　正價廿五錢 郵稅三錢

● **增鏡**　全一冊洋並製 中判 三九五頁　正價廿五錢 郵稅三錢

● **大鏡**

● **榮花物語**　全三冊洋並製 中判一二三五頁　正價七十五錢 郵稅九錢

● **平家物語**　全一冊洋並製 中判 六四二頁　正價廿五錢 郵稅三錢

● **保元平治物語**　全一冊洋並製 中判 三八四頁　正價廿五錢 郵稅三錢

● **太平記**　全三冊洋並製 中判 頁　正價七十五錢 郵稅九錢

文學士坂本健一君著 挿畫挿入
● **日本風俗史**　全一冊洋並製 大判 三四二頁　正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

外國史

通史

文學士史學專攻坂本健一君著 全二冊 上卷背皮上製 下卷近刊 新版
● **世界史**　大判一〇八〇頁　正價一圓六十錢 小包四百匁迄

世に世界史と稱するもの少からず、但其記述する所大抵歐米二洲に限るの觀ある、一大缺典と言ふべきなり、本書は斷然此陋習を排し、東西洋古今の事蹟を併敍して宇內万國を一貫す、始めて眞世界史あり

長谷川天溪君著
● **通俗世界歷史**　全一冊洋並製 大判 三三四頁　正價廿五錢 郵稅八錢

大和田建樹君著
● **新體萬國歷史**　全二冊洋並製 中判 四〇四頁　正價廿四錢 郵稅八錢

墨谷漣山人著 中村不折君挿畫
● 幼年讀本 **世界歷史**　全一冊洋並製 大判 一三八頁　正價十五錢 郵稅四錢

文學士木寺柳次郎君著 沿革地圖及挿畫入 文部省檢定濟 第四版
● 中等教育 **東洋歷史**　全一冊背皮上製 大判 二八七頁　正價八十錢 郵稅二十錢

- 文學士木寺柳次郎君著 中等教育 **西洋歷史** 沿革地圖及密畫入 第四版　全一冊 大判 背皮上製 二六六頁　正價七十錢 郵稅十二錢
- 文學士吉國藤吉君著 **西洋歷史** 第二版　全一冊 大判 洋並製 三四八頁　正價卅五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢
- 東京專門學校講師松平康國君著 **世界近世史**　全一冊 大判 洋布上製 四二〇頁　正價一圓廿五錢 郵稅十二錢
- 米國ウヰツトソン著 大內暢三君譯 **歐洲十九世紀史** 新版　全一冊 大判 洋布上製 四一八頁　正價一圓廿五錢 郵稅十二錢
- 文學士幸田成友君著 **十九世紀史**　全一冊 大判 洋並製 四一〇頁　正價五十錢 郵稅十二錢
- 文學士高山林次郎君外十一學士分擔編述 太陽紀念發行 **十九世紀** 寫眞銅版畫數十葉挿入　全一冊 大判 洋並製 三六六頁　特別價廿五錢 郵稅五錢五厘
- 澁江保君著 **西洋事物起原**　全一冊 小判 洋並製 二〇〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 文學士高山林次郎君著 **世界文明史** 第五版　全一冊 大判 洋並製 三七六頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

各國史

- 河上清君著 **通俗獨逸歷史** 新版　全一冊 大判 洋並製 三三四頁　正價三十錢 郵稅八錢
- 法學博士高田早苗君校閱 山本利喜雄君著 **露西亞史** 沿革地圖挿入　全一冊 大判 洋布上製 四四〇頁　正價一圓廿五錢 郵稅十四錢
- 佛國ボリユー著 有賀長雄 鐮田榮吉 兩君閱 林毅陸君譯 **露西亞帝國**　全一冊 大判 背皮上製 九〇六頁　正價二圓 郵稅二十錢
- 英國マツカアシー著 法學博士高田早苗外二君共譯 **英國今代史** 一名女皇之御宇　全一冊 大判 上製背皮上製 一〇七六頁　正價二圓三十錢 小包送四百匁
- 國友重章君閱 恒屋盛服君著 **朝鮮開化史** 地圖挿入　全一冊 大判 洋布上製 五六六頁　正價一圓 郵稅十四錢
- 文學士白河次郎 國府種德兩君合著 **支那文明史**　全一冊 大判 洋並製 三二六頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢
- 中西牛郎君著 **支那文明史論**　全一冊 大判 洋並製 二一〇頁　特價二十錢 郵稅六錢
- 法學士立作太郎君譯 **最近之支那**　全一冊 大判 洋並製 一六四頁　正價三十五錢 郵稅四錢
- 文學博士三島中洲君校閱 山名善讓君訓點 **資治通鑑** 全部木版　全七十冊 和上製 大判 五一二二枚　正價拾三圓 小包送　司馬溫公の資治通鑑は、古來有數の良史と稱す、獨り議論叙事の精整なるのみならず、文辭亦漢文の好模範たり、本書印刷鮮明美本なり
- 標註 **春秋左氏傳校本**　全十五冊 和上製 大判　正價二圓廿錢 小包送六百匁
- 點註 **五代史**　全八冊 和裝上製 大判　正價一圓四十錢 郵稅十八錢
- **廿二史言行略**　全六冊 和裝上製 大判　正價一圓 郵稅十五錢
- 校訂 **史記讀本**　全二拾冊 和上製 大判 一三五三枚　正價三圓 小包送八百目
- 城井壽庵君講述 **史記列傳講義**　全三冊 洋並製 中判 一七四三頁　正價七十五錢 郵稅二十四錢
- 萬國史標 **十八史略評註**　全七冊 和裝上製 大判　正價一圓二十錢 郵稅二十錢
- 大田淳軒君講述 **十八史略講義**　全二冊 洋並製 中判 八八六頁　正價五十錢 郵稅十六錢

●**戰國策講義**　平井參堂君講述
全二冊洋並製　中判八〇〇頁　正價五十錢　郵稅十六錢

●**支那史**　増田貢校閲　藤田久道著　中等教育
全七冊和裝上製　中判四〇七頁　正價一圓　郵稅十一錢

戰史

日本

●**増訂 西南戰史**　紫山 川崎三郎君著　寫眞版畫十六葉挿入
全一冊洋布上製　大判一三五〇頁　特價一圓五拾錢　小包送六百匁
明治十年西南の戰は、我邦維新以後の大事にして、亦新日本を開くの關鍵たり、我邦の近世史を知らんと欲する者必ず一讀せざる可らず、本書其因より戰鬪攻伐を叙して委詳を極む

●**日清戰史**　紫山 川崎三郎君著　寫眞銅版畫數十葉挿入
全七冊洋並製　大判　頁　特價一圓九十錢　郵稅五十六錢
日清戰は日清兩國の實力を始めて全世界に表現せしもの、少くとも近世東洋の一大事件たり、本書之を叙述して目睹親經の感あらしむ

●**平城包圍攻擊**　陸軍大將野津道貫君序　藤野房次郎君著　寫眞銅版畫入
全一冊洋布上製　大判七八二頁　正價七十錢　郵稅十八錢　第七版
▲分本製　洋並製二冊　一冊正價三十錢　郵稅八錢

●**黄海大海戰**　海軍大將伊東祐亨君題辭　平田勝馬君著　寫眞銅版畫入
全一冊洋布上製　大判八三八頁　正價九十錢　郵稅二十錢　第三版
▲分本製　洋並製二冊　一冊正價四十錢　郵稅八錢

海外

●**北清戰史**　博文館編輯局編纂　寫眞銅版畫四十八葉挿入
全二冊洋並製　大判六六六頁　正價六十錢　郵稅四錢

●**北京籠城日記**　北京籠城者文學士服部宇之吉著　寫眞銅版畫八葉挿入
全一冊洋並製　大判一四一頁　正價十錢　郵稅一錢

●**北京籠城**　北清從軍記者水田南陽君著　寫眞銅版畫挿入
全一冊紙皮上製　小判二九五頁　正價廿五錢　郵稅四錢

●**北清觀戰記**　伊谷晉四郎君著　寫眞銅版畫（著者實寫）十六葉挿入
全一冊紙皮上製　中判二六八頁　正價四十錢　郵稅六錢

●**米國獨立戰史**　澁江保君著
全一冊洋並製　中判三二二頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**米國南北戰史**　柏軒 松井廣吉君著
全一冊洋並製　中判三〇八頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**英米海戰史**　越山平三郎君譯述
全一冊洋並製　中判三〇〇頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**伊太利獨立戰史**　柏軒 松井廣吉君著
全一冊洋並製　中判三三〇頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**希臘獨立戰史**　柳井録太郎君著
全一冊洋並製　中判二九七頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**英國革命戰史**　澁江保君著
全一冊洋並製　中判三一六頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**佛國革命戰史**　澁江保君著
全一冊洋並製　中判三三〇頁　正價十八錢　郵稅六錢

●**英佛聯合征清戰史**　柏軒 松井廣吉君著
全一冊洋並製　中判三一〇頁　正價十八錢　郵稅六錢

澁江保君著 ●印度蠶食戰史 全一册洋装並製 中判 三五三頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著 ●波蘭衰亡戰史 全一册洋装並製 中判 三二六頁 正價十八錢 郵税六錢

越山平三郎君著 ●ナイル海戰史 全一册洋装並製 中判 二九六頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著 ●フレデリック大王七年戰史 全一册洋装並製 中判 三四七頁 正價十八錢 郵税六錢

岡俗犀東君著 ●三十年戰史 全一册洋装並製 中判 三三三頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著 ●歴山大王統一戰史 全一册洋装並製 中判 三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著 ●ピユニツク戰史 全一册洋装並製 中判 三二八頁 正價十八錢 郵税六錢

澁江保君著 ●希臘波斯戰史 全一册洋装並製 中判 三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

井上操君譯述 セザール ポムペー 羅馬戰史 全一册洋装並製 中判 三二五頁 正價十八錢 郵税六錢

比律賓 マリアノポンセ著 法學士宮本平九郎君譯 ●南洋之風雲 全一册洋装並製 大判 二一六頁 正價四十錢 郵税六錢

日南 福本誠君著 ●新建國（トランスバール戰記） 全一册洋装並製 大判 一二四頁 正價二十錢 郵税四錢

傳記

日本

大藏省總務長官法學博士坂谷芳郎君著 寫眞石版數葉挿入 第二版
●青淵先生六十年史 一名 近世實業發達史（男爵澁澤榮一君傳記） 全二册洋布上製 大判二二一九頁 特價四圓 小包送一貫目

身を實業家に起して、其私を計らず、遂に華族の貴爵に列せらる、其人既に貴ぶべく、其事蹟倣ふべし、洵に希覯の近世實業發達史なり

戸川殘花君著 ●三百諸侯 全一册津布上製 大判 正價一圓二十錢 小包六百匁

栗原亮一君 宇田友猪君 兩君共著 ●坂垣退助君傳 全一册洋布上製 大判 三八一頁 正價一圓 郵税十二錢

栄濶 坂崎斌君著 寫眞銅版畵數葉挿入 ●陸奥宗光 全一册洋布上製 大判 三五六頁 特價三十錢 郵税八錢

大橋乙羽君著 寫眞銅版挿入 ●藤侯實歷（伊藤博文侯直話） 全一册洋布上製 小判 二四六頁 正價三十錢 郵税六錢

伊藤侯 山縣侯 井上伯三君直話 寫眞銅版眞蹟肖像挿入 ●元勲談 全一册洋並製 大判 二〇二頁 正價三十五錢 郵税六錢

太陽評論記者 鳥谷部春汀君著 ●明治人物評論 全一册紙皮上製 小判 四二三頁 正價二十五錢 郵税六錢

同 ●續明治人物評論 全一册紙皮上製 小判 四四八頁 正價三十錢 郵税六錢

勢多章之君編 ●明治名家古人評論（近衛公外諸名士が古今偉人を評論せし珍書） 全一册紙皮上製 小判 二三四頁 正價二十五錢 郵税四錢

中央新聞社編纂 ●名士の嗜好 全一册紙皮上製 小判 三四六頁 正價二十五錢 郵税四錢

● **名士の平生** 無何有道人編 全一册 紙皮上製 小判 二四五頁 正價二十五錢 郵税四錢

● **遊俠傳** 文學士笹川臨風君著 全一册 紙皮上製 小判 二八八頁 正價二十五錢 郵税六錢

● **明治豪傑譚** 鈴木光次郎君編 全一册 紙皮上製 小判 三八五頁 正價三十錢 郵税六錢

● **明治閨秀美譚** 同 全一册 洋並製 小判 一七二頁 正價二十錢 郵税二錢

● **明治才媛美譚** 熊田宗次郎君著 寫眞版十二葉挿入 全一册 紙皮上製 中判 六〇六頁 正價五十錢 郵税八錢

● **和漢婦女龜鑑** 岸上操君著 全一册 洋並製 大判 一八二頁 正價十五錢 郵税六錢

● **譚海** 依田百川君著 全四册 和並製 小判 四六六頁 正價七十錢 郵税十二錢

● **南木誌** 中山利貞君著 全五册 和並製 大判 正價七十五錢 郵税八錢

● **近世百傑傳** 干河岸貫一君編撰 全一册 紙皮上製 小判 五六七頁 正價五十錢 郵税六錢

● **續近世百傑傳** 同 全一册 紙皮上製 小判 四八八頁 正價四十錢 郵税六錢

● **洋學大家列傳** 南梁小宮山綏介君編 全一册 洋並製 中判 一八六頁 正價十錢 郵税四錢

● **近世大儒列傳** 內藤燦聚君著 全二册 洋並製 中判 四〇二頁 正價二十四錢 郵税八錢

● **俳諧名家列傳** 有耶無耶樓主人著 全一册 洋並製 小判 二二三頁 正價十錢 郵税四錢

● **高山彥九郎** 山路愛山君著 全一册 洋並製 小判 二六八頁 正價二十五錢 郵税四錢

● **水野越前守** 角田音吉君著 全一册 洋並製 小判 二七四頁 正價十三錢 郵税四錢

● **豐臣太閤** 依田百川君著 寫眞銅版十三枚挿入 全一册 洋並製 大判 三三二頁 特價十一錢五厘 郵税二錢

● **菅公談** 伯爵大隈重信君講演 木版肖像入 全一册 洋並製 大判 一三〇頁 正價三十錢 郵税四錢

● 家庭教育歷史讀本 **花の白雲** 落合直文 小中村義象 兩君著 蕭伯數名密畫入 第十版 全一册 洋並製 大判 一九二頁 正價十八錢 郵税四錢
目次 ●日本武尊の事蹟 ●曾我兄弟の復讐 ●神功皇后の事蹟 ●護良親王の事蹟 ●和氣清麿の事蹟 ●菅原道眞の事蹟

● 家庭教育歷史讀本 **卯花月夜** 落合直文 小中村義象 兩君著 蕭伯數名密畫入 第十版 全一册 洋並製 大判 二一四頁 正價十八錢 郵税四錢
目次 ●源義家の事蹟 ●佐々木高綱の事蹟 ●那須與一の事蹟 ●平重盛の事蹟 ●俊寛僧都の事蹟 ●袈裟御前の事蹟 ●靜御前の事蹟 ●忠興夫人の事蹟

● 家庭教育歷史讀本 **紅葉の錦** 落合直文 小中村義象 兩君著 蕭伯數名密畫入 第十版 全一册 洋並製 大判 二一〇頁 正價十八錢 郵税四錢
目次 ●平敦盛の事蹟 ●阿新丸の事蹟 ●森蘭丸の事蹟 ●藤原師賢の事蹟 ●兒島高德の事蹟 ●楠正成の事蹟 ●加藤清正の事蹟

● 家庭教育歷史讀本 **枯野の雪** 落合直文 小中村義象 兩君著 蕭伯數名密畫入 第九版 全一册 洋並製 大判 二三六頁 正價十八錢 郵税四錢
目次 ●北畠親房の事蹟 ●新田義貞の事蹟 ●楠正行の事蹟 ●赤穗義士の事蹟 ●林子平の事蹟 ●高山彥九郎の事蹟

● **三條實美公** 依田學海君著 寺崎廣業君畫 第三版 全一册 洋並製 大判 一一四頁 正價十三錢 郵税四錢

● **島津齋彬公** 春山鶴峯君著 中澤弘光君畫 全一册 洋並製 大判 一九四頁 正價十三錢 郵税四錢

六

○歴史書類（記傳）

書名	著者	畫家	版	體裁	定價
近衛忠凞公	勢多章之君著	中村不折君畫		全一冊洋裝並製 大判一三〇頁	正價十三錢 郵税四錢
水戸烈公	野口勝一君著	横山大觀君畫		全一冊洋裝並製 大判一五六頁	正價十三錢 郵税四錢
白川樂翁公	中邨秋香君著	富岡永洗君畫	再版	全一冊洋裝並製 大判一三四頁	正價十三錢 郵税四錢
井伊掃部頭	巌谷小波山人著	小島沖舟君畫	再版	全一冊洋裝並製 大判一一二頁	正價十三錢 郵税四錢
水野越州	中村二葉君著	小林永興君畫		全一冊洋裝並製 大判一三〇頁	正價十三錢 郵税四錢
松平伊豆	法學士森山吐虹君著	鈴木華邨君畫		全一冊洋裝並製 大判一二〇頁	正價十三錢 郵税四錢
春日局	岸上質軒君著	菱田春草君畫		全一冊洋裝並製 大判一二四頁	正價十三錢 郵税四錢
佐久間象山	塚原澁柿君著	宮川春汀君畫		全一冊洋裝並製 大判一五〇頁	正價十三錢 郵税四錢
藤田東湖	大和田建樹君著	中村不折君畫		全一冊洋裝並製 大判一一六頁	正價十三錢 郵税四錢
西郷隆盛	川崎紫山君著	水野年方君畫	第三版	全一冊洋裝並製 大判一四八頁	正價十三錢 郵税四錢
桐野利秋	春山育次郎君著	小坂象堂君畫		全一冊洋裝並製 大判一八四頁	正價十三錢 郵税四錢
橋本左内	法學士桐生悠々君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋裝並製 大判一七〇頁	正價十三錢 郵税四錢
坂本龍馬	坂崎紫瀾君著	水野年方君畫		全一冊洋裝並製 大判一九六頁	正價十三錢 郵税四錢

書名	著者	畫家	版	體裁	定價
横井小楠	大野酒竹君著	中村不折君畫		全一冊洋裝並製 大判一二二頁	正價十三錢 郵税四錢
高野長英	干河岸貫一君著	宮川春汀君畫		全一冊洋裝並製 大判一三〇頁	正價十三錢 郵税四錢
渡邊華山	渡邊霞亭君著	筒井年峯君畫		全一冊洋裝並製 大判一八二頁	正價十三錢 郵税四錢
釋月性	干河岸櫻所君著	宮川春汀君畫		全一冊洋裝並製 大判一三四頁	正價十三錢 郵税四錢
平野國臣	文學士白河鯉洋君著	山中古洞君畫		全一冊洋裝並製 大判一一六頁	正價十三錢 郵税四錢
周布政之助	堺枯川君著	高橋松亭君畫		全一冊洋裝並製 大判一二四頁	正價十三錢 郵税四錢
河井繼之助	戸川殘花君著	梶田半古君畫	再版	全一冊洋裝並製 大判一三四頁	正價十三錢 郵税四錢
雲井龍雄	玉木椿園君著	齋藤紫白君畫		全一冊洋裝並製 大判一五四頁	正價十三錢 郵税四錢
大鹽平八郎	堀紫山君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋裝並製 大判一五六頁	正價十三錢 郵税四錢
池大雅	田山花袋君著	下村觀山君畫		全一冊洋裝並製 大判一四六頁	正價十三錢 郵税四錢
曲亭馬琴	饗庭篁村君著	下村觀山君畫		全一冊洋裝並製 大判一一四頁	正價十三錢 郵税四錢
新井白石	文學士武島羽衣君著	山田敬中君畫		全一冊洋裝並製 大判一三六頁	正價十三錢 郵税四錢
荻生徂徠	内田不知庵君著	中川蘆舟君畫		全一冊洋裝並製 大判一三〇頁	正價十三錢 郵税四錢

● 貝原益軒　石原笠堂君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一四六頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 中江藤樹　岡府學東君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大判一一四頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 熊澤蕃山　文學士幸田成友君著　水野年方君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 野中兼山　北村香陽君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋並製　大判一四八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 小栗上野介　妙多卒之君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大判　正價四十三錢　郵稅四錢

● 高島秋帆　櫻痴福地源一郎君著　水野年方君畫　第四版　全一冊洋並製　大判一七八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 伊能忠敬　幸田露伴君著　富岡永洗君畫　全一冊洋並製　大判九四頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 間宮倫宗　文學士笹川臨風君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 中濱萬次郎　石井研堂君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋並製　大判一三八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 錢屋五兵衛　法學士桐生悠々君著　富岡永洗君畫　再版　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 山田長政　遅塚麗水君著　菱田春草君畫　再版　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 木内宗吾　松原廿三階堂君著　宮川春汀君畫　第十七版　全一冊洋並製　大判一二八頁　正價四十三錢　郵稅四錢

● 二宮尊德翁　幸田露伴君著　彩色密畫挿入　全一冊和並製　中判一一四頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 近江聖人　村井弦齋君著　彩色密畫挿入　第二十版　全一冊和並製　中判一四三頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 維新三傑　川崎紫山君著　全一冊和並製　中判一三〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 河村瑞軒　高橋太華君著　全一冊和並製　中判一三五頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 太閤秀吉　高橋太華君著　全一冊和並製　中判一四〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 德川家康　矢部五洲君著　全一冊和並製　中判一五〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 新太郎少將　高橋太華君著　全一冊和並製　中判一八〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 賴山陽　三宅青軒君著　全一冊和並製　中判一一五頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 上杉鷹山公　大橋乙羽君著　寺崎廣業君畫　全一冊和並製　中判一五〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 菅丞相　遅塚麗水君著　全一冊和並製　中判一五〇頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 日蓮上人　幸田露伴君著　全一冊和並製　中判一三二頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 平賀源内　水谷不倒君著　全一冊和並製　中判一一八頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 高山彥九郎　村上浪六君著　全一冊和並製　中判一二六頁　正價四十二錢　郵稅四錢

● 加藤清正　江見水蔭君著　全一冊和並製　中判一二三頁　正價四十二錢　郵稅四錢

小倉秀貫君著
●加藤清正
全一冊洋装並製 中判一三〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

草野正裕君著
●徳川吉宗
全一冊洋装並製 大判一二八頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士高山林次郎君著 少年史談
●平相國
全一冊洋装並製 大判 正價十五錢 郵稅四錢

村井弦齋君著 彩色密畫挿入
●紀文大盡
第十壹版 全一冊洋装並製 中判一五六頁 正價十二錢 郵稅四錢

原抱一庵主人著 彩色密畫挿入
●大石良雄
第九版 全一冊和装並製 中判一二〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

宇田川文海君著 彩色密畫挿入
●契沖阿闍梨
再版 全一冊和装並製 中判一一五頁 正價十二錢 郵稅四錢

海外

國府犀東居士著
●菩提達磨
全一冊洋装並製 大判一六二頁 正價三十錢 郵稅六錢

文學士高山林次郎君著 下村觀山君畫
●釋迦
第七版 全一冊洋装並製 大判一二八頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士上田敏君著 中村不折君畫
●耶蘇
第四版 全一冊洋装並製 大判一四二頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士坂本蠡舟君著 北蓮藏君畫
●麻訶末
全一冊洋装並製 大判一四八頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士吉國藤吉君著 横山大觀君畫
●孔子
第五版 全一冊洋装並製 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士白河鯉洋君著 宮川春汀君畫
●王陽明
全一冊洋装並製 大判一五二頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士永井惟直君著 宮川春汀君畫
●孟子
全一冊洋装並製 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士三浦菊太郎君著 北蓮藏君畫
●漢高祖
全一冊洋装並製 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士笹川種郎君著 渡邊金秋君畫
●岳飛
全一冊洋装並製 大判一三二頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士安東俊明君著 高橋松亭君畫
●孔明
全一冊洋装並製 大判一九四頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士大田蒼溪君著 中村不折君畫
●成吉思汗
全一冊洋装並製 大判一四四頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士佐藤信安君著 宮川春汀君畫
●彼得大帝
全一冊洋装並製 大判一三六頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士幸田成友君著 中村不折君畫
●歴山大王
全一冊洋装並製 大判一三六頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士土井晩翠君著 中村不折君畫
●那破翁
全一冊洋装並製 大判一三四頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士福山義春君著 山中古洞君畫
●華聖頓
全一冊洋装並製 大判一六八頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士佈施[illegible]太郎君著 宮川春汀君畫
●虞蘭得將軍
全一冊洋装並製 大判一一八頁 正價十三錢 郵稅四錢

法學士赤松紫川君著 宮川春汀君畫
●戈登將軍
全一冊洋装並製 大判一三二頁 正價十三錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 渡邊審也君畫
●ハンニバル將軍
全一冊洋装並製 大判一三二頁 正價十三錢 郵稅四錢

- 法學士島田文之助君著　北蓮藏君畫　●ネルソン將軍　全一册洋並綴　大判一五二頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士岸崎昌君著　中村不折君畫　●ガリバルヂー　全一册洋並綴　大判一三六頁　正價十三錢　郵税四錢
- 文學士酒井小太郎君著　中村不折君畫　●ガーフヰールド　全一册洋並綴　大判一六六頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士松岡國男君著　遠藤耕溪君畫　●クロンウエル　全一册洋並綴　大判一四六頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士近松宇太郎君著　中村不折君畫　●グラッドストン　全一册洋並綴　大判一八二頁　正價十三錢　郵税四錢
- 文學士久保天隨君著　中村不折君畫　●ソクラテース　全一册洋並綴　大判一五四頁　正價十三錢　郵税四錢
- 文學士高木尙介君著　宮川春汀君著　●ウエリントン　全一册洋並綴　大判一六六頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士名尾良辰君著　遠藤耕溪君畫　●クリスピー　全一册洋並綴　大判一七〇頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士森山守次君著　宮川春汀君畫　●メッテルニッヒ　全一册洋並綴　大判一八五頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士谷野格君著　佐藤磐水君畫　●甲比丹屈克　全一册洋並綴　大判一四八頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士笹川潔君著　小坂象堂君畫　●ビスマーク　全一册洋並綴　大判一五三頁　正價十三錢　郵税四錢
- 法學士中村可雄君著　高橋松亭君畫　●シエクスピーア　全一册洋並綴　大判一三四頁　正價十三錢　郵税四錢
- 文學士十時彌君著　山中古洞君畫　●デモスセネス　全一册洋並綴　大判一三八頁　正價十三錢　郵税四錢

- 法學士桐生政次君著　白瀧幾之助君畫　●コロンブス　全一册洋並綴　大判一四〇頁　正價十三錢　郵税四錢
- 慶應義塾教授菅綠陰君著　●カーネギー　全一册紙皮上綴　中判一五四頁　正價廿五錢　郵税四錢
- 著名文學政治大家合著　●近世世界十偉人　再版　全一册紙皮上綴　小判八八二頁　正價五十錢　税税八錢
- 著名文學政治大家合著　●東西二十四傑　全一册紙皮上綴　大判五六二頁　正價三十五錢　郵税六錢
- 從二位伯爵勝安芳君題辭　米山梅吉君著　●開國先登提督彼理　全一册洋並綴　大判一九一頁　正價二十錢　郵税六錢
- 大和田建樹君著　●英米文人傳　全一册洋並綴　中判一九二頁　正價十二錢　郵税四錢
- 漣山人　霧山人共撰　●獨逸文壇六大家列傳　全一册洋並綴　小判一八六頁　正價十錢　郵税四錢
- 德富蘇峯君　志賀重昂君序文　霞山迎兵衞君譯述　●三大革命巨人バーク　全一册洋並綴　小判二四四頁　正價十錢　郵税四錢
- 荻原滑淮君譯述　●英傑之典型（ワシントン及ハンプトン）　全一册洋並綴　小判一七九頁　正價十錢　郵税四錢
- 矢部新作君著　●ウエルリントン　全一册洋並綴　小判一二六頁　正價十錢　郵税四錢
- 澁江保君編纂　●泰西婦女龜鑑　第三版　全一册洋並綴　大判一八四頁　正價十五錢　郵税六錢
- 東邦協會々員　●大院君實傳　全一册洋並綴　小判二〇〇頁　特價四錢　郵税二錢

地理書類

日本

●中等教育 地理學教科書 第五版　理學士 佐藤傳藏君著
全二冊 背皮洋綴 大判 四二四頁 正價壹圓 郵税十八錢

佐藤先生は斯學の名家なり、而も此書の編著に潜思從事する者數年、始めて能く稿を脫す、其正確尋常普通の者と實に異なるを見るべし

●日本新地理 第七版　理學士 佐藤傳藏君著
全一冊 洋並綴 大判 三一三頁 正價三十五錢 郵税十錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

●通俗日本地理 再版　大和田建樹君著
全一冊 洋並綴 大判 二九六頁 正價三十錢 郵税八錢

●新編地理　佐野川泰彥君著
全一冊 洋並綴 大版 三一五頁 正價十八錢 郵税六錢

●日本地理　巖谷小波君著
全一冊 洋並綴 大判 一一八頁 正價十五錢 郵税四錢

海外

●萬國新地理 第三版　理學士 佐藤傳藏君著
全一冊 洋並綴 大判 三三七頁 正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

●通俗世界地理　渋江保君著
全一冊 洋並綴 大判 三四〇頁 正價三十錢 郵税八錢

●幼年讀本 世界地理　巖谷小波君著
全一冊 洋並綴 大版 九七頁 正價十五錢 郵税四錢

地學

●地理學講義 第十版 密畫挿入 統計表挿入　志賀重昂君著
全一冊 洋並綴 中版 一六二頁 正價三十五錢 郵税四錢

●日本風景論 第十三版 密畫挿入　志賀重昂君著
全一冊 洋並綴 大判 二五八頁 正價五十錢 郵税十錢

●河及湖澤 第五版 密畫挿入　志賀重昂君著
全一冊 洋並綴 大判 二二八頁 正價四十錢 郵税六錢

●中等教育 新編地文學 第六版　學習院教授 峰是三郎君著
全一冊 洋並綴 中判 四〇〇頁 正價五十錢 郵税八錢

●地質學 第三版　理學士 佐藤傳藏君著
全一冊 洋並綴 大判 三三五頁 正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

●小地質學　渋江保君著
全一冊 洋並綴 中判 二一〇頁 正價十二錢五厘 郵税一錢

●簡易地震學　谷口政德君著
全一冊 洋並綴 中判 二一七頁 正價十二錢五厘 郵税一錢

地圖

● 理學士佐藤傳藏君著　中等教育 日本地圖　寫眞版三十二葉挿入　第七版　全一册洋上製 大判七〇頁　正價四十五錢 郵稅八錢

● 理學士 佐藤傳藏君著　中等教育 萬國地圖　寫眞版四十葉挿入　第四版　全一册洋上製 大判九七頁　正價六十錢 郵稅八錢

● 小宮寛制君編　日本詳密全圖　大判形布洋上製 統計表三五二頁　正價壹圓 郵稅十二錢

● 小宮寛制君編　支那北京市街圖　全一册中判一枚　特價五錢 郵稅二錢

● 田中紹祥君編　新撰朝鮮國全圖　全一特中判一枚　特價五錢 郵稅二錢

日本紀行

● 大橋乙羽君著　增補 千山萬水　寫眞版廿八葉挿入　第十二版　全一册洋布上製 小判七〇二頁　正價五十錢 郵稅十錢

● 大橋乙羽君著　續千山萬水　寫眞版廿八葉挿入　第五版　全一册洋布上製 小判六五〇頁　正價五十錢 郵稅十錢

● 大橋乙羽君著　耶馬溪　彩色美麗寫眞版五十七葉挿入　再版　全一册洋布上製 小判一五五頁　正價四十錢 郵稅四錢

● 大町桂月君著　一蓑一笠　寫眞版八葉挿入　全一册紙皮上製 小判三七六頁　正價三十錢 郵稅六錢

● 文學士久保天隨君著　檜木笠　寫眞版十六葉挿入　全一册紙皮上製 小判四七四頁　正價四十錢 郵稅六錢

● 田山花袋君著　南船北馬　寫眞銅版十六葉挿入　第三版　全一册紙皮上製 小判五〇〇頁　正價四十錢 郵稅六錢

● 田山花袋君著　續南船北馬　寫眞銅版十六葉挿入　全一册紙皮上製 小判五一六頁　正價四十錢 郵稅六錢

● 饗庭篁村君著　旅硯　全一册紙皮上製 小判六二八頁　正價四十五錢 郵稅六錢

● 幸田露伴君著　枕頭山水　全一册洋並製 中判二二四頁　正價十五錢 郵稅四錢

○

● 大橋乙羽君編　紀行文集　密畫二十葉挿入　全一册背皮上製 中判一〇〇六頁　正價六十錢 郵稅十六錢

● 岸上質軒君編　續紀行文集　全一册背皮上製 中判一〇三四頁　正價六十錢 郵稅十六錢

● 岸上質軒君編　續々紀行文集　全一册背皮上製 中判一〇〇六頁　正價六十錢 郵稅十六錢

● 佐藤飯人君校訂　俳諧紀行全集　古俳人手蹟寫眞銅版挿入　全一册洋並製 大判四〇〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

大和田建樹君著
●紀行文選　全一冊洋並製　大判一六〇頁　正價十五錢　郵稅六錢

海外紀行

大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入　第三版
●歐山米水　全一冊特別上製　大判一七〇頁　正價一圓五十錢　郵稅八錢
故乙羽君遊を好み、遊ぶ毎に必ず記あり、而して其觀察の奇警にして行文の輕妙なる世皆之を知る、此書は乃ち歐米の遊を記する者にして其製頗の美を盡し善を盡せる、眞に錦上花を添ふる者なり

大橋乙羽君著
●歐米小觀　全一冊洋布上製　小判二六二頁　正價四十錢　郵稅四錢

鎌田榮吉君著
●歐米漫遊雜記　全一冊紙皮上製　中判四二四頁　正價四十五錢　郵稅六錢

水田榮雄君著　寫眞版挿入
●大英國漫遊實記　全一冊皮紙上製　中判七〇〇頁　正價七十錢　郵稅十錢

松井廣吉君著　寫眞版十六枚挿入
●米國漫遊雜記　全一冊紙皮上製　中判二八六頁　正價三十八錢　郵稅六錢

文學士石川澄身君著　寫眞版十六枚挿入
●白山黑水　全一冊紙皮上製　中判三二六頁　正價四十五錢　郵稅六錢

內藤湖南君著　寫眞版十六枚挿入
●燕山楚水　全一冊紙皮上製　中判三三八頁　正價四十五錢　郵稅六錢

吉田正春君著　回疆探險
●波斯之旅　全一冊洋並製　大判二〇〇頁　正價二十錢　郵稅六錢

○

中川忠君輯　木版密畫挿入
●清俗紀聞　全六冊和上製　大判五六二頁　正價壹圓四十錢　郵稅十錢

澁江保君譯述　寫眞版八枚挿入
●支那人氣質　全一冊洋並製　大判四五一頁　特價二十錢　郵稅八錢

四島貞爾君著　歷
●清國一斑　全一冊洋布上製　小判二五〇頁　正價二十五錢　郵稅四錢

羽化仙人譯述
●歐洲巡遊通信　全二冊洋並製　小判四〇〇頁　正價二十錢　郵稅八錢

名所案內

野崎左文君著
●日本名勝地誌　全十二冊洋並製　中判五一〇〇頁　正價一冊三十錢　郵稅一冊八錢
五畿八道臺灣琉球を分ちて十二卷とし、一々其國郡の沿革變遷より、名勝舊蹟神社佛閣は勿論、旅店の名稱、舟車の價格に至るまで、精細調査して之を揭ぐ、本邦惟一の名勝地誌にして、完全無比なる全國のガイドブックと言ふべし

野崎左文君著　寫眞版三十二枚挿入　第廿四版
●改正漫遊案內　全一冊洋布上製　小判四八五頁　正價四十錢　郵稅八錢

●江戸名所圖繪　長谷川雪旦君畫圖　全廿冊和上級　大判　正價五圓　小包一貫三百匁

●江戸名所花暦　長谷川雪旦君畫圖　全四冊和上級　大判一五六頁　正價四十錢　郵稅六錢

●東都歳事記　長谷川雪旦君畫圖　全五冊和上級　大判　正價六十五錢　郵稅六錢

●木曾街道圖繪　長谷川雪旦君畫圖　全二冊和上級　大判　正價三十錢　郵稅四錢

●上野鑛泉誌　高橋周楨君著　石版畫及地圖插入　全一冊洋並級　中判二四〇頁　特價八錢　郵稅四錢

●探凉案内　東西南北　萬朝報探凉軍記者合著　寫眞版數十枚插入　全一冊紙皮上級　大判七〇九頁　正價六十錢　郵稅十錢

農業書類

農業

●農學大全　農學博士橫井時敬君外七農學士諸君合著　全一冊背皮上製　大判一五八六頁　正價二圓五十錢　小包送六百匁

農は國本なり、農家は乃ち富國强兵の基礎なり、此書は諸名家各其專門とする所を分擔編述せられたるもの、斯學の津梁となすべし

●增訂農學入門　合本　農學博士稻垣乙丙君著　增訂第十六版　全一冊和並級　大判三七二頁　正價三十五錢　郵稅八錢

●仝（分本）卷一　全一冊和並級　大判一一〇頁　正價十一錢　郵稅四錢

●仝（分本）卷二　全一冊和並級　大判一二二頁　正價十二錢　郵稅四錢

●仝（分本）卷三　全一冊和並級　大判一四二頁　正價十五錢　郵稅四錢

●農業讀本　農學博士橫井時敬君著　第十六版　全二冊和並級　大判二五〇頁　正價廿八錢　郵稅八錢

●初等作物通論　農學博士稻垣乙丙君著　再版　全一冊洋布上級　大判一八四頁　正價五十錢　郵稅八錢

●農學階梯　農學博士稻垣乙丙君著　第五版　全一冊背皮上級　大判三八三頁　正價七十五錢　郵稅十錢

●農學講習全書　農學士伊藤悌藏君著　再版　全一冊洋並級　大判三三四頁　正價四十五錢　郵稅八錢

●中等教育農學通論　農學士大內建君著　第六版　全一冊背皮上級　中判六二四頁　正價九十錢　郵稅十錢

●農學汎論　農學士恩田鐵彌君著　第三版　全一冊洋並級　大判三五二頁　正價三十五錢　郵稅八錢

▲特製本　洋布上級　正價五十錢　郵稅十錢

●農業汎論　農學博士橫井時敬君著　第八版　全一冊洋並級　大判二〇四頁　正價十五錢　郵稅六錢

●農業須知　農學士池田昇三君著　第九版　全一冊洋並級　大判三〇六頁　正價十五錢　郵稅六錢

●農業大意　茅原茂君著　寫眞版及彩色密畫插入　全一冊洋並級　大判二四二頁　正價廿五錢　郵稅六錢

農學博士橫井時敬君　農學士澤村眞君合著
●農業經濟學　全一冊洋裝　大判三五四頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士今關常次郎君著
●農業經濟篇　第九版　全一冊洋裝　大判二二五頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士西村榮十郎君著
●農用器具學　全一冊洋裝　大判三二二頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學博士稻垣乙丙君著
●植物營養論　第再版　全一冊洋裝　大判三四六頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士佐々木祐太郎君著
●氣候及土壤論　再版　全一冊洋裝　大判三六一頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士中村鼎君著
●土壤改良篇　第十二版　全一冊洋裝　大判二〇〇頁　正價十五錢　郵税六錢

佐賀縣農學校長農學士木下彌直君著
●肥料學　第四版　全一冊洋裝　大判三三〇頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士原熙君著
●肥料篇　第十二版　全一冊洋裝　大判二三一頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士井上正賀君著
●黴菌學　全一冊洋裝　大判三四〇頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

坪谷善四郎君著
●農工書簡文　寫眞版及彩色木版畫挿入　全一冊洋裝　大判二五五頁　正價廿五錢　郵税六錢

農學博士稻垣乙丙君著
村落學校補習科用
●農業算術　全一冊洋裝　中判一五〇頁　正價八錢　郵税二錢

農學士石阪橘樹君著
●農政學　全一冊洋裝　大判三二〇頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士　井上正賀君著
●農藝化學　全一冊洋裝　大判三一五頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

栽培

農科大學教授農學博士橫井時敬君著
●栽培汎論　再版　全一冊洋裝　大判三五八頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士田中節三郎君著
●栽培各論　全一冊洋裝　大判四〇〇頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製布　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士狩尾録作君著
●栽培篇　第十版　全二冊洋裝　大判四五〇頁　正價三十錢　郵税十二錢

農學士高田鑑三君著
●作物篇　第九版　全一冊洋裝　大判二一一頁　正價十五錢　郵税六錢

山口縣農事試驗場長農學士楠原正三君著
●米麥栽培書　第五版　全一冊洋裝　大判一六〇頁　正價廿錢　郵税四錢

農學士楠原正三君著
●米麥篇　第六版　全一冊洋裝　大判一九五頁　正價十五錢　郵税六錢

福羽逸人君著
●蔬菜栽培法　全一冊洋装並製　大判　五四〇頁　正價七十錢　郵税十二錢

福羽逸人君著
●果樹栽培全書　第七版　全五冊洋装並製　大判　六七四頁　正價五十五錢　郵税十二錢

農學士恩田鐵彌君著
●實用苹果栽培書　全一冊洋装並製　大判　一三二頁　正價二十錢　郵税四錢

農學博士玉利喜造君校閲　川上善兵衛君著
●實驗葡萄栽培書　寫眞版密插入　全一冊洋装並製　大判　二三五頁　正價六十錢　郵税八錢

安藤謙吉君著　寫眞版挿入
●果樹と蔬菜　全一冊洋装並製　大判　二五八頁　正價二十五錢　郵税六錢

農學士小島銀吉君著
●作物病害篇　全一冊洋装並製　大判　二四二頁　正價十五錢　郵税六錢

池田榮太郎君著
●栽桑新論　全一冊洋装並製　大判　二五〇頁　正價三十錢　郵税七錢

岩淵平太君著
●桑樹病害論　全一冊洋装並製　大判　二四九頁　正價三十錢　郵税六錢

農産製造

農學士橋厳君著
●農産製造學　再版　全一冊洋装並製　大判　三四五頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士今關常次郎君著
●農産製造篇　第十版　全一冊洋装並製　大判　二五三頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士井上正賀君著
●日用化學　全一冊洋装並製　大判　三二四頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士石阪橘樹君著
●製茶篇　再版　全一冊洋装並製　中判　三五八頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士奥村順四郎君編
●烟草篇　第三版　全一冊洋装並製　中判　三〇〇頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士石井淳二郎君編
●砂糖篇　全一冊洋装並製　中判　三六一頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士西村榮十郎君編
●味噌醤油篇　第四版　全一冊洋装並製　中判　三三〇頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士矢木久太郎君編
●日本酒釀造法　第四版　全一冊洋装並製　中判　三〇八頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士矢部規矩治君編
●西洋酒釀造篇　第四版　全一冊洋装並製　中判　三五一頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士石阪橘樹君著
●日用品製造篇　全一冊洋装並製　中判　二八二頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士石阪橘樹君著
●廢物利用篇　全一冊洋装並製　中判　三三七頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士大工原銀太郎著
●菜食篇　全一冊洋装並製　中判　二八二頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士辻暢太郎君著
●肉食篇　全一冊洋装並製　中判　三八二頁　正價十六錢　郵税六錢

農學士坂本久喜君著
●飲料篇　全一冊洋裝　中判三三六頁　正價十五錢　郵税六錢

農學士山下脇人君著
●實用分析術　全一冊洋裝　中判三〇二頁　正價十五錢　郵税六錢

畜産水産

農學士高見長恒君著
●畜産汎論　全一冊洋裝　大判三二〇頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士田口晋吉君著
●畜産各論　全一冊洋裝　大判三五〇頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

農學士原麟君著　第九版
●養畜篇　全一冊洋裝　大判二二一頁　正價十五錢　郵税六錢

獸醫學士内村兵藏君著　第四版
●獸醫篇　全二冊洋裝　大判三八五頁　正價三十錢　郵税十二錢

田村松魚君編　寫眞版挿入
●狩獵と養鷄　全一冊洋裝　大判二三〇頁　正價二十五錢　郵税六錢

農學士瀨尾儀吉君校閱　廣益　高橋要亮君譯述　第六版
●家禽新書　全一冊洋裝　中判二五五頁　正價十五錢　郵税四錢

關澤明淸君校閱　竹中邦香君著　第五版
●水産學大意　全一冊洋裝　大判二五五頁　正價十五錢　郵税六錢

蠶業

農學士本多岩次郎君校閱　三谷徹君　池田榮太郎君共著
●蠶業通論　全一冊洋裝　大判二五二頁　正價三十錢　郵税六錢

佐々木藤太郎君著
●養蠶手引草　全一冊洋裝　大判一八六頁　正價三十錢　郵税六錢

農學士高田鑑三君著　第十二版
●蠶業篇　全一冊洋裝　大判二一三頁　正價十五錢　郵税六錢

横山源之助君編　寫眞版挿入
●養蠶と製絲　全一冊洋裝　大判二四〇頁　正價廿五錢　郵税六錢

農商務省蠶業講習所技師松永伍作君閱　望月關馬君　三谷徹君合著
●育蠶要錄　全一冊洋布上製　小判二三八頁　正價三十五錢　郵税四錢

農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著　第六版
●蠶業汎論　全一冊洋裝　中判二二四頁　正價十五錢　郵税四錢

農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著　第九版
●栽桑篇　全一冊洋裝　中判二八〇頁　正價十五錢　郵税四錢

農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著　第十二版
●養蠶篇　全二冊洋裝　中判四五〇頁　正價三十錢　郵税八錢

農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著
●製絲篇　全二冊洋裝　中判二八〇頁　正價三十錢　郵税八錢

鶴田賢也君著
生絲檢查論 全一冊 洋並製 大判 二五〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

林業

林學士奧田貞衛君著
森林學 ▲特製本 洋布上製 全一冊 洋並製 大判 三二四頁 正價五十錢 正價三十五錢 郵稅八錢 郵稅十錢

林學士鈴木審三君著
林業篇 第五版 全一冊 洋並製 大判 二〇六頁 正價十五錢 郵稅六錢

林學博士ドクトル本多靜六君著
提要造林學 ▲特製本 洋布上製 全一冊 洋並製 大判 三五三頁 正價五十錢 正價卅五錢 郵稅八錢 郵稅十錢

林學士臼杵永次郎君著
造林學 全一冊 洋並製 大判 二五二頁 正價十五錢 郵稅六錢

林學士新島善直君著
森林保護學 ▲特製本 洋布上製 全一冊 洋並製 大判 三八二頁 正價九十錢 正價三十五錢 郵稅八錢 郵稅十錢

林學士臼杵永次郎君著
林產物製造法 第五版 全二冊 洋並製 大判 四〇二頁 正價卅二錢 郵稅十錢

林學士柴田榮吉君著
日本山林一斑 寫眞版挿入 全一冊 洋並製 大判 一三二頁 正價廿五錢 郵稅四錢

法學士田中次郎君校閱 市原虎松君著
國有林野法要義 全一冊 洋並製 大判 二一七頁 正價卅五錢 郵稅六錢

商業書類

商業

男爵金子堅太郎君閱辭 戶川殘香君編
實業寶典 全一冊 背皮上製 中判二一一八頁 正價二圓五十錢 小包送料六十錢

本書の特色は單に雅語俗語古語の解說に止まらず植物に於ては、品[illegible]播種栽培適地收穫製造料理成分貯藏等に分ち動物に於ては品種形狀調育繁殖料[illegible]成分貯藏[illegible]分ち鑛物に於ては品種採製製造等に分ち名產地海外輸出等に至るまで悉く[illegible]說を加へ例へば衣服の目に於ては東西兩様の[illegible]纏法な[illegible]せ料理の[illegible]に於ては作ゆろ料理於を說き染物の目に於ては東門附様の染色法を揭げ茶の湯生花音樂其他の遊戲に至るまて詳細に起源沿革考證を附記したれば一本にして殆ど實業自家の音を網羅し一作縮けは立ろに万能の師と爲るを備べく荷ち商工農に從ふものは勿論一家政を執る者の參考として必す各家に一本を備ざるべからす

高等商業學校教授縄山鐘三君著
商業實踐法 第三版 全一冊 紙皮上製 大判 六八〇頁 正價七十五錢 郵稅十四錢

法學士清水泰吉君著
商業經濟學 ▲特製本 洋布上製 全一冊 洋並製 大判 三二五頁 正價五十錢 正價三十五錢 郵稅八錢 郵稅八錢

松本重太郎君序文 森一兵君著
商業大意 第六版 寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判二四〇頁 正價廿五錢 郵税六錢

天城安政君著
商業教科書 第五版
全一冊洋並綴 中判六七〇頁 正價四十五錢 郵税十錢

保田安政君著
商業讀本 第十六版
全三冊洋並綴 大判六〇〇頁 正價三十九錢 郵税十八錢

公爵近衞篤麿公題辭 六條隆吉君 近藤千吉君合著
中等教育 **世界商業史** 第四版
全一冊洋並綴 中判五〇五頁 正價三十錢 郵税八錢

法學士永井惟直君著
商工地理學 ▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢
全一冊洋並綴 大判三六二頁 正價三十五錢 郵税八錢

文學士濱田健次郎君校閲 伊勢本一郎君編
應用新編 **經濟地理**
全一冊洋並綴 小判二五三頁 正價十錢 郵税四錢

高橋邦二郎君著
通俗商業簿記
全一冊洋並綴 大判三三〇頁 正價二十五錢 郵税八錢

高等商業學校卒業山本邦之助君 田村八二君合著
新式 **商業簿記全書** 第十版
全一冊洋並綴 大判三四〇頁 正價四十錢 郵税八錢

大倉喜八郎君題辭 森一兵君著
商家書翰文 第三版 彩色木版寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判二四五頁 正價廿五錢 郵税六錢

高等商業學校卒業佐藤適君著
外國貿易案内 寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判二六〇頁 正價廿五錢 郵税六錢

小山松壽君著 彩色地圖挿入
南清貿易
全一冊洋並綴 〇判二六〇頁 正價五十五錢 郵税六錢

法學士高槻純之助君著
爲換及外國貿易 第四版
全一冊洋並綴 中判二三二頁 正價十五錢 郵税六錢

平田純一郎君著 再版
相場必勝法
全一冊紙皮上綴 小判三〇〇頁 正價五十錢 郵税六錢

平田純一郎君著 再版
米商寶函
全一冊洋並綴 小判二九〇頁 正價三十錢 郵税六錢

若尾逸平君題字 森一兵君
致富要訣 再版 寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判二三六頁 正價廿五錢 郵税六錢

法學博士天野爲之君序 坂牧勇助君譯述
金即幣即 能散能聚 **金**（合本） 第十二版
全一冊洋並綴 中判五〇〇頁 正價十八錢 郵税六錢

增井[illegible]次郎[illegible]著
銀行實踐法 第九版
全一冊洋並綴 大判五一二頁 正價十六錢 郵税十錢

森一兵君著
會社銀行 **實務案内** 彩色木版寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判二六一頁 正價廿五錢 郵税六錢

戸田繁香君編
新撰 **銀行法典大全**
全一冊洋布上綴 大判一〇二〇頁 正價一圓五十錢 小包送四百匁

檜垣淳三九著君
改正法規 **會社設立案内**
全一冊洋布上綴 大判二八〇頁 正價五十錢 郵税六錢

法學士篠田治策君著
會社法釋義
全一冊洋並綴 大判二〇四頁 正價卅五錢 郵税六錢

草鹿丁卯次郎君述
歐米各國 **株式會社要解**
全一冊洋並綴 大判一五七頁 正價二十錢 郵税六錢

高等商業學校卒業生瀧川眞澄君著
通俗銀行簿記 第三版
全一冊洋並綴 大判三四六頁 正價廿五錢 郵税八錢

高等商業學校卒業生高橋邦次郎君著
通俗會社簿記
全一冊洋並綴 大判三六八頁 正價廿五錢 郵税八錢

農商務省特許局御編纂
商標審決錄
全一冊洋布上綴 大判三二〇頁 第二版 正價一圓 郵税十一錢

法學博士坂谷芳郎君著 寫眞石版挿入
青淵先生六十年史 一名近世實業發達史
全二冊洋布上綴 大判二二一九頁 特價四圓 小包送一貫目

青淵先生澁澤榮一君の實歷六十年間の歷史なり君か一代の事業は我邦實業の發達を知るの明鑑にして本書二冊を通覽せは其實蹟を知了せむ

法學士勝部國臣君著
● 實用手形法釋義
全一冊洋並製 大判 二〇五頁 正價三十錢 郵稅六錢
▲特製本 洋布上製 正價四拾錢 郵稅六錢

法學士桐生政次君著
● 世界商工業史
全一冊洋並製 大判 正價　錢 郵稅　錢
▲特製本 特布上製 正價 郵稅

經濟

法學士池袋秀太郎君著
● 經濟汎論
全一冊洋並製 大判 二八四頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

鶴峯 春山育次郎君著
● 通俗經濟汎論
全一冊洋並製 大判 三二六頁 正價廿五錢 郵稅八錢

法學士井上辰九郎君著
● 經濟原論
全一冊背皮上製 大判 正價一圓二十錢 郵稅十八錢

伊國法學博士ルイヂー、コッサ著 法學士永井直好譯述
● 社會經濟原論
全一冊洋布上製 大判 三〇七頁 正價一圓 郵稅十二錢

法學博士田島錦治君 文學士土子金四郎君共譯
● 經濟政策 第三版
全一冊背皮上製 大判 五八四頁 正價一圓四十錢 郵稅十四錢

法學博士天野爲之君譯述
● 經濟學研究法 第三版
全一冊背皮上製 大判 四四四頁 正價一圓 郵稅十錢

法學博士天野爲之君閲 柏原文太郎君譯述
● 國民銀行論 第三版
全一冊背皮上製 大判 五六四頁 正價一圓六錢 郵稅十錢

濱口吉右衛門君著
● 歐米日本商工政策
全一冊洋並製 大判 一八六頁 正價卅錢 郵稅六錢

ドクトル高木正義君譯述
● トラスト 再版
全一洋冊並製 大判 一三〇頁 正價卅錢 郵稅四錢

米國文學博士松本君平君著
● 金貨本位論
全一冊洋並製 大判 一六八頁 正價廿五錢 郵稅六錢

木下政次郎君著
● 金銀貨幣論
全一冊洋並製 中判 二二七頁 正價十二錢 郵稅四錢

高市住太郎君 川上忠平君共譯
● 貨幣問題
全一冊洋並製 中判 二二〇頁 正價廿錢 郵稅四錢

米國文學博士小手川豊次郎君譯述
● 恐慌論
全一冊洋並製 大判 二一五頁 正價卅錢 郵稅六錢

米國文學博士小手川豊次郎君著
● 戰後之經濟
全一冊洋並製 大判 一六五頁 正價廿錢 郵稅四錢

法學士後藤勇君著
● シンヂケート及トラスト
全一冊洋並製 大判 三六六頁 正價五十錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價六十五錢 郵稅十錢

交通

●通信法釋義　法學士田中次郎君著　全一冊　大判　洋布上綴　七四六頁　正價一圓二十錢　郵税十八錢

●運送法　法學士菅原大太郎君著　全一冊　大判　洋並綴　三一〇頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●船舶論　法學士赤松梅吉君著　全一冊　大判　洋並綴　三〇〇頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●税關及倉庫論　法學士岸崎昌君著　全一冊　大判　洋並綴　三〇六頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價九十錢　郵税十錢

●將來の海軍と商業　海軍少將肝付兼行君譯述　全一冊　大判　洋並綴　二五〇頁　正價卅五錢　郵税六錢

●日本海運論　坪谷善四郎君著　全一冊　大判　洋並綴　二一二頁　正價十二錢　郵税四錢

●航海術　高橋安太郎君編　全一冊　小判　洋布上綴　三〇〇頁　正價六十錢　郵税四錢

●共同海損法　法學士田野莊平君著　全一冊　中判　洋布上綴　六五八頁　正價一圓二十錢　郵税十錢

●非鐵道國有論　尾崎行雄君序　横山正修君著　全一冊　大判　洋並綴　一〇〇頁　正價廿五錢　郵税四錢

●鐵道新論　マスターチヴアーツ片山潜君著　全一冊　大判　洋並綴　二二六頁　正價卅五錢　郵税八錢

●明治三十年度鐵道局年報　遞信省鐵道局編　官私設鐵道線路圖挿入　全一冊　大判　洋並綴　二〇〇頁　正價七十錢　郵税十錢

●郵便電信規則全書　博文館編輯局編　全一冊　小判　洋並綴　三五〇頁　正價廿五錢　郵税四錢

工業書類

工業

●工業叢書水及油　海軍機關學校教授工學士市川俊雄君著　全一冊　中判　洋布上綴　二二二頁　正價五十錢　郵税八錢

●應用化學　工學士蜂屋貞興君著　全一冊　大判　洋並綴　三三五頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●分析化學　再版　工學士内藤游君　工學士藤井光藏君合著　全一冊　大判　洋並綴　三四二頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●應用機械學　工學士重見道之君著　全一冊　大判　洋並綴　三〇〇頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●蒸汽機關使用法　遠藤勇作君著　全一冊　大判　洋並綴　正價卅錢　郵税六錢

●實用建築便覧　竹貫直次君著　全一冊　小判　洋布上綴　三二八頁　正價七十錢　郵税四錢

●造家と築庭　再版　竹貫直次君著　全一冊　大判　洋並綴　二五〇頁　正價二十五錢　郵税六錢

●實用土木便覧　第六版　龜井重麿君著　全一冊　小判　洋布上綴　三二六頁　正價七十錢　郵税四錢

- 龜井重麿君著　● 長川　續土木便覽　全一册　洋布上製　小判　三二〇頁　正價七十錢　郵税四錢
- 竹貫直次君著　● 應用土木工學　全一册　洋　並製　大判　三八〇頁　正價七十錢　郵税八錢
- 松方正義伯題字　市川義方君著　● 圖解　水理眞寶　全二册　洋　並製　大判　二五四頁　正價八十五錢　郵税八錢
- 第六高等學校教授松尾哲太郎君著　● 製圖用文字　全一册　洋布上製　大判長形　新裝　正價四十錢　郵税四錢
- 第六高等學校教授松尾哲太郎君著　● 器械設計　製圖學初步　全一册　洋布上製　正價六十錢　郵税四錢
- 橋本奇策君著　● 合成金製造法　再版　全一册　洋　並製　中判　三五八頁　正價四十錢　郵税六錢
- 工學士鴨居武君著　● 電氣鍍金術　全一册　洋　並製　中判　三六〇頁　正價廿五錢　郵税四錢
- 四日市商業學校教諭　馬詰次男君著　● 通俗　工業官廳簿記　再版　全一册　洋　並製　大判　二八〇頁　正價廿五錢　郵税八錢
- 工學士松永新之助君著　● 工業大意　全一册　洋　並製　大判　二五〇頁　正價廿五錢　郵税六錢
- 坪谷善四郎君譯　● 工業進化論　全一册　洋　並製　大判　三五七頁　正價四十錢　郵税八錢
- 平田東助君著　● 信用組合提要　全一册　洋　並製　大判　二〇〇頁　正價十五錢　郵税四錢
- 坪谷善四郎君著　● 鑛業法令註釋　全一册　洋布上製　中判　三〇〇頁　正價七十錢　郵税六錢
- 農商務省特許局御編纂　● 特許意匠審決錄　全一册　洋布上製　大判　五七二頁　正價一圓　郵税十四錢
- 別府丑太郎君著　● 特許法釋義　全一册　洋　並製　大判　一三八頁　正價卅錢　郵税四錢
- 農商務省特許局纂編　● 特許發明分類表　全一册　洋　並製　大判　二三〇頁　正價八十錢　郵税八錢
- 工學士松永新之助君著　● 化粧品製造法　彩色木版寫眞版挿入　全一册　洋　並製　大判　二五〇頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 黑田政憲君著　● 工業叢書　陶器製造化學　全一册　洋布上製　中判　三〇二頁　正價六十錢　郵税八錢
- 工學士原山幸吉君著　● 工業叢書　機關車　全一册　洋並上製　中判　二九三頁　正價六十錢　郵税六錢
- 工學士村瀬英一君著　● 工業叢書　構造強弱學　全一册　洋並上製　中判　正價　錢　郵税　錢
- 石井研堂君著　● 少年工藝文庫　鐵道の卷　全一册　洋　並製　大判　一〇〇頁　正價十五錢　郵税四錢

理科書類

理學

- 理學士眞島眞行君　理學士岡田武松君共著　● 中等教育　理化示教　全一册　洋布上製　大判　正價四十錢　郵税八錢

藤野篤吉君 花井七三郎君 草野要藏君共著
通俗理化一斑　全一册洋並製 大判三三〇頁　正價卅五錢 郵稅八錢

理學士眞島利行君著
無機化學　全一册洋並製 大判三五四頁　正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

理學士龜高德平君著
有機化學　全一册洋並製 大判四〇〇頁　正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

工學士鳥居休夫君著
中等教育 有機化學　第四版　全一册背皮上製 中判四二〇頁　正價四十錢 郵稅八錢

理學士波塚啓君著
植物學新論　全一册洋並製 大判三一四頁　正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

理學士安田篤君著
植物學汎論　全一册背皮上製 大判一〇〇〇頁　正價一圓五十錢 郵稅十六錢

川村守發君著
通俗動物學　全一册洋並製 大判三〇〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

理學士須藤傳治郎君著
星學　全一册洋並製 大判三三二頁　正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

理學士岡田武松君著
近世氣象學　全一册洋並製 大判三三八頁　正價卅五錢 郵稅十錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

西村貞君著
理科讀本　全四册和並製 大判五六二頁　正價五十二錢 郵稅十六錢

小栗栖香平君編　文部省檢定濟
小學理科訓導　全八册和並製 大判四二〇頁　正價九十六錢 郵稅卅二錢

永島長五郎君著
通俗昆蟲學　全一册洋並製 大判二八〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

池上泰次郎君著
受驗必携 物理學演習　全一册洋並製 小判　正價十五錢 郵稅四錢

理學士西松次郎君著
科學雜談　全一册洋並製 中判一五〇頁　正價十二錢 郵稅四錢

關澄藏君著
人類及人種　第三版　全一册洋布上製 大判五五八頁　正價一圓 郵稅十四錢

藥學得業士金澤殿君著
寫眞及幻燈　寫眞版挿入　全一册洋並製 大判二四〇頁　正價廿五錢 郵稅六錢

橋本奇策君著
實驗應用 寫眞術　第六版　全一册洋並製 小判一八〇頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
新風船　再版 密畫挿入　全一册洋並製 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
雪達磨　密畫挿入　全一册洋並製 大判九五頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
花乃錦　密畫挿入　全一册洋並製 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
汐干狩　密畫挿入　全一册洋並製 大判八五頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
植物園　密畫挿入　全一册洋並製 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
蜻蛉祭　密畫挿入　全一册洋並製 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢

石井研堂君著
游泳臺　密畫挿入　全一册洋並製 大判八五頁　正價十錢 郵稅四錢

●富士詣　石井研堂君著　密畫挿入
全一册洋並綴　大判九四頁
正價四十錢　郵税四錢

●暴風雨　石井研堂君著　密畫挿入
全一册洋並綴　大判八二頁
正價四十錢　郵税四錢

●銃獵者　石井研堂君著　密畫挿入
全一册洋並綴　大判八四頁
正價四十錢　郵税四錢

●幻燈會　石井研堂君著　密畫挿入
全一册洋並綴　大判七八頁
正價四十錢　郵税四錢

●歸省錄　石井研堂君著　密畫挿入
全一册洋洋綴　大判八〇頁
正價四十錢　郵税四錢

數學書類

高等數學

●新撰算術　第二版　理學士高木貞治君著
全一册洋並綴　大判三〇五頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●新撰代數學　理學士高木貞治君著
全一册洋並綴　大判三〇四頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●新撰幾何學　京都大學教授理學士林鶴一君著
全一册洋並綴　大判三〇四頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●新撰三角法　理學士松村定次郎君著
全一册洋並綴　大判二八二頁　正價卅五錢　郵税九錢
△特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●初等平面三角法教科書　理學士林鶴一君著　文部省檢定濟　訂正再版
全一册洋並綴　中判一二〇頁　正價四十錢　郵税四錢

●新撰微分積分學　理學士松村定次郎君著
全一册洋並綴　大判三五五頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●新撰解析幾何學　理學士松村定次郎君著
全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價卅五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾錢　郵税十錢

●中等教育平面幾何學　理學士谷田部梅吉君著
全一册洋並上綴　中判　正價廿五錢　郵税四錢

普通算術

●算術手引草　竹貫樂文君著
全一册紙皮上綴　中判四七五頁　正價五十錢　郵税六錢

●普通教育算術教科書　理學士鮫島晉君著
全二册洋並綴　中判　正價五十錢　郵税十二錢

●理論適用普通算術　片山清勝君　三田暉信君合著
全一册洋並綴　中判　正價卅錢　郵税六錢

●實用數學一萬題　第八版　三田暉信君著
全一册洋並綴　中判五一〇頁　正價四十錢　郵税八錢

●岡村増太郎君著 高等小學 **筆算教科書** 全一冊背皮上製 中判四八〇頁 正價五十錢 郵稅八錢

●岡村増太郎君著 尋常小學 **筆算教科書** 第三版 文部省檢定濟 全一冊背皮上製 中判四六〇頁 正價四十錢 郵稅八錢

●峯是三郎君著 地理歷史教育兵事理科實業 **新題算術** 全一冊洋並製 中判二六〇頁 正價十八錢 郵稅四錢

●吉田正雄君著 尋常小學 **珠算教科書** 全二冊洋並製 中判三五〇頁 正價卅錢 郵稅八錢

●吉田正雄君著 **女子算術書** 全一冊洋並製 中判一六五頁 正價十二錢 郵稅四錢

●竹貫直人君著 **數學遊戲** 全一冊紙皮上製 小判二五〇頁 正價廿五錢 郵稅四錢

政治書類

政治

●兆民中江篤介先生著 **一年有半** 全一冊洋並製 大判二八八頁 正價卅五錢 郵稅八錢

兆民先生空しく歷代の奇才を抱き久しく天涯の旅窓に病む頃日自ら起たざるを知り病中筆を揮て一年有半と名く其事既に悲壯也其文豈に神ならざらん其古今を笑殺し一世を罵倒する所慷慨悲壯に過ぎ沈鬱杜詩に似たり天下有心兒來つて東洋ルーソーの大本領如何を見よ

●文學博士高田早苗君譯述 **政治汎論** 第八版 全一冊紙皮上製 大判一二七四頁 正價一圓五十錢 小包送四百匁

●法學士永井惟直君著 **政治汎論** 全一冊洋並製 大判三二二頁 正價三十五錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

●鳥谷部春汀君著 **通俗政治汎論** 全一冊洋並製 大判三一六頁 正價二十五錢 郵稅八錢

●法學士森山守次君著 **政治史** 全一冊洋並製 大判三一二頁 正價三十五錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

●森政治郎君著 **日本政體史** 全一冊洋並製 中判二八四頁 正價十二錢 郵稅四錢

●法學士莚川潔君著 **財政學** 全一冊洋並製 大判三一〇頁 正價三十五錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

●井上辰九郎君著 高野岩三郎君共譯 **財政學** 全一冊背皮上製 大判一〇八八頁 正價二圓二十錢 小包送四百匁

●法學士夏秋龜一君著 **最新統計學** 全一冊洋並製 大判三三二頁 正價三十五錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

●呉文聰君譯述 **社會統計學** 全一冊洋並製 大判六〇〇頁 正價一圓五十錢 郵稅十四錢

●英國マルホール原書 大石熊吉君 前川九萬人君共譯 **萬國國力比較** 全一冊背皮上製 大判一〇〇〇頁 正價二圓五十錢 郵稅十八錢

● 日本帝國憲法論　再版　法學士田中次郎君著　全一冊洋並製　大判三六一頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

● 英國憲法論　高田早苗君　梅若誠太郎君共譯　全一冊背皮上製　大判八七二頁　正價一圓七十五錢　郵稅二十錢

● 英國憲法史　松平康國君著　全一冊洋布上製　大判五〇〇頁　正價一圓廿五錢　郵稅十四錢

● 英國國會史　第三版　文學博士高田早苗君譯述　全一冊背皮上製　大判七四〇頁　正價一圓三十錢　郵稅十四錢

● 十九世紀歐洲政治史論　文學士酒井雄三郎君著　全一冊洋並製　大判一一六頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 藩閥之將來　文學博士外山正一君著　全一冊洋並製　大判一五〇頁　正價二十五錢　郵稅四錢

● 理想的國家　秋原涓涯君譯述　全一冊洋並製　中判一七六頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 個人對國家論　文學士永井久滿次君譯述　全一冊洋並製　中判一六二頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 不平談　田川大吉郎君著　全一冊洋並製　中判一六一頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 選擧原理　文學士龜井英三郎君著　全一冊洋並製　中判二七六頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 新舊社會主義　森山信規君譯述　全二冊洋並製　中判三四〇頁　正價二十四錢　郵稅八錢

● 地方自治財政論　石塚剛毅君著　全一冊洋並製　中判一七〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 國債論　法學士織田一君著　全一冊洋並製　中判一五〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 日本會計法要論　文學士坂谷芳郎君著　全一冊洋並製　中判一六二頁　正價十二錢　郵稅四錢

行政

● 國法學　法學博士有賀長雄君著　全一冊背皮上製　大判七一二頁　正價一圓七十五錢　郵稅十八錢

● 比較國法學　第二版　法學博士末岡精一君著　全一冊背皮上製　大判八五二頁　正價一圓五十錢　郵稅十八錢

● 國法學　法學士岸崎昌君　中村孝君共著　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

● 比較行政法　浮田和民君譯述　全一冊背皮上製　大判七八五頁　正價二圓　郵稅十八錢

● 行政警察法　法學士中大路正雄君著　全一冊背皮上製　大判三一七頁　正價四十錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十五錢　郵稅十錢

● 監獄學　法學士谷野格君著　全一冊洋並製　大判三一二頁　正價四十錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十五錢　郵稅十錢

● 司法警察手續法　法學士中大路正雄君著　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價四十錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十五錢　郵稅十錢

法學士宮國忠吉君著
警察法
全一冊洋並綴 大判三〇四頁 正價四十錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十五錢 郵稅十八錢

法學士廣中佐兵衛君著
衛生法
全一冊洋並綴 大判三一八頁 正價四十錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十五錢 郵稅十八錢

法學士佐藤信安君著
日本監獄法
全一冊洋並綴 大判三一八頁 正價四十錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十五錢 郵稅十八錢

外交

酒井雄三郎君譯述
近世歐洲外交史 再版
全一冊背上皮綴 大判一六三四頁 正價三圓五十錢 郵稅十六錢

法學博士有賀長雄君著
近時外交史
全一冊背上皮綴 大判七〇七頁 正價一圓五十錢 郵稅十六錢

中島滋太郎君著
日本外交之大勢
全一冊洋並綴 中判一七〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

法學博士中村進午君著
新條約論 第三版
全一冊背皮上綴 大判五八六頁 正價一圓三十錢 郵稅十四錢

島谷部春汀君著
內地雜居改正條約案內 彩色木版寫眞銅版挿入
全一冊洋並綴 大判二五二頁 正價廿五錢 郵稅六錢

博文館編輯局編輯
改正條約類纂 寫眞版挿入
全一冊洋並綴 大判三六二頁 正價十五錢 郵稅二錢五厘

法律書類

法學

法學士熊谷直太君著
法律汎論 第四版
全一冊洋並綴 大判三四四頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

法學士桐生政治君著
通俗法學汎論
全一冊洋並綴 大判三二三頁 正價廿五錢 郵稅八錢

法學士丸山長渡君著
法理學
全一冊洋並綴 大判三〇〇頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

文學士三浦菊太郎君著
日本法制史
全一冊洋並綴 大判三三六頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

法學博士中村進午君著
國際法 再版
全二冊背皮上綴 大判一五六五頁 正價四圓 郵稅三十四錢

- 法學士北條元篤君　法學士熊谷直太君共譯補
  ●國際公法　再版
  全一冊洋裝並製　大判三二六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 法學士中村太郎君著
  ●國際公法
  全一冊洋裝並製　大判三〇九頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 野澤武之助君　山口弘一君共著
  ●國際私法論
  全一冊背皮上製　大判六二八頁　正價一圓四十錢　郵稅十六錢

- 蜷川新君譯述
  ●國際法論
  全一冊洋裝並製　大判一一〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

法令註釋

- 法學士丸尾昌雄君著
  ●民法釋義　總則編　物權編
  全一冊洋裝並製　大判三一〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 法學士上田豐君著
  ●民法釋義　親族編　相續編　再版
  全一冊洋裝並製　大判三〇一頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 法學士丸尾昌雄君著
  ●民法債權編釋義
  全一冊洋裝並製　大判三三六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 博文館編輯局編
  ●民法商法修正案理由書　再版
  全一冊背皮上製　大判一二九〇頁　正價一圓五十錢　小包送四百匁

- 博文館編輯局編
  ●民法修正案理由書　第六版
  全一冊洋裝並製　大判六六六頁　正價六十錢　郵稅十錢

- 法學士添田敬一郎君著
  ●商法汎論
  全一冊洋裝並製　大判三三〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 法學士栗本勇之助君著
  ●帝國商法釋義　再版
  全一冊背皮上製　中判一三三五頁　正價一圓八十錢　郵稅二十錢

- 法學士梶原仲治君著
  ●民事訴訟法釋義　第三版
  全一冊洋裝並製　大判三二二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
  ▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

- 坪谷善四郎君著
  ●市制町村制釋義
  全一冊洋裝並製　大判三七七頁　正價四十錢　郵稅八錢

- 坪谷善四郎君著
  ●府縣制郡制釋義　再版
  全一冊洋裝並製　大判二八六頁　正價三十錢　郵稅六錢

- 神津槇二郎君著
  ●民法戶主必携
  全一冊洋裝並製　小判四八五頁　正價三十五錢　郵稅六錢

- 宮川大壽君註解
  ●理由詳說改正戶籍法典
  全一冊洋裝並製　中判四二六頁　正價三十錢　郵稅八錢

- 市岡正一君著
  ●戶籍事務實行問答
  全一冊洋裝並製　大判一九〇頁　正價廿五錢　郵稅四錢

- 法學士中山文次郎君著
  ●不動産登記法正解
  全一冊洋裝並製　大判二五〇頁　正價三十錢　郵稅六錢

- 乾政一君著
  ●不動産登記申請實用
  全一冊洋裝並製　大判二一〇頁　正價二十錢　郵稅四錢

法令

●博文館編輯局編 現行 日本法令大全 増訂第十一版 全二冊背皮上綴 大判八一一〇頁 正價四圓五十錢 小包送一貫匁

本書初版以來、年々改增、夙に江湖の好評を博したりしが、第十一版に際して新に大増補をなし、携帶閲讀の便を計りて上下二卷となし、前版發兌後公布の新法令は收載して漏らさず、是に於て本書は明治元年より卅四年七月に至る現行諸法令を網羅し、分類序次整然として、殊に目次索引は新意匠を用ゐたれば、實用上無比の良書となれり

●堤一馬君編纂 現行罰則大全 全一冊洋布上綴 大判一三六六頁 正價二圓 小包送六百匁

●博文館編輯局編纂 現行警察法典 全一冊洋布上綴 大判六四八頁 正價四十錢 郵税六錢

●博文館編輯局編纂 改正增補 帝國六法全書 增補第十二版 全一冊洋布上綴 小判一五〇〇頁 正價九十錢 郵税十四錢

●博文館編輯局編纂 改正商法 第二版 全一冊洋並綴 小判一七六頁 正價十錢 郵税二錢

●博文館編輯局編纂 修正 四大法典草案（刑法法例民法商法） 再版 全一冊洋並綴 大判三二八頁 正價三十錢 郵税六錢

●博文館編輯局編纂 新舊制對照 改正官制全書 全一冊洋並綴 大判七三九頁 正價八十錢 郵税十四錢

●市岡正一君編纂 改正 戸籍事務取扱全書 全二冊洋並綴 大判九一〇頁 正價一圓二十錢 郵税十六錢

●鷲見金三郎君編纂 府縣制郡制 關係法規 全一冊洋並綴 大判五一二頁 正價五十錢 郵税十錢

●大藏省主税局編纂 租税法規纂要 全一冊洋並綴 大判五三八頁 正價七十五錢 郵税十錢

●柳田津々雄君編纂 恩給扶助法大全 全一冊洋並綴 中判二一六頁 正價二十錢 郵税四錢

●市岡正一君編纂 市町村事務取扱全書 全一冊洋並綴 大判 頁 正價八十錢 郵税十二錢

●加野十次郎君編纂 新撰民事刑事訴訟手續 全一冊洋布上綴 小判二七一頁 正價二十五錢 郵税四錢

●靈木一郎君 朝見小三郎君編纂 大審院判決摘要類纂 全一冊洋布上綴 大判八三〇頁 正價一圓五十錢 郵税十八錢

●東京控訴院編纂 東京控訴院裁判錄 全一冊洋並綴 大判二六〇頁 正價三十五錢 郵税六錢

●坂東陸藏君著 現行活用契約證書大全 全一冊洋並綴 中判 正價二十錢 郵税四錢

●博文館編輯局編纂 新法令 寫眞版二十枚挿入 全一冊洋並綴 大判二五一頁 正價三十錢 郵税三錢

教育書類

教育學

● 教育學　文學士熊谷五郎君編　全一冊 洋裝並製 大判 三八一頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

● 實踐教育學　文學士藤代禎輔君譯註 垤氏　全一冊 洋裝皮上製 中判 三七〇頁　正價七十五錢 郵稅十錢

● 通俗教育學　永持德一君著　全一冊 洋裝並製 大判 三一二頁　正價卌錢 郵稅八錢

● 新編教育學　高等師範學校教授高橋章臣君著　全一冊 洋裝並製 中判 三一四頁　正價十八錢 郵稅六錢

● 教育學　今泉䀡善君著　全一冊 洋裝並製 大判 一七二頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 普通教育學　澁江保君著　全一冊 洋裝並製 中判 二〇〇頁　正價十二錢 郵稅四錢

● 東洋 西洋 教育史　文學士中野禮四郎君著　全一冊 洋裝並製 大判 三一〇頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

● 教育史　高等師範學校教諭高橋章臣君著　全一冊 洋裝並製 大判 二四八頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 教育古典　本庄太一郎君著　全一冊 洋裝並製 大判 二三三頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 女子教育論　永江正直君著　全一冊 洋裝並製 大判 一七五頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 教育新論　法學士高槻純之助君著　全一冊 洋裝並製 中判 一五八頁　正價十二錢 郵稅四錢

● 教育時言　坪谷善四郎君著　全一冊 洋裝並製 中判 二四六頁　正價十二錢 郵稅四錢

教授法及管理法

● 歷史教授法　本庄太一郎君著　全一冊 洋裝並製 大判 二一八頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 地理教授法　本庄太一郎君 高橋章臣君合著　全一冊 洋裝並製 大判 二三八頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 理科教授法　今泉䀡善君著　全一冊 洋裝並製 大判 二一六頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 德育及修身教授法　矢島錦藏君著　全一冊 洋裝並製 大判 二二二頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 修身教授訓練法　峯是三郎君著　全一冊 洋裝並製 大判 二一七頁　正價十五錢 郵稅六錢

● 習字圖畫教授法　一條龜次郎君著　全一冊 洋裝並製 大判 一五四頁　正價十五錢 郵稅六錢

相原金太郎君著 ●尋常小學教授法 全一冊洋並製 中判二五〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

清水直義君著 ●單級教授法 全一冊洋並製 中判一五四頁 正價十二錢 郵稅四錢

高等師範學校教授 高橋宗臣君著 ●新編學校管理法 全一冊洋並製 中判三〇〇頁 正價十八錢 郵稅六錢

一條龜次郎君著 ●學校管理法 全一冊洋並製 大判二五七頁 正價十五錢 郵稅六錢

杉山正毅君著 ●實驗學校管理法 全一冊洋並製 中判二一〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

多田房之助君著 ●學校家庭連絡の方法 全一冊洋並製 中判一〇三頁 正價十二錢 郵稅四錢

安田稔君著 ●通俗學校管理法 全一冊洋並製 大判三三八頁 正價三十錢 郵稅八錢

修身及立志

文學博士中村正直君譯述 ●改正西國立志編 第十二版 全一冊洋並製 中判六〇八頁 正價二十七錢 郵稅八錢

東京女學館教授西田敬止君編 ●益軒十訓 第十版 全一冊背皮洋綴 中判一一〇二頁 正價一圓 郵稅十六錢

文學士大町桂月君著 ●學生訓 第二版 全一冊紙皮上製 小判二八八頁 正價二十錢 郵稅四錢

法學士田中次郎君譯述 ●學生立身策 第五版 全一冊洋並製 小判一六六頁 正價十二錢 郵稅四錢

マーデン原著 羽化仙史譯述 ●出世乃栞 全一冊紙皮上製 小判三〇六頁 正價二十五錢 郵稅四錢

慶應義塾教師菅學應君著 ●成功要錄 第五版 全一冊紙皮上製 中判二二〇頁 正價二十八錢 郵稅四錢

法學士丸尾昌雄君著 ●日常行爲法則 彩色木版密畫寫眞版挿入 第四版 全一冊洋並製 大判二五六頁 正價二十五錢 郵稅六錢

法學士桐生政次君著 ●勸學と處世 彩色木版密畫寫眞版挿入 第十一版 全一冊洋並製 大判二四〇頁 正價二十五錢 郵稅六錢

星野久成君著 ●讀書法 第四版 全一冊洋並製 小判二二二頁 正價十錢 郵稅四錢

飯尾規矩三君著 ●學術自修法 第七版 全一冊洋並製 小判二四五頁 正價十二錢 郵稅四錢

博文館編輯局編纂 ●官私立諸學校就學案内 第五版 寫眞版挿入 全一冊洋並製 大判二四〇頁 正價二十五錢 郵稅四錢

北一勢君編纂 ●現行試驗規則大全 全一冊背皮上製 小判六八七頁 正價四十五錢 郵稅六錢

東京女學館講師西田敬止君著 ●帝國女子修身鑑 文部省檢定濟 全四冊和並製 大判四二四頁 正價五十六錢 郵稅八錢

文學士荻原朝之介君著 ●帝國修身軌範 文部省檢定濟 全四冊和並製 大判七三八頁 正價一圓 郵稅十六錢

澁江保君著
●世界格言大全　全一冊洋布上製　小刋五〇〇頁　正價五十錢　郵稅四錢

千河岸櫻所君評釋
●女訓評釋　全一冊和上製　大刋　正價　郵稅

哲學書類

哲學及倫理

文學士藤井健吉郎君著
●哲學汎論　第三版　全一冊洋並製　大刋三三〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

文學士桑木嚴翼君著
●哲學概論　第二版　全一冊背皮上製　大刋五三四頁　正價一圓四十錢　郵稅十四錢

文學士蟹江義丸君著
●西洋哲學史　全一冊洋並製　大刋三三二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

中江兆民君著
●續一年有半　一名無神無靈魂　全一冊洋並製　大刋三六六頁　正價三十八錢　郵稅八錢

文學博士加藤弘之君著
●道德法律之進化の理　再版　全一冊洋並製　大刋二二五頁　正價三十錢　郵稅六錢

文學士高山林次郎君著
●近世美學　第三版　全一冊洋並製　大版三二八頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

文學士高山林次郎君著
●論理學　第七版　全一冊洋並製　大刋三一四頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

澁江保君著
●小論理書　第三版　全一冊洋並製　中刋二二一頁　正價十二錢　郵稅四錢

文學士蟹江義丸君著
●倫理學　第五版　全一冊洋並製　大刋三三〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

足立栗園君著
●通俗倫理學　全一冊洋並製　大刋三三七頁　正價廿五錢　郵稅八錢

文學士木村鷹太郎君著
●東洋西洋倫理學史　全一冊洋並製　大刋三五八頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

高橋章臣君著
●新編倫理學　全一冊洋並製　中刋二二〇頁　正價十八錢　郵稅六錢

文學士大町桂月君著
●道德實踐法　全一冊洋並製　大刋一一六頁　正價二十錢　郵稅四錢

峯是三郎君著
●中等教育應用心理學　再版　全一冊背皮上製　中刋四四二頁　正價五十錢　郵稅八錢

宗教

- ●宗教新論　文學士加藤玄智君著　全一冊洋布上製 大形四八四頁　正價一圓四十錢 郵稅十錢
- ●宗教學概論　文學士姉崎正治君著　全一冊背皮上製 大形六〇〇頁　正價一圓五十錢 郵稅十四錢
- ●世界宗教一斑　內山正如君 瑜伽理圓君共著 寫眞版挿入　全一册洋並製 大形二六〇頁　正價二十五錢 郵稅六錢
- ●宗教哲學　文學士姉崎正治君著 第五版　全一册洋並製 大形四〇〇頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢
- ●世界宗教史　文學士加藤玄智君著　全一冊洋並製 大形三一六頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢
- ●上世印度宗教史　文學士姉崎正治君著　全一冊洋布上製 大形三〇四頁　正價七十錢 郵稅八錢
- ●佛教大原理　同 雲照律師著 第三版 雲照律師肖像挿入　全一冊洋並製 中形九〇頁　正價十錢 郵稅二錢
- ●國民教育之方針　同 雲照律師著　全一冊洋並製 大形五〇〇頁　正價七十五錢 郵稅十二錢
- ●大日本教　無明居士著　全一冊洋並製 小形二六〇頁　正價五十六錢 郵稅六錢

社會

- ●社會學　文學士十時　彌君 第三版　全冊洋並製 大形四〇六頁　正價三十五錢 郵稅八錢　▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢
- ●社會學　ギッヂング原著 文學士遠藤隆吉君譯述 第再版　全一冊背皮上製 大形五五二頁　正價一圓廿五錢 郵稅十四錢
- ●社會問題解釋法　安部磯雄君著　全一冊背皮上製 大形四七五頁　正價一圓二十錢 郵稅十二錢
- ●新聞學　米國文學博士松本君平君著　全一册洋布上製 大形三五八頁　正價八十錢 郵稅十錢
- ●廢娼之急務　島田三郎君木下尚江君共著　全一冊洋並製 大形一一四頁　正價十五錢 郵稅四錢
- ●天則百話　文學博士加藤弘之君著 第五版　全一冊洋並製 大形三〇八頁　正價三十錢 郵稅六錢
- ●人事百話　男爵福羽美靜君著 第四版　全一冊洋並製 大形二四〇頁　正價二十錢 郵稅四錢
- ●況翁閑話 附祝辭訣片　男爵石黑忠悳君著　全一册洋並製 大形三〇〇　正價二十五錢 郵稅六錢
- ●權謀學　金井啓一君著　全一冊洋並製 小形一五四頁　正價三十錢 郵稅四錢
- ●萬國人名辭書　山田美妙君著　全二冊洋布上製 中形一二三八頁　正價一圓七十錢 小包八百匁

兵事書類

- 久留島武彥君著　國民必讀　**陸軍一斑**　第六版　寫眞版挿入　全一册洋裝　大判二九〇頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 海軍中尉長尾耕作君著　國民必讀　**海軍一斑**　第五版　寫眞版挿入　全一册洋裝　大判二八〇頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 陸軍中尉多賀宗之君著　**家庭軍事談**　全一册紙皮上製　小判三六〇頁　正價三十錢　郵税六錢
- 尾上新兵衛君著　**陸海軍人生活**　第六版　全一册洋裝　中判二一〇頁　正價十二錢　郵税四錢
- 海軍大尉長尾耕作君著　**海軍出身案内**　全一册洋裝　中判四三〇頁　正價四十錢　郵税六錢
- 三宅青軒君編　**陸海軍人書翰文**　第三版　寫眞版挿入　全一册洋裝　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 上野義八郎君著　**海軍兵器說明**　第十版　寫眞版挿入　全一册洋裝　大判一四五頁　正價十八錢　郵税四錢

醫學書類

- **藥物學**　全一册背皮上製　大判一〇六〇頁　正價貳圓　小包送六百匁
  本書は最新の學說に據り公平に諸藥物の作用を論じ且つ其應用を精選し極めて平易簡潔に然も細大漏す所なく敍述せり且つ一種の分類法に依り化學的に非ず亦應用的にあらず最了解し易き記憶實用に便せり卷首には處方學一般を述へ各藥に處分例を添へ卷尾に精細なる索引を附せり我藥物學界に此好著を得るは醫學社會の一明星を得たりと謂ふべし
- 醫學士守矢親國君譯述　**生殖器新書**　第五版　全一册洋布上製　中判四五六頁　正價九十錢　郵税十二錢
- 醫科大學藥學得業士金澤嚴君著　**通俗治療救急法**　第三版　全一册紙皮上製　小判三一〇頁　正價三十錢　郵税四錢
- 西川政憲君著　育兒體育　**健康要訣**　全一册紙皮上製　小判二二〇頁　正價三十錢　郵税四錢
- 醫學士高橋金一郎君著　**通俗看病法**　第四版　全一册洋裝　大判一五三頁　正價十五錢　郵税六錢
- 平野鐙君著　**看病の心得**　第再版　全一册洋裝　中判一七〇頁　正價二十錢　郵税四錢
- 陸軍藥劑監石塚左玄君著　通俗　**食物養生法**　全一册洋布上製　大判二五〇頁　正價七十錢　郵税六錢
- 陸軍藥劑監石塚左玄君著　化學的　**食養長壽論**　全一册洋布上製　大判五六〇頁　正價一圓五十錢　郵税十二錢
- 醫學士三島通良君著　救世　**種痘學**　全一册洋裝　中版八五頁　正價二十五錢　郵税四錢

遊戲書類

醫學士三島通良君著 ●學校衛生學 全一冊洋布上製 中判三六〇頁 正價七十五錢 郵稅八錢

坂田猿四郎君著 ●長命術 全一冊洋並製 小判一八九頁 正價十錢 郵稅四錢

澁江保君著 ●記臆術 全一冊洋並製 小判二〇〇頁 正價十錢 郵稅四錢

澁江保君著 ●催眠術 全一冊洋並製 小判一九三頁 正價十錢 郵稅四錢

桑刈融君著 ●美身術 全一冊洋並製 小判一九三頁 正價十錢 郵稅四錢

遊戲

博文館編輯局編纂 ●日本全國兒童遊戲法 全三冊洋並製 大判四六〇頁 正價四十五錢 郵稅十八錢

華族女學校學監下田歌子君著 ●女子遊嬉の栞 全一冊和並製 大判二二九頁 正價三十五錢 郵稅八錢

上村左川君編纂 第六版 彩色木版畫挿入 ●內外遊戲法 全一冊洋並製 大判二五〇頁 正價二十五錢 郵稅六錢

農科大學志岐守二君著 ●室內遊戲法 全一冊洋並製 小判二三二頁 正價十二錢 郵稅四錢

安藤淸吉君編纂 第四版 ●福引集 全一冊洋並製 小判一四四頁 正價十二錢 郵稅四錢

三宅鑛骨君著 ●玉突術 全一冊洋並製 小判一六〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

工科大學野田圭園君著 ●庭球術 全一冊洋並製 小判一五〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

法科大學三井末彦君著 ●蹴鞠と自轉車 全一冊洋並製 小判一二五頁 正價十二錢 郵稅四錢

法科大學津田素彦君著 ●射的術及弓術 全一冊洋並製 小判一二〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

法科大學遠山椿君著 ●馬術 全一冊洋並製 小判一三二頁 正價十二錢 郵稅四錢

稲田實君著 再版 ●新遊泳術 全一冊洋並製 小判一三六頁 正價十二錢 郵稅四錢

法科大學遠山椿君著 ●端艇競漕 全一冊洋並製 小判一四〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

農科大學志岐守二君著 ●陸上競走 全一冊洋並製 小判一五二頁 正價十二錢 郵稅四錢

法科大學津田素彦君著 ●ベースボールクリケット 全一冊洋並製 小判一八〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

澁江保君著 第十版 ●西洋秘傳魔術 全一冊洋並製 大判三五〇頁 正價三十錢 郵稅八錢

●易占及骨相法　博文館編輯局編纂　第五版　寫眞版挿入
全一冊 洋並製 大判 二六〇頁　正價廿五銭 郵税六銭

●諸藝指南　太田才次郎君著　寫眞版挿入
全一冊 洋並製 大判 二八三頁　正價二十五銭 郵税六銭

●秘術傳法　博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞版挿入　第八版
全一冊 洋並製 大判 二六〇頁　正價二十五銭 郵税六銭

●銃猟案内　佐野信三郎君 内藤徳行君合著　第再版
全一冊 洋並製 小判 一九六頁　正價十二銭 郵税四銭

●鳥獸狩猟法　農科大學忠岐守二君著
全一冊 洋並製 小判 一四八頁　正價十二銭 郵税四銭

●昆虫採集　農科大學安藤譲吉君著
全一冊 洋並製 小判 一五〇頁　正價十二銭 郵税四銭

●漁魚術　柄尾藤次郎君著
全一冊 洋並製 小判 一二〇頁　正價十二銭 郵税四銭

●狩猟と養鷄　田村松魚君著　寫眞銅版挿入
全一冊 洋並製 大判 二三〇頁　正價二十五銭 郵税六銭

●簡易體操法　遠江保君著
全一冊 洋並製 中判 一六八頁　正價十二銭 郵税四銭

●遊藝起源　大槻如電君校訂　原田芳斤郎君著
全一冊 洋並製 小判 一八九頁　正價十銭 郵税四銭

●劍舞術教範　神刀流劍舞術開祖日比野正吉君著　第八版
全一冊 洋並製 中判 一九四頁　正價十八銭 郵税四銭

●相撲新書　上司子介君著　第六版　寫眞銅版挿入
全一冊 紙皮上製 小判 三二三頁　正價二十五銭 税郵四銭

●相撲と芝居　上司子介君著 山岸荷葉君合著　寫眞銅版挿入　第三版
全一冊 洋並製 大判 二三六頁　正價二十五銭 郵税六銭

●日本周遊雙六　水野年方君畫
全一枚 大判 折　特價二十銭 郵税二銭

●世界周遊雙六　下村爲山君畫
全一枚 大判 折　特價二十銭 郵税二銭

●明治立身雙六　宮崎永洗君畫
全一枚 大判 折　特價六銭 郵税二銭

●明治少年雙六　巖谷小波君案　武内桂舟君畫
全一枚 大判 折　特價六銭 郵税二銭

囲碁

●新撰囲碁錦嚢　十七世本因坊土屋秀榮君校訂　山田福平君著　第三版
全三冊 和上製 小判 三一八頁　正價五十銭 郵税四銭

●囲碁大鑑　中川龜三郎君 小林鐵次郎君 巖崎健造君合著　第四版
全二冊 和上製 大判 二〇〇頁　正價五十銭 郵税六銭

●囲碁と將棋　平田純一郎君著　彩色木版寫眞銅版挿入　第七版
全一冊 洋並製 大判 二三八頁　正價二十五銭 郵税六銭

●囲碁入門　小林鍵太郎君著　第五版
全一冊 和並製 大判 八六頁　正價十五銭 郵税四銭

●囲碁初歩　小林鍵太郎君著　第再版
全一冊 和並製 大判 八〇頁　正價十五銭 郵税四銭

小林鍵次郎君著
●圍碁定石　全一冊 和並製 中判八二頁　正價十五錢 郵税四錢

小林鍵太郎君著
●圍碁詰方　全一冊 和並製 中判八八頁　正價十五錢 郵税四錢

小林鍵太郎君著
●圍碁布石法　全一冊 和並製 中判八四頁　正價十五錢 郵税四錢

小林鍵太郎君著
●古今名家打碁集　全一冊 和並製 中判八五頁　正價十五錢 郵税四錢

將棊

大橋宗英君著 新編
●將棊歩式（駒組）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗英君著
●將棊早指南（駒組）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗桂君著
●將棊早學（駒組）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

伊藤宗印君著
●將棊精妙（詰手）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗眠君著 福泉勝吉君合著
●將棊新撰圖式（詰手）　全一冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

桑原名仲君著
●將棊極妙（詰手）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

伊藤看壽君著
●將棊圖巧（詰手）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

伊藤看壽君著
●將棊玉圖（詰手）　全三冊 和並製 小判　正價十六錢 郵税四錢

天野宗歩君著
●將棊精選（定石）　全三冊 和並製 小判　正價十六錢 郵税四錢

伊藤宗印君著 天野宗歩手合
●將棊手鑑（手合）　全三冊 和並製 小判　正價十六錢 郵税四錢

新古名人之手合
●將棊玉手箱（手合）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗英君著
●將棊輝光（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

福島順碁君著
●將棊絹篩（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

福島順碁君著
●將棊獨稽古（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗桂君著
●將棊妙手（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗桂君著
●將棊明玉（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗英君著
●將棊粹金（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

大橋宗英君著
●將棊奇戰（指方）　全二冊 和並製 小判　正價十二錢 郵税四錢

- 伊藤宗看君著 ●将棋絶妙（指方） 全二冊 小判 和 並製 正價十二錢 郵税四錢
- 大橋英俊君著 ●将棋軌範（指方） 全二冊 小判 和 並製 正價十二錢 郵税四錢
- 大橋宗桂君著 ●将棋圖式（指方） 全二冊 小判 和 並製 正價十二錢 郵税四錢
- 大橋宗與君著 ●将棋養眞圖（詰手） 全二冊 小判 和 並製 正價十二錢 郵税四錢

家庭書類

家政

- 華族女學校學監下田歌子君著 ●家政學 第拾版 全二冊 大判 和 並製 四二九頁 正價六十錢 郵税十二錢
- 華族女學校學監下田歌子君著 ●家事要訣 第三版 全一冊 大判 和 並製 二八二頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 岸上操君著 ●家政案内 第十三版 彩色版木寫眞銅版挿入 全一冊 大判 洋 並製 二五六頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 三浦智之君著 ●實用家事經濟學 全一冊 小判 紙 皮上製 一八四頁 正價二十錢 郵税四錢
- 華族女學校學監下田歌子君著 ●婦女家庭訓 第四版 全一冊 大判 和 並製 三六一頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 華族女學校學監下田歌子君著 ●泰西所見 家庭教育 全一冊 大判 和 並製 二五一頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 華族女學校學監下田歌子君著 ●母親の心得 第四版 全一冊 大判 和 並製 二六七頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 西田敬止君著 ●育兒と衛生 第八版 彩色木版寫眞銅版挿入 全一冊 大判 和 並製 二四四頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 醫學士三島通良君著 ●はゝのつとめ 增補訂正十五版 全一冊 大判 洋 皮上製 三一二頁 正價七十五錢 郵税十錢
- 進藤玄敬君著 ●育兒必携 乳の友 全一冊 小判 洋 並製 一七九頁 正價十錢 郵税四錢
- 華族女學校學監下田歌子君著 ●女子手藝要訣 再版 全一冊 大判 和 並製 二六〇頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 吉田鞆子君著 ●裁縫と編物 第十七版 彩色版寫眞銅版挿入 全一冊 大判 洋 並製 二六二頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 博文館編輯局編纂 ●衣服と流行 第三版 彩色木版寫眞銅版挿入 全一冊 大判 洋 並製 二三六頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 濱本茂顯君著 ●婦女教育 明治姫鏡 第再版 彩色木版密畫挿入 全一冊 大判 和 並製 三一四頁 正價五十錢 郵税六錢
- 寒澤振作君著 ●家政の栞 全一冊 大判 洋 並製 二〇〇頁 正價二十錢 郵税六錢
- 寒澤振作君著 ●子供のしつけ 全一冊 中判 洋 並上製 二一〇頁 正價十四錢 郵税四錢

● 博文館編輯局編　明治三十五年　**當用日記**　全一册 特製　大形 五四八頁　正價六十五錢　郵税十四錢

● 明治三十五年　**當用日記**　全一册 特製　小形 五五〇頁　正價五十錢　郵税十錢

● 明治三十五年　**當用日記**　全一册 上製　大形 五五〇頁　正價五十錢　郵税十四錢

● 明治三十五年　**當用日記**　全一册 上製　小判 五五〇頁　正價三十五錢　郵税六錢

● 明治三十五年　**當用日記**　全一册 上製　菊半截形 三三頁　正價三十錢　郵税八錢

● 明治三十五年　**懷中日記**　全一册 特製　小判 二九八頁　正價十八錢　郵税四錢

● 明治三十五年　**懷中日記**　全一册 特製　小判 二九八頁　正價十二錢　郵税四錢

禮式及料理法

● 坪谷善四郎君著　**日本女禮式大全**　第十版　彩色木版寫眞銅版挿入　△函入特製 和上製　全一册 洋並上製　大判 五五六頁　正價七十五錢　郵税十六錢　正價壹圓 小包四百匁

● 大橋乙羽君著　**和洋禮式**　第十九版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册 洋並製　大判 二四八頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 中島義式君著　**新撰小學女禮式**　第五版　大判密畫挿入　全一册 洋並製　大判 二二〇頁　正價廿五錢　郵税六錢

● 華族女學校學監下田歌子君著　**料理手引草**　第四版　全一册 和並製　大判 三三〇頁　正價三十五錢　郵税八錢

● 藤本藤隆君著　**實用料理法**　第十八版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册 洋並製　大判 二八四頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 佐々木孝君著　**西洋料理法**　第九版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册 洋並製　大判 二五四頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 石井治兵衞君著　**日本料理法大全**　寫眞版挿入　全一册 洋布上製　大判 一五六三頁　正價二圓　小包四百匁

著者石井氏は舊幕府の料理師範家にして、今現に宮中の料理御用を勤む、其斯道に精通せる知るべし、本書は我邦諸般の料理法を網羅す

茶の湯及生花

● 岡崎淵沖君著　**點茶活法**　各傳比較　全四册 和上製　大判 七〇〇頁　正價　郵税

● 江刺家協一君著　**茶の湯大全**　全一册 洋布上製　中判 五〇八頁　正價壹圓　郵税八錢

● 博文館編輯局編纂　**茶の湯と生花**　第十七版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册 洋並製　大判 二五七頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 壯月齋惠一烏丹編纂　挿花盆石　**四時の詠**　全三册 和上製　大判 一四〇枚　正價五十錢　郵税六錢

● 秀貫齋月一瑞君編纂　挿花盆石　**正風花鏡**　全三册 和上製　大判 二〇二枚　正價五十錢　郵税六錢

習字書類

書學

● 書法自在　三宅青軒君著　第六版　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判二二〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 書法詳論　石川鴻齋君著　全二冊和上製　大判二〇〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

● 略可法　市河米庵君著　全二冊和上製　大判三〇〇頁　正價四十八錢　郵稅六錢

● 六書通　秦駘自穪甫校　全三冊和上製　大判三〇〇頁　正價七十錢　郵稅六錢

● 墨場必携　市河米庵君著　全六冊和上製　大判三〇五頁　正價七十錢　郵稅八錢

● 行書類纂　關澍南君著　全十二册和上製　大判一二〇〇頁　正價二圓十錢　小包四百匁

● 楷行薈編　市河米庵君著　全十五册和上製　大判一二五〇頁　正價三圓　小包六百匁

● 草叢　瀬尾鷗齋君編纂　全十二冊和上製　大判一四〇〇頁　正價三圓五十錢　小包六百匁

習字手本

● 明治書簡文　大和田建樹君著　巖谷一六居士書　全一冊和並製　大判二〇〇頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 明治女子書簡文　大和田建樹君著　小野鵞堂君書　全一冊和並製　大判二〇〇頁　正價四十錢　郵稅四錢

● 新選應用書翰　飯田學海君著　巖谷一六居士書　再版　全一冊和並製　大判一七〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

● 初學手紙の文　河村吉之輔君著　全二冊和並製　大判二〇〇頁　正價三十五錢　郵稅六錢

● 烏丸帖　橘千蔭君書　全一冊和並製　大判二四枚　正價三十五錢　郵稅四錢

● 假名習字帖 新百人一首　橘千蔭君書　全一冊和並製　大判五一枚　正價三十錢　郵稅四錢

● 一六蘭亭帖　巖谷一六居士書　再版　全一冊和並製　大判五〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 鳴鶴蘭亭帖　日下部鳴鶴君書　全一冊和並製　大判五〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 小學校 女子習字帖　成瀨大域君著　全八冊和並製　折手本　正價三十二錢　郵稅十六錢

● 尋常小學 習字帖　成瀨大域君著　全八冊和並製　折手本　正價二十四錢　郵稅十六錢

● 高等小學 習字帖　成瀨大域君著　全八冊和並製　折手本　正價三十錢　郵稅十六錢

●消息往來 巻菱潭君書 全二冊 大判 和並綴 正價九十錢 郵税十錢

●三體千字文 柳澤小陽君書 全一冊 大判 和並綴 一五〇頁 正價四十錢 郵税四錢

●十體千字文 河村曇嶽君書 全一冊 大判 和並綴 正價二十錢 郵税四錢

●楷書千字文 吉田晩稼君書 全一冊 大判 和並綴 正價三十八錢 郵税四錢

●眞書千字文 巻菱湖君書 全一冊 大判 折本 正價七十錢 郵税十錢

●眞書千字文 佐瀬得所君書 全一冊 大判 折本 正價六十五錢 郵税十錢

●眞書千字文 歐陽詢君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税六錢

●楷書千字文 市河米菴君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税八錢

●隷書千字文 錢詠君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税六錢

●行書千字文 孫過庭君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税八錢

●行書千字文 文徴明君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税六錢

●行書千字文 市河米菴君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税八錢

●行書千字文 佐瀬得所君書 全一冊 大判 和並綴 正價三十錢 郵税四錢

●草書千字文 孫過庭君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税八錢

●書法千字文 巻菱湖君書 全一冊 大判 和並綴 正價三十錢 郵税四錢

●隷書歸去來帖 柳澤小陽君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税四錢

●楷書丞民帖 柳澤小陽君書 全一冊 大判 折本 正價二十五錢 郵税四錢

●行書蘭亭帖 趙子昂君書 全一冊 大判 折本 正價三十五錢 郵税六錢

●天朗帖 王羲之君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税六錢

●聖母帖 懐素君書 全一冊 大判 折本 正價三十五錢 郵税六錢

●落花詩 蘇東坡君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 税郵六錢

●前出師表 佐瀬得所君書 全一冊 大判 和並綴 正價二十五錢 郵税四錢

●赤壁賦 董其昌君書 全一冊 大判 折本 正價四十五錢 郵税六錢

●赤壁賦 文徴明君書 全一冊 大判 折本 正價三十五錢 郵税六錢

繪畫書類

遺墨

●**流芳遺墨** 附追贊逸話　勝海舟君書　全二冊 和並綴 大判　正價一圓五十錢 小包廿百匁

●**亡友帖**　勝海舟君編　全一冊 和並綴 大判　正價一圓三十錢 郵税十錢

●**上樂翁公書**　勝海舟君編 頼山陽眞蹟　全一冊 和並綴 大判　正價二十錢 郵税二錢

●**詩文帖**　長尾銀次郎君編 山陽先生眞蹟　全二冊 和並綴 大判　正價三十錢 郵税六錢

●**赤穗義士眞筆帖** ▲特製木和上綴　文學博士重野安繹君編　全一冊 和並綴 大判 正價二圓五十錢　正價二圓 小包四百匁

●**吉田松陰眞蹟**　博文館編輯局編　全一冊 洋並綴 大判　正價五錢 郵税二錢

畫學

●**畫法自在**　野口珂北君著 野口小蘋女史挿畫 木版密畫百頁挿入　全一冊 洋並綴 大判 一五〇頁　第六版 正價二十五錢 郵税六錢

●**畫法大意** 第八版 木版密畫挿入　久保田米僊君著　全一冊 洋並綴 大判 二二一頁　正價十五錢 郵税六錢

●**畫法詳論**　石川鴻齋君著　全三冊 洋並綴 大判 三〇〇頁　正價五十錢 郵税六錢

●**支那歷代名畫論評**　佐久間健壽君著　全一冊 和並綴 大判 二三二頁　正價四十錢 郵税八錢

畫譜

●**美術大觀**　寫眞協會編纂　全四冊 和並綴 大判 一〇〇枚　正價十圓 小包六百匁

●**狩野探幽縮圖 聚珍畫譜**　狩野㯗信君編　全三冊 和並綴 大判　正價一圓四十錢 郵税十四錢

●**花鳥畫譜**　瀧和亭翁畫　全一冊 和並綴 大判　正價三圓 郵税十四錢

●**子供遊び畫譜**　小林永濯君畫　全一冊 和並綴 大判 錦絵　正價三圓五十錢 郵税二十錢

●**谷文晁 本朝畫纂大全**　谷文晁君畫　全四冊 和並綴 大判　正價一圓 郵税十二錢

酒井抱一上人編 ●光琳百圖 全二冊和並製 大判 正價五十錢 郵税六錢

西川祐信君畫 ●祐信畫譜 全三冊和並製 大判 正價四十五錢 郵税十錢

中島亨齋君畫 ●亨齋畫譜 全二冊和並製 大判 正價三十錢 郵税六錢

立齋廣重君畫 ●廣重畫譜 全三冊和並製 大判 正價七十錢 郵税六錢

諸名家合作 ●新雛形千歳袖 全一冊和並製 大判三十一枚 正價二十八錢 郵税四錢

諸名家合作 ●地口畫譜 全一冊和並製 大判 正價二十五錢 郵税二錢

黄園五岳君畫 ●俳諧畫譜集 全二冊和並製 小判 正價二十錢 郵税四錢

畫學手本

伊藤眞備君 岡村増太郎君合著 文部省檢定濟 ●高等小學帝國習畫帖 全四冊洋並製 中判二四八頁 正價四十八錢 郵税十六錢

伊藤眞備君 岡村増太郎君合著 ●尋常小學帝國習畫帖 全四冊洋並製 中判二〇八頁 正價二十六錢 郵税八錢

伊藤眞備君 岡村増太郎君合著 ●幾何畫法 全一冊洋並製 中判一五四頁 正價十二錢 郵税四錢

文學書類

文法

落合直文君著 第四版 ●日本大文典 全一冊背皮上製 大判八三四頁 正價一圓七十五錢 郵税十八錢

落合直文君著 第四版 ●日本大文典 分本 全四冊洋並製 大判八三四頁 正價一圓六十五錢 郵税二十四錢

第一高等學校教授落合直文君著 第二十九版 文部省檢定濟 ●中等教育日本文典 全一冊背皮上製 中判四八八頁 正價六十錢 郵税十六錢

文學士岡田正美君著 ●解説批評日本文典 全一冊洋並製 大判三〇〇頁 正價三十五錢 郵税八錢 ◀特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

落合直文君著 第四版 ●中等教育文法教科書 全一冊背皮上製 大判一二六頁 正價四十五錢 郵税八錢

華族女學校學監下田歌子君著 ●女子普通文典 全一冊和並製 大判二四六頁 正價三十五錢 郵税八錢

● 新撰假名遣活法　第三版　大和田建樹君著　全一冊　洋並綴　小判　一七〇頁　正價十五錢　郵稅二錢

文學史

● 通俗文學汎論　奧村信太郎君著　全一冊　洋並綴　大判　三二五頁　正價二十五錢　郵稅八錢

● 日本大文學史　大和田建樹君著　全五冊　洋並綴　大判　一四七〇頁　正價二圓　郵稅四十錢

● 和文學史　大和田建樹君著　全一冊　洋並綴　中判　六四九頁　正價四十五錢　郵稅八錢

● 明治文學史　大和田建樹君著　全一冊　洋並綴　中判　二一六頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 英文學史　文學博士坪內雄藏君著　全一冊　洋布上綴　大判　九五〇頁　正價二圓　小包送四百匁

● 支那文學史　文學士笹川臨風君著　全一冊　洋並綴　大判　三二二頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

● 支那學術史綱　文學士白河次郎君　國府種德君共著　全一冊　洋並綴　大判　一三八頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 英國文學史　澁江保君著　全一冊　洋並綴　中判　二七〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 獨佛文學史　澁江保君著　全一冊　洋並綴　中判　二五〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 希臘羅馬文學史　澁江保君著　全一冊　洋並綴　中判　二七〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

● 歷史研究法　ヘーゲル原著　澁江保君譯述　全一冊　洋並綴　中判　五〇〇頁　正價廿四錢　郵稅八錢

國文

● 國文軌範　第一高等學校教授　中等教育　落合直文君著　第五版　全一冊　洋並綴　中判　三八〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 名文評釋　第二版　國學院編纂　全一冊　洋並綴　大判　四五二頁　正價五十錢　郵稅十錢

● 標註枕草子　第二版　文學博士萩野由之君註　全二冊　洋並綴　大判　二〇〇頁　正價六十錢　郵稅十二錢

● 吉野拾遺詳解　第二版　中村秋香君校訂　全一冊　洋並綴　大判　一五一頁　正價二十五錢　郵稅四錢

● 校註土佐日記　第七版　佐々木信綱君校註　全一冊　洋並綴　大判　五〇頁　正價十錢　郵稅二錢

佐々木信綱君校註
●校註竹取物語 第八版
全一冊洋並綴 大判七六頁 正價二十二錢 郵税二錢

佐々木信綱君校註
●校註伊勢物語
全一冊洋並綴 大判一〇六頁 正價十二錢 郵税四錢

大和田建樹君删足 中等教育
●删定徒然草 第六版 文部省檢定濟
全一冊洋並綴 大判一一二頁 正價十八錢 郵税四錢

大和田建樹君選
●古文讀本
全六冊和並綴 大判七五六頁 正價一圓六十錢 郵税二十四錢

北村季吟君著
●枕草紙春曙抄
全七冊和並綴 大判 正價一圓五十錢 郵税二十錢

大宮宗司君著
●校註神皇正統記
全一冊洋並綴 大判 正價二十五錢 郵税六錢

佐々木信綱君著
●校註徒然草
全一冊洋並綴 大判 正價二十五錢 郵税四錢

佐々木信綱君校註
●校註更科日記
全一冊洋並綴 大判 正價十二錢 郵税四錢

佐々木信綱君校註
●校註方丈記
全一冊洋並綴 大判六〇頁 正價八錢 郵税二錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●竹取物語 伊勢物語 徒然草 紫式部日記 住吉物語
全一冊洋並綴 中判四三〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●土佐日記 枕草紙 更科日記 方丈記
全一冊洋並綴 中判四四〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●十六夜日記 落窪物語 辨内侍日記
全一冊洋並綴 中判四五〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●とりかへばや物語 堤中納言物語 四季物語
全一冊洋並綴 中判四三〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●中務内侍日記 讃岐典侍日記 和泉式部日記 蜻蛉日記
全一冊洋並綴 中判四三二頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●濱松中納言物語 大和物語 唐物語
全一冊洋並綴 中判四五〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●宇治拾遺物語 多武峯少將物語
全一冊洋並綴 中判五二〇頁 正價二十五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●源氏物語
全五冊洋並綴 中判二五七七頁 正價一圓廿五錢 郵税十五錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●榮花物語
全三冊洋並綴 中判一五六〇頁 正價七十五錢 郵税九錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●太平記
全三冊洋並綴 中判一七一〇頁 正價七十五錢 郵税九錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●保元物語 平治物語 秋の夜長物語 鴉鷺合戰物語
全一冊洋並綴 中判四三〇頁 正價廿五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●平家物語
全一冊洋並綴 中判六六〇頁 正價廿五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●古今著聞集
全一冊洋並綴 中判四七〇頁 正價廿五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●十訓抄 公事根源
全一冊洋並綴 中判四二〇頁 正價廿五錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●水鏡 大鏡
全一冊洋並綴 中判四八〇頁 正價廿六錢 郵税三錢

落合直文君 小中村義象君 萩野由之君校註
●増鏡
全一冊洋並綴 中判四二〇頁 正價廿五錢 郵税三錢

和歌書類

和歌

- 大和田建樹君著　**歌まなび**　全一冊洋布上製　中判一〇三八頁　正價一圓五十錢　郵稅十六錢
- 佐々木信綱君著　**歌の栞**　全一冊總皮上製　中判一三九六頁　正價一圓二十錢　小包四百匁
- 佐々木信綱君著　**増補詠歌自在**　第八版　全一冊洋布上製　中判七八〇頁　正價一圓　郵稅十二錢
- 佐々木信綱君著　**詠歌辭典**　第四版　全一冊洋布上製　小判一三七六頁　正價七十五錢　郵稅八錢
- 華族女學校學監　下田歌子君著　**詠歌の栞**　第三版　全一冊和並製　大判三一〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
- 第一高等學校教授　落合直文君著　**新撰歌典**　第十版　全一冊洋並製　中判六一〇頁　正價四十錢　郵稅八錢
- 宮澤春文君著　**作歌自在**　第六版　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判二四〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 文學士武島羽衣君著　**霓裳歌話**　全一冊紙皮上製　小判三四〇頁　正價三十錢　郵稅四錢
- 有賀長伯君著　**和歌八重垣**　全七冊和並製　小判　正價五十五錢　郵稅四錢

- 佐々木信綱君著　**少年歌話**　第二版　全一冊洋並製　中判二二〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

歌集

- 佐々木信綱君校註　**古今和歌集　貫之家集　躬恒家集　友則家集　忠岑家集**　全一冊洋並製　中判四一八頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**後撰和歌集　能宣家集　順家集　元輔家集　天徳歌合**　全一冊洋並製　中判四〇六頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**拾遺和歌集　紫式部家集　公任家集　清少納言家集**　全一冊洋並製　中判三八八頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**後拾遺和歌集　經信卿集　相模家集　高陽院歌合**　全一冊洋並製　中判三九二頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**金葉和歌集　堀川百首　詞花和歌集**　全一冊洋並製　中判三八八頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**千載和歌集　忠度朝臣集　永久百首　後京極自歌合**　全一冊洋並製　中判四〇六頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**新古今和歌集　自讃歌　鴨長明集**　全一冊洋並製　中判四〇八頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**林下集　山家集　源三位頼政集　金槐集**　全一冊洋並製　中判四九四頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- 佐々木信綱君校註　**萬葉集**　全三冊洋並製　中判一二二〇頁　正價七十五錢　郵稅十八錢

- 佐々木信綱君校註 **悦目抄 無名抄 歌かたり にひまなび 新學異見 外二書** 全一冊洋並綴 中判四二八頁 正價二十五錢 郵税六錢
- 佐々木信綱君校註 **加茂眞淵翁全集** 第三版 全二冊洋並綴 中判一〇〇〇頁 正價七十錢 郵税十六錢
- 佐々木信綱君校註 **本居宣長翁全集** 全一冊洋並綴 中判五四二頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 佐々木信綱君校註 **香川景樹翁全集** 全二冊洋並綴 中判一〇二一頁 正價七十錢 郵税十六錢
- 佐々木信綱君校註 **小澤蘆庵翁全集** 全一冊洋並綴 中判五二一頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 佐々木信綱君校註 **近世名家家集** 全二冊洋並綴 中判一〇七二頁 正價七十錢 郵税十六錢
- 佐々木信綱君校註 **近世長歌今様歌集** 全一冊洋並綴 中判五七〇頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 佐々木信綱君校註 **桂園門下家集** 全一冊洋並綴 中判五七〇頁 正價三十五錢 郵税八錢
- 佐々木信綱君校註 **明治名家家集** 全二冊洋並綴 中判一〇五四頁 正價七十錢 郵税十六錢
- 佐々木信綱君校註 **校註明倫家集** 全一冊洋並綴 大判 正價二十五錢 郵税六錢
- 岸本宗道君校註 **校註古今和歌集** 全一冊洋並綴 中判 正價十五錢 郵税四錢
- 佐々木信綱君校註 **竹柏園集** 全一冊紙皮上綴 小判五一六頁 正價三十五錢 郵税六錢
- 從五位末松房泰君著 **冠詞例歌集** 第二版 全一冊紙皮上綴 小判二一〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

- 佐々木信綱君著 **百人一首講義** 第七版 全一冊洋並綴 中判三〇〇頁 正價二十錢 郵税四錢
- 小林永濯君編纂 **明治英名百首** 全一冊和並綴 中判 正價十八錢 郵税二錢

新體詩

- 中邨秋香君著 **新體詩歌自在** 全一冊洋布上綴 中判八三四頁 正價一圓 郵税十二錢
- 大和田建樹君著 **新體詩學** 第四版 全一冊洋並綴 小判二二四頁 正價十五錢 郵税四錢
- 大和田建樹君著 **歐米名家詩集** 全一冊洋並綴 中判六〇五頁 正價三十錢 郵税四錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **深山櫻** 第四版 全一冊紙皮上綴 小判七〇二頁 正價四十錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **雪月花** 第十版 全一冊紙皮上綴 小判六二五頁 正價三十五錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **藻鹽木** 全一冊紙皮上綴 小判六〇〇頁 正價四十五錢 郵税六錢
- 鹽井雨江君 武島羽衣君 大町桂月君合著 美文韻文 **花紅葉** 第十五版 全一冊洋布上綴 小判四二一頁 正價三十錢 郵税六錢

文學士大町桂月君著 美文韻文 **黄菊白菊** 第十版 全一冊紙皮上綴 小判四〇二頁 正價二十五錢 郵税六錢

文學士鹽井雨江君著 美文韻文 **暗香疎影** 全一冊紙皮上綴 小判三五四頁 正價二十五錢 郵税六錢

文學士土井晩翠君著 **天地有情** 第七版 全一冊洋布上綴 小判二三〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

國府犀東君著 新體詩集 **花ざくろ** 全一冊紙皮上綴 小判二五六頁 正價二十五錢 郵税四錢

唱歌

入江好次郎君著 **123唱歌身** 第四版 全一冊洋並綴 大判六〇頁 正價十八錢 郵税四錢

大和田建樹君著 尋常小學 **帝國唱歌** 全二冊和並綴 大判 正價十四錢 郵税四錢

大和田建樹君著 尋常小學 **帝國唱歌** 全二冊和並綴 大判 正價十四錢 郵税四錢

學習院音樂教官納所辨次郎君編 **日本軍歌** 第五版 全一冊洋並綴 大判五〇頁 正價十二錢 郵税二錢

納所辨次郎君編 **明治軍歌** 全一冊洋並綴 大判 正價十二錢 郵税二錢

竹内十次郎君著 征清 **海軍々歌** 全一冊洋並綴 小判四五頁 正價三錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **桃太郎** 木村小舟君作歌 第再版 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **舌切雀** 木村小舟君作歌 再版 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **松山鏡** 木村小舟君作歌 再版 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **花咲爺** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 便税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **浦島太郎** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **文福茶釜** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **一寸法師** 木村小舟夜作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **俵藤太** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **羅生門** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **猿蟹合戰** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

巖谷小波君校閲 家庭唱歌 **瘤取り** 木村小舟君作歌 全一冊洋並綴 小判三六頁 正價六錢 郵税二錢

俳諧書類

俳諧作法

老鼠堂永機君著 第二版
● 俳諧自在　全一冊洋布上製 小判 一二三頁　正價一圓 郵稅十二錢

三宅青軒君著 第九版 彩色銅版寫眞銅版挿入
● 俳諧獨學　全一冊洋並製 大判 二五五頁　正價二十五錢 郵稅六錢

伊藤松宇君校訂 名家手蹟寫眞銅版挿入
● 付合作法全集　全一冊洋並製 大判 三三五頁　正價三十錢 郵稅八錢

松永播松庵君著
● 俳諧麓の栞　全一冊洋並製 中判　正價二十錢 郵稅六錢

今川柳如君著
● 和歌俳諧節用集　全二冊和並製 小判 五八四頁　正價三十五錢 郵稅四錢

高井蘭山君著
● 俳字節用集　全二冊和並製　正價二十錢 郵稅二錢

俳諧史傳

角田竹冷君校閲 星野麥人君 牧野望東君合著
● 俳諧年表　全一冊和上製 小判 二八六頁　正價六十錢 郵稅八錢

汐淺四丁君校訂 名家眞蹟挿入
● 俳諧逸話全集　全一冊洋並製 大判 三二二頁　正價三十錢 郵稅八錢

山崎庚午太郎君著
● 俳諧史談　全一冊洋並製 小判 二三六頁　正價廿錢 郵稅四錢

朝山鈎月君著
● 俳諧名家列傳　全一冊洋並製 小判 二二二頁　正價十錢 郵稅四錢

俳諧及俳文

巖谷小波君校訂 第二版 名家手蹟挿入
● 俳諧論集　全一冊洋並製 大判 三三〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

巖谷小波君校訂 名家手蹟挿入
● 續俳諧論集　全一冊洋並製 大判 三〇六頁　正價三十錢 郵稅八錢

佐藤飯人君校訂 名家手蹟挿入
● 俳諧紀行全集　全一冊洋並製 大判 三九〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

巖谷小波君校訂 名家手蹟挿入
● 俳諧文集　全一冊洋並製 小判 三二八頁　正價三十錢 郵稅八錢

[illegible]主人選
● 俳諧文選　全一冊洋並製 中判 四〇〇頁　正價二十錢 郵稅六錢

俳諧句集

老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂 第七版 寫眞版挿入
●芭蕉全集　全一冊洋裝大判 三〇四頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 第二版 名家手蹟寫眞版挿入
●芭蕉以前俳諧集　全一冊洋裝大判 六三〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢

老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂
●其角全集　全一冊洋裝大判 二八〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

中庵雲志君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●嵐雪全集　全一冊洋裝大判 二九〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●許六全集　全一冊洋裝大判 三〇〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

老鼠堂永機君 其角堂機一君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●支考全集　全一冊洋裝大判 三四〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

老鼠堂永機君 寶雪庵柳浪君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●蕉門十哲集　全一冊洋裝大判 三〇二頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●元祿名家句集　全一冊洋裝大判 二八六頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●素堂鬼貫全集　全一冊洋裝大判 二八七頁　正價三十錢 郵稅八錢

岡野知十君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●也有全集　全一冊洋裝大判 二八四頁　正價三十錢 郵稅八錢

不白軒梅年君 寶中庵雲志君 雪中庵雪人君 宇貫君校訂
●蓼太全集　全一冊洋裝大判 三一二頁　寫眞版挿入　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 第二版
●蕪村曉臺全集　全一冊洋裝大判 三〇〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●一茶大江丸全集　全一冊洋裝〇判 三二〇頁　正價三十錢 郵稅八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●俳諧珍本集　全一冊洋裝大判 三一七頁　正價三十錢 郵稅八錢

角田竹冷君校訂 名家手蹟寫眞版挿入
●俳諧句合全集　全一冊洋裝大判 二九七頁　正價三十錢 郵稅八錢

尾崎紅葉君校訂
●俳諧類題句集　全二冊洋裝大判 七二〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢

竹村秋竹君編
●明治俳句　全一冊紙皮上製小判 三〇〇頁　正價三十五錢 郵稅六錢

栗原無角君編
●俳家成美全集　全一冊洋裝小判 五二〇頁　正價四十錢 郵稅六錢

雄島碌碌君編 木版密畫挿入
●俳人百家撰　全一冊和裝中判 一〇〇頁　正價二十錢 郵稅二錢

阿心庵雪人君 古學庵仙編君編
●俳諧一萬集　全一冊洋裝中判 三〇〇頁　正價二十錢 郵稅六錢

醉亭鈍川君著
●狂俳句の栞　全一冊紙皮上製小判 三〇〇頁　正價二十錢 郵稅四錢

聲曲書類

謡曲

●増補謡曲通解　第六版　大和田建樹君著　全一冊総皮上製　大判一一七八六頁　正價一圓八十錢　小包六百匁

●謡曲文粋　第四版　大和田建樹君著　全一冊紙皮上製　小判五三〇頁　正價六十五錢　郵税六錢

●謡と能　第三版　大和田建樹君著　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判二七六頁　正價二十五錢　郵税六錢

●日本歌謡類聚　大和田建樹君著　全二冊背皮上製　中判二〇四八頁　正價一圓二十錢　郵税三十二錢

浄瑠璃

●近松時代浄瑠璃　第五版　饗庭篁村君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇〇八頁　正價六十錢　郵税十六錢

●近松世話浄瑠璃　第五版　博文館編輯局校訂　全一冊背皮上製　中判一〇四四頁　正價六十錢　郵税十六錢

●續近松浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判六六八頁　正價六十錢　郵税十六錢

●近松二十浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇九〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●浄瑠璃名作集　博文館編輯局校訂　全一冊背皮上製　中判一〇〇〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●忠臣藏浄瑠璃集　幸堂得知君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇八〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●竹田出雲浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇四六頁　正價六十錢　郵税十六錢

●江戸作者浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇六〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●紀海音浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇一〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●文耕堂浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊洋布上製　小判一〇一〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●並木宗輔浄瑠璃集　水谷不倒君校訂　全一冊背皮上製　中判一〇四〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

●義太夫百番　水谷不倒君編輯　全一冊洋布上製　小判六七六頁　正價一圓　郵税十二錢

音曲

博文館編輯局編纂 ●琴曲獨稽古　第三版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製 大判二四八頁　正價二十五錢 郵税六錢

百足登君著 ●胡弓の栞　全一冊和並製 中判一〇二頁　正價十錢 郵税四錢

百足登君著 ●尺八の栞　全一冊和並製 中判一一〇頁　正價十錢 郵税四錢

雜曲

風中金升君校訂 ●俗曲大全　全一冊背皮上製 中判一〇九七頁　正價六十錢 郵税十六錢

博文館編輯局編輯 ●聲曲自在　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製 大判二三八頁　正價二十五錢 郵税六錢

大宮宗司君編 ●日本雅曲集　全一冊洋並製 中判三二八頁　正價二十錢 郵税六錢

岸上操君編 ●新撰歌曲集　全一冊洋並製 中判三三〇頁　正價二十錢 郵税六錢

鶯亭金升君著 ●都々逸の栞　全一冊紙皮上製 小判二九〇頁　正價二十錢 郵税四錢

鶯亭金升君著 ●冠句の栞　全一冊紙皮上製 小判三二四頁　正價二十錢 郵税四錢

鶯亭金升君著 ●都々逸一千題　全一冊紙皮上製 小判五六〇頁　正價三十五錢 郵税六錢

漢詩書類

詩學

闕谷修　三島毅　岡千仞　栗本鋤雲　石川鴻齋　各先生校訂 ●佩文韻府　全六冊和上製 大判六（一二〇枚）　正價四十圓 小包三貫六百匁

石川鴻齋君校訂 ●圓機活法　全三冊和上製 小判　正價三圓 小包六百匁

湯文路齋君著 ●詩韻合璧　全一冊和上製 中判　正價一圓 郵税六錢

石川鴻齋君著 ●詩法詳論　全二冊和並製 大判二二〇頁　正價四十錢 郵税六錢

人觀一臨君著 ●詩文良材　全二冊和並製 大判　正價五十五錢 郵税六錢

沖冠嶺君著 ●新選詩語活用　全三冊和並製 中判　正價三十錢 郵税四錢

柳井絅齋君著　**作詩自在**　第十版　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋裝並製　大判二四六頁　正價二十五錢　郵稅六錢

松本杞山君著　**作詩訣**　全一冊洋裝並製　中判二〇〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

野口寧齋君著　**少年詩話**　第二版　全一冊洋裝並製　中判一六八頁　正價十二錢　郵稅四錢

[illegible]君著　**枯窓詩話**　全一冊和裝並製　中判三八頁　正價十五錢　郵稅四錢

詩集

小宮山綏介君講述　**詩經講義**　第八版　全一冊洋裝並製　中判四八〇頁　正價二十五錢　郵稅八錢

太田淳軒君講述　**唐詩選三體詩講義**　全一冊洋裝並製　中判四六四頁　正價廿五錢　郵稅八錢

岡本黃石君著　**雷笑餘聲**　全一冊洋裝並製　小判二三〇頁　正價十錢　郵稅四錢

青山□州君撰　**朝鮮名家詩集**　全一冊洋裝並製　小判二〇〇頁　正價十錢　郵稅四錢

柳井絅齋君編　**征清詩集**　全一冊洋裝並製　小判二一〇頁　正價十錢　郵稅四錢

漢文書類

經史

後藤點　**四書**　全十冊和裝並製　大判四一〇頁　正價一圓六十錢　小包六百匁

後藤點　**五經**　全十一冊和裝並製　大判八八〇頁　正價二圓二十錢　小包八百匁

文學士久保天隨君著　**新釋大學**　第二版　全一冊和裝並製　大判一三〇頁　正價十五錢　郵稅四錢

文學士久保天隨君著　**新釋中庸**　全一冊和裝並製　大判二〇〇頁　正價廿錢　郵稅四錢

林退菴著　**新註四書補註備旨**　全五冊和裝上製　大判二四四枚　正價一圓　郵稅六錢

中島筑山君校點　**四書讀本**　全一冊洋裝並製　大判二六〇頁　正價三十錢　郵稅六錢

內藤恥叟君講　**四書講義**　第十八版　全二冊洋裝並製　小判九〇〇頁　正價五十錢　郵稅十六錢

内藤耻叟君講義 ●小學孝經忠經講義 全一冊洋並綴 中判 正價廿五錢 郵稅八錢

内藤耻叟君講義 ●近思錄講義 全一冊洋並綴 中判 正價廿五錢 郵稅六錢

諸子

村岡良弼君訓點 增注 荀子箋釋 全二冊洋並綴 大判 四五〇頁 正價七十錢 郵稅十錢

城井錦懸君講義 ●荀子講義 全二冊洋並綴 中判 正價五十錢 郵稅十六錢

大田淳軒君講義 ●莊子講義 全二冊洋並綴 中判 正價五十錢 郵稅十六錢

小宮山綏介君講義 ●韓非子講義 第二版 全二冊洋並綴 中判 九〇〇頁 正價五十錢 郵稅十六錢

小宮山綏介君講義 ●老子 列子 孫子 吳子 講義 第九版 全一冊洋並綴 中判 四三〇頁 正價廿五錢 郵稅八錢

内藤耻叟君講述 ●鬻子文中子講義 全一冊洋並綴 中判 五八〇頁 正價廿五錢 郵稅八錢

文集

文學士大町桂月君 文學士白河鯉洋君編纂 ●帝國漢文讀本 第二版 全一冊洋並綴 大判 一〇八〇頁 正價一圓七十錢 郵稅三十錢

石川鴻齋君編纂 ●中等教育 漢文軌範 第四版 全一冊洋並綴 中判 二九〇頁 正價二十錢 郵稅四錢

安原健堂君註箋 ●正續文章軌範讀本 第五版 全一冊洋布上製 大判 五五〇頁 正價七十五錢 郵稅十四錢

大竹政正君編 ●增評文章軌範 全六冊和並綴 大判 正價一圓 郵稅十四錢

安原健堂君註箋 ●正文章軌範讀本 全一冊洋並綴 大判 二五〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

安原健堂君註箋 ●續文章軌範讀本 第四版 全一冊洋並綴 大判 二八〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

石川鴻齋君編 ●和漢 合璧文章軌範 全四冊和並綴 大判 正價七十錢 郵稅八錢

田島象二君編 ●日本文章軌範評林 全三冊和並綴 大判 一七〇頁 正價三十八錢 郵稅六錢

石川鴻齋君講義 ●正文章軌範講義 第十二版 全一冊洋並綴 中判 四七〇頁 正價廿五錢 郵稅八錢

石川鴻齋君講義 ●續文章軌範講義 全一冊洋並綴 中判 正價廿五錢 郵稅八錢

漢文學

- 櫻木寛明君編　唐宋八大家讀本　全八冊和裝 大判　正價一圓八十錢 郵稅二十錢
- 村瀬博君編　續唐宋八大家讀本　全十冊和裝 小判　正價二圓 郵稅二十錢
- 神村谷君編 正續　皇朝百家論文鈔　全八冊和裝 大判　正價一圓三十錢 郵稅十四錢
- 宍戸逸郎君編　唐宋四大家文選　全五冊和裝 大判 二七六頁　正價八十錢 郵稅十錢
- 大槻東陽君編　歐蘇手簡　全一冊和裝 大判　正價廿五錢 郵稅四錢
- 川崎三郎君編　和漢名家文粹 上　全一冊洋裝 中判 四〇〇頁　正價二十錢 郵稅二錢五厘
- 佐田白茅君著　枕上一覽　全一冊和裝 中判　正價十錢 郵稅二錢
- 管丞相撰　博覽古言　全五冊和裝 大判　正價九十錢 郵稅十錢
- 石川鴻齋君著　文法詳論　全二冊和裝 大判 二五〇頁　正價四十錢 郵稅六錢
- 石川鴻齋君著　續文法詳論　全二冊和裝 小判 二三〇頁　正價四十錢 郵稅六錢
- 安原健堂君著　漢文講讀法（第四版）　全一冊洋裝 中判 六一二頁　正價廿四錢 郵稅六錢

- 大和田建樹君著　應用漢文學　全一冊洋裝 大判 一八〇頁　正價十五錢 郵稅六錢
- 山本北山君著　作文率　全三冊和裝 大判 三〇〇頁　正價五十錢 郵稅六錢
- 山本北山君著　作文志彀　全一冊和裝 中判　正價十錢 郵稅二錢
- 山本北山君著　文藻行潦　全二冊和裝 大判　正價二十五錢 郵稅四錢
- 芸閣千葉君著　文草小成　全二冊和裝 大判　正價五十錢 郵稅六錢
- 東涯君著　尺牘棠材　全三冊和裝 大判　正價廿五錢 郵稅四錢
- 慣州君著　尺牘筌　全一冊和裝 大判　正價十錢 郵稅二錢

隨筆書類

- 文學士高山林次郎君著　時代管見（第四版）　全一冊紙皮上製 小判 五二〇頁　正價三十錢 郵稅六錢

文學士高山林次郎君著 **文藝評論**（第二版） 全一册 紙皮上製 小判 四八〇頁 正價三十錢 郵税六錢

文學士大町桂月君著 **大絃小絃** 第二版 全一册 紙皮上製 小判 四二〇頁 正價三十錢 郵税六錢

文學士笹川臨風君著 **雨絲風片** 全一册 紙皮上製 小判 三三六頁 正價二十五錢 郵税四錢

福本誠君著 **日南子** 全一册 洋並製 大判 一一二頁 正價二十錢 郵税四錢

内田不知庵君著 **文藝小品** 全一册 紙皮上製 小判 六一〇頁 正價三十五錢 郵税六錢

齋藤緑雨君著 **あられ酒**（第二版） 全一册 紙皮上製 小判 正價二十五錢 郵税六錢

齋藤緑雨君著 **わすれ貝** 全一册 紙皮上製 小判 正價三十錢 郵税六錢

〒府學東君著 **龍吹鶴語** 全一册 紙皮上製 小判 二六四頁 正價二十五錢 郵税四錢

川崎三郎君著 **小文章** 第二版 全一册 紙皮上製 小判 三三〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

ドクトル岡崎遠光君著 **警世評論** 全一册 紙皮上製 小判 四二五頁 正價三十五錢 郵税四錢

大橋乙羽君著 **名流談海** 第四版 美麗彩色寫眞版挿入 全一册 洋布上製 小判 二九〇頁 正價三十錢 郵税四錢

卯谷善四郎君編 **當代名流五十家訪問録** 第三版 全一册 紙皮上製 小判 四八〇頁 正價四十錢 郵税六錢

呦鹿堂主人著 **溪韻松聲** 全一册 紙皮上製 小判 二八〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

谷信次君編 **月の光** 第二版 全一册 洋並製 小判 二八〇頁 正價四十八錢 郵税四錢

戍島柳北君著 **柳北全集** 寫眞銅版挿入 正一册 洋並製 大判 三三八頁 正價二十七錢五厘 郵税二錢

内藤恥叟君 小宮山綏介君標註 **温知叢書** 文逝古 全十二册 並洋製 中判 一五〇頁 一册二十五錢 郵税六錢

内藤恥叟君校訂 **日本文庫** 少年必讀 全十二册 洋並製 中判 一五〇頁 一册二十五錢 郵税六錢

石中研堂君著 **雅三俗山** 文鈔 設錄 全一册 洋布上製 小判 二〇〇頁 正價二十五錢 郵税六錢

作文書類

作文法

大和田建樹君著 **作文寶典** 第四版 全一册 忍皮上製 中判 一七二〇頁 正價二圓二十錢 小包四百匁

大和田建樹君著 **作文寶典** 第十版 袖珍實用 全一册 洋布上製 小判 一〇二〇頁 正價六十五錢 郵税六錢

- 百東持中君編纂　作文熟語字典　第四版　全一冊洋布上製　中判九八〇頁　正價一圓　郵税十錢
- 文學博士萩野由之君著　中學教育 作文法　第九版　全一冊洋並製　中判五〇〇頁　正價二十錢　郵税八錢
- 小高山弘道君著　中等教育 作文教科書　第三版　全一冊洋並製　大判四五〇頁　正價四十錢　郵税十錢
- 岸上操君編　作文自在　第八版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判二七四頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 和田維樹君著　作文組立法　第十四版　全一冊洋並製　大判一六九頁　正價十五錢　郵税六錢
- 羽山□□君著　作文眞訣　全一冊洋並製　中判一八二頁　正價十二錢　郵税四錢
- 華族女學校學監下田歌子女史著　女子作文の栞　全一冊和並製　大判二三六頁　正價三十五錢　郵税八錢
- 堀江秀雄君著　學生必讀 作文資料　第十一版　全一冊洋並製　小判二一五頁　正價十五錢　郵税四錢
- 井上敏夫君著　詳註熟語 作文錦嚢（第三版）　全一冊紙皮上製　小判四三〇頁　正價卅五錢　郵税六錢
- 宮川鐵次郎君著　通俗文章學　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價三十錢　郵税八錢
- 上村左川君編　記事論說文範　第七版　美麗寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判二四四頁　正價廿五錢　郵税六錢
- 池田一刊君著　今體作文六大秘訣　全一冊紙皮上製　小判三三〇頁　正價廿五錢　郵税四錢
- 西村醉夢君著　美文韻文 創作要訣　全一冊洋並製　中判二〇六頁　正價廿五錢　郵税六錢
- 石川□齋君著　初學 文法詳解　全一冊洋並製　中判　正價二十錢　郵税四錢
- 大典□師君著　初學文軌　全二冊和並製　大判一二四頁　正價三十八錢　郵税四錢

書翰文

- 中村秋香君著　書翰文大成　全一冊背皮上製　大判三四七頁　正價一圓　郵税十八錢
- 内山幻□君著　明治書翰文大全　第六版　寫眞版八葉挿入　全一冊洋並製　大判四六〇頁　正價四十五錢　郵税十錢
- 樋口一葉君著　通俗書翰文　第十五版　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判二四六頁　正價二十五錢　郵税六錢
- 華族女學校學監下田歌子君著　女子書翰文　第十二版　石版書翰挿入　全一冊和並製　大判二二八頁　正價三十五錢　郵税八錢
- 須永金三郎君著　日本學生用文　訂正七版　全一冊洋並製　中判五〇〇頁　正價二十錢　郵税六錢
- 池田良一君著　普通用文　全一冊洋並製　中判一六〇頁　正價十五錢　郵税四錢
- 佐々木信綱君著　日本婦女用文　第十四版　全一冊洋並製　中判三□四頁　正價十八錢　郵税六錢

大和川建樹君著
●書翰組立法　全一冊洋並綴　大判　正價十五錢　郵稅六錢

修辭及演說

文學士武島又次郎君著　第五版
●修辭學　全一冊洋並綴　大判三六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

博文館編輯局編纂　第十版
●祝辭演說法　彩色木版寫眞挿入　全一冊洋並綴　大判二五〇頁　正價廿五錢　郵稅六錢

坪谷善四郎君著
●演說討論軌範　全一冊洋並綴　中判二〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢

文集

博文館編輯局編纂
●壺すみれ　寫眞版十二葉挿入　全一冊洋並綴　大判二一〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●花あやめ　寫眞版十二葉挿入　全一冊洋並綴　大判二一〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●英才詞范　春夏　寫眞版十二葉挿入　全二冊洋並綴　大判二四二頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●秀才詞林　秋冬　寫眞版十二葉挿入　全二冊洋並綴　大判二一〇頁　一冊十錢　郵稅一錢五厘

博文館編輯局編纂
●明治青年文壇　春冬　寫版眞四葉挿入　全二冊洋並綴　大判一二二頁　一冊六錢　郵稅一錢

博文館編輯局編纂
●千紫萬紅　春秋　石版一葉寫眞版八葉挿入　全二冊洋並綴　大判二六四頁　一冊二十錢　郵稅二錢五厘

博文館編輯局編纂
●糸すゞき　寫眞版十二葉挿入　全一冊洋並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●磯ちどり　寫眞版十二葉挿入　全一冊洋並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

外國語書類

文典

文學士野柳部太郎君著
●邦語英文典　全一冊洋並綴　大判三三三頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

石川辰之助君著 ●初等英文典教科書 全一冊洋布上製 中判一五〇頁 正價四十錢 郵税四錢

文學士畔柳都太郎君譯述 ●英文典語句慣用法 第二版 全一冊洋布上製 中判二六〇頁 正價六十錢 郵税六錢

文學士青木昌吉君編 ●邦語獨逸語文典 全一冊洋並製 大判二三二頁 正價三十五錢 郵税八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

文學士青木昌吉君編 ●邦語獨逸文章編 全一冊洋並製 大判 正價三十五錢 郵税八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵税十錢

文學士杉谷泰山君編述 ●獨乙前置詞使用法 全一冊洋布上製 大判一四六頁 正價五十錢 郵税八錢

今村有隣君著 ●例解應用佛蘭西文法 全一冊洋布上製 中判二七一頁 正價一圓二十錢 郵税十錢

福山八治君著 ●初學實用佛蘭西文典 全一冊洋布上製 中判五五二頁 正價七十五錢 郵税十錢

佛國文部大臣裁決 ●佛蘭西文法要規 全一冊洋並製 大判一〇頁 正價二十錢 郵税二錢

宮田修君著 ●通俗言語學 全一冊洋並製 大判三五〇頁 正價廿五錢 郵税八錢

會話

石川辰之助君著 ●通俗英語案内 第四版 全一冊洋並製 大判三一二頁 正價二十五錢 郵税八錢

石川辰之助君著 ●初等英語會話教科書 全一冊洋布上製 中判一八〇頁 正價四十錢 郵税六錢

島田豐君著 島田弟丸君合著 ●英和應用會話指針 第五版 全一冊洋布上製 小判二三一頁 正價三十錢 郵税四錢

齋藤忠二郎君著 ●實用英和商業會話 第三版 全一冊洋布上製 小判八六頁 正價二十錢 郵税四錢

小宮錦太君 金澤保胤君合著 ●支那南部會話 全一冊洋並製 小判三三〇頁 特價十錢 郵税四錢

博士エー・ストレーキ氏著 ●英和商人會話必携 全一冊洋布製 小判二三八頁 正價三十五錢 郵税六錢

作文

石川辰之助君著 ●初等英語作文教科書 文部省檢定濟 第二版 全一冊洋布製 中判一一〇頁 正價四十錢 郵税六錢

島田豐君　島田弟丸君合著
實用英和作文　第二版
全一冊洋布上製　小判二四〇頁　正價三十錢　郵稅四錢

祖山雄二君　大田黑重五郎君編纂
英和商業作文辭彙　第二版
全一冊背皮上製　大判二八三頁　正價一圓廿錢　郵稅十錢

讀本

津田梅子君著
イングリッシ ストリード　第再版　文部省檢定濟
全一冊洋布上製　大判一六〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

櫻井彥太郎君著
フエーマース ストリーメ
全一冊洋布上製　中判一五〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

校訂翻刻
ナショナル第一讀本　第六版
▲特製本正價十八錢
全一冊洋布上製　中判一一二頁　郵稅四錢　正價十五錢　郵稅四錢

校訂翻刻
ナショナル第二讀本　第三版
▲特製本正價三十錢　郵稅六錢
全一冊洋布上製　中判一七一頁　正價二十四錢　郵稅六錢

校訂翻刻
ナショナル第三讀本　第三版
▲特製本正價三十五錢　郵稅八錢
全一冊洋布上製　中判二五〇頁　正價三十錢　郵稅六錢

校訂翻刻
ロングマンス第一讀本　第再版
全一冊洋布上製　中判一二八頁　正價廿五錢　郵稅四錢

校訂翻刻
ロングマンス第二讀本
全一冊洋布上製　中判一三二頁　正價卅五錢　郵稅六錢

校訂翻刻
ロングマンス第三讀本
全一冊洋布上製　中判一八〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

澁江保君註釋
ロングマンス第一讀本註釋
全一冊洋並製　中判三二八頁　正價三十錢　郵稅六錢

澁江保君註釋
ロングマンス第二讀本註釋
全一冊洋並製　中判三八六頁　正價三十五錢　郵稅六錢

澁江保君註釋
ロングマンス第三讀本註釋
全一冊洋並製　中判三四〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

澁江保君註釋
ロングマンス第四讀本註釋
全一冊洋並製　小判五三六頁　正價四十五錢　郵稅八錢

辭典書類

漢語字典

石川鴻齋君校訂
音釋頭註
康熙字典
全六冊和上製　中判　正價四圓五十錢　小包八百匁
▲函入上製　正價四圓八十錢　小包一貫目

市河清流君 高井思明君校正 四聲一音字貫 函入上製 正價六圓	全五冊和上製 中判一六一〇枚 小包一一[illegible]日	正價五圓三十錢 小包八百匁
石川鴻齋君校訂 發音 文字引 日本大玉篇	全三冊和上製 中判七二八枚	正價二圓二十錢 小包四百匁
石川鴻齋君著 新撰日本字典	全二冊和上製 小判一〇二〇枚	正價九十五錢 郵稅八錢
戸川殘香君著 文章字典	全一冊和上製 小判	正價七十錢 郵稅六錢
大田淳軒君著 新撰歷史字典	全一冊和上製 小判	正價六十錢 郵稅八錢
大田淳軒君著 新撰明治字典	全一冊洋並製 小判四七〇頁	正價三十五錢 郵稅四錢
棚橋影君著 新撰漢語字引	全一冊洋並製 小判二一六頁	正價二十五錢 郵稅二錢
長岡道謙君著 新刻正字通	全一冊洋並製 小判	正價三十五錢 郵稅四錢
齊木寛直君著 明治文選字引	全一冊和並製 小判二一六頁	正價二十五錢 郵稅四錢
棚橋影君著 日本いろは新字典	全一冊和並製 小判四〇〇頁	正價三十錢 郵稅四錢
寒泉振作君著 新撰五千字典	全一冊洋並製 小判二七〇頁	正價二十錢 郵稅六錢

國語字典

大和田建樹君著 日本大辭典	全一冊總皮上製 大判一八〇〇頁	正價二圓廿五錢 小包四百匁
大和田建樹君著 日本小辭典	全一冊洋布上製 小判一八八〇頁	正價七十五錢 郵稅八錢
大宮宗司君編纂 第十四版 日本辭林 ▲特製本 洋布上製	全一冊洋並製 小判七二〇頁 正價四十錢 郵稅六錢	正價三十錢 郵稅六錢
佐々木弘綱君 岡野伊平君著 假名遣枕詞字典	全一冊洋並製 中判	正價三十錢 郵稅六錢

英和辭典

島田豐君著 第四版 學生用英和字典	全一冊總皮上製 小判一三四八頁	正價一圓三十錢 郵稅十錢
島田豐君著 珍小學生用英和字典	全一冊總皮上製 小判二〇五六頁	正價一圓五十錢 郵稅八錢
島田豐君著 學生和英字典	全一冊總皮上製 小判一三二四頁	正價一圓八錢 郵稅十錢

節用

博文館編輯局編纂　傳家寶典　●明治節用大全　第七版　彩色美麗木版畫插入　全一冊総皮上製　大判一二三二頁　正價一圓六十錢　小包送六百匁

內山正如君著　●新撰日本節用　全一冊和上製　中判五二〇頁　正價九十五錢　郵稅十錢

小說書類

新作小說

大橋乙羽君著　●花鳥集　彩色木版密畫插入　第三版　全一冊洋布上製　大判一二百八頁　正價一圓　郵稅十八錢

大橋乙羽君著　●初子集　彩色木版密畫插入　第一版　全一冊洋布上製　小判五九六頁　正價四十錢　郵稅六錢

大橋乙羽君著　●風月集　彩色木版密畫插入　第　版　全一冊洋布上製　小判五二二頁　正價三十五錢　郵稅六錢

大橋乙羽君著　●若菜籠　彩色木版密畫插入　第六版　全一冊洋並製　小判三二〇頁　正價二十八錢　郵稅四十錢

大橋乙羽君著　政治小說　●累卵の東洋　第七版　全一冊洋並製　小判二〇六頁　正價十八錢　郵稅四錢

樋口一葉君著　●一葉全集　全一冊洋並製　大判　正價四十錢　郵稅十錢

川上眉山君著　●奥さま　彩色木版密畫插入　全一冊洋並製　大判一六〇頁　正價二十五　郵稅四錢

江見水蔭君著　●戀　（第五版）　全一冊紙皮上製　小判三八二頁　正價三十錢　郵稅四錢

江見水蔭君著　●星　寫眞版插入　（第二版）　全一冊紙皮上製　小判六八四頁　正價五十錢　郵稅八錢

巖谷小波山人著　●笑　寫眞版插入　（第四版）　全一冊紙皮上製　小判五三八頁　正價三十五錢　郵稅六錢

巖谷小波山人著　●女波男波　寫眞版插入　全一冊紙皮上製　小判七二一頁　正價四十錢　郵稅八錢

江見水蔭君著　●月と梅　寫眞版插入　全一冊紙皮上製　小判三六二頁　正價二十五錢　郵稅四錢

福地櫻痴君著　●山陰麒麟　寫眞版插入　全一冊紙皮上製　小判四六〇頁　正價二十五錢　郵稅四錢

福地櫻痴居士新作脚本　●芳哉義士の譽　美麗石版畫插入　全一冊洋並製　小判一五二頁　正價三十錢　郵稅六錢

饗庭篁村君著 **聚寶盆** 寫眞版挿入 全一冊 大判 四九二頁 紙皮上製 正價三十五錢 郵税六錢

石橋思案君著 **筆と紙** 寫眞版挿入 全一冊 小判 五一八頁 紙皮上製 正價三十五錢 郵税一錢

江見水蔭君著 鐵道小說 **流車の友**（第五版） 全一冊 小判 紙皮上製 正價三十錢 郵税六錢

江見水蔭君著 短篇小說 **避暑の友**（第三版） 全一冊 小判 三八七頁 紙皮上製 正價三十五錢 郵税六錢

江見水蔭君著 軍事小說 **突貫** 寫眞銅版挿入 全一冊 小判 三八七頁 紙皮上製 正價三十錢 郵税六錢

尾上新兵衛君著 軍事小說 **戰塵** 着色寫眞銅版挿入 第二版 全一冊 小判 三六九頁 紙皮上製 正價三十錢 郵税六錢

福地櫻痴君著 **櫻痴滑稽談** 全一冊 大判 洋 並製 正價二十五錢 郵税六錢

幸堂得知君著 **幸堂滑稽談** 全一冊 大判 洋 並製 正價二十五錢 郵税六錢

内田不知庵君著 **彫像師** 全一冊 大判 一四二頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

幸堂得知君著 **天製糸爪の水** 全一冊 小判 一四九頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

依田學海君著 文覺脚本 **小御門** 全一冊 小判 一八一頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

須藤南翠君著 江戶自慢 **男一疋** 全一冊 大判 一七七頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

齋藤緑雨君著 **あま蛙** 全一冊 大判 一五九頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

塚原蓼州君著 **密告** 全一冊 小判 一五〇頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

山田美妙君著 **腕ためし** 全一冊 小判 一五六頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

遲塚麗水君著 **杜鵑一聲** 全一冊 小判 一五六頁 洋 並製 正價八錢 郵税二錢

諸名家執筆 **明治小說文庫** 全五冊 一冊 三二〇頁 洋 並製 正價二十錢 郵税三錢

廣津柳浪君著 **親こゝろ** 彩色木版寫眞版挿入 全一冊 大判 三二〇頁 洋 並製 正價二十五錢 郵税二錢五厘

諸名家執筆 **梨園の春** 着色寫眞版挿入 全一冊 大判 二六四頁 洋 並製 正價二十二錢 郵税二錢五厘

諸名家執筆 **小說八家選** 着色寫眞銅版挿入 全一冊 大判 二六四頁 洋 並製 正價二十二錢 郵税二錢五厘

翻譯小說

若松賤子君譯述 **小公子** 全一冊 大判 洋 並製 正價三十五錢 郵税八錢

● 乞食王子　少年小說　小波山人 川田河山人 黒田湖山人共譯　第二版　全一冊 小判 紙皮上製 五九四頁　正價二十五錢 郵税六錢

● 十五少年　森田思軒君譯述　全一冊 大判 洋並製　正價三十五錢 郵税八錢

● 絶島漂流記（ロビンソン）　高橋光威君譯述　全一冊 大判 洋並製　正價四十錢 郵税八錢

● 日露戰爭未來記　文學士大町桂月君譯述　全一冊 大判 洋並製　正價十八錢 郵税四錢

● 海底軍艦　押川春浪君譯述　全一冊 小判 紙皮上製　正價三十錢 郵税六錢

● 塔中の怪　押川春浪君譯述　全一冊 小判 紙皮上製 三三二頁　正價廿五錢 郵税四錢

● 初航海（少年冒險譚）　櫻井鷗村君譯述　第六版　全一冊 小判 紙皮上製 三一四頁　正價二十五錢 郵税四錢

● 魔法醫者　南湯外史譯述　第二版　彩色木版密畫挿入　全一冊 小判 紙皮上製 三二〇頁　正價廿五錢 郵税四錢

● 金堀少年　櫻井鷗村君譯述　第二版　中村不折君畫　全一冊 小判 洋並製 二四二頁　正價三十錢 郵税六錢

● 遠征奇談　櫻井鷗村君譯述　第二版　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製　正價三十錢 郵税六錢

● 二勇少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二八〇頁　正價三十錢 郵税六錢

● 續遠征奇談　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二六〇頁　正價三十錢 郵税六錢

● 決志少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折入畫　全一冊 中判 洋並製 二七六頁　正價三十錢 郵税六錢

● 漂流少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二四二頁　正價三十錢 郵税六錢

● 殖民少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二四四頁　正價三十錢 郵税六錢

● 航海少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二四四頁　正價三十錢 郵税六錢

● 不撓少年　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二六四頁　正價三十錢 郵税六錢

● 朽木の舟　櫻井鷗村君譯述　中村不折君畫　全一冊 中判 洋並製 二四六頁　正價三十錢 郵税六錢

● 少看護婦　櫻井鷗村君譯述　西洋木版密畫挿入　全一冊 大判 洋並製 一三二頁　正價十五錢 郵税四錢

● 鈍機翁冒險譚　松井松葉譯述　全二冊 大判 洋並製 三二〇頁　正價三十錢 郵税十二錢

● 闇黑亞非利加　矢部五洲君譯述　全[illegible]冊 大判 洋並製 八五〇頁　正價七十五錢 郵税三十錢

● 大寶窟　宮井安吉君譯述　全二冊 大判 洋並製 三二〇頁　正價三十錢 郵税十二錢

● めをと　内田不知庵君譯述　全一冊 大判 洋並製 一六二頁　正價十五錢 郵税六錢

● なまけもの　坂山霜山人譯述　全一冊 大判 洋並製 一七一頁　正價十五錢 郵税六錢

講談落語

● 落語全集　石橋思案君校訂　第二版　全一冊紙皮上製　中判一〇九二頁　正價六十錢　郵稅十六錢

● 新撰落語 福　柳亭金升君著　第三版　全一冊背皮上製　小判三一二頁　正價三十錢　郵稅六錢

● 後前講讀 中山大納言　松林伯圓君講演　第二版　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判三七四頁　正價廿五錢　郵稅四錢

● 天下之糸平　放牛舍桃林講演　第三版　三島蕉窓君挿畫　全一冊洋並製　大判二三九頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 佐倉宗五郎　桃川燕林君講演　全一冊洋並製　大判　正價二十五錢　郵稅六錢

● 大岡裁判　諸名家講演　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十四錢　郵稅二錢五厘

● 講演 名妓傳　諸名家講演　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十四錢　郵稅二錢五厘

● 講演 俠客傳　諸名家講演　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十四錢　郵稅二錢五厘

● 雪の梅　諸名家講演　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十二錢　郵稅二錢五厘

● 講談 櫓太鼓　諸名家講演　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十四錢　郵稅二錢五厘

● 第一二三講談揃　諸名家講演　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價二十二錢　郵稅二錢五厘

● 日本武士　諸名家講演　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並製　大判三二〇頁　正價二十五錢　郵稅二錢五厘

稗史實錄

● 眞書太閤記　博文館編輯局校訂　第六版　全四冊背皮上製　中判四〇六九頁　一冊六十錢　郵稅十六錢

● 南總里見八犬傳　曲亭馬琴翁著　第十二版　全三冊背皮上製　中判三八〇〇頁　一冊六十錢　郵稅十六錢

● 水滸傳　博文館編輯局校訂　第五版　全二冊背皮上製　中判二〇八五頁　一冊六十錢　郵稅十六錢

● 續水滸傳　田中從吾軒君 三木愛花君譯　全一冊背皮上製　中判一一三四頁　正價六十錢　郵稅十六錢

● 傾城水滸傳　博文館編輯局校訂　全一冊背皮上製　中判一〇〇〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

● 通俗三國志　博文館編輯局校訂　第四版　全二冊背皮上製　中判二二〇〇頁　一冊六十錢　郵稅十六錢

● 源平盛衰記　博文館編輯局校訂　第十三版　全一冊背皮上製　中判一三一〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

● 楠廷尉秘鑑　博文館編輯局校訂　全一冊背皮上製　中判　正價六十錢　郵稅十六錢

●甲越軍記	博文館編輯局校訂	第二版	全一冊背皮上製	中判九八二頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●星月夜鎌倉顛晦錄・北條九代記	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判	正價六十錢	郵稅十六錢
●眞田三代記	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判九五八頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●通俗呉越軍談・通俗漢楚軍談	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判一〇〇〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●通俗十二朝軍談・通俗武王軍談・通俗明清軍談	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判一〇二一頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●前々太平記	博文館編輯局校訂	第再版	全一冊背皮上製	中判一一一〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●太平記	博文館編輯局校訂	第五版	全一冊背皮上製	中判一一九〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●後太平記	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判一一二〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●常山紀談	江見水蔭君校訂		全一冊背皮上製	中判一〇五三頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●朝夷巡島記	博文館編輯局校訂		全一冊背皮上製	中判一一七二頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●白縫譚	博文館編輯局校訂		全二冊背皮上製	中判二〇四二頁	一冊六十錢	郵稅十六錢
●偐紫田舎源氏	博文館編輯局校訂	第二版	全一冊背皮上製	中判一〇六八頁	正價六十錢	郵稅十六錢

●兒雷也豪傑譚	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇四〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●時代鏡（北條、美濃）	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇五八頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●大岡政談	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇〇〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●騷動實記（柳澤、黑田、越後、加賀、伊達）	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇〇〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●高僧實傳（佛教各宗）	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇五〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●赤穗復讐全集	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇一〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●仇討小說集	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇八〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●續仇討小說集	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一〇〇〇頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●俠客傳全集	博文館編輯局校訂	全一冊背皮上製	中判一一〇八頁	正價六十錢	郵稅十六錢
●南總里見八犬傳（圖入）	曲亭馬琴著	全五十冊和上製	大判三〇五一枚	正價八圓五十錢	郵稅五十錢

飜刻小說

- 博文館編輯局校訂 東海奧羽木曾江島道中膝栗毛 第六版　全一冊背皮上製 中判一一九〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 梅曆春告鳥　全一冊背皮上製 中判一二八〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 曲亭馬琴翁著 近世說美少年錄　全一冊背皮上製 中判一二〇〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 三馬傑作集　全一冊背皮上製 中判一〇九〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 京傳傑作集　全一冊背皮上製 中判一一五〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 種彥傑作集　全一冊背皮上製 中判一一八〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 馬琴傑作集　全一冊背皮上製 中判一一二三頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 風來山人傑作集　全一冊背皮上製 中判一〇〇〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 大橋乙羽君 尾崎紅葉君校訂 西鶴全集　全二冊背皮上製 中判一〇〇五頁　（發賣禁止）
- 大橋乙羽君校訂 其磧自笑傑作集　全二冊背皮上製 中判二〇八五頁　一冊六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 京山全集　全一冊背皮上製 中判一一三二頁　正價六十錢 郵稅十六錢

- 博文館編輯局校訂 一九全集　全一冊背皮上製 中判一〇〇四頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 續一九全集　全一冊背皮上製 中判九七六頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 人情本傑作集　全一冊背皮上製 中判一一二三頁　一冊六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 滑稽名作集　全一冊背皮上製 中判一〇三〇頁　一冊六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 俳優全集　全一冊背皮上製 中判一〇〇〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 四大奇書 第四版　全二冊背皮上製 中判二一一一頁　一冊六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 珍本全集　全三冊背皮上製 中判三一〇〇頁　一冊六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 氣質全集 第再版　全一冊背皮上製 中判一〇五二頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 續氣質全集　全一冊背皮上製 中判一〇五二頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 脚本傑作集　全一冊背皮上製 中判一〇八〇頁　（賣發禁止）
- 石井研堂君校訂 漂流奇談全集　全一冊背皮上製 中判一〇一四頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 博文館編輯局校訂 邯鄲諸國物語　全一冊背皮上製 中判一〇三四頁　正價六十錢 郵稅十六錢
- 石井研堂君校訂 萬物滑稽合戰記　全一冊背皮上製 中判一〇一八頁　正價六十錢 郵稅十六錢

幸堂得知君校訂
● 黄表紙百種
全一冊　背皮上製　中判一〇九〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

博文館編輯局校訂
● 續馬琴傑作集
全一冊　背皮上製　中判一〇八〇頁　正價六十錢　郵税十六錢

少年書類

お伽噺

巖谷小波山人著
● 日本お伽噺
全廿四冊洋裝並製　大判一冊六八頁　一冊六錢　郵税二錢

目次

第一編　八咫烏　久保田米仙畫
第二編　田村將軍　水野年方畫
第三編　玉取　梶田半古畫
第四編　源三位　尾形月耕畫
第五編　八幡太郎　筒井年峯畫
第六編　武藏坊　右田年英畫
第七編　一休和尚　鈴木華邨畫
第八編　東照宮　小堀鞆音畫
第九編　鉄拐山　梶田半古畫
第十編　川中島　山中古洞畫
第十一編　玄武門　久保田金仙畫
第十二編　白虎隊　橋本周延畫
第十三編　鎮西八郎　尾形月耕畫
第十四編　最明寺　鈴木華邨畫
第十五編　朝夷奈　筒井年峯畫
第十六編　櫻井驛　水野年方畫
第十七編　草薙劔　小林永興畫
第十八編　日吉丸　小峯苔石畫
第十九編　文覺上人　梶田半古畫
第廿編　和唐内　高橋松亭畫
第廿一編　高千穗　鈴木華邨畫
第廿二編　鬼童丸　富岡永洗畫
第廿三編　熊本城　水野年方畫
第廿四編　宇治川　武内桂舟畫

巖谷小波山人著
● 世界お伽噺
全[illegible]冊洋裝並製　大判一冊七八頁　一冊七錢　郵税二錢

目次

第一編　世界の始（太古）
第二編　五色の石（支那）
第三編　珊瑚島（南洋）
第四編　魔法博士（獨逸）
第五編　無人島大王（英國）
第六編　鬼婆と小女（獨逸）
第七編　法螺先生（〇〇）
第八編　二人王子（露國）
第九編　十人島（英國）
第十編　孫悟空（支那）
第十一編　驢馬姫（佛國）
第十二編　火人國（英國）
第十三編　[illegible]盲者（印度）
第十四編　王冠乘取（土耳古）
第十五編　續法螺先生（獨逸）
第十六編　猿智惠小僧（アフリカ）
第十七編　酋長征伐（多島洋）
第十八編　夢の三郎（南洋）
第十九編　鼠の踊（伊太利）
第二十編　光明姫（印度）
第廿一編　雛の便（アフリカ）
第廿二編　日の市（南亞細亞）
第廿三編　三人片輪（小亞細亞）
第廿四編　白い鳥（蝦夷）
第廿五編　滑殿太郎（コサック）
第廿六編　十二王妃（カンボヂヤ）
第廿七編　狐の裁判上（獨逸）
第廿八編　狐の裁判下（獨逸）
第廿九編　奇体の洋燈（亞刺比亞）
第三十編　獵師大鷲（希臘）
第卅一編　九重の塔（西藏）
第卅二編　虹の橋（亞米利加）
第卅三編　魔法の弱（露西亞）

大和田建樹君著
● 日本歴史譚
全廿四冊洋裝並製　大判一冊八二頁　一冊八錢　郵税四錢

目次

第一編　日本開闢　山田敬中畫
第二編　畝傍山　村田丹陵畫
第三編　三韓征伐　寺崎廣業畫
第四編　聖徳太子　水野年方畫
第五編　菅公　梶田半古畫
第六編　九郎判官　筒井月耕畫
第七編　曾我兄弟　尾形月耕畫
第八編　惡七兵衛　水野年方畫
第九編　相模太郎　山中古洞畫
第十編　楠公　小林永興畫
第十一編　日蓮　武内桂舟畫
第十二編　大塔宮　歌川國松畫

第十三編 豊太閤 小堀 鞆音畫
第十四編 七本槍 筒井 年峯畫
第十五編 關ヶ原 高橋 松亭畫
第十六編 水戸黄門 水野 年方畫
第十七編 四十七士 中川 蘆州畫
第十八編 平田篤胤 遠藤 耕溪畫
第十九編 櫻田門外 小峰 大羽畫
第二十編 上野落 池田 輝方畫
第廿一編 彰義隊 小山 光方畫
第廿二編 城山 宮川 春汀畫
第廿三編 平壤 永井 寸昂畫
第廿四編 威海衛 小山 光方畫

巌谷小波君著 日本昔噺

全廿四冊洋裝並綴 大判一冊九十二頁 一冊五錢 郵税二錢

▲帙入 全四冊 一冊三十五錢 郵税十錢

目次

第一編 桃太郎 富岡 永洗畫
第二編 玉の井 小林 永興畫
第三編 猿蟹合戰 村田 丹陵畫
第四編 松山鏡 武内 桂舟畫
第五編 花咲爺 水野 年方畫
第六編 大江山 歌川 國松畫
第七編 舌切雀 三島 蕉窓畫
第八編 俵藤太 藤島 華僊畫
第九編 かち／＼山 寺崎 廣業畫
第十編 瘤取 山田 敬中畫
第十一編 物臭太郎 梶田 半古畫
第十二編 文福茶釜 鈴木 華邨畫
第十三編 八頭の大蛇 尾形 月耕畫
第十四編 兎と鰐 高橋 松亭畫
第十五編 羅生門 筒井 年峯畫
第十六編 猿と海月 久保田 米僊畫
第十七編 安達ヶ原 小堀 鞆音畫
第十八編 浦島太郎 永峯 秀湖畫
第十九編 一寸法師 小林 清親畫
第廿編 金太郎 右田 年英畫
第廿一編 雲雀山 玉桂 女史畫
第廿二編 猫の草紙 淺井 忠畫
第廿三編 牛若丸 橋本 周延畫
第廿四編 鼠の嫁入 川端 玉章畫

巌谷小波君著 幼年讀本

全十二冊洋裝並綴 大判一冊一二〇頁 一冊十五錢 郵税四錢

目次

第一編 日本歴史
第二編 日本地理
第三編 世界歴史
第四編 世界地理
第五編 日本立志談
第六編 世界立志談

木村小舟君著 田中虎藏君作曲 家庭唱歌

全十二冊洋裝並綴 小判一冊八〇頁 一冊六錢 郵税二錢

目次

第一編 桃太郎
第二編 舌切雀
第三編 松山鏡
第四編 花咲爺
第五編 浦島太郎
第六編 文福茶釜
第七編 一寸法師
第八編 雲雀山
第九編 俵藤太
第十編 羅生門
第十一編 勝々山
第十二編 猿蟹合戰

華族女學校學監下田歌子女史著 お伽噺教艸

全一冊和裝並綴 大判一冊二四二頁 正價卅五錢 郵税六錢

華族女學校學監下田歌子女史著 庭訓お伽噺

全一冊和裝並綴 大判二三四頁 正價卅五錢 郵税六錢

少年讀物

石井研堂君著 理科十二ヶ月

全十二冊洋裝並綴 大判一二〇頁 一冊十錢 郵税四錢

目次

第一編 新風船
第二編 雪達磨
第三編 花の節
第四編 汐干狩
第五編 植物園
第六編 蜻蛉祭
第七編 游泳場
第八編 富士詣
第九編 暴風雨
第十編 銃獵者
第十一編 幻燈會
第十二編 節會餘

巌谷小波君著 こがね丸

全一冊和裝並綴 中判 正價十二錢 郵税四錢

書名	著者	體裁	定價
二人むく助	尾崎紅葉君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
今辨慶	江見水蔭君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
維新三傑	川崎紫山君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
雨の日ぐらし	山田美妙君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
寶の山	川上眉山君著	全二册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
姉と弟	嵯峨の舍主人著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
當世少年氣質	巖谷小波君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
紀文大盡	村井弦齋君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
親の恩	宮崎三昧君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
暑中休暇	巖谷小波君著	全一册和中利並製	正價十二錢 郵税四錢
近江聖人	村井弦齋君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
甲子待	南新二君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
俠黑兒	尾崎紅葉君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
陸奥の長者	幸堂得知君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢

書名	著者	體裁	定價
五少年	中村花痴君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
二代忠孝	武田仰天君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
寧聲兒	石橋思案君著	全一册和中判並製	正價十二錢 郵税四錢
繪入幼年唱歌	佐々木信綱君著	全一册和小判二四頁並製	正價十錢 郵税二錢
繪入幼年歷史	坂下龜太郎君著	全一册和小判六四頁並製	正價十錢 郵税二錢
祝砲　寫眞版十六枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判二四二頁並製	正價十一錢 郵税二錢五厘
滿艦飾　寫眞銅版十六葉挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判二四二頁並製	正價十一錢 郵税二錢
春遊び　アートペーパー二面寫眞版八枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判一三八頁並製	正價十錢 郵税一錢五厘
競漕會　アートペーパー二面寫眞版八枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判一三八頁並製	正價十錢 郵税一錢五厘
五月幟　寫眞版八枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判一三二頁並製	正價三錢五厘 郵税一錢
内國少女鑑	下田歌子女史著	全一册和大判並製	正價卅五錢 郵税六錢
外國少女鑑	下田歌子女史著	全一册和大判並製	正價卅五錢 郵税六錢
園遊會　アートペーパー一葉寫眞版八枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判一三八頁並製	正價十錢 郵税一錢五厘
探涼軍　アートペーパー一葉寫眞版八枚挿入	博文館編輯局編纂	全一册洋大判一三八頁並製	正價十錢 郵税一錢五厘

帝國百科全書

毎月二回刊行全部壹百册
紙數一册三百二十頁以上菊判

正價
（特製）一册五十錢六册二圓八十錢十二册五圓四十錢廿五册拾圓八十錢郵税一册十錢
（並製）一册卅五錢六册貳圓十二册三圓八十錢廿五册七圓五十錢郵税一册八錢

我邦日進の奎運は專門學術の普及を促して已まず本書は此急需に應じて起りたるもの社會智識の指導を以て任する者獨り僻郷師に乏しきもの丶為のみに非す大都大中學の士も亦本書に俟つ所必す大なるものあらん

通俗百科全書

全部二十四册完成紙數
一册三百頁以上菊判形

正價
（自第一編至第拾五編）一册廿五錢六册壹圓四十錢十二册貳圓七十錢十五册三圓廿五錢（自第十六編以下）一册三十錢六册一圓七十錢九册貳圓五十錢

日用百科全書

全部五十册洋裝菊判完成

正價
一册貳拾五錢六册一圓四十四錢十二册二圓七十六錢三十册六圓六十錢五十册十圓〇五錢
郵税一册六錢宛

帝國文庫

全部五十册洋裝上製完成

正價
一册六十錢六册三圓五十錢十二册六圓九十錢廿五册十三圓
全部貳拾五圓郵税一册十六錢宛

續帝國文庫

全部五十册洋裝上製背皮金
文字入美本毎月一回發行

正價
一册六十錢六册三圓五十錢十二册六圓九十錢廿五册十三圓
〇郵税一册十六錢宛

警察監獄全書

全部六册完成　洋裝菊判

正價
（上製）五十五錢六册三圓拾錢
郵税一册拾錢（並製）四拾錢六册二圓廿錢郵税一册八錢

世界歴史譚

全部三十六册毎編讀切密畫入

正價
一册十三錢十二册一圓三十錢廿四册二圓五十錢三十六册三圓七十錢郵税一册四錢宛

少年讀本

全部五十册毎編讀切密畫入

正價
一册十三錢十二册一圓三十錢廿四册二圓五十錢全部五十册五圓郵税一册四錢宛

少年工藝文庫

毎月一回發行全部十二册
毎編寫眞版西洋木版數面入

正價 一册十五錢六册八十五錢十二册一圓六十錢郵税一册四錢

商業叢書

毎月一回發行菊判形洋裝
上製並製二種正價不一

本叢は學理と實驗とにより文明の商戰場に於て新教育を要すべき新書を撰び專門の學士各家の著述に成れる者なり

工業叢書

毎月一回發行四六判形洋裝
上製總クロース金文字入

本書全部五十册定價毎編一定せず既に市川工學士の「水及油」黑田政憲氏の「陶器製造化學」永山學士の「機關車」出版せられたり

蠶業叢書

毎月一回發行全部十二册菊判

正價 一册三十錢六册一圓七十錢十二册三圓廿錢郵税一册六錢

蠶絲業全書

全部六册洋裝菊判完成

正價 一册拾五錢六册八拾五錢拾貳册一圓六十錢郵税一册六錢紙數一册六百餘頁

通俗日用化學全書

全部十二册完成中判洋裝

正價 一册十五錢六册八拾五錢拾貳册一圓六十錢郵税一册六錢

實用教育農業全書

全部二十册完成菊判洋裝

正價 一册拾五錢十册一圓卅五錢廿册二圓六十錢郵税一册六錢

風雅文庫

全部六册毎月一回發行

正價 一册二十錢三册五十七錢六册一圓二十錢郵税一册六錢

幼年讀本

巖谷漣山人著

全部六册洋裝菊判完成

正價 一册拾五錢六册八十五錢郵税一册四錢紙數一册百五十頁

華族女學校學監下田歌子女史著

家庭文庫

全部十二冊和裝上製完成

正價 一冊三十五錢六冊一圓九十錢全部三圓六十錢郵稅一冊八錢

華族女學校學監下田歌子女史著

少女文庫

全部六冊毎月一冊發行
毎編有名書伯挿圖數十葉

正價 一冊三十五錢三冊一圓全部六冊一圓九十錢郵稅一冊六錢

俳諧文庫

全部廿四冊完成洋裝菊判

正價 一冊三十錢六冊一圓六十八錢十二冊三圓廿四錢全部六圓十二錢郵稅一冊八錢紙數一冊二百廿頁

大和田建樹君著

日本歷史譚

全部廿四冊完成洋裝菊判

正價 一冊八錢六冊四十五錢廿四冊一圓五十九錢郵稅一冊四錢

巖谷漣山人著

日本お伽噺

全部廿四冊完成洋裝菊判

正價 一冊六錢六冊三十四錢十二冊六十五錢全部一圓廿錢郵稅二錢宛

巖谷漣山人著

日本昔噺

全部廿四冊完成洋裝菊判

正價 一冊五錢六冊廿七錢十二冊五十錢全部九十五錢郵稅二錢宛

巖谷漣山人著

世界お伽噺

毎月一冊全部一百冊美本

正價 一冊七錢六冊三十九錢十二冊七十五錢廿四冊一圓四十錢五十冊二圓七十五錢郵稅一冊二錢宛

石井研堂君著

理科十二ヶ月

毎月一回發行洋裝菊判完成

正價 一冊十錢六冊五十五錢十二冊郵稅一冊四錢

內外遊戲全書

全部十五冊完成洋裝袖珍

正價 一冊十二錢六冊六十六錢十五冊一圓五十三錢郵稅一冊四錢

日本文學全書

全部二十四冊洋裝中判完成

正價　一冊廿五錢十二冊二圓六十錢全部五圓郵稅一冊三錢一冊紙數四百頁以下

日本歌學全書

全部十二冊洋裝菊判完成

正價　一冊廿五錢六冊一圓卅五錢十二冊二圓六十錢郵稅一冊六錢紙數四百二十頁以下

續日本歌學全書

全部十二冊洋裝中判完成

正價　一冊三十五錢六冊一圓九十錢十二冊三圓七十錢郵稅一冊八紙數一冊五百頁以上

支那文學全書

全部二十四冊洋裝中判完成

正價　一冊廿五錢六冊一圓卅五錢十二冊二圓五十錢廿四冊四圓七十五錢郵稅一冊八錢紙數一冊四百廿頁

少年史譚

全部十二冊洋裝菊判美本

正價　一冊十五錢六冊八十七錢十二冊一圓六十錢郵稅一冊四錢

櫻井鷗村君譯述

世界冒險譚

全部十二冊每月一冊發行

正價　一冊二十錢六冊一圓七十五錢十二冊三圓卅錢郵稅一冊六錢紙數一冊三百三十頁

九版　小林鐵次郎君遺稿
初版　小林鍵太郎編

圍碁全書

全部十二冊每月一冊發行

正價　一冊十五錢六冊八十錢全部十二冊一圓五十錢郵稅一冊二錢

醫學新書

每月一冊發行洋裝上製美本

此新書は本年一月以後の刊行にして醫界の名家其專門學科を負擔し著述聊遺す所なきなり

日本名勝地誌

全部十二冊洋裝中判完成

正價　一冊三十錢六冊一圓七十五錢十二冊三圓四十錢郵稅一冊八錢紙數一冊五百頁

博文館發行圖書雜誌特約大賣捌所

東京 東京堂　　大阪 盛文館

東京 北隆館合資會社
大阪 吉岡平助
名古屋 川瀬代助
東京 東海堂
京都 東枝律書房
同 飯田信文堂
博多 積善館支店
熊本 長崎次郎
久留米 菊竹書店
長野 西澤喜太郎
名古屋 永東書店
長崎 虎與號商店
金澤 宇津宮書店
鹿兒島 吉田幸兵衛
廣島 積善館支店
東京 良明堂
神戸 吉岡支店
同 日東館

長岡 覺張治平
水原 西村六平
名古屋 新聞合資會社
松本 水琴堂
津 關西圖書會社
横濱 第一第二有隣堂
博多 博文社
岡山 武内彌三郎
同 週營堂
神戸 船井新聞商店
同 熊谷久榮堂
大津 太田支店
秋田 成見清兵衛
上諏訪 宮坂日新堂
京都 便利堂
高岡 學海堂
松江 川岡清助
福岡 眞海書店

長崎 渡邊重吉
松山 向井藏次郎
横濱 倉田屋
甲府 柳正堂
同 内藤傳右衛門
弘前 今泉道次郎
同 近松書店
札幌 進振堂
同 富貴堂
函館 魁文舍
同 一二堂
臺南 小出書店
宇都宮 内田瀧吉
仙臺 木村文助
高松 龜友堂
濱松 谷島屋書店
千葉 多田屋支店
鴻巣 長島爲一郎

靜岡 吉見書店
新潟 北光社
山口 超世館
小樽 川南重祐
鹿兒島 金光堂
大分 甲斐治平
盛岡 佐藤庄兵衛
富山 中田書店
前橋 煥手堂
増田 東海林書店
東京 栗原吉五郎
同 盛春堂
同 松邑三松堂
同 木村正直堂
同 加島至誠堂
同 服部書店
同 盛文堂
同 勉强堂

博文館發行圖書雜誌特約賣捌所

東京 林平次郎
同 目黒支店
同 榮星堂
同 春祥堂
同 福島書店
同 有斐閣
同 青木嵩山堂
同 小林仙鶴堂
同 中西屋
同 水野慶次郎
同 大倉書店
同 田中書店
同 青野書店
同 丸善書籍會社
同 神戸國太郎
同 榊原友吉
同 日本堂
同 宇佐美書店
大阪 博報社
同 柳原喜兵衛
同 岡島新聞舖
同 梅原龜七
京都 寶文館
同 大黒屋書舖
神戸 高梨東神堂
兵庫 南澤湊文堂
四日市 伊藤許太郎

山田 古川小三郎
同 有文堂
名古屋 耐成堂
岡崎 岡崎活版所
同 伊藤小文司
豊橋 富田安一
見附 中遠日進社
掛川 撥文堂
沼津 闢製社
横濱 丸屋書店
八王子 小林祐之
同 熊澤兼太郎
東金 多田屋本店
福岡 多田屋支店
水戸 川又銀藏
長濱 文泉堂
大津 文泉堂支店
岐阜 郁文堂
關 松野書店
松本 松榮堂
同 高美書店
長野 荻原朝陽館
同 北辰堂
上諏訪 堀田盛文堂
同 三光堂
飯田 曾川半四郎
上田 西澤支店

宇都宮 臨雲堂
栃木 宮川膺三郎
同 城山堂
足利 三泉堂
平 清光堂
白河 奥村書店
三春 橋本悌輔
福島 博向堂
同 上野屋彦太郎
郡山 虎屋忠左衛門
須賀川 橋本太平
若松 荒井陽文堂
喜多方 瀬野屋書店
仙臺 高藤書店
同 有千閣
同 藤崎祐之助
同 佐勘書店
石巻 山口德之助
佐沼 近源商店
盛岡 鶴鳴閣
同 便益堂
一ノ關 廣文館
青森 今泉謙吉
八ノ戸 伊吉商店
同 浦山政吉
山形 八文字屋書店
同 牧野德太郎

米澤 盛文堂書店
同 素月晨平
鶴岡 日向源吉
寒河江 柿本書店
酒田 鈴木喜八
本庄 吉川政五郎
横手 大澤鮮進堂
大曲 柳田繁治
秋田 秋田株式會社
大館 藤島常三郎
敦賀 山上宗兵衛
福井 品川太右衛門
同 日新館
武生 松井文榮堂
同 西村伊八
鯖江 大谷幸藏
金澤 近田書店
富山 小林清重堂
八尾 毛利研精堂
魚津 舟崎精二
長岡 目黒十郎
高田 高橋書店
直江津 柿村書店
三條 原山商店
河原田 中山萬平
柏原 中井正吉
篠山 小山富之助

豊岡 石田松造
米子 今井郁文堂
松江 大蘆庄次郎
同 園山文會堂
濱田 安達共榮堂
姫路 朝榮舍
同 木村次作
津山 仁科照文堂
岡山 吉原弘文館
尾道 兒玉芸香堂
三次 森盛文堂
山口 一二三堂
同 桂山陽堂
岩國 白銀日新堂
同 米谷判藏
廣島 東西堂
赤間關 上山松造
同 重野集文堂
德島 黒井新聞舖
西條 金川支店
松山 土肥書店
高知 澤本駒吉
同 開成舍本店
久留米 田中幸次郎
中津 野依曆三
小倉 三浦春日堂
大分 安東平太郎

杵築 荘野俄三郎
佐賀 河内壯助
同 大坪萬六
唐津 牧川德次郎
佐世保 五郎川書店
長崎 柴榮堂
熊本 長崎支店
同 中山知新堂
宮崎 修進堂
同 阪田蹄泉堂
同 津野融貫堂
鹿兒島 谷村藤吉
函館 小島大盛堂
小樽 白鳥書店
江差 西堀商店
岩内 池田大盛堂
札幌 小鹽自治堂
旭川 三澤庄作
室蘭 最上谷治吉
釧路 田中作次郎
根室 山本利輔
臺北 城谷書店
同 龍泉堂
釜山 尾縣哲太郎
同 吉見フヂ
桑港 富士合資會社
シヤトル 古屋政次郎

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

●東京市内

東京 松本七百丸
同 小林新兵衛
同 勝々堂
同 榮松堂
同 清弘堂
同 大黒屋平吉
同 庭花堂
同 五十嵐文明林
同 積文堂
同 廣集堂
同 萬文堂
同 靜雲閣
同 森江佐七
同 三宅半四郎
同 上原才一郎
同 河内屋
同 清水泰五郎
同 播磨屋
同 吉村卯太郎
同 柏屋松榮堂
同 椙山杉盛堂
同 塚原書店
同 三誠堂
同 松成堂
同 方圓閣
同 辻岡文助
同 吉川半七
同 鴻盟舍
同 田沼代理店
同 見珍堂
同 若林善吉
同 金榮堂
同 金昌堂
同 武藏屋
同 眞誠堂

東京 集成館
同 淺見文林堂
同 大塚太洋堂
同 佐野旭堂
同 有隣堂
同 三省堂
同 越後屋
同 一心堂
同 岡島捨次郎
同 教文館
同 内田芳兵衛
同 明々堂
同 鮮泉堂
同 瑞穗堂
同 金櫻堂
同 洗心堂
同 丸山舍
同 河合書店
同 横尾喜章堂
同 櫻井書店
同 池田書店
同 永田書店
同 弘文館
同 淺久書店
同 松江堂
同 上田屋支店
同 金盛堂
同 南江堂
同 永岡書店
同 大川屋錠吉
同 飯田書店
同 山陽堂
同 青山堂
同 岸田雜誌店
同 京屋
同 秩山堂
同 眞故堂

東京 日成堂
同 北原總吉
同 赤心社
同 得寶堂
同 高知堂

●畿内

山城 久下清文堂
同 田中治兵衛
同 吉田至誠堂
同 松田庄助
同 藤森改進堂
同 吉村勉強堂
同 藤井孫兵衛
同 笹田彌兵衛
同 東枝出張店
同 小川柳枝軒
同 便利堂支店
同 河合卯助
大和 辻本藻文堂
同 阪田購文堂
同 圖書卸賣會社
同 木原保吉
同 堀徳太郎
同 小川長次郎
河内 西條易榮堂
同 阪口自助社
同 安井共進社
同 一成舍
和泉 慶雲堂
同 集廣舍
同 船野六平
攝津 三田新聞舖
同 松村九兵衛
同 青木嵩山堂
同 三輪源兵衛
同 中川勘助

攝津 恒川文華堂
同 福音館
同 吉原書店
同 井上開運堂
同 郁文堂
同 前川文華堂
同 魚住悦五郎
同 汐川郁文館
同 寺倉光照館
同 大垣久太郎
同 玄々舍書店

●東海道

伊賀 安屋勝次郎
同 柴高書店
同 藤堂三省
同 文粹堂
同 岡村常三郎
同 保田書店
伊勢 渡邊東吉
同 清玉堂
同 木村温史堂
同 別所藤四郎
同 瀬古書堂
同 加藤五百記
同 松田新聞舖
同 野住讃次郎
同 松田鉀三郎
同 中津原書店
志摩 松井文四
同 山下三折堂
同 伊藤信次郎
同 結城重助
尾張 三輪伊六
同 三輪文次郎
同 耕芳園
同 淺見鉦太郎

尾張 平松伊兵衛
三河 愛友舍
同 高須廣治
同 西尾新聞會社
同 鐵鐘堂
同 世暘堂
同 永田茂富
遠江 三原屋甚藏
同 近江屋茂吉
同 大石謙三
同 古澤良作
同 東清堂
同 市川忠次郎
同 明治舍書店
同 郁文堂
同 精々堂
同 濱松堂
同 林新聞舖
同 好文堂
駿河 靜陵館
同 新聞堂
同 西駿新聞店
同 文源堂
同 實業社
同 瀧治三郎
同 文林堂本店
同 渡邊八重吉
同 廣瀬市藏
同 勝見義助
同 太陽堂
同 杉山書店
同 林儀三郎
甲斐 正榮堂
同 弘文館
同 依田久太郎
同 證古堂
同 小坂藤作

甲斐 萩原岩吉
伊豆 山梨啓次郎
同 甘晴堂
同 村上書店
同 内田桂兵衛
同 成玉堂
同 北豆新聞舖
同 芹澤政吉
同 堺屋書店
相模 鈴八書店
同 川上書籍店
同 石村直造
同 竹川啓次郎
同 飯尾外次郎
同 平井清八
同 林初三郎
同 山本佐兵衛
同 小川堂
同 今井政兵衛
同 三宅藤兵衛
武藏 弘集堂
同 古屋支店
同 明文堂
同 青木百太郎
同 川島平左衛門
同 金子彌吉
同 島崎書店
同 小出磯助
同 近榮堂
同 文華堂
同 博榮堂
同 脩文堂
同 山田滿次郎
同 福田利右衛門
同 協立舍
同 植村三六
同 弘聞堂

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

武藏 清水書店
同 日の出屋
同 共和堂
同 水村岩三郎
同 紅雲堂
安房 岩城書店
同 竹田書店
同 鳥海書店
同 遠藤金太郎
同 宮地平太郎
同 福原彌助
同 播磨屋常吉
上總 長峰和兵衛
同 至誠堂
同 勉精堂
同 郁文堂
同 藤平四郎七
同 鈴木啓次郎
同 國松書店
同 根本爲三郎
下總 立澤吉兵衛
同 新々堂
同 明文堂
同 堤安五郎
同 高寺濟兵衛
同 小村善吉
同 知新堂
同 木內嘉兵衛
同 新聞雜誌同盟店
同 立眞舍
同 田中屋太平
同 中島拾三
同 井上勇次
同 飯塚孝助
同 春風舍
常陸 寺田支店
同 宮田梧七

常陸 大塚屋彌平
同 山口好之助
同 太田屋常七
同 內田濟太郎
同 田所午次郎
同 橋本光文堂
同 柳旦堂
同 高梨卯吉
同 伊沼彌助
同 太平堂
同 資文堂
同 日進堂
同 東洋堂

●東山道

近江 澤一商店
同 加藤梅吉
同 廣田七次郎
同 山田嘉右衛門
同 東枝支店
同 渡邊東吉
同 淡海堂
同 玉成堂
美濃 園部共盛堂
同 安藤茂太郎
同 平野利兵衛
同 岡安慶助
同 上田源藏
同 森井彥十郎
同 順風舍
同 川弘堂
飛驒 桝屋重兵衛
同 打保雜誌店
同 荒垣明治堂
同 丸川玉泉堂
飛 中川金治
同 平田書店

信濃 寺澤汲古館
同 小山盛文堂
同 今村書房
同 金華堂
同 鶴林堂
同 明倫堂
同 芳潤堂
同 氣賀澤庄五郎
同 宮坂文弘堂
同 長田忠之助
同 高見澤和市
同 桝屋久次郎
同 都築文明堂
同 遠山商店
同 小林佐平治
同 名取幸藏
同 共和堂
同 文友堂
同 山下條三郎
同 增屋商店
同 岩下袈裟吉
同 矢島民也
同 福澤文星堂
同 神村律
上野 山田屋金兵衛
同 竹內藤吉
同 中村孫四郎
同 山田良吉
同 木田精三郎
同 文心堂
同 櫻井源八郎
同 耕雲堂
同 中田禎次郎
同 正林堂綱吉
同 文心堂
同 萩原太一郎
同 柳風舍

上野 中島愛次郎
下野 永樂屋
同 紙屋五郎平
同 大鹽泰雄
同 青木卯一
同 片山平太郎
同 相場領平
同 塚田郁文堂
同 北越館
同 小林安太郎
磐城 石井書店
同 中島儀兵衛
同 谷津屋
同 丁字屋與七
同 高本大榮
同 吉成謙四郎
同 郡豐太郎
同 松屋健之助
同 鈴木眞雄
同 八島平兵衛
同 內藤屋榮藏
同 倉田角治
岩代 鶴屋新作
同 森萬作
同 田中善平
同 宗形彌兵衛
同 吉井啓次郎
同 鈴木萬助
同 齋藤松柏堂
同 鈴木富造
同 深井博分堂
同 高橋重雄
同 吉田榮進堂
同 山寺昇山堂
同 漸進堂
同 小原條三郎
同 平田藤市

岩代 柳沼靖一
同 渡邊傳吉
陸前 相澤榮吉
同 佐政商店
同 鈴木榮三郎
同 松榮堂支店
同 松榮堂分店
同 佐藤養治
同 朝野堂
同 伊東德三郎
同 菊池重造
同 佐々木運吉
同 井上金三郎
同 宮崎日新館
同 一條榮
同 大泉福治
同 新菊堂
同 鈴木圭三
同 白榮堂
同 佐々木忠五郎
陸中 木津屋七太郎
同 關忠治
同 文港堂
同 菅原忠五郎
同 淺利佐太郎
同 東北堂
同 大里榮次郎
同 八重樫廣治
同 岡田書店
同 北村千藏
同 野田齡
同 奈良商舖
同 木村平作
同 三ヶ田忠治
陸奧 成田泰
同 尙文堂
同 鳴海才助

陸奧 松山禎祥堂
同 福士秀剛
同 柳田要太郎
同 藤田商店
同 佐々木忠藏
同 文林堂
同 岩館商店
同 苫米地商店
同 文華堂
同 川島準次郎
羽前 小池藤次郎
同 大山分店
同 風間五右衛門
同 相原太吉
同 大泉善助
同 舟山彥兵衛
同 高橋富五郎
同 工藤八郎兵衛
同 上村平五郎
同 田宮喜右衛門
同 青木彥兵衛
同 氣早伊勢治
同 田宮政藏
同 永井新聞店
同 富樫三之助
同 菅間兵左衛門
同 吉野屋又三郎
同 佐藤倉吉
同 加藤屋伊七
同 地主文藏
同 鈴木仙五郎
同 伊藤書店
同 金子幸太
同 鈴木庄五郎
同 金子京吉
同 巴屋辰藏
同 阿部久四郎

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

羽前 荒井太四郎
同 西田芳松
同 細井商店
同 倉田角次
羽後 板谷五郎右衛門
同 東海林支店
同 伊藤淵七
同 荒川保太郎
同 成田市五郎
同 本間金之助
同 白崎善助
同 青山堂
同 越後屋虎五郎
同 和田清助
同 西野六左衛門
同 中島良治
同 高田吉之助
同 川村孫四郎
同 高山[illegible]助
同 平澤清左衛門
同 岩川和吉
同 織田良助
同 北村豐治
同 小原金治
同 伊藤龍太
同 富田三次郎
同 藤田雅九郎
同 糸井書店
同 佐藤久左衛門
同 武田福次郎

●北陸道

若狹 吉岡昌太郎
同 吹田資新堂
越前 平澤潤助
同 中村六三郎
同 南部平兵衛
同 不破清七
越前 山崎書店
同 井田書店
同 酒井文榮堂
同 廣川才吉
同 堂森書店
同 島崎書店
同 谷口伊太郎
加賀 近田丈吉
同 醉香堂
同 菅井慶太郎
同 佐久間善作
同 紺藤治三郎
同 益智館
能登 小栗北陸館
同 白尾屋
同 河内勇作
同 宮光堂
同 米林五七
同 川端龜次郎
同 山上嘉一郎
同 大來堂
同 昇進館
同 千田末松
越中 大橋甚吾
同 守川吉兵衛
同 文海堂
同 車吉兵衛
同 長谷川喜一郎
同 高橋直基
同 清水雄吉
同 島田幸助
同 石原八太郎
同 櫻田與作
同 北一屋書店
同 塚原書店
同 水野儀三郎
越後 時事堂
同 原良治
越後 島道毅光
同 伊丹屋藤吉
同 畑澤清造
同 大竹新平
同 櫻井產作
同 金子書籍店
同 益田久作
同 野島書店
同 笛木又平
同 室直支店
同 竹内三郎治
同 長谷川毅一郎
同 磐城屋勇
同 桑野康之助
同 長谷川要三
同 櫻井支店
同 宮島新聞舖
同 川崎良次
同 古島九八
同 赤塚茂平
同 阪川宇三郎
同 樋口小左衛門
同 伊倉長三
同 高桑小兵衛
同 川口滕作
同 宮末八
同 宜布書院
同 小林尚文館
同 岡村利平
同 潤身堂
同 交信舍新聞部
同 早川朔平
同 吉田俊人
同 皆川德吉
同 番場吉次郎
同 田中榮作
同 早津鐵三郎
同 中野長藏
佐渡 荒井忠平
同 島野幹多
同 吉岡如蘭堂
同 幅野長藏
同 近藤祐藏
同 渡邊新吉

●山陰道

丹波 足立改成館
同 北川至寶堂
同 柏原九郎兵衛
同 浦名有恒堂
同 立志堂商店
同 大西好文堂
同 入江辰之助
丹後 鵜飼文英堂
同 吉岡新聞舍
同 南波庄兵衛
但馬 坂本書肆
同 山本錦英堂
同 久代俊平
同 永田新之助
同 中村歌之助
因幡 金居堂
同 橫山敬次郎
同 久松堂書店
同 旭日堂書房
同 原豐吉
同 靜觀堂
同 島田龜藏
同 山本吉太郎
同 楠城治平
伯耆 德岡長藏
同 三好治兵衛
同 八木橋辰藏
同 加島惠太郎
同 坂田精華堂
出雲 有田傳助
出雲 光谷梅五郎
同 遠藤和助
同 直江儀一郎
同 島屋尾富
同 兒玉啓助
同 周藤商店
同 堀又之助
同 狩野廣助
同 山本善右衛門
石見 古井廣吉
同 山崎書店
同 小野寺文華堂
隱岐 河田商店
同 佐々木熊吉

●山陽道

播磨 博文堂
同 丸尾白堂
同 近藤喜保
同 井上喜代太郎
同 前田清翠堂
同 澤田安藏
同 松野來々堂
美作 木村新聞舖
同 鶴山舍
同 石田吉太郎
同 英進社
同 龜井精文堂
備前 細謹舍
同 本郷安次郎
同 森博文堂
同 山本金正堂
同 西澤新聞舖
同 大國文友堂
備中 備陽舍
同 藤井思正堂
同 長尾虎吉
同 郷木盛文堂
備中 橋野梅松堂
備後 藤木文曜堂
同 尾道北辰社
同 宮地玉文堂
同 奥愛次郎
同 三木文明堂
同 鈴岡新聞舖
同 前川大成堂
同 長商店
同 安田斯文堂
同 阪井得一
安藝 友田新聞舖
同 瀬野進步堂
同 井上龜吉
同 三木文明堂
同 平山盈進堂
同 神代賤身
同 松村善助
同 田上商店
同 博文堂
同 片山商店
周防 長谷川作次郎
同 牧野精昌堂
同 片山新聞舖
同 野上瀧三郎
同 宮川臣吉
同 柳原善八
同 西村長之助
同 弘中惣吉
同 三奈木青陽堂
同 精華堂書店
長門 村田梅龍堂
同 山名曲江堂
同 井生文花堂
同 藤川東輔
同 岡貫一
同 柳井商店
同 西村勝之助

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

長門 田中北濱館
同 中原書店
同 山田明倫堂
同 岩本彌左衛門

●南海道

紀伊 三宅書店
同 津田源兵衛
同 生駒任天堂
同 集文社
同 前田新聞舗
同 宮井書店
同 村木新聞舗
同 清水丹龍堂
同 島源之助
同 畠中濟進館
同 山田保久
淡路 芙蓉館
同 前川文化堂
同 福沼文藏
同 黒崎精二
阿波 坂井萬吉
同 井關粂吉
同 藤井是平
同 四宮鐵太郎
同 内田悦三郎
同 田岡民次郎
同 松浦治郎吉
讃岐 開文舍
同 宮脇仲次郎
同 友安書店
同 盛友堂支店
同 神崎書店
同 中野光
伊豫 石崎本店
同 宮内書店
同 本山伍作
同 光本國書館
伊豫 高橋居廣
同 阿部利三郎
土佐 開成舍本店
同 小川代治
同 村岡書店
同 山中書店
同 野町彌助
同 三宮利太郎
同 岡村書店
同 田内運平
同 池内寶行
同 山崎書店

●西海道

筑前 石松國吉
同 山村正平
同 文林堂書店
同 水村松太郎
同 元ノ木錄次郎
同 飯野數吉
同 相川書店
同 林斧介
同 伊藤書店
同 大野伊三郎
同 跡部萬藏
筑後 廣瀬常太郎
同 豐田純平
同 吉祥館
同 宮本宗四郎
同 和浦書店
同 田邊書店
同 永東末次郎
豐前 中村近古堂
同 加生覺治
同 梅津書店
同 加部市太郎
同 中島卯助
同 林有斐
豐前 身深正則
同 喜多川義節
同 中園角兵衛
豐後 甲斐文七
同 矢熊文林堂
同 成出三玉堂
同 小野長春堂
同 伏見屋書肆
同 高野菊三
同 今泉熊太郎
同 明倫堂
同 藤松利平
同 岡田梅吉
肥前 鶴野書店
同 虎與號支店
同 松尾クラ
同 中村千代松
同 平井平治
同 鮎川吉次郎
同 百田春靜
同 松崎和市
同 西村勝平
同 坂井與一郎
同 山本廣太
同 宮本茂三郎
同 久米康七
同 橋口範右衛門
肥後 時昌堂
同 乾萬吉
同 梶原好文堂
同 浦田開明堂
同 金子[illegible]舗
同 岡部萬四郎
同 岩本理平
同 江島新店
同 菅開化堂
同 園田政太郎
肥前 岡部唯吉
同 中村治三郎
日向 小玉傳右衛門
同 谷仲吉
同 高野書肆
同 園師萬四郎
同 森定治
同 文友堂
大隅 松田市藏
同 山之内龍之助
同 德永書店
同 有川宗之助
同 平尾榮次郎
薩摩 石原直次郎
同 折田金次郎
同 福留書店
同 篠原直太郎
同 原田備造
同 藤田文友堂
同 兒玉太市
同 財津書店
同 北原藏六
同 西村書店
壹岐 倉成惣次郎
對馬 齋藤文港堂
同 吉田元次郎

●北海道

渡島 辻二八堂
同 國光松太郎
同 井上日進店
同 近江屋書店
同 三國堂
同 常野嘉兵衛
同 近江屋書
後志 其水堂
同 伊藤睦愛
後志 池田鮎五郎
同 松田源吉
同 山我龜吉
同 安田榮三郎
石狩 江藤恭太郎
同 三澤書店
同 鈴木規矩男
同 河原九兵衛
同 並川榮三郎
同 岩城民次郎
同 第一村上商店
同 中垣商店
同 廣日屋
同 樹塚商弘
同 大原久次郎
同 林卯吉郎
天鹽 小野寺喜兵衛
同 阿部商店
北見 酒井榮吉
同 松林堂
同 斐杏林堂
同 塚原健商堂
膽振 掛川勉強堂
十勝 鹽見魁三
同 久富書店
釧路 池田運治
同 小原常吉
根室 伊藤喜武
同 清水常吉

●琉球

那覇 村田彌三郎
同 有馬三笑堂
同 豐盛書林

●臺灣

臺北 博文堂
臺北 岩内敬次郎
同 村崎長親
同 岡本武平
基隆 開通堂
同 高杉市之丞
臺中 棚邊久吉
臺南 岡田書店
同 松川金太郎
宜蘭 菅原堂支店
新竹 篠塚新三
淡水 橋本商店
澎湖島 石丸有明館
同 大武澎湖堂

●韓國

釜山 岸田秀平
京城 公報社
仁川 山岡書店
同 町田一葉堂

●米國

桑港 堂本商會
同 平田商會
同 小島源二郎
同 大坂屋商會
同 井出商會
フレスノ 中澤商會

●布哇

ヒーロー 町田商店
ホノルヽ 岩上商會
同 木坂眞影堂
同 脇田商店

●濠洲

木曜島 田中音松
同 村松文店

(金丁製本)

女學世界
毎月一回五日發行
第貳卷第壹號
(明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可)
(明治三十五年一月五日發行)

東京秀英舎印刷